



左邊分は女性都市

さん せん

~不思議の島で
いちやラブ
ハーレム~

Mysterious Island

著 / 一夜澄 イラスト / アジシオ

VN Variant Novels TAKESHOBO





CHARACTER



【ヴァイオレット】

コスタヴィーノ近海を
縄張りにする女海賊。
自由とHな男を求める豪快美女!

【ベアトリス】

コスタヴィーノの女領主。
イルゼと領民を愛するが
時に空回りしてしまう。

【ネレイダ】

謎に満ちたネビュラ島から
やってきた女性型アンド
ロイド。快楽に弱い。

【セラーフア】

謎の遺物の力でイルゼが
変異した姿。何かの施設の
管理者らしいが…!?



【イルゼ】

女性都市ウィメの
グラマー領主。
セラーフアに変化してしまう。



【アリスト】

異世界転移者の青年。
この世界で希少な、
女性に優しい貴族の息子。



【エフィ】

イルゼに仕える
アリストの専属メイド。
真面目でHなご奉仕が得意。

左遷先は
女性都市！
MI

Mysterious Island

～不思議の島で
いちゃラブ
ハーレム～

著／一夜澄
イラスト／アジシオ

VN
Variant Novels
TAKESHOB0



この作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差異が認められることがあります。

一部の漢字が簡略字で表示されていることがあります。

×CONTENTS×

プロローグ	007
第一章 非公式都市は陰謀だらけ!?	018
第二章 海賊船長の肉感面談!?	070
第三章 島の守護者は自動魔法人形!?	129
第四章 レースの鍵は領主のおっぱい!?	176
第五章 遺跡の奥の邪悪なオーダー!?	259
第六章 強欲転生者のあぶない散歩!?	314
番外編 二人の従者のシャッフルご奉仕!?	341



CONTENTS

プロローグ

挿絵 1 わたし、領主（非公式）ですよ！

第一章 非公式都市は陰謀だらけ!?

挿絵 2 イルゼとエフィに左右から…三

挿絵 3 イルゼがドスケベ天使に!?

第二章 海賊船長の肉感面接!?

挿絵 4 女海賊ヴァイオレット、颯爽と登場！

挿絵 5 甲板でイキ顔をさらす女船長

第三章 島の守護者は自動魔法人形!?

挿絵 6 海中から現れる美少女軍人

挿絵 7 イキ果てるネレイダ

第四章 レースの鍵は領主のおっぱい!?

挿絵 8 爆乳いじりで快樂加速 ≡するベアトリス

挿絵 9 女領主のうれしがり絶頂 ≡

第五章 遺跡の奥の邪悪なオーダー!?

挿絵 10 セラーファのアへ絶頂!

第六章 強欲転生者のあぶない散歩!?

挿絵 11 夜の路地で露出交尾 ≡

番外編 二人の従者のシャツフルご奉仕!?

挿絵 12 ネレイダとエフィ・肉感サンドウィッチ

プロローグ

春を目前に控える異世界で、俺が乗っている馬車は鬱蒼うつそうとした熱帯雨林を抜ける。

するとそこに広がったのは、快晴の空に浮かぶ太陽と蒼あおく輝くコバルトブルーの海だった。

「おおっ！」

その反対側には、色とりどりの屋根が並ぶ栄えた街並みも見える。

カリブ海の都市を思わせる光景に、隣に座る青髪のメイドさんが腰を浮かせた。

「これが海……なのですね！」

瞳を輝かせる彼女の名はエフィさん。

俺の専属メイドをしてきている真面目な女性だ。

「バニエスタの湖よりずっと大きい、それに街並みも色とりどりでとても美しいです！」

普段は控えめな彼女が声を弾ませる様子に、対面から声がかかった。

「もう、エフィったらはしゃぎすぎですわ」

声の主は美しい金髪を耳にかけて微笑ほほえむイルゼさんだ。

エフィさんはその言葉に頬ほおを赤くすると、やや浮かせた腰を落ち着かせる。

「あっ！ も、申し訳ありません。つい……」

イルゼさんはメイドさんの可愛い反応にもう一度微笑んだ後、片目を瞑つぶってみせた。

「アリスト様、専属メイドの粗相をお許しくださいませ。ふふふっ♪」

茶目っ気のある仕草を見せてくれた彼女は、ウイメという女性都市の領主様だ。

同時にエフィさんの直接的な上司でもある。

真面目で可愛いメイドさんと、上品だけど茶目っ気のあるイルゼさん。

(こんな素敵な女性二人と旅ができるなんて、転生前は考えたことも無かったなあ)

二十八年間童貞を守った前世を思えば、感慨もひとしおである。

でも、その感慨を噛み締めてばかりもいられなかった。

なぜなら今回の旅には――

「おーほっほっほっ！ とくと御覧なさい！ 『コスタ半島と』『コスタヴィーノ』の輝きを！」

――とても賑やかな女性が同行しているからである！

「ええ、ええ！ 眩めまゆいばかりの美しさに開いた口がふさがりませんわよね！ ですが、そのようになっても恥じる必要はなくてよ」

優雅な縦巻きが印象的な桃色の髪、髪と同じ色合いの勝ち気そうな瞳を持つ女性。

イルゼさんの隣に座った彼女は得意満面の表情になると、オペラの如く高らかに言った。



「なにしろここはわたしー美貌と知性を兼ね備えたベアトリスが住まう場所、そして領主を務める都市なのですから！ 口の一つや二つ、閉じなくなっても不思議ではありませんわ！ おーほっほっほっほ！」

なんとも賑やかな彼女こそ今回の同行者、ベアトリス領主であった。

（美貌と知性を兼ね備えた、って自分で言うのは凄いなあ）

ウイメからコスタヴィーノまでは約一週間の道のり。

彼女とはその間に一緒に旅をしてきたが、その自信家っぷりは相当なものだと感じる。

とはいえその自信にはきちんと根拠がある。

なにしろ様々な理由で首都から出た女性達をまとめあげ、このコスタ半島に非公認ながら女性都市を一から作ったというのだ。

その手腕は驚嘆に値するし、彼女の容姿は誰に聞いても間違いなく美女だと評されるだろう。

（おっぱいもイルゼさんに負けず劣らずの爆乳……！）

赤を基調とした彼女のドレスは胸の横に布が無く、柔らかかそうな横乳は常に丸見え状態だ。

というか、馬車が揺れる度にちらつと桃色がはみ出ている。

（わっ、い、今も見えた！ うう、なんて目と股間に悪い衣装なんだ……！）

さて、そんなベアトリス領主はイルゼさんの大ファンらしい。

「ああ、流石はイルゼ様！ 我が都市、コスタヴィーノにいらしてもその美しさはまったくお変わりありませんわ!! コスタに広がる海の輝きにも負けていらっしやいません!! ああ、素敵です！ 素敵すぎます!!」

「べ、ベアトリス殿。お顔が近いー」

流石のイルゼさんも押され気味だけれど、横乳領主様の愛は止まらない。

「いいえ、これは落ち着いていられませんわ！ すぐにでも画家を呼んで、その美しい容姿を描かせなければなりません！」

彼女はそう言って自身の後ろにある窓をせわしなく叩く。

「クラネ！ もっと速度は上がらないのでして!？」

深い茶色の長髪を揺らす御者さんが振り返ると、その瞳に呆れの色を浮かべた。

「上がりません。むしろベアがうるさければうるさいほどゆったりと進むことになるでしょう」

「はあ!? 貴女、あなたわたしの部下のくせになんて生意気ですの!？」

いきり立つ上司にクラネさんはまったく動じない。

「優秀な部下は直言を避けません。画家も貴女に急かされては良い絵が描けないかと」

「今この瞬間を表現するのも画家の仕事ですわ！ さあクラネ、わたしと御者を代わりなさいー」

「この間も丸うさぎ達に服を引っ張られて涙目になっていたではありませんか。動物社会でも最下層と認識されている貴女に御者など無理です」

「動物社会でも!? 貴女今、もって言いまして? ぐぎぎ……後で覚えておきなさい!」
こんな調子で二人が言い合いをするのも見慣れた光景になってしまった。

とはいえ、ベアトリス領主が長旅の御者を任せているところを見るに、それなりの信用はしているのだろう。

(賑やかすぎるけど、終始無言の車内よりはずっと良いかな)

それにイルゼさん自身も彼女の強火っぷりや、上司と部下が反転しているようなやり取りを楽しんでいるようなのは幸いだ。

「ふふふ♪うちのメイドは畏まりすぎる子が多いから、少しくらいクラネ殿を真似させるのも良いかもしれませんわ。ねえ、エフィ?」

「そ、そうでしょうか? リジエあたりには、もう少し奥ゆかしくなってほしいのですが……」
「確かにそうですね。あの子がもっと派手になったら、今度はエフィの部屋の扉を本格的に改修しなくてはなりませんし。ふふふ♪」

リジエさん、というのはエフィさんと同室のメイドさんのことだ。

武道に精通し、趣味は筋トレという赤髪ポニーテールがよく似合う可憐な女性なのだけれど、その細腕からは想像もつかないほど怪力である。

(一、二ヶ月に一度は扉の取っ手を壊してしまうって聞いた時はびっくりしたなあ) そんな彼女は今、俺の棒術の先生でもあった。

自分の身を守る程度の技術は持つておいて損はないと考え、俺のほうからお願いをしたのだ。

「アリスト様、リジエとの鍛錬^{たんれん}はいかがですか？ 毎朝なさっていると聞いておりますけれど」

「初歩的なことをやるのでやっつとです。身体は前より鍛えられた……かなあ」

「それはもう間違いありませんわ。わたくしもすっかり確認してありますから」
意味深に微笑むイルゼさんに俺はドキツとする。

エフィさんもその意味するところを理解し、頬を染めていた。

ただそんな奥ゆかしい反応を見せる彼女も、体術の腕前は相当なものであった。

(メイドさんは護衛も仕事の内……って話は聞いていたけど)

事実俺が出かける時は、基本的にはこっさりメイドさん達が護衛してくれている。

無論エフィさんもその例に漏れないわけで、当然それなりの腕前があるとは想像していた。

(でも、あれを見ると男としての矜持が揺らぐというか、なんというか)

鍛錬中の彼女が見せた華麗な身のこなしと鋭い手刀は、俺の予想を遥かに上回るものだった。

エフィさんの凛々^{りんり}しさに見惚^{みと}れ、同時にその実力差にちよつと落ち込んだのは内緒である。

と、そこへベアトリス領主の心底^{けいへつ}軽蔑したような視線が飛んできた。

「なあにが鍛錬ですか。威厳も気迫も感じられない平凡な顔に、みすばらしい薄っぺらい身体。今更何を鍛えようとも無駄ですわ。そんな体たらくでイルゼ様のお側にいるなんて、恥知らずにも程がありましたよ！」

彼女はぐいと俺のほうへ身体を乗り出してくる。

四人乗りの馬車はさほど広くはないため、そうなれば互いの顔は目と鼻の先だ。

(で、でっか……っ！)

思わず胸元に目が吸い寄せられる俺に、ベアトリス領主はひそやかな声で語りかけてきた。

内容は出発する前から何度となく言われたことである。

「さあ、そろそろ白状して楽におなりなさい。本当は使えるのでしょうか？ 女性達の精神に干渉できるような魔法を。あるいは幻覚を見せる遺物でも隠しているのではなくて？」

「いや、だから、そんなものは無いって……。持ち物検査もしたのに、まだ信じられない？」

俺が否定するが、彼女の訝^{いぶか}しげな表情はまったく崩れない。

「確かに一度使えば長く効果が続くような魔法も遺物も伝説にしかありませんわね。けれど無いと決まっているわけでもありませんわ」

困ったことに、ベアトリス領主はこうした疑念をずっと俺に向けてきているのである。

その度に潔白を主張しているのだけれど、なかなか理解してもらえない。

「そうかもしれないけど、左遷された男がそんなもの持っていると思う？ 首都にいたころもろくに外出しなかったし、今回だって体よくコスタヴィーノへ送り出されてるわけで……」

この世界の人々は知る由もないし言っただけで信じてもらえないだろうけれど。

俺の元の名は『コウイチ』であり、早逝してしまった貴族子息『アリスト』くんの身体を使わせてもらう形で異世界へと転生してきた日本人だ。

（まあ、そんなこと言ったらもっと怪しまれるから言わないけど……）

そして元の彼はこの世界では非常に珍しい『魔法が使えない男性』であり、首都では大層嫌われて、周囲との接触も相当限られていたらしいのだ。

事実転生した際にも貴重な道具なんて何一つ持っておらず、持ち物といえば今着用している貴族の服と、親であるペレ伯爵が用意してくれた金銭くらいのもだった。

「露骨に謙虚な態度、あまつさえ最初はわたしに丁寧な言葉すら使っておりましてわね。いいですわ、必ず暴いてみせます。あのイルゼ様が男性を信用しているなんてありえないことですよ」

しかし、この意見について俺は首をひねらざるを得ない。

そもそもイルゼさんは男性の執事であるニユートさんとの関係も良好で、この超男尊女卑な世界で男性との協調の可能性を探っている側だと思っただけである。

（ううん、イルゼさんは初めから男の俺にも優しくかったと思うけどなあ）

俺が首を傾げたのと、ベアトリス領主が短い悲鳴を上げたのは同時だった。

「ひっ……！」

青ざめた彼女の視線の先にいるのは、とてもにこやかなエフィさんだ。

しかしその笑顔には心が安らぐ穏やかさは無く、代わりにたつぷりの冷気を漂わせていた。

「ベアトリス様。もうすぐ目的地のように思われます。お席へきちんとお座りになられたほうがよろしいではありませんか？」

(エフィさん、怖っ!! 目、目が笑ってないよっ!! その視線だけで人が気絶するよっ!!) 標的になった者の恐怖は推して知るべしといったところ。

ベアトリス領主はあつという間に身を縮め、こくこくと頷くだけの人形になってしまった。

「は、はい……」

彼女はおずおずと座るが、それだけでは許されなかった。

隣席にいるイルゼさんもまた、修羅の笑みを浮かべていたからである……!

「ええ、ええ。それがいいですわ。アリスト様との積もるお話はまた後ほどになさって？」

「ひいつ!? ひゃ、ひゃい! そ、そうさせていただきましゅっ!」

やはり女性を怒らせてはいけない。

今回の旅で幾度も見たイルゼさんとエフィさんの冷徹な微笑みは、俺にそんな世界の真理を分
からせてくれるものだったといえよう。

そして真理を理解^{わか}らされたコスタヴィーノの領主様は、震える口を開く。

「な、長旅でしたし、本格的な歓迎の式典等は明日にいたしますわ……！　ひとまず、今晚はごゆつくりお休みくださいませ」

その声とともに馬車は止まり、まもなくクラネさんが扉を開く。

「お疲れ様でした。我が領主ベアトリスの屋敷へ到着しました。皆様どうぞ中へ」

すつかりいつもの様子に戻ったイルゼさんとエフィさんが彼女へ会釈を返した。

「ベアトリス殿、クラネ殿。改めてお世話になりますわ」

「従者としてご厄介になります。私にもお手伝いできることがあればぜひお申し付けください」
ベアトリス領主がそんな二人の様子にほっと息をつくのを見つつ、俺もクラネさんの案内に従って馬車を降りる。

するとそこで待っていてくれたのは、ずらりと並んだ使用人の皆さんだ。

「」「コスタヴィーノへようこそお出でくださいました。アリスト様」「」「」

揃って恭しくお辞儀をされ、その迫力にやや気圧^{けお}される。

しかしここで怯んでは、同行してくれているイルゼさん達の面子^{めんつ}にも関わるというもの。

「よろしくお願ひします、アリストです。都市調査員として、しばらくご厄介になります」
精一杯堂々と振る舞いつつ、俺は屋敷の中へ案内してもらったのであった。

第一章 非公式都市は陰謀だらけ!?

湯浴みを終え、俺は宛てがわれた客室のベッドへ腰掛ける。

その柔らかかさによって襲いくる眠気を払い、窓際にある光石の照明を灯す。
到着した際に快晴だった空は今、分厚い雨雲に覆われていた。

「……随分降るなあ」

領主の屋敷は、街中からやや距離がある丘の上に建っている。

そのため窓からは雨が降り注ぐ街と、その先にある港と海までよく見えた。
すると目にとまるのは、海上の一部に不自然に掛かった霧だ。

(雨の時でも消えたりはしないんだ)

コスタヴィーノの一部の海域に常に掛かっているというそれは、消えたことがないという。

霧の奥にはぼんやりと島影が見えており、地元では『ネビュラ島』と呼ばれているらしい。

だが島を指して船を出しても霧に触れることすらできず、上陸できた者はいないのだそうだ。

そんな異世界の不思議をしばし眺^{なが}めていると、扉がノックされた。

「アリスト様、イルゼです。まだ起きていらっしやいますか？」

「エフィです。お飲み物を頂いてきましたが、いかがでしょうか」

「あ、はい！ どうぞ」

二人が部屋へ入ってくると、室内は一気に華やぐ。

彼女たちが普通にしているのもそうだったと思うけれど、今晚はイルゼさんが新しい装いになっていたため尚^{なほ}更^{さら}だった。

「ベアトリス殿からの贈り物ということでしたの」

少し照れくさそうにする彼女が身につけているのは、花柄のワンピース。

肩が出るタイプの軽やかなデザインが、いかにもリゾートに遊びにきたお嬢様っぽくて素敵だ。

しっかりと主張する胸元はもちろん、ざっくりと開いた背中も美しい……！

「袖を通さないのは失礼かと思って着てみたのですけれどー」

少し所在なさそうにする彼女の言葉を、俺は興奮のあまりつついつい遮ってしまう。

「いいです！ すごく似合ってます！」

イルゼさんは瞳を丸くした後、くすくすと笑う。

そしてそのまま踊るように俺の右隣に腰掛けると、ぴったりと身体を寄せてくれた。

「アリスト様は本当にお上手なんですから♪」

(うはあ、腕に幸せな感触が押し付けられてる)

そうこうしている内に、ベッドの脇にある大きめのサイドテーブルにカップが置かれる。

エフィさんが手早く紅茶を淹れてくれたのだ。

「アリスト様、イルゼ様、どうぞ」

俺とイルゼさんは彼女にお礼を言いながら早速口をつける。

ほんのり柑橘類かんきつるいを思わせる味わいは絶品で、旅の疲れが身体から抜けていくようだ。

「ふふ、やっぱり紅茶はエフィに任せるに限りますわ」

「そ、そんな、勿体ないお言葉です」

エフィさんは恐縮するけれど、俺も彼女の紅茶は本当に美味しいと思う。

ただ、エフィさんの卓越した手法を共有するには大きな壁があった。

「ぽかぽかとお湯を沸かして、ふわぁっと注いで、するするっと淹れるだけで、特別なことは何もしていません。なのでそれほど褒めただけのようなものでは……」

「あの、エフィ？ それは特別というより、独特って言うのですわ」

イルゼさんが苦笑すると、可愛らしいメイドさんは焦ったように説明を繰り返す。

「いえ独特ではないのです、あの、こう……あつあつ、ひゅるる、しゅわわわ……なんです」

うん、彼女の手法が共有される日はまだまだ先になりそうだ。

(料理が壊滅的なのも、この独特な感性から来るものなのかなあ)

宮殿で時折起きる刺激臭騒ぎを思い起こしていると、イルゼさんが俺を軽くつついた。

「アリスト様。ベアトリス殿に関してですけど」

困ったような笑みを浮かべた彼女は続ける。

「使用人にも慕われているようでしたわ。ふふ、力関係が逆転してはいましたけれど」

どのメイドさんも大体クラネさんと同じような感じで領主に接しているらしい。

「わたくしやアリスト様への誤解を除けば、思い込みが少し苛烈なこと以外は問題なさそうですわ」

「確かに悪しきことを企む御方には見えませんが……アリスト様への横暴は目に余ります」

「あれは見過ぎせませんわね。明日以降は本格的に教育をさせていただかないといけません」

じわじわと二人が冷気をまとい始めるのを、俺は慌てて止める。

「だ、大丈夫！ 大丈夫だから！」

「アリスト様はお優しくすぎます」

「そこが素敵なのですけれど♪」

少し不服そうにしながらも、いつもの調子に戻る二人。

俺は冷気がぶり返す前に、急いで話題を振った。

「でも、たった数年でこの都市を作り上げたのは本当に凄いです。性格は過激だけど、手腕は本物だったっていうか」

俺が言っているとイルゼさんは頷き、窓の外へと視線をやった。

夜闇と雨の中、いくつもの明かりが灯る街並みが見えている。

「わたくしもここまでの規模だとは思っておりませんでした」

今回、俺達がコスタヴィーノへ訪れたのは首都から『都市調査』の命令が出たからであった。

左遷された俺に対し、首都から気まぐれに命令が出されるのはいつものこと。

一方で、その内容が『この都市を調査し現状の報告をせよ』というものは、この都市の微妙な立場が理由だ。

「これほど立派な街が『非公式都市』だなんて、未だに信じられませんか」

この国の都市は一定以上の規模になると必ず首都へ毎年お金を納付しなければならない。

所謂税金いわざねみたいなもので、ウイメやバニエスタはこれを納めている『公式女性都市』だ。

しかしコスタヴィーノはここ数年で作られた都市であり、首都から金銭を徴収されておらず、都市として認定されていない。

そのためウイメと同等規模の街であっても『非公式都市』という位置づけになるそうだが、だからこそコスタヴィーノは、犯罪が起きても正式に罰することはできない。

例えば街中での窃盗であれば『所有者のない森の中で拾っただけ』と解釈されるからだ。

都市内は領主権限で取り締まれても、犯罪者が他都市に逃げた場合泣き寝入りとなってしまう。

一方で首都側としては公式都市にして金銭徴収をしたいという思惑はあるが、それが未だにできていないのは誰がこの都市を管轄に収めるかで揉めていることが原因らしい。

『集っているのは首都に嫌気がさして飛び出した女性らだ。収入と一緒に面倒事も増えるのは目に見えている。問題を起こした住民を利用され、他の貴族から足を引っ張られる可能性も高い』
というのは俺の異世界での父親であるペレ伯爵の談。

一方で都市そのものを潰したくはない、という思惑もあると父さんは言っていた。

『扱いづらい女性達が一箇所に集まっていること自体は都合が良い。各地に散り散りよりは動向をつかみやすいからな。しかし勝手に利を得ようとすれば、抜け駆けと評され袋叩きだろう』

結果、奇妙な干渉地域——非公式女性都市コスタヴィーノが成立してしまったわけだ。

しかし手を出しあぐねています、という形では首都の面子がたたない。

そこで都合良く動かせる駒として俺が選ばれ、調査という名目で放り込まれたわけだ。

(我ながら便利に使われているよなあ)

相変わらずな扱いに苦笑せざるをえないが、一方で良いこともあった。

それはベアトリス領主がイルゼさんの大ファンであり、彼女の猛烈なお願いによりイルゼさんとエフィさんが調査へ同行してくれたことである。

『どうか、どうかイルゼ様も一緒にいらしてくださいませ!!』
ウイメの応接間で美しい土下座を披露したベアトリスは、ある意味格好良かったと思う。

会話が少し途切れたところで、エフィさんは紅茶のセットが載った台車の下段に手を伸ばした。

「あの……アリスト様」

そして一冊の本を取り出すと、俺のほうへ控えめに差し出す。

「こちらコスタヴィーノ周辺の植生や生き物、鉱物の簡易図鑑だそうです。その、余計なことかもしれませんが、アリスト様がご興味あるのではとー」

それを見た俺は思わず立ち上がり、本よりも先にエフィさんの手を握ってしまった。

「わあ、ありがとう！　そういうのあったら読みたいなって思ってたんだ！」

バンドンやバニエスタで石に関わったこと、そしてルステラさんから熱心な授業を受けたことで、俺はすっかりこの世界の石や植生を知る楽しさにハマってしまった。

当然この地の植生にも大いに興味がある。

そしてエフィさんはそんな俺の胸中を察して図鑑を手に入れてくれたわけで、その心が凄く嬉しかったのだ。

「ひゃっ!?　あ、あの、お役に立てたのなら嬉しいです……♪」

しかもはにかむエフィさんも見られて、一冊で二度美味しい！

などと楽しんでいた俺の後ろから、領主様が囁いた。

「握るのはそちらではありませんわ。メイドに感謝する時は、こっちを握らないと♪」
そう言っただけでイルゼさんは俺の右手を取り、エフィさんの胸に俺の手のひらを押し付けてしま
う。

「ちょ!？」

唐突なことに慌てる俺の手にエフィさんの手が添えられる。

そしてそれを控えめに引き寄せつつ、エフィさんが頬ほおを更に赤くした。

「お、お願いします……」

「ふふ、素直は美德ですわ♪さ、アリスト様。たっぷり感謝なさって♪」

俺は促され求められるまま、スケスケブラウスと一緒にメイドさんのおっぱいを揉む。

「あの……ありがとう。エフィさん」

「あんっ…ああ、だんなさま…うれしいです……」

これが感謝の印になるのだから、やっぱり異世界は股間に悪い！

しばし堪能させてもらった後、俺は受け取った凶鑑を開いて目を通すことにした。

本を開いてみるとエフィさんの言っていた通り、そこにはこの地域周辺に生息する様々な植物
や鉱物が載っている。

「おっ」

「何かお好みのものでもございましたの？」

「好みというか、一度は見てみたいなって思ってた植物がこれで」

気づけばエフィさんが俺の左隣に腰掛けており、彼女もまた興味津々といった様子で図鑑を眺めている。

「『ロックアイビー』……？ とても綺麗なお花ですね」

ロックアイビー、それは蒼くあお光る花を咲かせる幻想的な植物だ。

蔓をのばして成長する植物で、アサガオに近い感じである。

変わったところの一つは、水中でも花を咲かせることができるところだろう。

とはいえ、それはこの植物が持つ特色としてはジャブみたいなもの。

「食石植物!? このお花は石を食べますの？」

そうなのだ。

ロックアイビーは虫を誘い込んで生育する食中植物ならぬ、石を食べて生育する異世界でも非常に珍しい食石植物なのである。

「蔓を自在に動かして石を引き寄せて食べる習性があつて、お腹が減っている時はかなり素早く蔓を伸ばすつてルステラさんに教えてもらったんだ。こんな不思議な植物知らなかったから、一回見てみたいなって」

ちなみに削ると良い香りがするという石『パルフライト』というものが大好物らしく、その石が産出する所の周辺に生息しているという。

そして都合の良いことにコスタヴィーノ周辺ではこのパルフライトが産出するらしい。

「橙色で半透明の石……ふふ、ルナ族の皆さんがお好きな飴玉みたいですよ」

「本当ですね。いい匂いもするそうですし、間違って食べてしまわないか心配です」

イルゼさんとエフィさんの表情が元に戻り、その後も三人で凶鑑を眺めていく。

しばし穏やかな時間が流れ、俺は満たされた気持ちになった。

（こういうのが幸せっていうのかな。ふふ、なんだかだらしな顔になっちゃいそうだ）

ふへへと頬が緩んでしまったところで、俺は奇妙な感触に気がついた。

「ん……？」

広げた凶鑑の裏側、具体的に言うところ右腿の上側がむずむずする。

ごく僅かな感覚なので最初は気の所為かと思ったのだけれど、頁をめぐっているうちに次第にそれははつきりしたものに変わりはじめた。

（貸してもらった寝間着が肌にあってないのかなあ）

とはいえ、替えてくれというのも気が引ける。

それでも太腿の内側へと広がり始める感触の正体は気になり、俺は凶鑑を持ち上げてみる。

すると、その感触の正体はとても身近な人の手であることが判明した。

「い、イルゼさん？」

「ふふ♪」

可笑しそうに笑うイルゼさんが、俺の太腿を撫で回していたのである。

「アリスト様は本当にお勉強熱心でいらっしやいますわ。長旅でお疲れになっていらっしやるはずなのに……」

イルゼさんの手が腿の内側へ入り込む。

そして今度は優しくそこを揉み始めてしまった。

「馬車に長時間座っていますと、こうしたところにも凝りが溜まりますの」

イルゼさんの手つきは絶妙で、凝りが揉みほぐされている感触はとても気持ちが良い。

「やっぱり、とつても凝っていらっしやいますわ。こんな時はバンドンの温泉に浸かるのが良いのかもしれないけれど、今日はわたくしの手で我慢してくださいまし」

「ありがとうございます……あう……」

お礼を言いつつも、俺は内腿を揉まれるという独特な感触に変な声が出てしまう。

「エフィは左側をお願いしますわ。一緒にアリスト様のお疲れをほぐしてさしあげて？」

「は、はい。では失礼します」

続いて、今度はエフィさんの手が左隣から滑り込んできた。

そしてそのまま、俺の左側の内腿を揉みほぐしてくれる。

「さ、アリスト様はお勉強なさって？ 凝りはわたくし達にお任せくださいませ♪ね、エフィ」
「はい。お疲れを癒せるよう頑張ります」

「……じゃ、じゃあお言葉に甘えて」

そう言つて、視線を凶鑑に戻す。

でも両方の太腿を女性に揉みほぐされるといふ不思議な感觸のせいで、どうにも集中できない。

(つていうか、なんか手が上^{のぼ}つてきてない……?)

そればかりか、二人の手はじわじわと際どいところへ進み始めた。

内腿を上^{そけいぶ}つて鼠徑部へ近づき、やがて二人のしなやかな指が大事なところをかすめ始めたのだ。

(こ、これ以上は別の意味で気持ち良くなってしまう)

事実肉棒はじわじわと硬くなり、服を押し上げはじめている。

しかしそれを誤魔化す暇は無かった。

イルゼさんがごく当然のように俺の玉袋を撫で回し始めたからである……！

「いつ!？」

「ごもこんなに重くなって……これはいけません。長旅で大変疲れが溜まっていらっしやるのですわ。しっかり揉んでほぐさない」と

「あの、そこは、あうっ！」

そこからは、俺が情けない声を出そうがおかまいなし。

イルゼさんは玉袋を手で包んで揉みしだいたり、付け根のほうから撫で回したりして、どんどんと股間部の血流を促進していく。

服の上からの刺激でも、彼女のねっとりとした愛撫は強烈だ。

持ち上がった竿がテントを作りだし、そこにはエフィさんの手が巻き付いた。

「ちょ……!？」

思わず彼女の顔を見ると、その頬は赤く染まっている。

けれどエフィさんはどこか楽しげで、主のイルゼさんと似た雰囲気をもっていた。

「こ、こちらもとっても凝っていらっしやいます……」

「あら、大変ですわ。エフィ、これは直接してさしあげないと♪」

言うが早いか、二人の手によって俺の息子はあつという間にズボンの外へ。

そして完全に臨戦態勢に入ったその姿が、美女たちの前に晒されてしまった。

「はあ……」

「これは一生懸命ほぐさないと明日に響いてしまいますわ」

両脇からにんまりとした笑みを見せられ、俺は頬が熱くなる。

しかし一方で二人がこれからしてくれるであろうことに期待もしてしまっていた。

だからこそ俺は凶鑑を脇に置こうとして……しかし、それはイルゼさんに阻まれる。

「いけませんわ、アリスト様。わたくし達よりずっとずっと草花のほうが大切なのですから、しっかりお勉強なさらないと」

ぐっと凶鑑を俺へ押し付け、手放せないようにするイルゼさん。

その頬は少しだけ膨らんでいた。

「せっかくゆっくりできる場所に着いたのに、アリスト様だったら本ばかりご覧になって……。わたくしにはお胸の挨拶もしてくださいさらないですし」

「えっ、あ、いやそういうわけじゃ……」

イルゼさんの可愛らしい主張に戸惑っていると、もう一方からも控えめな抗議が聞こえてくる。

「経由地でもお世話させてくださらなくて、その……寂しかったです」

「エフィ。アリスト様はわたくし達より、本のほうが好きなのですわ」

旅疲れがあるはずの二人に無理をさせたくない、という配慮は裏目に出てしまったらしい……。

両脇の主従はぶくつと頬を膨らませ、俺に凶鑑を手放すことを許さない。けれど、彼女達の愛撫はますますいやらしい動きに変わっていく。

「こんなにお疲れが溜まっていらっしやるのに、アリスト様だったら……!」

言いながらイルゼさんは俺の玉袋を大胆に弄ぶ。

ピアノを弾くように指を動かし、その後はとても大切なものを慈しむように撫でた。

「くっ、ああ……！」

そして俺の反応をじっくりと見つめて、今度は絶妙な力加減で全体を揉みほぐしてくれる。

「アリスト様、頁をちゃんとご覧にならないと駄目ですわ。ふふっ≡」

なんとも困ったいたずらだけれど、少し意地悪なイルゼさんの魅力には抗えない。

一方のエフィさんも負けてはいなかった。

「旦那様……≡」

「あっ、エフィさん、それ、うあっ！」

彼女が竿をしごき上げる手つきには一切淀みがない。

指で作った輪っかでカリを的確に責め立てたり、手のひら全体で裏側を撫であげたり。

更に折を見て裏スジ周りを優しく刺激し、そのまま柔らかな手で竿全体を上下に扱く。

（エフィさん、ほんと上手……気持ちよすぎっ！）

こんな状態で本を読むはずもないけれど、俺はなんとか凶鑑を開き続ける。

これをやめたら、二人に不必要な配慮をした謝罪にならない気がしたからだ。

そんな俺の耳元でイルゼさんが囁く。

「お勉強は捗はかどっていらっしやいますか？ アリスト様≡」

当然捲るわけではない。

けれどももう少し意地悪な二人と触れ合いたくて、俺は必死に嘘をついてみせる。

「は、捲ってます……あっ、くうっ……」

「それは良いことですね。ふふっ♪」

イルゼさんは楽しげに笑い、玉袋から手を放す。

そして今度は俺の耳を舐め回し始めた。

「ちゅっ≡ちゅっ≡ちゅぱっ≡」

「うああっ……!」



「ちゅっつっ ≡ 耳もとつても凝っていらっしやいます ≡ ちゅっ」

「そ、そんなとこ、凝らない……です……っ……ああっ!」

「いいえ ≡ 凝っていらっしやるのです ≡ えろえろえろっ ≡」

「くっ、ああ!」

思わず身体を反らすと、今度はエフィさんが動いた。

「失礼します…… ≡」

彼女はそう言つと、一旦竿から手を放して立ち上がる。

そして座つた俺の前にしゃがみ込み、あつという間に肉棒を^{くわ}啜えこんでしまった。

「はむっ ≡」

既に敏感になつた我が息子にとって、その刺激はとても鮮烈だ。

「あう、くうっ!」

俺はつい情けない声を出してしまうが、それでもエフィさんはペニスを呑み込むのをやめな
い。

「んむ……っ……」

亀頭が柔らかい喉奥へ突き当たつても彼女は一切苦しそうな様子がない。

そればかりか、竿を飲み込んだまま付け根や下腹部周りをべろべろと舐め回してきた。

「えろえろ ≡ ちゅっ ≡ んちゅっ ≡」

それはエフィさんの清楚で貞淑な見た目からは想像できない、下品で大胆な愛撫だった。竿を呑み込まれ、喉奥で亀頭を甘く締め付けられ、下腹部を執拗に舐め回される。

(気持ち、良すぎ……っ！)

強烈な快感に、俺の腰はびくびくと跳ねた。

ただその腰にもエフィさんの腕が回っており、逃げ道を塞ぐように押さえられている。

「ぢゅっ≡ちゅぱっ≡ちゅぱ、ちゅぱっ≡えろっ≡」

「あっ！ くあっ！ エフィさん……っ……すっ……っ……！」

「ぢゅぞっ≡ぢゅぞぞぞっ≡ぢゅっぽ≡ぢゅっぽ≡」

エフィさん自身の欲望を感じる激しいフェラチオに俺は翻弄され、しばし彼女のされるがままになってしまう。

しかし欲望を押し付けてきてくれるのは彼女だけではない。

「アリストさま、ちゅぱ、ちゅぱっ≡」

妖艶な声でささやく領主様もであった。

彼女はドレスから爆乳を取り出し、ねちっこくそれを押し付け始めていた。

そして今度は俺の上着をめくりあげると、露あらわになった乳首へと唇を這わせる。

「はあ≡はあっ≡アリストさま、こっちも硬くなっていますわ、はあっ≡」

円を描くように周囲を舐め回したり、中心をつんつんと舌尖でつついたり。

「えろっ ≡ えろっ ≡ ちゅっ ≡ んんっ ≡ ちゅっ ちゅっ ≡

「あっ、ああ……イルゼさん、それ、うっう……!」

二人の女性による的確で熱烈な愛撫。

上も下も気持ち良くなりすぎて、俺はついに凶鑑を取り落としそうになってしまっ。

「あっ……!?!」

まずい、と思ったのも束の間。

すぐにそれはイルゼさんの手によって受け止められた。

「エフィ、わたくし達の勝ちですわ ≡

「はいっ ≡

微笑む二人が凶鑑を台車の下の段へと戻し、すぐに情熱的な愛撫が再開する。

「ずぞぞっ ≡ ずぞぞぞっ ≡

「えろえろっ ≡ ちゅぱっ ≡ ちゅぱっ ≡

二人の貪るような愛撫は、俺に息をつく間も反撃の隙も与えてくれない。

そしてエフィさんに激しくペニスを吸引され。

「らんなさま ≡ くだひゃいっ ≡ ぢゅぞぞっ ≡ おしやせい ≡ くだひゃい ≡

イルゼさんにふやけそうなほど耳を舐めしゃぶられ。

「お疲れをお出しになって ≡ アリストさま ≡ はやく ≡ はやく ≡ ちゅぱっ ちゅぱっ ≡

俺は溜まりに溜まった欲望をついに吐き出すことになった。

「はあ……っ！ はあ……っ！ もうイク……射精る……ッ……！」

ービュルルルッ！ ビュルルルルッ！ ビュクッ！ ビュクッ！

旅の間に溜め込んだ精液がエフィさんの口内へと注がれていく。

がっちり俺の腰を掴んだ彼女は、それを躊躇なく飲み干していった。

「んんっ≡んくッ≡んくっ≡ぢゅぞぞぞっ≡ぢゅるるるッ≡」

その上、更に射精せよと言わんばかりに、彼女は敏感になったペニスを吸引し始める。

同時に俺の乳首を舌で蹂躪しているイルゼさんも行動を起こした。

俺の乳首の片方は舐めしゃぶるままに、もう片方をつねったのだ。

「ありひゅとしゃま≡んちゅっ≡んむっ≡んふふっ≡」

意外な責めと絶妙な力加減に促され、俺はあえなく二度目の白旗を上げさせられてしまう。

「ああ、また射精る……っ！」

ードビュルルッ！ ビュルルルッ！ ビュクッ！

射精の快楽が収まらないうちに、再び次の射精へと導かれる。

その気持ち良さは壮絶で、若干恐ろしくなるほどだ。

「んんんんっ≡んくっ……んくっ……≡ぢゅぞっ≡んくっ……≡」

「ありしゅとしゃま≡えろっ≡もっ舌をお出しになって≡ちゅっ≡ちゅっ≡」

その上射精は全て美しいメイドさんが飲み下してくれて、領主様が深いキスで口内をしきりに気持ち良くしてくれるのだ。

(ああ、ここが極楽！)

快楽と幸福感に浮かされ、俺はまさに夢見心地だ。

全身が弛緩し、硬くなっているのは精を吐き出しているペニスだけ。

しかしエフィさんはまだまだ足りないとはかりに、肉棒を強烈に吸引してきた。

「ずぞぞぞぞツ≡」

「あうっ!!」

肉棒を持っていかれそうなほどの吸引に、俺の腰は大きく跳ねる。

その拍子に肉棒が彼女の喉奥へ強く当たってしまった。

流石のエフィさんもこれには驚いたようで、くぐもった声をあげる。

「んんんん……っ!! けほっ!」

軽くむせるエフィさん。

俺は慌ててペニスを引き抜き、彼女に声をかけた。

「ご、ごめん！ エフィさん、大丈夫!？」

「は、はい、大丈夫です。少し驚いただけで……」

「ふふ、エフィったら嘘つきですわね。今、お股のほうからぴゅっとお汁が出ていたこと、わたしは知っていますわ。」

「そ、そそそ、そんなことは……っ……!」

かあつと頬を赤くするエフィさん。

(もしかして……っというの、好きなのかな?)

恥じらうエフィさんに確認したかったけれど、それをすることはできなかった。
なぜなら、部屋の扉がばんつと大きな音を立てて開かれたからだ。

「狼藉ろうじやくは許さなくてよっ!!」

「「!?!」」

そしてそこには右手に赤色の光をまとわせ、憤怒の表情を浮かべたベアトリス領主が――

「この下衆げすめ、吹き飛びなさーッ!」

――いや。

「え、ひゃっ!? は、はだかつ!? な、なんで!? ふああえええっ!?!?!?!」

驚愕の表情を浮かべるベアトリス領主がいたのであった……!

賓客達との食事を終え、わたしは屋敷の執務室で安堵の息をつく。

「ふう……ひとまずは落ち着きましたわね。歓迎の出来も上々といったところですよ」

長旅も問題無し。

あらかじめ指示しておいた食事も完璧でしたし、イルゼ様はニコニコ。

それに一緒にやってきたエフィという美人ーだけど時々凄く怖いーメイドもニコニコ。

ここまで配慮の行き届く美人領主ベアトリスに、イルゼ様はきつと一目おいてくださったに違
いありませんわ！

『ウイメからの長旅も、到着後の歓迎会も……なかなかに見どころがありますね、ベアトリス』

『そ、そんなもつたいたいお言葉……！』

『謙遜など不要ですわ、ベア。貴女あなたはもはやわたくしの同志。言うなれば右と左の靴みたいなア
シです。これからは領主として共に霸道的な凄く感じで歩んでまいりましょう』

ああ、イルゼ様からベアと呼んでいただけるとはなんて！

『イルゼ様と靴みたいなアレで、凄く感じて歩む、合点承知いたしましたよ！ コスタヴィーノ
をウイメにも負けない素晴らしい女性都市にしてみせますわ！』

ただ下賤なわたしは、イルゼ様とのつながりをついつい欲してしまうのですわ……。

「そ、そそ、それでは愚かなわたしが決意を忘れてしまわないように……お、おお、おそろいの
ドレスを仕立てる、という愚行をお許しくださいませんか……！」

ああ、わたしの馬鹿！

でもイルゼ様はお優しい方……こんなわたしをきつと許してくださいさるのです！

「ほ、ほほ、本当でございますか!? ああ、まさか普段身につけていらっしやるドレスを下賜かしてくださるなんて!! 一生大切にしますわ! すーはー、すーはー!!」

なーんてことになっちゃったりして!!

いえ、きつとなっちゃいますわ! わたし凄こいし、色々頑張こっていますもの。

健気に頑張こるわたしを女神イルゼ様さまが放はなっておくはずはありません!

決まり! 決まり決まり! イルゼ様のお古ドレスはわたくしのものですわあ!!

「うふ、うふふふっ♪うふふふふふ♪」

「その変態様、気持ち悪い笑い声をやめていただけますか?」

「ひよえっ!?!」

急に声をかけられて、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ品のない声をあげてしまいましたわ。

しかしすぐに威厳と美しさを取り戻し、下手人を睨にらみつけてさしあげましてよ!

「クラネ! いたのならそう言いなさいませ! それに変態様さまってなんですよっ!!」

「一人で言いったり答こえたりして、しまいに笑い始める女をを変態以外以外になんと形容けいごうしたら良いのです? 人様の衣服いぶつをもらった気きになつて、一体いっどんな妄想まぼろしですか」

「な、なな、何を言いっているのです!! わたし、そんな妄想まぼろしなんて全く、決して、これっぽっちもしていませんよ!」

「『一生大切にしますわ！ すーはー、すーはー!!』と聞こえましたが。気持ち悪い動作つきで」

「や、やめなさい!! 可憐な動作だったでしょう!!」

「言ったことは認めるのですね」

「はっ! ぐ、ぐぬぬぬ……!!」

よく手入れされた茶色の長髪と整った顔立ち。

ウイメのものを真似て作らせたメイド服もばっちり似合っていますし、仕事ぶりはわたしがちよつとだけ驚く程度に優秀。

そんなクラネは、完璧領主のわたしが右腕として重用するに足る人材ですわ。ただ大きな問題を抱えているのもまた事実。

クラネったら部下の癖に、わたしへの敬意が感じられないのですわ!

「普通に名前で呼べばよいでしょうに!! わたし、一応は貴女の上司だということを忘れにないでいるのではなくって!？」

「上司の乱心を止めるのも部下の役目。上司の有り様あさまを率直に表現することも必要です」

「別に必要ではありませんわ! なぜならわたし変態ではありませんもの!!」

コスタヴィーノがまだまだ小さな規模だった頃からの付き合いとはいえ、領主を変態扱いするなんてまったくもって度し難いのですの!

「そもそも執務室に入ってくるなら声をかけるのが礼儀でしょ？ 貴女がそのように礼を失った振る舞いを見ると、部下達に示しがつかなくなってしまうわ」

「いえ、その点は心配無用です。『屋敷には夜な夜な気味悪い笑い声が聞こえる部屋があるけれど、気持ちが悪いので近づかないように。万が一近づくと気味の悪い笑い声が伝染ります』と新人には伝えておりますので」

「最低な教育を施すのをおやめなさいっ!!」

ここ最近入ってくれた新人が妙に執務室に入りたがらないと感じていましたけれど、クラネの教育が原因だったのですわね……!」

みな良い子ばかりですし、一緒にお茶でも頂いて仲良くなるうと思っていましたのに!

「……ちっ。では怨霊領主様、こちら明日以降の調査日程表です。たたき台を元にいくつかの場所を詰めておきましたので、確認を」

「舌打ち!? しかも何事も無かったかのように仕事に戻る!! 貴女怖い、怖いですわ!!」

今すぐお説教をするべきとは思いますが、仕事を疎かにしては領主の名が廃りますわ。

わたしは有能な領主、物事の優先順位を間違えたりはしませんの。

「相変わらず書類はよく出来ていますわね。まったく……上司への当たりだけ改善すれば、どこへ出しても恥ずかしくない部下ですのに……!」

「どこへ出しても恥ずかしい領主がそれを言うのですね」

「あ、ひどいこと言った!! 訂正なさい!! じゃないと残業させますわよ!」

「しかも横暴ときました。まったく困ったものです」

うぐぐ、クラネの涼しい顔が本当に腹立たしいですわ……っ!

とはいえ、クラネも長旅を終えたばかりですわ。

だから優しくして可憐なわたしは、可愛い部下に別の書類を授けてさしあげることになりました。

「4日目以降は規模の小さな商店にも顔を出していただけるようにしましたわ。イルゼ様もエフイもそういったところを嫌がる女性では無いようですから」

「この書類は……旅の途中で? もともとの計画とは少し違ってはいますが」

「ええ、そうですわ。苦勞をかけますけれど、客人にも領民にもより良い機会にしたいと思いましたが。メイド達の配置も整えておきましたわ」

いくつか案を用意するのは優秀な領主の役目、この程度当然のことです。

「もし厳しそうであればこちらで。以前のものより軽く調整しておきましたわ。まあこれも経由地でやりましたから、雑な部分はうまく馴染ませてもらってよろしくて?」

「……」

「クラネ? どうかしまして? 何やら不思議な顔になってますわよ」

「あ、ああ……いえ。人は自分のことが一番見えなないものなのだな、と」

「え、何でそんなに優しい顔をしていますの? 怖いですわよ?」

「……ちつ。今の発言は撤回します」

「あつ、また舌打ちした！」

わたしの抗議を誤魔化すためか、クラネは話題を変えましたわ。

「アリスト様についてはどうお考えで？ 旅の最中から失礼を連発なさっていましたけれど」

「考えも何も、イルゼ様を洗脳した下衆ということで答えは出ておりますわ！」

「はあ……未だに『アリスト様が何やら妙な術を使う、あるいは遺物を隠している』という考えを変えないおつもりですか」

「当然ですわ！」

わたしは力強く抗議しましたわ。

そもそも考えを変えないとかそういうことではなく、そうじゃないと今のイルゼ様の態度に説明がつかないということなのでから。

「だつて……！」

イルゼ様は確かに仰おっしゃっていた。

そして男達への反感にまみれていた頃のわたしに、しっかりと教えてくれたのです。

「『女性が豊かな人生という絵を描くために、外遊訪問という絵の具は必ずしも必要ではないと思うのです』……これが、イルゼ様が仰ったお言葉だとは常々言ってきましたわよね」

「ええ。聞かされすぎて、私もそろそろ空で言えそうです」

「ならば分かるのではなくって？ 男性と決別した女性のあり方を実現したいという、イルゼ様のお心が。首都や男達との関係をどこ吹く風と流し、女性だけで生きていく……そんな軽やかな過ごし方を確立させたいという崇高な志が」

イルゼ様の高い志に震えたあの日の感覚は、今もずっと鮮明で。

その理念の素晴らしさはクラネにも伝わっているのでしょう。

わたしにつっかかることなく黙って聞いているのがその証拠ですよ。

「崇高なイルゼ様が簡単に心変わりをするとは思えません。にもかかわらず今は朗らかに下衆に寄り添っていらっしやる。この不可思議な状態を洗脳以外になんと表現するのでして？」

まったく憎たらしい下衆ですわ！

「下衆が女性の作ったものを嬉しそうに頬張り、丁寧に敬礼をしていくのですか？」

「それは……ほら、げ、下衆だってお腹ぺこぺこなら思わずご飯を食べますわ」

「あんなに顔を近づけて罵倒しても怒らず、手を出したりしない下衆がいるのですか？」

「い、いましたわね！ 世界は広いというのはこのことですわ！ おほほほほ！」

確かに……強気に出ても魔法を出してこないのはちよっとだけ、ほんのちよっとだけ変だとは思いますが。

でも制圧能力が非常に低かったり、あるいはごく限られた場所でしか行使できなかつたりする魔法だってありますもの。

「私もアリスト様が奇つ怪、あるいは奇天烈と表現するしかないのは理解できます」

「でしょう？ ま、あのアリストという男はただの下衆だと思えますけれど！」

「でもベア、人とは多面的なものです。イルゼ様のお心が変わっていなくても、理念への取り組み方が変わることだってあります。それこそ世界は広いのですから、貴女の考えだけが全てというわけではないのですよ？」

「そ、それは……そうかも、しれませんけれど……」

……でも、絶対におかしい。

だって確かにあの時、イルゼ様の美しい双眸ソウメイに灯った光はまっすぐで。

言葉の一つ一つが心の底からのものだって、わたしのような者にも分かったのですもの。

男にすり寄るなんて……天地がひっくり返ってもありえない。

「……ともかく！ わたしは考えを変えませんわ！ 今後も最大限の注意と、場合によっては魔法の行使も視野に入れていきますわ」

「はあ……そんなに首都の貴族と問題を起こしたいのですか？」

「起こしたくなんてありませんわ！ クラネの分からず屋！」

言いながら、わたしは書面へ押印する判子を探し、引き出しを開けたのですけれど。

「……っ……！」

……そこに入った紺色の箱を見て、心に昏い雲が掛かりましたわ。

それはまるで今コスタヴィーノに雨を降らせているような黒くて重い雲。
最低の男がこの都市へ持ち込んだ……逃れがたい雲でしたわ。

イルゼ様達をコスタヴィーノへ招くべく、お迎えに出発する準備をしていた夜。
執事服のその男は、どこからか執務室に侵入してきましたの。

「なかなか凄い雨だねエ」

「っ……!？」

その男は一般的な貴族と比べれば華奢な身体つきで、そこはペレ伯爵を彷彿させましたわ。
けれど、この男はペレ伯爵と異質さの方向性が違う。

「ちよおつと邪魔してるよオ、ヒヤッヒヤッヒヤッ!! ご領主様ご機嫌はいかがかなア？」
奇つ怪な笑い声をあげる割に、切れ長の目は冷徹なまま。

後退した白髪を後ろでまとめていますけれど、それも乱雑でどこか不気味でした。

「……やんごとなき方の執事様かと存じます。夜更けに、どのようなご用件でしょうか？」

「ほほう! こうして声をかけると、うちの主は必ず腰を抜かすんだけどねエ? どうやら君は
アルコル伯爵より胆力においては優越しているようだア。存分に誇るといいよオ? ヒヒヒ!」

「あ、アルコル伯爵……!？」

わたしは身体が震えるのを抑えられませんでしたわ。

だってアルコル伯爵といえば、男性貴族に好まれる酒を一手に担う重鎮。

政まことに大きな影響力を持ち、全ての頂点に立つイコモチ公爵とも近い位置にいるとされる御方ですもの。

「グリムウエフトと呼んでくれたまえ。優越的な部分を持つ検体にはそれくらいの権利を授けてやらないと、ワタシの信条に反するからねエ。フヒヒツ！」

「ありがとうございます、グリムウエフト様。それでアルコル伯爵から何か……？」
コスタヴィーノは非公式な都市。

首都内で貴族が互いに牽制しあう隙について立ち上げたとはいえ、いつかこうしてどこかの貴族が接触してくるのはわかっていましたわ。

(……まさか人間を検体呼ばわりする狂人がやってくるとは思いませんでしたけれど)
ただそれが公爵とも近いアルコル伯爵ならば、むしろ好都合ではありますの。

(あとはどのような要求をされるか、ですわ……)
わたしのそんな思考はお見通しなのでしょう。彼は冷笑を浮かべましたわ。

「自由の都市コスタヴィーノ、なんともいい響きだねエ！　そしてその自由には代償があるということを理解しているなんて、我が主より知性も優越しているようだア。頭を割って、中身を交換してやりたいくらいだよオ。ヒヒヒ!!」

自身の主をここまで言う執事は初めてで、わたしは少し面食らいましたの。

その発言内容も不気味で、背筋に冷たいものが流れましたわ。

「では早速本題だア。ワタシは……いや失敬、ワタシと我が主アルコル伯爵はねエ、とある実験がしたいのだよオ」

「実験……？」

「なるほど、もう少し言葉がいる程度の知能ってわけねエ」

彼はわたしを舐めずるように見た後、低い声色で言いますの。

「じゃあ『遺物』って知ってるかいイ？」

「え、ええ……。古い時代に遺のこされた、不思議な効果のある道具だという話は聞いておりますわ。賢者様が遺したともいわれていると」

賢者様は、子を作る力を失ったこの世界の人類に『魔法交配』という儀式を授けた御方ですわ。

それは魔法が使える男女が首都の地下にある生命の部屋にて秘術を受けることで、子孫を生み出す奇跡の法。

古代には『セックス』というものがありそれで子を繋いだという説もありますけれど、今は全ての人がその奇跡の法によって生まれている……というのは常識ですわ。

「そうそう。で、その遺物の一つがこれなのよオ」

言いながらグリムウエフト執事が懐から取り出したのは簡素な形状のネックレス。

わたしはそれを見てつい大きな声をあげてしまいましたわ。

「え……ええっ!？」

「いい反応だねエ。確かに遺物は貴重なものだけどオ、アルコール伯爵に取り入りたい者は少ないからさア、ご機嫌取りに「う」いうのが持ち込まれることもあるんだよねエ。ま、大抵は偽物、つまり取るに足らないゴミなんだけどオ？」

彼は鈍い銀色に光るそれを揺らしながら、口元を歪ませましたわ。

(つまり、本物と判断されるに足る情報を持っているのですわね……。首都に伝わるとい遺物の図鑑に記録があつたのかもしれないわ)

そうして彼は、貴族が重要な取り決めの時だけに使う魔法印がされた書類を机に置くのです。「まあうちの主ときたら、酒をつくる遺物をディーブとかいう小物に盗まれてただけどねエ？ ヒヒヒツ!! 愚か者もここまで来ると一種の芸だと思わないかい!? 思い切つて解剖して、どこからその芸が生まれるのか細胞単位でしらべてみたいねエ！」

ゾツとするような話を心底面白そうに言われても、わたしの立場で反応なんてできませんわ。

アルコール伯爵の気分を害すような発言に賛同などすれば、後ろ盾になっていただくどころではありませんもの。

「グリムウエフト様。お話からすると、実験というのはその遺物を……？」

「そういうコト。ちゃんと話を聞ける検体は好きだよオ」

彼は取り出した古めかしい箱にネックレスをしまいます。

「賢者が遺した記録によると、このネックレスは魔力を込めてから他者に身に付けさせるとオ、その者を徹底的に素直にできるらしいんだよねエ」

「徹底的に素直、というのは？」

「つまりなあんでも自白させられるってことさア。今思ってること、隠している財産の在り処、人に言えない欲望……全部言わせちゃえるってわけだねエ」

「それがこの装飾品だと仰るのですか……!？」

わたしが身を固くすると、グリムウエフト執事は下卑た笑みを浮かべましたわ。

「女の秘密になんて興味ないよオ。ワタシの興味はこの効果が本物かどうかってことだけさア」
「そ、そうです。それで、そちらをお試しには？」

「試したよオ、でも男にはどうにも効きが悪いみたいでエ。命を取れるわけでも無かったし、身体に不調を引き起こすこともできないのよオ。とはいえ、本当に有用ならこんな便利なものはないってわけでエ」

……今度は女性を実験台にしたいと。

いえ、実験台として都合が良いと目をつけたということですね。

「当然、他の貴族に見つかりたくないし？ ってなるとこの都市、貴族達が微妙に手を出しづらい状況で都合が良いってわけさア」

とても、とても気が進まない取引ですわ。

このようなこと、一度引き受ければ次はもつと非道な話を押し付けられかねません。大切な民を傷つけない領主などいるはずありませんわ。

「……この都市にはもうすぐ調査が入ります。アリストという男性がその調査員として現地入りもいたします。それこそ領民に妙な実験などとしては、首都に悟られるではありませんか？」

「いやいや実験対象は、まさにそのアリストって検体だよオ。どうしてわからないかなア？」

「そんな、かの者は男性ですよ！」

「だけど魔法が使えない、そうだよねエ？ だから首都を追い出されたわけだア」
想像通り、いえ想像以上に冷たい青い瞳がぎよろりと動きます。

「もしも魔法を隠しているなら暴けるし、普通とは違うからこそ従わせられる可能性もありそうだろうオ？ 遺物の効果が充分に確かめられれば、それで良し。面白^{アリスト}い検体が入るなら、それも良し。どつちも大収穫なわけだア」

この男にとって、今こそ絶好の機会だったというわけですね……。

「もし効果が無ければ男に媚びたちよつとした贈り物にしか見えないだろうオ？」

不気味な執事は、改めて書面を見せびらかします。

「ほらこれを良く見てご覧よオ。ちゃあんとアルコール伯爵の後ろ盾が約束されてるよねエ？ しかも魔法印つきときたア、これで本気だつて分かってもらえるだろうオ？」

彼の言うことは事実。

書面には、確かにコスタヴィーノを公式に女性都市と認めるための後ろ盾になることが約束されていて、特殊な魔法印も押されていますわ。

これならば契約を違えれば彼、あるいはアルコール伯爵が命を失うのでしよう。

「コスタヴィーノの領主でいたいんですよ？ 仮初かりそめの自由を満喫したいんですよ？ 相手は

のこのこやってくる男だア。領民じゃないんだし、簡単じゃないのオ」

「……っ……」

「今ならできるよオ？ あ、検体にはもう少し言い方を変えないと伝わらないかア」

と、唐突に執務室の机上のランプが倒れましたわ。

……いいえ、その表現は正確ではありませんわね。

グリムウェフト執事の指先から現れた透明の糸、恐ろしいほどの冷気をまとったそれがランプを切り刻んだのです。

「……その身体もこの都市も、こおんなふう^に解体されたくないですよオ？」

狂気の滲む陰湿な笑みを前に、もはや選択の余地などありませんでしたわ。

……ッ……ト……リ……ス……

「ベアー！」

どうやら、黙って考え込んでしまっていたようですわね。

クラネが珍しく心配そうにわたしの顔を覗き込んでいますわ。

「大丈夫ですか？ 意識がどこかへいつていたようですが」

「だ、大丈夫ですよ。少し考え事をしていただけですわ」

軽く首を振り、胸中を覆う黒い雲を払い除けます。

窓の外のそれはどうにもできずとも、自身の心の中くらい晴れやかにしておきたいですもの。

「ベア。何か私に隠していることがあるのではありませんか？」

「えっ？ き、急に何のお話ですよ？」

流星に鋭いですわね……！

「私にも言えないことですか？」

確かにグリムウエフト執事の件はクラネには話していません。

それに関して申し訳なきがないと言え、それは大きな嘘と言えるでしょう。

(クラネがわたしの手を引いてくれたから今がある……それは分かっていますけれど)

首都で周囲と折り合いが悪かったわたしの手を、彼女と、海賊を名乗る女が引いてくれなければ、きつと今も首都でのけ者だったはず。

だからこそクラネは一番の側近で使用人で友達なのですわ。

でも、これはわたしが領主でありつつづけるために抱えるべきこと。

(わたしは、イルゼ様が仰るようにあらねばならない。そうでなければ「コスタヴィーノを守れない」)

男性を必要としない、男性と決別する。

それがイルゼ様から学んだ思想で、わたしが体現すべき生き様なのですから。

「大したことのない話ですから、言うべきでないというだけですわ」

わたしは領主、この都市で誰よりも自立する女でなければ。

そう、「コスタヴィーノのイルゼ様であらねばならないのですわ。」

「はあ……常々妄言を聞き流してさしあげているところのこと」

「ちよ!? 妄言とはなんでして!! 夢見る美女の可愛らしい独り言ではありませんの!!」

「扉の外まで聞こえてくる独り言などありません。まあ、ベアはアレですからね……」

「アレってなんですか!？」

「大丈夫ですよ、ベア。貴女がアレであることは領民もある程度、悉々、すぐく面倒だなあと思いつつ、我ま……んんっ、受け入れていますから」

「あー!! 我慢!! 我慢って言いましてたわね!! いいですわ、泣きます! それはもうびいええ

つともう泣きますわよ!」

「どっぞ」

「いっらあっ!! 少しは止めるそぶりくらい見せるべきですわよ!!」

わたしの居場所はここなのです。

暖かくて、それでいて安心できる場所はこの領主の席だけ。

クラネが今もこうして付き合ってくれるのだから……きつと。

「もうっ！ ……とりあえず、イルゼ様達の様子を見にいけますわ」

「おや、今からですか？」

「監視が無くなった途端、下衆があの子を虐めている可能性もありえますよ？」

「はいはい。お疲れのところでしょうから、あまりうるさくしないように。イルゼ様にも嫌われ
てしまいますよ」

「弁わきえておりますわ。わたし、領主でしてよ？」

そう言つて、わたしはクラネの目を盗んで遺物のネックレスを懐に入れ、部屋を出ました。

本当に用事があるのは例の下衆の部屋だからです。

(……隣がイルゼ様とエフィの部屋ですし、気づかれないようにしませんと)

かの男について、当初はイルゼ様達の部屋から遠い客室へ泊まらせる予定でした。

しかし、それは叶いませんでしたわ。

だって宿泊の部屋について説明した時のイルゼ様達の目、すっごい怖かったんですもの！

(あんなのお願いの目つきじゃなくなつてよ……！)

ぶるつと身震いをしながら歩いていると、やがて下衆の部屋の前へ到着しましたわ。

(……彼は、とびきりの悪人で、下衆で、救いようのない男)

イルゼ様達と微笑み、車内で無防備にお昼寝してしまったわたしに掛布をして。

美味しい美味しいと嬉しそうにメイド達の料理を食べ、女性との団欒を心の底から楽しんでい
るように見えた。

(でもそれは、全部まやかし。まやかしに……決まっていますわ)

だから、コスタヴィーノのために。

この扉を叩き今までのことを詫びる振りをして、ネックレスを渡しても。

彼をあの男のもとへ送ってしまったも。

(……許される。許される、はず……ですわ)

わたしは懐から例のネックレスを取り出し、魔力を込めます。

雨が激しく窓を叩く中、それはわたしの魔力を吸い込み、ぼんやりと発光しはじめました。

後はもう一方の手で扉を叩き、下衆の名を呼ぶだけ。

(……っ)

ただ何故かわたしの片手は重くて動きませんでしたの。

……きつと、長旅の疲れが二の腕に出たのですわね。

これでは演技にも熱が入らず、下衆に見抜かれてしまうでしょう。

(……目を改めましょう。機会はこれからいくらもありますわ)

そう思つて扉に背を向けた時、わたしの耳は重大な音を扉の奥に聞いたのですわ。

「んんんん……っ!! けほっ!!」

「!!」

それは明らかに女性のむせる声でしたわ……! !

おそらくはイルゼ様の従者であるエフィのものです。

そしてその声は少しえずくようでもあり、何か喉奥が苦しそうなことがすぐにわかりましたわ。

(ここは下衆の寢室……! ! つまりあの男がエフィを苦しませるようなことを……やっぱり、わたしの考えは当たっていたのですわ! !)

わたしは右手に魔法をまとわせ、いつでもあの下衆を吹き飛ばせる状態で部屋へ飛び込みます。

「狼藉は許さなくつてよッ! !」

幸い部屋の光石が灯っていたことで、すぐに下衆の姿を見つけることができましたわ。

そうなれば後は魔法弾を打ち込むだけ。

わたしの魔法で、あの下衆を窓の外へ放りだしてやるのです! !

「この下衆め、吹き飛びなさーッ! !」

でも、ことはそうは運ばなくつて……。

「え、ひゃっ!?」

だつて!!

あの下衆が、お、おちっ、お、おち×ぽ、出してるなんて思いませんものっ!!

「は、はだかつ!? な、なんで!? ふああえええっ!?!?!?!?」

そりゃあ声も出るつてもんですし!

普段は軽やかなわたしの足も、もつれるつてものでしてよ!

「あ、あわわわっ!?」

けれどその纏もっれが、あんなとんでもない事態を巻き起こすなんて。

……愚かなわたしには、これっぽっちも想像できませんでしたわ。

コスタヴィーノに到着し、二人の美女に誘われ夢のような時間を楽しんでいた俺。

けれど、その時間は唐突に終わりを告げることになった。

部屋の扉がけたたましい音を立てて開き、ベアトリス領主が飛び込んで来たからである……!

「狼藉は許さなくつてよッ!」

「「「!?」」」

憤りを瞳に浮かべた彼女は赤に光る右手を振り上げる、けれど。

「この下衆め、吹き飛びなさーッ!?」

彼女はすぐに顔色を変え、悲鳴とも奇声とも言えない声をあげ始めてしまった。

「え、ひゃっ!? は、はだかつ!? な、なんで!? ふああえええっ!??!?!?!?」
でもその反応は淑女として当然と言えるだろう。

だって今の俺、下半身すっぽんぽんでベッドに座ってるんだもの……!

「あ、えと、ご、ごめん!」

俺は流れて謝罪しつつ、急いでズボンを穿き直す。

が、その僅かな間にも事態は更に進行した。

ベアトリス領主が足を纏れさせ、盛大に体勢を崩してしまったのである。

「あ、あわわわっ!?」

正面から床へ倒れ込もうとするベアトリス領主の先には、悪いことに応接用の椅子やテーブルが置かれている。

このままでは天板や脚に顔や頭をぶつけかねないと察した俺達は、弾けるように立ち上がって彼女へ手を伸ばす。

「危ない!」

「いけません……っ!」

「ベアトリス殿っ!」

一番に彼女の手を取れたのは俺だった。

細腕を引くと、小柄なベアトリス領主はくるりと回転し、俺の左腕に背中を預ける形で収まる。

とはいえ勢いはあったので彼女の身体は少しだけバウンドし、小さく声があがった。

「ひゃうっ!？」

同時に彼女の手から何かが投げ出される。

それは薄暗い室内の宙を舞い、窓の外に走った稲光によって形状が浮き上がった。

(ネックレス?)

宙へ放り出されたそれは放物線を描いて飛び、輪投げのようにイルゼさんの首に収まった。

「あら? ふふっ、上手く受け取れましたわ♪」

俺はイルゼさんの首元を見て、それが普通のネックレスではなさそうであることに気づいた。

(赤い粒子を纏っているような……?)

どうも異世界でも珍しい類のものらしい。

その証拠に、イルゼさんとエフィさんも興味津々といった様子で顔を近づけている。

「とても綺麗ですわね。いわゆる、蓄光性の石でしょうか」

しかしイルゼさんが手を触れようとした瞬間、ベアトリス領主が血相を変えて叫んだ。

「い、いけませんわっ!!」

刹那、ネックレスは今までの比にならないほどの光を発する。

その光は夜が吹き飛んだかと思うほどの強さで、俺達は揃って目を覆った。

「「きゃっ?!」「」

「わっ!!」

発光は一瞬のこと、すぐに室内はもとの夜闇に戻る。

しかし俺の目が闇に慣れるより前に、イルゼさんの悲鳴が上がった。

「えっ！ な、なんですの!?!」

すぐにそちらへ目をやると、そこには驚きの光景が広がっていた。

イルゼさんの首に掛かるネックレスのチェーンが、大量の光る立方体が変わっていくのだ。

そしてそれらはそれぞれが複雑に回転しながら組み合わせさり、やがて一つの形を成す。

(仮面……!?!)

その仮面は目にも止まらぬ速さで動き、イルゼさんの美しい顔に取り付いてしまう。

「ひゃあっ!?!」

「イルゼさんっ!?!」

「「イルゼ様っ!!」「」

更に驚くべき現象は続く。

仮面を身に着けた彼女が当たり前のようにふわりと宙へ浮かび、その背中の右半分に天使のよ
うな羽を生やしたのである……! !

「「「なっ……!?!」」」

現実感のない光景に、俺達は言葉を失う。

一方で、宙へ浮かんだイルゼさんは異常なほど平坦な声色で話し始めた。

「イヴシステム・セラーフア承認。ミストコープ管理権限を受諾」

あまりにも起伏のない声。

まるで文字を機械的に読み上げるソフトウェアのようだ。

「い、イルゼさん……?」

明らかに様子がおかしいイルゼさんに、俺は恐る恐る声をかけてみる。

けれど口から上を仮面に覆われた彼女は、感情が一切感じられない声を発した。

「起動手続き中です。メイカー権限以外の問い合わせは現在応答できません」

異論を挟ませないような淡々とした対応。

人が変わったようなイルゼさんを前に俺は不安と混乱で頭も身体も上手く働かない。

ただ息を呑み、彼女の様子を見守るだけだ。

その間もなお、仮面のイルゼさんはどんどんと言葉を進める。

「ホロウィング破損。修復と施設稼働準備のため、サポートアソシエイトを選定。コード・ネレ

イダへ緊急回収を要請します。付近の従業員は一定の距離をとってください」

今度は窓の外でも変化が起きた。

どこからともなく現れた白い光の粒子が、豪雨の合間を縫って屋敷に向かってきたのだ。それらは窓の隙間から流体のように室内へと侵入し、イルゼさんの右隣で塊になる。そしてその塊は女性的な声を発した。

「ネレイダ。到着しました」

同時に集合体が発していた光が白から肌色へ変わり、その形も変容する。やがてそこに現れたのは――

（は、裸の女の人……!?)

――蒼く長い髪が印象的な若い裸の女性であった。

その裸体は芸術品か、あるいは計算され尽くした工業製品のように美しい。目元を完全に隠す長い前髪を持つ彼女は、イルゼさんと同じく宙に浮かび、平坦な声を出す。

「ネレイダよりセラーフアへ。簡易装復元^{かんいそう}」

すると蒼い髪の女性の身体に、蒼と白を基調とした軍服のような衣装が出現する。

同時にイルゼさんの服にも変化があった。

南国風ワンピースが、まるで上から印刷されるかのように別の衣装へ変わっていくではないか。

「復元完了。セラーフア、異常はありませんか？」

ネレイダという女性がそう言って声をかける頃には、イルゼさんの服装は白地に金の刺繍が入ったものになっていった。

更にその頭の上には光の粒子によって形作られた金色のリングが浮かぶ。

「ええ。問題ありません」

翼とリング、どこか神々しさを感じる衣装。

その佇まいは仮面の天使と形容するにふさわしい。

圧倒的な存在感のせいか、彼女からはこちらを気圧するような力が発せられ始め、それに合わせて右側だけだった羽が左側にもじわじわと現れ始めた。



(このまま見ているだけじゃ駄目な気がする……っ……！)

そう思うのに、俺の口も喉も脚も動かない。

いや、正確にはその全てが震えてしまつて、言うことを聞かない状態なのだ。だから俺は声を出すこともままならなかつた。

「ホロウィング、修復完了。セラーファ、ミストコープへの帰還は可能ですか？」

やがて彼女は左右三枚ずつの立派な翼を広げ、完全なる天使となつた。

そしてネレイダという女性に対し、自身の肉感的な身体を触りながら言った。

「可能です。しかしこの女性体の健康のため、まずは十分な休息が必要です。施設稼働に向けた準備は最低限にし、短期間の休眠状態へ入ります」

「了解。同席者の魔法紋をスキャンします」

イルゼさんの言葉に、まるで副官のような振る舞いをする蒼髪の女性。

そんな彼女は身体の向きを変えると、宙を滑るように移動して俺の目の前へと降り立つ。

「……っ……」

何か今言わないといけないのではないか。

そう思うけれど、やはり声がつまみ出さない。

そんな俺に対し蒼髪の彼女は瞳を見せないまま言った。

「同席者全員の極度の緊張を検知。ネレイダより皆さんへ、警戒の必要がないことを伝えます」

唐突に直接声をかけられ、俺は目を見開く。

すると彼女が降り立つた場所を中心に大きな魔法陣のようなものが床に広がった。

それは動けなくなっている俺達三人を内包する程度に広がった後、粒子状になって消えていく。

「メイカーと相違。臨時の代理グループ、あるいはセラールファ担当个体イルゼに近い者と判断します」

そのまま彼女は俺に語りかけてきた。

「个体イルゼの健康と休養のため、一度ミストコープへと帰還します。面会は二十四時間以上経過後に可能になり、役割の解除もそれ以降に可能です。セラールファ担当の間、彼女の健康は私達『イヴ』が完全に保証します」

一度言葉を切った彼女は、そのまま自らの胸の谷間へ手を入れる。

場の空気にそぐわない、やたらに艶かしい仕草に俺は面喰らうが、何かを話す間はなかった。

俺が声を出す前に、彼女がそこから取り出した古めかしい鍵を手渡されたからである。

「島への上陸、个体イルゼとの面会にはこちらを必ずお持ちください。未所持の場合、不法侵入者とみなされる可能性があります。それからこちらも」

更に間髪を入れずに、彼女はどこからか別の紙も取り出し、ぐいと俺の手を取ってやや強引に握らせた。

「セラーファは運営側となるため、イヴとしては活動しません」

「っ……!？」

唐突な行為に驚く俺の耳元に彼女は唇を寄せ、密やかに言う。

「施設稼働後は『男性向けのイヴ』のご利用が可能になります。どうぞご検討ください」
眼の前で起きた謎の現象や彼女たちが話す単語の数々に、手渡された古めかしい鍵。次々と押し付けられる情報の洪水に、俺の混乱は深まるばかりだ。

(い、一体何が起きてるんだ……!?)

とてもじゃないが纏まらない思考と、驚きで動かない脚。

その二つによつて俺の行動は遅れてしまうことになり、そしてそれが良くなかった。
なぜなら二人の女性は共に宙へ浮かび――

「「手続き完了。ネレイダ・セラーファ、帰還します」」

ホログラムのような翼をはためかせ、窓の外へ飛び去っていつてしまったからだ……!

「ま、待つて……っ!」

俺は手渡された全てを放りだして、彼女たちを追う。

しかし脚は未だに上手く動かず、ほとんど転がるように窓際に近づくのが精一杯だ。

それでも思い通りにならない喉をなんとか震わせ、できる限り声を張り上げる。

「イルゼさんっ!!」

すると隣にエフィさんも駆け寄ってきた。

彼女も飛び去っていくイルゼさんの背中に必死に声をかける。

「い、イルゼ様っ!! イルゼ様あつ!!」

しかし二人の背中は止まることはない。

豪雨の中でもはつきりと輝く翼が、どんどん遠ざかっていく。

そしてその翼は、まもなく海洋に立ち込める霧の中へ入った。

「イルゼさん待ってっ! 待ってくれ……っ……!」

そうしたって仕方がないと分かっている、俺はさすがのように手を伸ばしてしまう。

すると、不思議なことが起きた。

(霧が晴れた……!?)

二人の女性が入った場所から割れるようにして、一度も消えたことがないという霧が晴れていくではないか。

そして雷鳴を響かせた稲妻の光によって、そこに大きな影が浮かび上がった。

「し、島です! アリスト様! イルゼ様達はあの島へ……!!」

驚く俺達の視線の先で、輝く翼はその島の上空で一度旋回する。

そしてすると高度を落として着陸したかと思うと、やがて光は消えてしまった。

「「……」」

次々と起きた異常事態を未だに消化しきれず、俺とエフィさんは改めて言葉を失う。

(あそこはどうやって到着できないって話じゃなかったか……?)

俺はそこで他の手がかりに意識が行く。

ネレイダという女性に渡された鍵、あとは何かの紙についてだ。

(そういえば、彼女は面会だとか役割の解除だとかという話もしてたはず)

ならばすぐにでもそれらを調べて、一刻も早くあの島へ向かえるようにしたい。

もしその方法に直接繋がらなくても、きっと何かの役に立つに違いない。

俺は急いで室内に散らばっているはずのそれらをかき集めようとした……のだけれど。

その行動はすでにベアトリス領主によって先を越されていたらしい。

彼女は古めかしい鍵と、俺が最後に握らされた不思議な紙をすでに手に取っていたのだ。

……しかし、ベアトリスの様子はどこかおかしかった。

「え、ひゃっ……えっ……へえっ……?」

彼女のイルゼさんへの想いの深さは、その頬に沢山伝っている涙を見れば察するに余りある。

ただその割には、イルゼさんへの手がかりを手にした彼女の反応は不可思議であった。

やたらに目を泳がせ、そして何度も瞬かせ、口をパクパクと動かすばかり。

さきほどまでの異常な現象の影響を受けて、彼女も何か変わってしまったのではないか。

悪い想像が膨らみ、俺の声は震えてしまう。

「べ、ベアトリス領主……?」

けれど不幸中の幸いというべきか、その想像は的外れであった。

「こ、これ……っ……ここ、これ……これっ……」

ベアトリス領主がこちらに見せた事実は、想像を容易く超える。

なぜなら彼女が手にしていた紙には。

『熱烈歓迎、淫猥天国・ミストコープ!! まもなく施設稼働!!』

過激な文面とともに、あられもなく組んず解れつする男女の絵ほぐが描かれていたからである!!

「な、な、な、なんじゃこりゃああああ!!」

「ベアトリス様! 今はおふざけになっている場合じゃありませんッ!」

「ひいッ!? 襟元つかまないでえッ!? 違う、違いましてよッ!! こ、これ、さっきの女が置

ていった紙ですよッ!!」

紛糾した客室が落ち着くのは空が白み、豪雨がやんだ頃であった。

第二章 海賊船長の肉感面談!?

一夜明け、昼すぎ。

昨晚のことなど忘れたような青空が見下ろす中、俺とエフィさん、そしてベアトリス領主が乗った馬車はコスタヴィーノの港へ向かっていた。

昨晩は驚きや混乱に振り回されていたものの、何を目指すべきかはすぐに一致を見た。

『……絶対に、絶対にイルゼさんを迎えに行こう!』

『もちろんです!』

『い、言われるまでもありませんわっ!』

幸いなことに二人が向かった場所は霧に隠れていた島であることははっきりしている。ならば必要になるのはそこへ向かう移動手段、つまり船だ。

けれどここで大きな問題が判明した。

『間の悪いお話ですけど、わたくしが所有している船は現在故障中ですわ』
ベアトリス領主によれば修理には一ヶ月以上が必要とのこと。

それを聞いてうなだれる俺とエフィさんに、ベアトリス領主は無理に声を張って言った。

『そ、そこは領主のわたしにどーんと任せておけばよくなってよ！ 島まで同乗させてくれる船長を知っていますわ！』

かくしてその女性と話をするため、俺達は馬車に揺られている。

とはいえ、現在かなり心配である。

それは肝心のベアトリス領主の様子があからさまにおかしいからだ。

「わたくしがイルゼ様をあんな目に遭わせてしまったあの大切なイルゼ様をわたくしがあのようなことにわたくしのせいでわたくしのせいでわたくしの」

深く昏い目くらで壊れた機械のようにつぶやき続ける様子はあまりに痛々しい……。

(……イルゼさんを慕う気持ちは本物ってことだね)

昨晚の件には、彼女が持ち込んだ例のネックレスが深く関わっているのは間違いない。

一方で、それが悪意によって画策されたものではなかったということも明らかだ。

ちなみに、不思議な光を纏うタイプの装飾品自体は首都にもまま出回っていて、首都内はもちろん、首都外では相当の高値で取引されるといふ。

その人気は高く、ウイメのような首都から遠い都市では目にも叶わないほどだそう
だ。

『首都を出た後、どうしてもお金に困ったら売ろうと考えて、も、持ち出したものなのです。それがこんなことになるなんて……!』

その考えは当然のことだと思えるし、彼女が大きな責任を感じるべきだとは思わない。むしろ、過失があったのは俺のほうだ。

(あのネックレスが明らかに魔法的な効果を発揮していたと分かったのに……)

バニエスタでの一件で、俺は強力な魔法効果を持つ『遺物』という道具がこの世界にあるということを知った。

それによって起きた転移を自分の身体で味わい、文字通り身にしみていたはずだったのに。

(なのにあの時の俺は、イルゼさんが変身していくのをただ見ているだけだった)

あの時、俺はろくに言葉すら出せなかった。

驚き、戸惑い、そしておそらく恐れに身体が支配されてしまっていたんだ。

(……『魔法が使えない』ということがこの世界でどれほど重いものか、見てきたのに)抱きつくなり仮面を剥がしにいくなり何かしら行動はできたはず。

でも、俺はそのどちらもできなかった。

(イルゼさんに優しくしてもらえばなしで、肝心な時に役立たずだなんて……)

と、不意に俺の右手が温かいものに包まれた。

「アリスト様」

それは右隣に座っていたエフィさんの手の温もりだった。

「イルゼ様をお引き止めできなかつたことは、私の責任でございます」
青い瞳を揺らす彼女に、俺は急いで首を振る。

「そ、それはないよ！」

魔法が使えない女性が集う女性都市に住んでいれば、そもそも魔法を見ることすら稀だ。

となれば昨晚のような突飛な現象や、遺物に即座に反応することは難しいだろう。

「突然あんなことになるなんて誰も想像できないと思う。だからエフィさんの責任じゃないよ」
念押しも込めて俺が言うと、エフィさんは微笑んで言った。

「その通りでございます。ですからアリスト様も予想できませんでしたし、それは、ないのです」

「あ……」

目を伏せたエフィさんの言葉はきつと嘘じゃない。

真面目な彼女がこの件に対し、責任を感じていないわけがないからだ。

なのに……なんて素敵な励ましだろうか。

こんな女性が専属でお世話してくれているなんて、俺はやっぱり世界一の幸せ者だ。

「ありがとう、エフィさん。……よしー！」

だとすれば、俺がやるべきは落ち込むことじゃない。

窓の外の青空を見る。

(何があってもイルゼさんを救出してみせる！)

それが俺のスタートライン、覚悟だのなんだのはその後を考えるべし！
そう考え、改めて自分に気合を入れるべくパチンと自分の両頬りょうほおを叩く。
するとその音で、ベアトリス領主の発作も収まったらしい。

「ひゃッ!? な、なんの音ですか!? って下衆男、ついに気でも狂ったのでして?」
「げ、下衆って……」

人が気合を入れ直したところに、なんとも酷い言い様である……。
ただその暴言に、うちのメイドさんは黙っていなかった。

「……ベアトリス様?」

「ひえッ!? そ、その眼、やめなさいっ! やめないと漏らします! い、色々漏らしましてよっ!」

「では『下衆』はお止めくださいませ」

「やめます! すぐやめますわ! 変人! 変人って呼びますわ!」

「変人……承知しました。アリスト様を愚弄することはおやめにならないということですね?」

「ひいええっ!? ちょっとその変人!! お願だから、メイドを止めてもらってよろしくって!? でないと、もう出ます! 出ますわ! どうなっても知らなくてよ!!」

「ええっ!? 何その脅し!? 二重の意味で汚いんだけど!」

「領主だつて人でしてよ！ 出るときは出ますわ！ そりゃあもつたつぷり出ますわよ!!」

「量は聞いてないよ!? っていうか聞きたくないよ!!」

あまりに汚い、そして悲しい言い合いだ……。

麗しい女性の発言にがっくりしつつ、俺はエフィさんに声をかける。

「エフィさん。俺、変人で大丈夫だから」

「……アリスト様がそう仰るなら、承知いたしました」

不服そうな顔をして綺麗なメイドさんと、汚い発言を躊躇しない領主様。

俺の中にあつた彼女に対する敬意は相当に薄れ、俺はつい呼び捨てにしてしまう。

「それで、ベアトリス。島へ同乗させてくれる船長って……?」

言った後にしまったと思つたけれど、意外にも本人からの抗議はなかった。

エフィさんのお仕置きが相当堪えたらしい。

「ヴァイオレット、と言う女でしてよ。少々荒っぽく態度が大きくて、淑女が持つべき品はあり

ませんわね。我が領の領民ならもう少ししゃんとしてほしいところですけど」

真剣そのものという顔で言うベアトリス。

どうやら彼女は随分高い、それこそ天を貫くほどの心の棚をお持ちらしい。

「な、なるほど」

「そ、そうなのですわね」

揃って微妙な顔をしてしまう俺とエフィさんをよそに、彼女の話は続く。

「ヴァイオレットは以前から霧の中に見えるあの島に上陸することを目指していて、港の女達を巻き込んで奇妙な一団を結成しておりますの」

ベアトリスはそう言うと、馬車の窓の外を指差す。

そこには凧いだ海と、その先に浮かぶ島が見える。

「昨日から一切霧が無くなったとはいえども、怪しげな島へ好んで航海しようという者は少ないでしょう。けれどヴァイオレット達は好機と捉えているに違いありませんわ」

明るくなってから見ると島は小高い丘、あるいは規模の小さな山といった感じで、大部分が森に覆われていることが遠くからでもわかった。

「急いで航海に向けた準備をしているに決まっていますの。となれば物資も求めているはず」

彼女は俺達が乗る馬車の後方を指差す。

そこにはたつぷりと食料を積んだ別の馬車の姿がある。

手ぶらでのお願いはしない、というわけだ。

「あとはその『鍵』ですわ」

彼女は俺の手元にある古ぼけた鍵へ視線を移す。

昨晚、ネレイダという女性に手渡されたものだ。

渡された際には古びた鍵だと思わなかったそれだが、一夜明けてみるとその鍵の先端にホログラムのように方位磁石が浮かび上がっていることが分かった。

そしてそれが指し示しているのは方角ではなく、あの島だ。

「首都でも方位を示す魔法道具はあれど、特定の島を指すものなんて初めてですよ。ヴァイオレットが目の色を変えるのは明らかですわ」

彼女の言い分に頷いたエフィさんが続ける。

「それにネレイダという方は、島への上陸、イルゼさんとの面会には鍵を必ず持ってくるようにと仰っていました」

「確かに」

彼女の言葉に、改めて俺はあの不思議な女性の淡々とした声を思い起こす。

「面会は二十四時間以上経過後で役割の解除も可能とも言ってたよね。あの話が本当なら、これはイルゼさんを正気に戻すのに必要なものってことかな」

「あるいはそれらに関連する部屋に入るためのものなのかもしれない」

ネレイダという女性からはイルゼさんの健康を気遣うような言葉もあった。

どこまで信じて良いかはわからないが、どうもイルゼさんを害することが目的という感じではない気がする。

とはいえ、イルゼさんを連れて行った理由はまったく分からないけどね……。

そして鍵の後に渡された紙も謎だ。

『熱烈歓迎、淫猥天国・ミストコープ!! まもなく施設稼働!!』

凄まじい文言と共に、情事の最中を思わせる男女の絵が描かれている。

「アリスト様。この紙からすると、あの、そうした本が沢山ある施設なのでしょうか？」

「ど、どうだろう。でもまあ、そういう場所に思える文面ではあるよね……」

「あの孤島にそんなすけ、んんっ！ 淫猥な施設を作る狂人がいるってことですか？ ちょっと信じられませんわ。そもそもあそこは霧に包まれたまま、誰も上陸できなかった島でしょ。一体どなたが利用するというのです？」

まったくもって真つ当な意見だし、不可解な点はそれだけではない。

(男性向けの何かが利用可能って言うてたよな……)

この世界の男性は女性を毛嫌いし、性欲なんて欠片かけらも持ち合わせていない。

男性同士の同性愛的な話も聞いたこともない。

仮に性的な施設だったとしても、男性向けのものが存在することすらおかしいのだ。

「うーむ……」

「見れば見るほどわからなくなってきましたね」

考え込む俺とエフィさんに対しベアトリスが首をゆるゆると横に振る。

「どちらにせよ、上陸すれば嫌でも分かることですからね。大事なことはそのための交渉をわたしがしてさしあげるといふこと。そして、その鍵はその時に非常に有用だといふことでしてよ」
まもなく馬車が緩やかに止まる。

手元に集中していて景色に気づいていなかったが、無事港に着いたようであった。

「到着しました」

御者を務めてくれていたクラネさんによって扉が開かれる。

すると目に入ってきたのは、領主の館から見ていたよりも遥かに大きく感じる港だ。

船着き場では大勢の女性達がせわしなく動き、複数ある棧橋には多くの船が係留されている。

馬車の目の前には特に立派な棧橋があり、大型船が寄港できそうな感じであった。

と、そこまでを見て俺はつい声をあげてしまった。

「えっ!？」

その理由は今まさに立派な棧橋へと寄ってくる帆船だ。

何故ならその船のメインマストには、これまた立派なドクロマークが描かれていたからである!
る!

(か、海賊船!?)

だとすれば港に堂々と入ってくるなんて一大事だ。

これは島へ渡るための船がどうこうなんて言ってられる状況じゃないのかもしれない。

(いや、待てよ。ここは俺の知っている世界じゃない)

俺はそこで少し冷静になった。

俺の常識では帆にドクロマークを掲げる船は海賊船と相場は決まっっていて、基本的に略奪上等の無法者という認識だ。

しかし今俺が生きているのは、ブラジヤーの概念すらなくノーブラが当たり前の世界である。

(そうだよ、明らかにドクロマークっぽいあれもお洒落の一環かもしれないじゃないか!)
ではあの目立つ船は一体なんなのだろう。

俺は異世界カルチャーショックに備えつつ、エフィさんへ解説をお願いする。

「エフィさん、あの船は？」

「か、海賊かと思われれます。どの都市にも属さない荒くれ者の方々が集うと聞きますが……」

「やっぱり!？」

まさかのカルチャーショック無し!!

(心の備えが丸ごと無駄になったんですけどっ!!)

ちっとも喜べない正解を噛み締めている間に船は棧橋へ接岸する。

そして、垂らされたタラップから次々と女性達が降りてきた。

彼女達は鮮やかな色の腰布をして、頭に揃いのターバンを巻いているようだ。

いかにも海賊船の船員といった感じのファッションである。

それ以外の部分が際どいマイクロピキニであることを除けば、だけどね！

「……あれ？」

と、俺はそこで違和感を覚えた。

荒くれ者だという海賊達が次々と波止場に降り立っても、港の女性達は当然のように作業を続けているのだ。

そして一切動じていないのはベアトリス領主も同じであった。

いや、そればかりか。

「ふふ、丁度良く交渉相手が来ましたわね」

どっちが海賊か分からなくなってしまおうようなことを言っているんですけど!?

「ちよっ、ベアトリス!？」

「べ、ベアトリス様、まさかあの方々をお相手になさるのですか……!？」
眼を白黒させる俺達に彼女は不敵に笑った。

「海の女なんて大抵このようなものですわ。では領主の交渉手腕をとくとご覧あそばせ」
言うが早いか、彼女は颯爽と馬車から降りてしまう。

その背を見つめる俺達に声をかけたのは、今まで黙っていたクラネさんだ。

「お二人はそのままですわ。エフィはうちのメイドだと思われるでしょうし、女性と共に馬車に乗る男性など想像だにしないので、アリスト様について騒ぐ者もいないでしょう」

「承知いたしました。あの、クラネ様。ベアトリス様は大丈夫なんでしょうか……？」
不安そうにするエフィさんに対し、クラネさんは苦笑気味に微笑む。

「ベアは小型船なら扱えますし、割と泳げます。海に放り出されても死ぬことはないでしょう」
「「えっ!？」」

不穏すぎる発言に俺達が声をあげたと同時に、青空に高らかな笑い声が響く。
馬車の前で仁王立ちをするベアトリスのものだ。

「おーほっほっほっ！ 下品な船の前に、美しき領主がご挨拶に来てさしあげましてよ！」
(嘘でしょ!?)

酷い初手を披露するベアトリスに対し、波止場に降りてきたターバンの女性達から野次が飛ぶ。

「おいおい何しに来たの？ 自称領主さん」

「そんなデカ乳持ってきたら魚が逃げちゃうじゃない。さっさとしまってもらえる？」

「乳に蓄えた脂肪で生きられる領主様と違って、こちらは毎日食べないとやってけないの。おっぱいお化けは下がってよ」

「「「あはははは！」「」」

どっとおきた笑い声につられ、港にいるターバンを巻いていない女性達も笑みを見せている。
ベアトリスはあっという間に憤慨し、大きな声で抗議を始めていた。

「お魚さんはわたしの胸を怖がりたりしませんわ！ 適当なことを言うのはおやめなさい！」

「じゃあアンタのオツムの弱さに魚が愛想つかして、どこか遠くに行っちゃうね！」

「「あはははは!!」」

「はあっ!? 全然弱くなんてありませんわよ！ むしろ強すぎてお魚さんがお勉強しに来ますわ！」

ムキになる領主様と楽しいげな海の女性達。

すでに主導権が握られている気がしてならないが、一方で俺はベアトリスと港の荒くれ女性達のやり取りに少し違和感を覚えていた。

(ううん……?)

彼女らは野次こそ言うものの、ベアトリスを本気で拒絶しているようには見えないのだ。

声の調子も、どこか友達をからかって遊ぶような感じである。

「な、なんか仲良さそう？」

そしてエフィさんも同じように感じていたらしく、俺の言葉に頷いた。

「音に聞く海賊さん達とは随分雰囲気違います……」

ただ真に驚くべきはここからであった。

「まったく、わたしは下っ端に用事なんてありませんの！ 今日には特に時間もありませんし……」

そう言ったベアトリスが、右手の人指し指をピンと伸ばしピストルのような形をつくる。そして更にその指先に赤の色を灯したかと思つとー

「さあ、さつさと船長をお出しなさいなっ!!」

何の躊躇もなくその船に向けて指先から光弾を放ったのである!

「なっ!？」

「べ、ベアトリス様っ!? 一体何を……!」

それは間違いなくベアトリスの魔法であった。

弾は赤色に発光しつつ、まるで本物の銃弾かのように船の甲板へと迫る。

ただそれが甲板にいる誰かに命中することはなかった。

開いた船室の扉から凄まじい速さで飛び出した女性が、その手に持った何かで光弾を受け止め

たからである。

「これは驚いた。ちょっと陸を離れた隙に、世の挨拶は魔法弾になつちまったのかい？」

女性はそう言うつと手に持っていたものをくるくると回す。

よく見るとそれは半月形をしたパイレーツハットであった。

彼女はそれをキャッチャーミットのようにして、ベアトリスの魔法を受け止めたらしい。

(つてそんなことある!?)

俺はかつてディーブ伯爵と俺の異世界における父さんであるペレ伯爵が、互いに魔法をぶつけ合ったところを見たことがある。

それは土を自在に操る魔法と木の成長を思うがままに操る魔法の衝突だった。

人のものとは到底思えない力の衝突に圧倒され、俺は腰が抜けてしまったのを覚えている。

（女性は男性よりも威力の小さな魔法しか使えない。それがこの異世界の常識だとは聞いてるけど……にしたって野球のボールみたいに受け止められるようなものには見えなかったけど!）

衝撃を受ける俺をよそに、女性は慣れた様子で帽子を軽く払う。

そして船の上からよく通る声で言った。

「つて、自称領主様が挨拶もできないのは今に始まったことじゃあないか」

堂々とした声色から、彼女がまったく息が上がっていないことがわかる。

その様子を予期していたのか、ベアトリスも一切動じていない様子であった。

「領主[、]にオツムが弱いと言う愚か者のまとめ役には、これくらいの挨拶が丁度よいのではなくって？ おーほっほっほー！」

「なるほど、乳ばかりに栄養がいつて頭が空っぽになった哀れな女の末路^{さまよ}ってわけだね。常識の後は理性も放りだして、遠くないうちに海に彷徨^{さまよ}う乳お化けになりそうだ」

「あ、貴女……ッ……もう一発撃たれたいようですわねっ!!」

ベアトリスが再び顔を赤くするが、女性はどこ吹く風と手に持った帽子を頭にやる。

同時に心地よい海風が走り、彼女が羽織る赤と黒のジャケットがはためく。

「それはやめてくれると助かるね」

風になびく紫髪にパイレーツハットが行儀良く座ると、彼女はニヤリと勝ち気な笑みを浮かべてみせた。

「気の抜けた魔法を二度も見せられたら、アタイ睡魔に負けて海に落ちちまうよ」



途端にターバンの女性達が大きく盛り上がる。

「ひゅーっ！ ヴァイオレット船長、今日もかっこいいっ!!」

「やっぱりうちの船長しか勝たないねっ!!」

「きゃー！ 海に落ちた船長も見たいー!!」

一部変な盛り上がり方をしている女性もいたけど……。

美人船長は女性らに軽く手を上げて応じると、野次を飛ばしていた女性達に声をかけた。

「ほらアンタ達、陸の皆さんに迷惑かけちゃいけないよ。アタイらは海に生きる女、どんな都市でもよそ者なんだからね」

彼女の一声で姦かしましかった船着き場は一気に締まる。

「「了解です、船長!!」」

「うん、いい返事だ」

満足気に頷くヴァイオレット船長は、ひらりと甲板から飛び降りる。

そしてその足先が棧橋についた途端、彼女の姿は短い声とともに消えた。

「はっ!」

……いや、こちらへ飛んできていた!

(速いっ!?)

まさに風、あるいは弾丸だ。

短距離アスリートの比ではなく、人が走ることで到達できる速さではないとひと目でわかる。おそらく魔法を使ったものなだろう。

彼女の足回りは発光する緑の粒子に包まれていることから、それは推測できる。

まあそのことを認識できたのは、彼女がベアトリスの前に到達したころだったけれど。

「さてと、ベアトリスもちつとはうちの船員達を見習ったらどうだい？」

息一つ切らさずに肩をすくめるヴァイオレット船長。

そんな彼女に対し、ベアトリスも同じように肩をすくめてみせる。

「わたしはコスタヴィーノの領主。つまり都市の顔ですわ。品のない冗談を言う女達を見習う気はなくてよ」

「ふむ、一理あるかもしれない」

頷く美人船長。

意外と話がわかる人なのかもしれない……と思った矢先。

美人船長はごくごく自然な様子で、ベアトリスの胸をむんずと掴んだ！

「でもこんな品のない胸をぶらさげているんじゃないってもんだね」

「ひゃあああつ!? な、なにをしていますのっ!?」

ベアトリスは悲鳴を上げるが、ヴァイオレット船長はどこ吹く風。

領主様のおっぱいを揉んでみたり持ち上げてみたりしている。

(公衆の面前で美人が美人のおっぱいを揉むってなかなか凄い光景だ……)

無論ベアトリスはすぐに美人船長の両手を掴み、大きな胸から引き剥がした。

「こ、こら！ 止めなさい！ 人の胸を好き勝手触るなんて非常識も良いところですよ！」

「船に魔法を打ち込むやつに言われたかないよ」

これについてはヴァイオレット船長に全面的に同意せざるを得ない。

というか急に胸を揉む以外、彼女はまともな言動しかしていない気がする。

イルゼさんのこととなると豹変するベアトリスに比べ、かなり常識的な女性なのかもしれない。

……例によって、その服装は非常識なんだけどね！

(遠目でも変だと思ってたけど、近くで見るとやっぱり服装が非常識だよ!!)

まずは彼女の上半身の衣装。

胸元は白、腰回りは黒のコルセットでできたビスチェ形状の服だが、腰回りのコルセットが短すぎるせいで引き締まったお腹から鼠径部のラインまで丸見えだ。

胸元もかなり大胆に開いていて、当然の如くノーブラである。

(にゅ、乳輪がチラチラ見えてしまっている気が……！)

凝視は良くないと視線を動かせば、次に目に入るのはタイトな黒革製のチューブスカート。しかしそれをスカートと呼ぶのは微妙かもしれない。

だつてあまりに短すぎるせいで、正面からでも下着が見えているんだもの！

(ローライズだし、短すぎるしでもうほとんど腰巻きだよ！ スリットまで入ってるし、そこま
でいくともうベルトだよ！)

そんな過激衣装の上に、彼女は一応海賊船長らしいジャケットを羽織っている。

ただそのせいで露出過多な服が際立っていて、目のやり場に困るファッションが完成してい
た。

(眼福……つていやいや、そうじゃなくて！)

乗船させてもらえるかどうかの大事な場面なのだ、股間を熱くしている場合ではない。

そんなことを考えていると、ちょうどヴァイオレット船長と目があった。

すると彼女はベアトリスや俺達にだけ聞こえるような小さな声でつぶやく。

「……」いつは驚いた。本当に来るとはね」

きりつとした瞳を丸くした後、ヴァイオレット船長はベアトリスに密やかに言った。

「だから魔法弾、か。ベアトリス……ここの女のほとんどはあの顔を知らない。もっと別のや
り方があったんじゃないかい？」

その言葉に、同じく声を潜めたベアトリスが不服そうな顔をする。

「あくまで『ほとんど』でしてよ。あの男に関する事で騒がせたいわけではありませんの」
「だから別の騒ぎを起こしたってわけかい」

「ええ。ご協力感謝いたしますわ」

「つたく、憎たらしい奴だよ」

ふん、と鼻を鳴らす美人船長。

一方のベアトリスはちらりと俺のほうへ視線を向けた後、再び彼女に囁いた。

「緊急の用件だと分かっていただけましして？」

ヴァイオレット船長の瞳が俺とエフィさんを順番に捉える。

そして彼女は軽く息を吐くとベアトリスに背を向けた。

(まさか、駄目ってことか……?)

と、落胆しかけた時。

ヴァイオレット船長は港中に響きそうなほど大きく通る声を出した。

「アンタたち、荷下ろしと酒場に納品が終わったら、そのまま陸おかで景気づけをしてきな！ アタ

イにツケて構わないよ！」

ターバンを巻いた女性達がその言葉に湧き立ち、甲板からの荷下ろしが速くなった。

一部の女性達はすでに街へ繰り出すようで、みな船長に感謝を伝えながら港を出ていく。

「船長！ ありがとうございます！」

「今日はちよっと高い酒場に入っちゃっても……？」

「いいよ、アタイにどんと任せときな」

「きゃー!! ありがとうございます!!」

女性船員達に母性を感じさせる眼差しを向ける美人船長。

彼女はしばし船員達を見送った後、改めてこちらへ振り返った。

「それじゃあアンタ達は船に乗んな。船が静かなうちのほうがいいだろう?」

――しばらくの後。

俺とエフィさん、そしてベアトリスの三人は船長室へ案内されていた。

まずはベアトリスからここまでの状況が説明される。

「……というごとく、ですわ」

内容は昨晚の奇つ怪な現象の数々や、その後に霧が晴れて現れた例の島についてである。

それを聞いていると、昨晚に起きたことがどれほど奇天烈なものだったのかを実感させられた。

(全部事実なんだけど、改めて言葉にすると凄い話だよな……)

ヴァイオレット船長が鋭い眼光をこちらに向けるのは当然であった。

「そんな与太話でアタイを担かつごうなんてね。アンタ達、海に放り込まれたってことでいいかい?」

しかし続いたのは大きなため息で、彼女の視線から厳しさはすぐに消えた。

そして胸元から小さな眼鏡を取り出し、飾り気のないテーブルに載せられた例の鍵を手に取り
る。

「……と言いたいとただけど。こんな代物は見たことも聞いたこともないよ。まず間違いなく遺
物だね」

ヴァイオレット船長はそこで言葉を区切ると、今度は俺に視線を向ける。

「そしてアリスト、お前さんの持ち物でもないね？ 財産を差し止められた男がこんなもの持っ
ていられるはずがない。お前さん、どうも隠し事は下手そうだしね」

顔に出る、と常々言われてきた俺である。

ヴァイオレット船長に見事にそれを言い当てられ、ついビクリと身体が動く。

「っ……」

「下手じゃないね、ド下手だ」

ニヤリと笑い、美人船長は続けた。

「ベアトリスも首都を飛び出してきた女だ。貴族からこんなもの貰える付き合いなんざないな」

「ちょ!? わ、わたしは交友関係は広いのでしてよ！ 領主たるものー」

「わかったわかった。つまりアタイが言いたいのは、お前らの言うことを半分くらいは信じてや
ってもいいってことさ」

「たった半分ですか？」

不服そうにするベアトリスに対し、ヴァイオレット船長は肩をすくめてみせる。

そして鍵をテーブルに戻すと彼女は美しい脚を組みなおし、少し声色を変えた。

「海賊つてのは誤りでね。本当の呼び名は『海族』。陸おかに定住せず、あちこちの都市を旅し、時には商船を海の怪魚から守るために魔法を使い、もらった金は陸での一夜で使い切る。一番の楽しみは、外海を進んで地図に乗らない島や大陸を見つけてそれを伝え歩くことさ」

ヴァイオレット船長は俺とエフィさんの顔を順々に見て、可笑しそうに軽く笑う。

「船を襲い財産を奪う海賊は男達が勝手に改変して物語で広めたものさ。あいつらは陸の規則で女を縛りたいらしいからね。ま、いずれにせよアタイらに横暴を振るう趣味はないよ」

俺の知る海賊とこの世界で広められた海賊という概念は似ていた。

しかし、それだけだった。

堂々と入港する海賊船や領主と軽妙に話す海賊船長が真実で、ここはやはり異世界だったというわけだ。

「ただ賊つて表現は気に入ってる。陸の規則をもともしない響きを感じるからね。だからアタイ達は『海賊』つて呼ばれることは好きさ」

美しき船長はそこでパイレーツ帽を脱ぎ、テーブルの上に置いた。

そしてちらりとベアトリスを見た後、話を続ける。

「アリスト、アタイらは自分の意思で首都を飛び出し海賊になった。魔法交配とかいう実際には何やってんだかわからない秘密の儀式に縛られるような生き方はごめんだってね」
と、その言葉に少し視線を鋭くしたのはベアトリスだった。

「……ヴァイオレット」

彼女が咎めるように言った理由は、続いたヴァイオレット船長の言葉でわかる。

「悪い。エフィ、アンタには気分の悪い話だね……配慮にかけた発言、申し訳ない」
エフィさんは女性都市の住民、つまり魔法が使えない女性だ。

そしてそんな女性からすれば首都に住むことは本来憧れなのだ。

そのための努力をしている女性だっている。

「いいえ、お気になさらないくださいませ。私は今、充分恵まれていますから」

ただ、俺のやや後方に立っているエフィさんの表情は朗らかだった。

首都出身女性二人の気遣いを素直に受け取る彼女は、やはり素晴らしい女性だと思う。

ヴァイオレット船長は、ありがとう、と頭を下げると話を続けた。

「自由、それがアタイらの信条だ。誰かが決めた大切なものじゃなく、自分が決めた大切なものを大事にするために生きる。船長としてそこは譲る気がないし、今日もそれは同じだ」

そこから、彼女はいくつかの説明をしてくれた。

島までの航海はまともに行けば半日ほどだろう、ということ。

しかし謎多き場所だから不測のことも充分に起きうる、ということ。

その上でヴァイオレット船長は俺の顔をじっくりと見た。

「アタイの船に客室はない。それは船に乗せるのは、不測の事態になった時、互いに躊躇ためらいなく協力しあえる仲間だけだからだ。選んだ自由の前に、人はみな平等なのさ。わかるかい？」

心の奥底まで見通すようなパープルの瞳。

魅力と迫力を兼ね備えたそれに俺が頷くと、彼女は先を続けた。

「ベアトリスは船員の経験があるから良いとして。アリスト、お前さんは違う。今日会ったばかりで為人ひとがわからないし、魔法が使えない特殊な男という意味で不気味だ。だからお前さんのことは、別に試させてほしいと思ってる」

ある程度予想していたし、かなり真つ当な言い分だと思う。

俺はこの世界の常識からすればかなり異端だし、男女の関係が良いとはとても言えないこの世界で『いざという時に協力できる男』なんて珍獣みたいなものなのだ。

ただエフィさんは控えめながらも声をあげてくれた。

「そのようなことを仰らないでください。アリスト様は決して悪しきお人ではありません。むしろ、大変素晴らしい御方で……！」

その言葉に俺はつい頬がだらしなくなってしまう。

今はそういう場合じゃないとは分かっているんだけど、それでも綺麗なメイドさんに褒められるのは凄く嬉しいのだから許してもらいたい！

しかし当然というか、俺に対する警戒を解かないベアトリスは少し不服そうであった。彼女としてはエフィさんの発言に思うところがあるのだろう。

ただその口から不安を零すことはなく、彼女は別のことを口にした。

「……ヴァイオレット。エフィは良いんですの？」

それは俺も気になっていたことだった。

珍獣を特別警戒するのはともかくとして、ヴァイオレット船長にとってはエフィさんも今日出会ったばかりの女性のはずだ。

だがヴァイオレット船長は首を振り、エフィさんの立つ位置を指差した。

「その位置に偶然立ってるとは言わせないよ」

そこは俺の座る席の後ろだ。

とはいえ基本的にこうした場では座らないエフィさんなので、さほど変わった位置とは思わない。

「「……？」」

ベアトリスも同じ意見らしく、俺と揃って首を傾げる。

しかし一方でエフィさんはその発言に気恥ずかしそうな表情をしていた。

その対比がおかしかったのか、ヴァイオレット船長はくすつと笑う。

「密室で出入り口を確保するのは護衛の基本。アリストを目立たせないためとはいえ、クラネが馬車の警護に残ったのも納得いくつてもんさ」

俺はそこでようやくはつとする。

確かにエフィさんのすぐ近くに船長室と甲板をつなぐ扉があつたからだ。

「身体もよく鍛えられてるし、礼も備わってるメイドが、主に恥あるじをかかせるはずがない。なら、主が誠意を見せてくれればいい。違つかい？」

じつとこちらを見るヴァイオレット船長に、俺は大きく頷く。

「俺は何をすればいいですか？」

「まずはその気持ち悪い話し方をやめな。男に丁寧に話されると、逆に背筋が寒くなる」

あつけらかんと言われ、俺は思わず苦笑する。

彼女も同じように笑った後、再び真剣な顔つきになった。

「今回の航海は荒れる。だからこそアタイ達と触れ合う覚悟があるか、そしてどれくらいイルゼという女に真剣なのか。それをアタイ達に身をもって示してほしい」

動機と行動がきちんと一致しているか、どれくらい本気なのかを見せてほしいってことだ。

とても筋が通っているし、ちゃんと示さないといけないところだと俺も思う。

それにイルゼさんともう一度会うためなら、どんなことだってやるべきだ。

「わかった、なんでもやるよ！」

俺はそんな自分の気持ちを確かなものにするためにも、少し大きめの声で言う。

そして心配そうな表情をするエフィさんと、意外にも同じような表情をするベアトリスにも大げさに頷いてみせた。

「大丈夫だから、心配しないで」

「アリスト様……」

「変人……」

いやそこは普通に名前を呼んでよ！

「よく言った。なら今からアタイが言うことに従ってもらおう。無論それを乗り越えてみせたら、イルゼっていう女を取り返すまで全力で支援することを誓う。アタイの自由をかけてね」

力強く頷くヴァイオレット船長。

俺は彼女も、その言い分もとても真つ当だと感じていたから、ある意味で不安は無かった。

(服装だけはちょっと過激すぎるけど……彼女ならきつと筋を通してくれるはずだ)

そして、その予想は半分的中する。

美人船長がこのあと俺に非道なことをすることはなかった。

でも……半分は大外れだったと言える。

「そ、それならっ！ 皆の前でアタイを気持ち良くさせるんだ!!」

「ちょ!?! えええっ!?!」

その後、船の上で判明した要求が、あんまり、まったく、全然まともじゃなかったからだ!!

夕陽に照らされるアタイの船の甲板。

その船首楼せんしゅろうに立つと、昨日まで霧に包まれていた孤島がはっきりと見える。

(ネビュラ島……アタイがずっと行きたかった島。首都を飛び出した理由)

イルゼという女性が変身し、奇妙な女が現れ、そして飛び去った。

そんな話、荒唐無稽も良いところだ。

(ベアトリスの悲壮な顔……それにあの鍵がなければ、話なんて聞く気は無かったけど)と、甲板の階段を登ってくる音がする。

顔を見せたのは、船員のタリアアだった。

「あの、ヴァイオレット船長。ちよっと、いいです……?」

優秀で快活なうちの航海士だけど、今日は珍しくおどおどしている。

「おや、ちゃんと街で美味しいもの食べてこなかったのかい?」

「いやいや、そんなことは! 今日はいつてもより高いお店でたくさん食べました! 美味しかったです! でも、本当に良かったんですか? 結構皆も贅沢しちゃってましたけど……」

「今回は他の都市から買い付けたものの大半がいい値で売れるって分かってるからね、ちよつとくらいはいいさ。それにネビュラ島へ挑むんなら美味しいもの食べて力をつけとかなないと始まんないだろ?」

「ええ、それはもちろん!」

「よしよし、夕飯もちゃんと腹いっぱい食べるんだよ。それで何が心配なんだい?」

アタイが聞くとタリアは再びおどおど……いや、極度に緊張した様子になった。

そして周囲を見回して甲板にアタイと自分しかいないのを確認した後、ひそひそと言う。

「あの、そろそろアリスト様を連れてきたほうがいいかなと。皆も午後の取引を終えて、もうすぐ戻ってきますし……」

「っ!! そ、そうか。うん、そうだな。そろそろ来てもらわないと、だな」

びくつと反応してしまうアタイにタリアは改めて聞いてくる。

「本当に……本当にアリスト様へあんなこと、お願いしちゃうんですか……?」

やめておいたほうがいい、と言外に感じる台詞だ。

でもねタリア、アタイの目はごまかせないよ!

「じゃあ、今からでもやめておくかい? タリアが言うならー」

アタイが言い切る前に、タリアは暴風を起こしそうなほど速く首を横に振る。

「い、いやいやいやいや! やめないでください! 絶対駄目です!」

首が飛んでいってしまいそうな勢いのタリア。

落ち着かせるべき状況だけれど、今日のアタイはそれができない。

だってー

「だろう!? アタイも今からやめるなんてできないからね! 船員全員が止めようが、アタイはやる。やるって決めたんだ!」

ーアタイも今からやるのが楽しみで楽しみでしょうがないんだもの!

「きゃー!! さつすが船長、素敵です!! 最高!!」

「ふふん、もっと褒めていいんだよ?」

「船長のどすけべ! 変態! ずるい女!」

「ああん!? お前さん、アタイに喧嘩を売るつもりかい!?

「だ、だってえ! 困ってる男性に付け込んであんなことやこんなことしようだなんて、変態じゃなければ思いつきませんよう」

「しーっ!! アタイは機会を逃さない女ってだけで変態じゃあないよ!」

船長に対してなんて人間きの悪いことを言う子だい!

確かにアタイはちよつぴり、まあ普通程度にすけべな自覚はあるけど!

「タリア、アタイ達は男とすけべな本みたいなのがしたい。そのためには命を投げ出すことも厭いとわない。そんな自由を、夢を追いかけてるんじゃないか!」

「ええ！ 船長の夢はあたし達の夢、船長のすけばはあたし達のすけばです！」

「まったく、アンタ達のすけばは元からじゃないか。どいつもこいつも『例の遺物』を探すつて言ったら二つ返事についてきた癖に」

「類が友を呼んだんですね！」

「嬉しそうに言うんじゃないよ！」

例の遺物——それはアタイが、いやアタイ達が探している、理想の男を生み出すことができる
とされる遺物。

古文書で『アウラナム』と呼ばれる伝説の遺物で、それを探す理由なんて一つしかない。

優しくて格好良くて毎日アタイとすけばしてくる男を生み出すためさ！

けれどアウラナムがある可能性が高い島の一つであるネビュラ島には、数年かけても接岸もできやしないままだった。

「そんな今、アウラナム無しで船に男がやってきた。こんな神のお告げみたいなもんさ。タリ
アだつてそう思うだろ？」

「はい、きつといつも頑張つてるあたし達への贈り物に違いありません！」

それにここで陸の男に突つ張れなきゃ、首都で男にへーこらしてた時と同じだ。

自由を愛し、体現しようとするアタイ達がやっていいことじゃあない。

「つて言い訳をしながら、後ろ盾のない男性を強請^{ゆす}るつてというのが最高です、船長！」

「ひ、人聞き悪いことを言う子だねアンタは！ アタイは自由を愛してるだけさ！」
無論、アタイの良心もキリキリと痛みはしてる。

「じゃあやっぱりやめるかい？ アタイの勘ではあの男、悪いやつじゃあないはず……」

「いいえ！ それなら尚更最高なまごうです！ 甘えましょう！ 良い思いさせてもらいましょう！」
タリア……あんたって子は。

「最高の船員だよ！ 誇らしい返事だ！」

「やったー！」

二人でハイタッチしていると、波止場から甲板に船員達が戻ってきた。
そしてアタイ達の周りに集ってくる。

「全班、戻りました……っ！」

「そろそろ、ですよね？ ヴアイオレット船長」

合計十数人の子らが皆一様にそわそわとし、ひそやかな声を出している。

それもそのはず、これからアタイ達がやることは他の女達に見られるわけにはいかないのだ。

「アンタ達、港の人払いはすんだかい？」

「はい！ ベアトリスとクラネの姉貴に協力してもらって、うまくやりました」
言葉どおり、港には人影がない。

元々昼を過ぎたら港なんてガラガラになるけれど、今日は特別に人がいないほうが良いのだ。

「ただ船長。今日は波止場に荷が多くて、完全な監視はできないかと」

「いや、それはいいさ。少しくらい覗く子がいることは織り込み済みだからね」
少人数なら問題ない。

アタイ達の目的が果たされても果たされなくても、コスタヴィーノの半分以上が目撃しなきゃ突飛な作り話だと思われるだけだからね。

「じゃあアタイは船首楼^こで。アンタ達は真ん中辺りにいな」

「「はい！」「」」

うちの子らが階段を降り、甲板中央から船首楼に視線を注ぐ。

船首楼は甲板より少し高くなっているため、アタイはまるで舞台役者。

ただ今日のアタイは助演で、主演は今まさに船室から顔を出したお宝さ！

「えと、この着かたであってるかな？」

そのお宝の名は、アリストという奇妙奇天烈、純真無垢な男！

貴族関係者にしちやあ質素だった服を脱ぎ、緩めのシャツと膝丈のズボン、腰元にサツシユベルトという出で立ちに変わっている。

まずは形から入ってもらおうと着替えを指示した自分を、今猛烈に褒めてやりたい！

(す、すけべすぎる!! 胸元も足元も肌が眩しい! なんだい、太陽でも飼ってたのかい!?)

凝視しても目が変にならないところを見ると、どうやらギリギリ太陽じゃないみたいだね!

よかった、それならもつともつと沢山見させてもらおうよ！

「あの、ヴァイオレット？」

可愛らしく首を傾げるアリストに、アタイは胸を撃ち抜かれたような衝撃を受ける。

ああ、アタイの名前がこんなに素敵な響きだったとは思わなかったよ！

「ヴァイオレット？ それで俺、何をしたら……」

この場を上手くいかせるためには、アタイは堂々としてなきゃならない。

だからアタイは一度咳払いをし、高鳴る胸を押さえつつ甲板に立つアリストに言った。

「まずは自己紹介をしな、仲間になるかもしれない女達にね！」

高いところから偉そうに言うアタイに、アリストはこくりと頷く。

少し緊張気味の表情がたまらない。

「アリストです。魔法が使えなくて首都から左遷されて、今回調査という名目でこちらにお邪魔しました。ただ大切な人がネビュラ島にいつてしまっ……」

女に囲まれているつての一切嫌悪感を出さずに語るアリスト。

女と一緒に馬車に乗ってくるんだからよっぽどだとは思っていたけれど……やっぱり本物だ。

風の噂で聞いた通りアリストは女性を恐れず、遠ざけない男なのだろう。

(これなら……イケる！)

アタイが下衆な確信を持ったと同時に、アリストは引き締まった表情で言う。

さして大きくない声だったけれど、その言葉は凜と甲板に響いた。

「俺は無力で未熟で、皆さんよりできることはずっと少ないです。でも、それでも絶対にイルゼさんを取り戻したい。だからどうか力を貸してください！」

(頭を下げ……っ!?)

女に頭を下げる男がこの世にいるだなんて。

高鳴る胸の鼓動も、聞き慣れた波の音も、アタイの耳にはもう何も入ってこない。

うちの子らも似たようなもので、皆完全に硬直し呼吸すらも忘れたかのようだ。

(駄目だ、やっぱりやめよう。こんなに真摯な男を好き勝手していいわけがない)

この誠意を利用するなんて、神が許してもアタイが許さない。

そうだよ、うちの子達だつてきつと分かってくれる。

だからアタイは自分の良心を優先することにしたのさ。

「アリスト、アンタの気持ちはよく分かってー」

なのに、アタイの良心はそこで遮られてしまった。

何故かって？

「力を貸してもらえるなら、俺何でもやります!!」

それは誠実そのものだったアリストが、決して言っちゃならない禁句を口にしたからさ！

「な、何でもって言ったのかい……?」

「はい。俺にできることなら！」
聞き間違いじゃない。

この男は自分から『何でもやります』って言ったんだ……！

(おいおい、そんな男が女に言っている言葉じゃあないよ！)

でもそれを言ったのはアリストのほうで、アタイは何も強要してない。

だとすれば……もうこれは神の思おぼし召めしだ！

アタイはもう我慢なんてしないやい！

「そ、それならっ！ 皆の前でアタイを気持ち良くさせるんだ!!」

ぱつと両腕を広げたアタイに、アリストはきよとんとする。

きつとアタイの強欲すぎる要求に面食らったのだらうね。

一足遅れて彼はその意味を理解したらしく、さつと顔に朱を浮かべて慌て始めた。

「ちよ!? えっ!? ほ、ほんとに……!?!」

なんと素直で可愛らしい反応だらうか！

それだけで満足してしまいそうになる自分を抑え、アタイは逃さないとはかりにせつつく。

「船に乗りたいたなら、さつさとこっちに来な！ そ、それでアタイの胸をモミモミするんだ！」

はー、アタイったら本当に最低な女だよ！

でも交渉するのは大抵一度ふっかけた後、だんだんと要求を現実的にしていくもんだらう？

アタイは交渉の基本に則^{したが}ったのさ、どんなことでも基本つてのは大事だからね！

(((船長……!)))

ふふ、甲板の子達にはその意図がしっかり伝わっているね。

アタイにかつてないほどの尊敬の眼差しが向けられているのがわかる。

若干引き気味の雰囲気を感じなくもないけど、きつと気のせいさ！

ただまあやはりというか、アリストの反応は芳しくなかった。

「こ、この場で胸を……!？」

瞳を何度も瞬かせ、少し掠れた声を出している。

(ううん、おっぱいは流石に無理か。まあ本来男は見るのも嫌がるもんなんだし仕方ない……)

女に頭を下げられる彼とて無理なことはある、それは分かったことさ。

でもそれでも今まで見た男とは明らかに違う彼に、アタイはつい期待しちまってた。

「その、難しいかい？ まあ、アタイの胸はベアトリスほどじゃないにしろ、あんまり気分のい

いもんじゃないしな……」

あーもう！ アタイったらなんて情けない声を出してるんだい！

駄目だ、ここは潔くおっぱいは無しにしよう！

「んんっ!! ならいいさ！ 別のことを――」

と、そこまで言いかけた時。

甲板から船首楼に上がる短い階段が音を立てた。

「じゃ、じゃあ失礼……します！」

ふわああああ!!

え!? え!? アリストがアタイのいる船首楼に上がってきてる!?!?!

(今、『じゃあ』って言ったのかい!? それは『じゃあ』おっぱい揉みますってことかい!?)

アタイの頭は大混乱で、船が左右に大きく揺れていると錯覚するくらいだ。けれどその揺れは留^{とど}まるところを知らない。

側にやってきたアリストがアタイに対し、凄いことを聞いてきたからだ。

「あの、どっちからがいい、かな？」

「ど、どど、どっちからって、ど、どうということだい……!?!」

「しょ、正面から触っていいのか、それとも後ろから触っていいのかっていう意味で……」
後ろから揉まれるか、それとも前から揉まれるか、アタイが選んでいいってことかい!?

(この世にこんな素敵な問いかけがあったのかい!?)

そして、その問いかけを恥じらいながらしてくれる男が眼の前にいる!

船の揺れが更に増したような気がして、アタイはもう立っているのもやっとだ。

「そ、そうだね、ええと……っ」

喉はカラカラで声すらまともに出ないし、アリストを直視することも難しい。

だからこそアタイの視界には甲板からこちらを見上げる船員の子達が映った。

「「「……っ……！」」」

揃って固唾をのみ、アタイよりも緊張した面持ちでいる。

よく見れば軽く震えていたり、あるいは神に祈るような姿勢になっている子までいた。

(アタイは自由を捕まえる船の船長！ 男に振り回されてるようじゃあ務まらないってもんさ！)

これはアタイ達がアリストを信じて良いかどうか、厳しく裁定する場じゃあないか。

だからアリストがアタイの胸を触るくらいの覚悟があるか、しっかり全員で見てやらないととくれば、前と後ろ、どっちからシてもらうかは決まってるね！

「後ろから、お願いしま、んっ、頼んだよ。両手で誠意を見せないと承知しないからね！」

「わ、わかった！」

「ちよんちよん、さわさわ、じゃ駄目だよ。ぎゅむぎゅむっ、もみもみだっ！ そうじゃないと甲板の子達に見えないんだ。決して、アタイの好みとかじゃあないからね！」

勢いにまかせて色々と要求してしまうアタイ。

しかしアリストは何故か瞳を明るくし深く頷き、アタイの背中側へ回る。

(きたああああ!! きちゃったああああッ!!)

外套越しがいとうこぎに伝わる乳の無い硬い胸板の感触に、夢見心地になるようない匂い。

アタイはくらくらしながらも、欲望を……違った、裁定を忘れない！

「ほ、ほら！ はやく、やんな！」

「うん……！」

すぐにアタイの両脇からアリストの手が入ってきた。

そして胸を、アタイの両方のおっぱいを！

わしつと、ぎゅむつと、大きな手で揉んでくれたんだ……っ！

「……んツ……≡」

アタイがつい声をあげちまうのと同時に、甲板の子達が一斉に息を呑んだのがわかる。

「「「っ……!!」「」」

当然さ、男が女の乳を揉むなんて絵空事でしかないんだからね！

「痛く、ない？」

（あうう、耳元に息があ……！）

優しく声をかけられ、アタイは蕩けてしまう。

もちろん、ちつとも痛くない。

むしろ力加減が絶妙すぎて、すでに腰にきちまってるくらいさ。

「んツ、ふう……、へ、平気だよ」

でもアタイはそのへんのなまっちよろい女とはひと味違うんだ、アリスト。

もう立ってるのもやっただけど、遠慮なんてしないよ！

「でも、まだまだ、甘いね。もっとやってくれないと、うちの子達は納得しないよ……っ……」

「「「!!」「」」

アタイの言葉に舞台を見つめる観衆――顔を真っ赤にしているうちの子達――が、瞳を輝かせる。

そして猛烈な速さで頷き、声をあげた。

「え、ええ！　そうですね、船長……!!」

「うんうん！　もっと大胆にやってくれないと、信用できなくなっちゃうかも！」

「そうそう!!」

やいやいと賑やかになった甲板から、タリアが素晴らしい言葉を放つ。

「服の上からじゃあワカンナイナー!!　誠意がツタワツテコナイナー!!」

(タリア、アンタって子は!!)

なんて素晴らしい発想だい！　いただきだよ!!

「ほらアリスト、うちの子らもああ言ってるよ！　だから、ちょ、ちょ、直接、わしっと頼むよ！」

「その、皆見てるけど良いのかな……?」

「はあ!?　良いに決まってるよ！　ほ、ほら、手をこらして……」

意を決して、アリストの手をつかみ胸元に直接突っ込む。

アリストの指がアタイの乳首に触れ、自分で触る時とは全く違う感覚が身体中を駆け巡る。アタイの身体は唐突に与えられたそれに耐えられず、腰を突き出しながら跳ね上がった。

「あっ、ふあ……ッ！」

乳首に少し指が当たっただけなのに、アタイは太腿を小刻みに震わせてしまう。

情けないアタイにアリストが慌てた声を出した。

「ごめん！ だいじょー！」

大丈夫じゃない、こんなにすごい刺激だなんて聞いてない！

……なんて口が裂けても言えるはずがない。

だって、そう言ったらきつと終わりになっちゃうからねっ！

「だ、大丈夫、だから。ほら、もっと揉んでみせてくれ」

アタイはそれを証明するため、自ら胸を外に露出させた。

そして、醜く揺れる両乳房に改めてアリストの手を押し付ける。

アリストは少し驚いたようにした後、露出したアタイの乳肉を握ってくれた。

「はあっ……はあっ……アリスト……っ……」

「こんな感じで、どうかな？ んっ、ふっ」

おっぱいを揉まれるだけで幸せなのに、彼はアタイのことを気遣ってさえくれる。

すると不思議と、アタイもアリストにいい気分になってほしいという思いが溢れてきた。

アタイのような女が彼に対してそう考えるのは失礼だと分かっているとしても、身体の奥から湧いてくる想いは止められない。

「こ、こんな感じも、どんな感じも、あっ、ああ……きもちよくなって、わかんない、つて……！」

でもアタイの頭はすでに沸騰していて、気の利いた言葉の一つも出てきやしない！
なのにアリストは、そんな女にも照れくさそうな笑みを浮かべてくれた。

「そ、そっか……なら、よかった」

(ふわあああああ！ なんだよ、その顔おお！)

そこにいたのは、まさに地上に舞い降りた天使だった。

そしてその天使は微笑みだけでなく、強い快樂もアタイに与えてくれる。

優しい手つきから一変、彼はアタイの乳首を激しく弄び始めたのだ。

アタイはとうとう我慢できなくなり、上ずった声をあげてしまう。

「あっ、うううっ、そ、そこ、つまんだら……あっ！ あっ≡はあっ≡ああっ≡やあっ≡
こんな声をあげても、アリストはアタイを全く拒絶しない。

そればかりかその身体をぴったりとくっつけ、何故か吐息を荒くしていた。

「ふーっ、ふーっ、ヴァイオレットのおっぱい、すごい……」

「す、すごい？ あっ ≡んはあっ ≡」

「柔らかくて、おつきくて、乳首も綺麗で最高だよ……っ」

「さいこう、うっ ≡な、なにをっ ≡あっ ≡ひっぱたらっ ≡ちくび、ひっぱるのはっ ≡
胸を褒められ、熱い吐息を首元に吹きかけられ。」

それで乳首をひっぱられたら、船長だろうが領主だろうが我慢なんて無理だ。

あ、イク、イク、乳首で思い切りイク……ッ ≡

「んんッ ≡ ≡ ≡」

「「「……」」」

アタイの絶頂を見た子達がごくりと喉を鳴らしている。

男が女の胸を揉みしだき乳首を弄って絶頂させる、という奇跡に圧倒されているのだ。

当然これならもう決まりだ、充分すぎるくらいだ。

アリストというアタイ達の仲間、いや天使に何とか声をかける。

「はあっ、はあっ、ありすと、あんたの、気概は、はあっ ≡しっかり、伝わったよ、んっ ≡」
そして彼の優しい掌に乳を任せたまま、船長としての裁定を伝えようとした。

「だからアタイ達の仲間としてこの船にー」

言葉の途中で、アタイは奇妙な感触に気づいた。

尻の後ろに何か硬いものが当たっているのだ。

アリストとアタイはぴったりくつついたままだから、そこに何か入るような余地はないはず。

(もしかして、アタイの魔法銃か!?)

海には危険な大魚や海洋生物も少なくない。

そうしたものから船や身を守るため、アタイ達は自分たちの魔法をより精度高く撃ち出す道具――『魔法銃』を持っている。

無論、人を殺すような威力はない。

それでも武器は武器、みだりにみせびらかすようなものでもないから、陸に上がる時はしまっのが基本だ。

(さっき水浴びして着替えた時に、いつもの流れで腰にやつちまったみたいだね)
アリストとの間に挟まってしまっていたなら、きつと痛かったに違いない。

アタイは慌てて詫び、銃をどけようとそこへ手を伸ばす。

「わ、悪かったね！ ごめんよ、アタイの得物が」

しかしそれを握った瞬間……天使がびくんと身体を震わせた。

「あうっ！」

同時に彼の可愛らしい声があがり、甲板上の全員の視線がアリストに注がれる。

よほど痛かったのかもしれない、アタイは急いでそれをどかそうとする。

「ああ、すまない！ そんなに痛いなら、アザになっているかもしれないね。すぐに軟膏を持ってくるから、ひとまず銃を……」

「あつ、ちよつ、ヴアイオレット、うっー！」

「お、おや、おかしいね？」

「くあつ、そんなに擦らないでもらえると、あつー！」

何故か悶えるアリストが、そこでアタイにだけ聞こえる声で密やかに言った。

「そ、それ、その、あの……俺の、ごじよごじよ……」

「……ふえっ！？！？！？！？！？」

アタイはすけべな本が好きだけれど、現実と妄想の区別はついているつもりだ。だから女の乳を触って男がアレを硬くするなんて夢のまた夢。

この世の男にはあんなもの付いてなくて、女の都合で描かれたものだとして今日まで思っていた。けれど、それは誤りだったらしい。

(アタイの手が今、触れてるのが、あ、アレだなんて……！)

アリストのズボンを押し上げる、銃と勘違いしそうなほど硬い棒。

でも落ち着いてみればそれは暖かく、いやそれ以上の熱さを感じる。

「す、すごい……！ 服越しでも、こんなに熱いんだね」

「うっ、ちよ、そろそろ手を離してもらっても……」

せつかく触れたのにそんなの嫌だ！

アタイは子供じみた考えに支配され、咄嗟に言質を振りかざしてしまった。

「さつき、何でもするって言っただろう？ それともこうされると痛かったりする、のかい？」

「い、いや痛くはないんだけど、おふっ」

「じゃあ、ちよつとくらい触らせてくれたっていいじゃないか」

「あ、ヴァイオレット、駄目だって……気持ち良く、なっちゃうから……！」
な、なんだって……？

そんなのまるで、すけべな本のままじゃあないか！

「ほ、本当に気持ちよく、なってるのかい？ その、す、すけべな気分になるってことかい？」
驚くアタイに、アリストはあっさりと頷く。

「そう、だよ。あっ、さつきも、ヴァイオレットの、お尻に擦れて、すごく良くて」

「!? あ、アタイのお尻が良かったのかい……？」

「くっ、うん。おっぱいも素敵で、声も可愛くて、だからつい、こうなっちゃって……」

苦しそうだけれど、とても色っぽい顔をするアリスト。

アタイはその表情を間近で堪能しながら、思い切ってすけべな本の知識をぶつけてみる。

「も、もしかして、白いお汁を出したくなったり、してるのかい？ アタイの身体に出したかったり、するの、かい？」

するとアリストはびくつと身体を震わせた。

ただその後何か返事が返ってくるわけではなく、アタイはさあつと血の気が引いていく。

(流石に、調子に乗りすぎたんじゃ……)

でもアタイってやつはしようもない女だった。

彼が動かなくなったことをいいことに、硬くて熱い棒をさすり続けてしまっただ。

だって男の、ち、ち×ぽを触れる機会なんて今後一生無いに決まってる！

ただそうして手を動かすうちに、アタイは声をあげそうになった。

何故なら、ズボンの腰元からち×ぽの頭部分が顔を出したからだ！

(わ、わっ!? ぬるぬるしてて、こ、こんなに熱いのかい!?)

先っぽから出てくるヌルヌルを堪能しつつ、張っている部分を撫で回したり、ちよつと奥の方まで挿んでみたり。

頭で何か考えるよりも先に、勝手に手が動いてしまう。

(ち×ぽ脈打ってて、^{たくま}遅しくって。あ、まだ大きくなるのかい……!?)

どういう原理かは分からないけれど、ち×ぽはぐんぐんと大きくなっていく。

そしてその先っちょがアタイの尻に触れた時。

今まで沈黙を貫いていたアリストの手に力が入り、アタイはぐいと彼に引き寄せられた。

「ひゃっ!? あ、アタイが悪かった、ごめんよっ!」

咄嗟に謝るアタイの首筋に、アリストは熱い吐息を吹きかけながら言う。

「ヴァイオレットの、せいだから！」

別人のように思えるほどの荒々しい言葉に、アタイは恐怖を感じた。

あれほど優しくかった人、しかも男をアタイは怒らせてしまったのだ。

一体何をされてしまうのか、想像だにできない。

後ろ盾が無いだろうって思ってたけれど、それだって確定じゃあない。

男の権力で仲間の子がひどい目にあったり、コスタヴィーノがいよいよ潰されたりする可能性

だって十分にあるじゃないか……！

（ああ、アタイの馬鹿！ 欲望に負けてなんて愚かなことをしちまったんだ！）

激しい後悔に襲われるアタイ。

けど、それは僅わずかな間のことだった。

「あ、えっ!? 熱っ、え、えっ、アリスト? ち、ち×ぽ、えっ!? えっ!?」

何故ならアタイの太腿の間に。

アリストのたくましいち×ぽが入ってきたからだ……！

いきり立った肉棒が、すべすべで張りのある肉の間に挟まれる。

（うはあああ、気持ちいい！）

散々触られたペニスにその感触は劇薬で、声を出してしまわないようにするので精一杯だ。一方でヴァイオレットはわたたと慌てていた。

「あ、アリスト!? そ、その、ち×ぽ、へんなどこに、挟まっちゃってる、けどっ!?」
彼女の反応はもつともだけれど、仕方がないんだ。

おっぱいを揉ませてもらっている時からずっと、彼女の魅力的な太腿が気になって仕方がなかったんだ!

「ご、ごめん! でも、もう我慢できない!」

「えっ!? がまん、できないって、何が、あつ、どういう意味だい!?」
ヴァイオレットには申し訳ないと思う。

でも俺の欲望は収まらず、彼女のおっぱいを鷲掴みわしづかしつつ、腰を前後に振っていた。
むつちりとした太腿に挟まれる快感が肉棒を襲い、俺は無意識につぶやいてしまった。

「はあつ、はあつ、ヴァイオレットの太腿、気持ちいい……」

先走りが彼女の内腿へこすりつけられ、魅惑の谷間はどんどん滑りがよくなっていく。それに伴って快感も増し、俺はカウパーが飛び散るのも構わず、その感触に夢中になった。勝手にこんなことを始めてしまうなんて、痴漢を通り越してお猿さんである。

なのに美人船長はそんな俺に、優しい声をかけてくれた。

「アリスト、これ、んっ! き、気持ちいいのかい? アタイの太腿なんかで、いいのかい?」

包容力を感じさせる問いかけに、情けなくも俺は本音を隠せない。

「うん……っ！ 擦れると、すごく気持ちいい。あっ、はあっ、はあっ」
とんでもない変態であることがヴァイオレットにも、俺達二人を見つめる甲板の女性達にも伝わってしまったに違いない。

なのに、ヴァイオレットは愛想を尽かさなideいでいてくれた。

そればかりか可愛らしく内股になり、ぎゅっと俺のペニスを更に強く挟んでくれたのだ……！

「そ、そっか。気持ちいいんだね……。≡じゃ、じゃあもっとうごいたらいい、かい？」

「あっ!? う、うん……はあっ、すごく、良い……っ！」

美しい女性に変態な欲望を受け入れてもらえた悦びで、肉棒はますます首をもたげていく。すると、カリの上側が太腿とは別の柔らかく、それでいてとても水っぽいところに当たり始めた。

「あっ≡こ、擦れてるっ≡そっ、っすっちゃだめだっ≡アタイの、ま、ま×こだからっ≡」
彼女の可愛らしい抗議に耳を貸せるくらいなら、俺はとうに腰振りをやめているだろう。

「待って≡アリスト、そこは、だめだっ≡お、おい、聞いているのか？ あっ≡」
「もっとなんかの甘い声が聞きたい。」

もっといやらしいところに肉棒を擦り付けたい。

こみ上げる欲望に逆らえず、俺はぐいと彼女の紐パンを引っ張る。

「ちよっ!? あっ≡ご、ごらっ≡それっ≡ちよ、直接っ≡あたるからっ≡だ、だめだよっ≡」
「はあっ、はあっ、はあっ!」

露あじわになったヴァイオレットの割れ目。

愛液まみれのそれがカリを撫でていく感触はたまらなく気持ちいい!

「あ、速く、す、するなっ≡そんな、硬いので擦られたら、アタイ、おかしく……っ≡」

「おかしく、なって! ヴァイオレットがおかしくなるとこ、見たい!」

「ああっ≡ぐりぐり押し付けないでっ≡あっ≡あっ≡」

彼女の腰が不規則に揺れ、むっちりとした脚が更に締まった。

(うはあっ!! 割れ目と内腿で絞られる……!)

煽られ続けたペニスはもう限界だ。

そしてそれはヴァイオレットも一緒だったらしい。

「だめだっ≡アリストっ≡おっ≡だめ……また、イクッ≡≡≡」

「お、俺も……射精るッ!」

ービュルッ!! ドビュッ!! ビュルルッ!!

ヴァイオレットの愛液と俺の精液が、甲板と船首楼を仕切る木製の柵を容赦なく汚す。

白濁液の一部はそれでは収まらず、柵を飛び越えて甲板の女性にも掛かってしまった。

「」「……っ!」「」

しかし女性達はびくりと肩を震わせるだけで、誰一人として逃げ出したりしない。むしろどこかうっとりとした表情すら浮かべてくれている。

「はあ≡」

「あ、あんなに沢山出るんだ……≡」

「すごい……≡」

彼女たちの熱い視線が俺の肉棒へ注がれているのを感じる。

そこには一点の軽蔑もなく、むしろ崇拜するかのような雰囲気すらあった。

(好き勝手に射精しちゃっただけなのに……)

男の象徴を賛美してくれるかのような様子に俺の牡が満たされ、肉棒も硬度を取り戻す。

熱い視線に肉棒はすぐに硬度を取り戻し、俺は鼻息荒くヴァイオレットの太腿に手をかけた。

絶頂の余韻に浸るヴァイオレットは疑問の声をあげる。

「はあっ≡はあっ≡アリスト……?」

俺はそんな彼女の声を無視し、思い切り彼女を持ち上げて背面駅弁の姿勢を取らせてしまう。

甲板の観客達に彼女の愛液塗れになった女性器が晒された。

船員達の視線を受け、ヴァイオレットは咄嗟に股間を手で隠そうとする。

「ちよっ、なあっ!？」

男勝りな彼女の乙女らしい仕草に、俺の興奮は更に高まった。

肉棒はますます硬度を増して天をつき、濡れた亀頭が彼女の大事なところにぴたりと当たる。そうして後は貫くだけ……となった時、ヴァイオレットが顔だけこちらに向けた。

「ほ、本気かい……？」

不安気な彼女の表情を見た途端、俺の脳に理性が戻る。

「あつ！ ご、ごめん、その、俺、もっとヴァイオレットとシたくなっちゃって……！」

慌てて彼女を下ろそうとしたが、他ならぬヴァイオレットによってそれは妨げられた。

朱色に頬を染めた彼女はさつと俺の首に両腕を回すと、濡れた瞳をこちらへ向けたのだ。

「じゃ、じゃあ……今やめたら、船には乗せない……」

なんていじらしい言葉だろう……！

かあつと胸が熱くなった俺は、返事の代わりにペニスを進ませる。

「ああ、挿入^{はい}つて……きてるう……ッ」

びくびくつと身体を反らせ、甘い声をあげるヴァイオレット。

幸いなことにそれは、彼女の処女を散らしても変わることはない。

そして亀頭が行き止まりに達すると、美人船長はうつとりと声を出した。

「く、あはあつ≡アリストのが、ああ、すごい奥に、当たってるう≡」

身を振るヴァイオレット。

同時にぐねぐねと彼女の膣壁はざわめき、鈴口をついばむように子宮口が降りてくる。

(子宮口でキスされてる!? ああ、このまま挿入^いれているだけでもイっちゃうかも……!)
しかしギャラリーの皆さんの手前、すぐに果ててしまいうわけにはいかない。

「す、すっご」

「船長の穴に、は、挿入っちゃってる」

「……ち×ぽってあんなにおっきいの……?」

俺とヴァイオレットの結合部に、恍惚とした様子で言葉を零す女性達の視線が注がれる。

俺は恥ずかしさよりも見られる、見せつける快感がこみ上げ、躊躇なくピストンを始めた。

「はあっ、はあっ、ヴァイオレット……!」

「あっ≡ああっ≡ありす、とぉっ≡」

じゅぶっ、ずぶっという音と共に船長の甘い声が響く。

甲板に愛液を撒き散らす彼女は、俺の首に手を回して言う。

「あっ≡はあっ≡こんなふう^うに持ち上げられるなんてっ、はじめての経験だよ、おっ≡おもく、ないのかい、あっ≡ああっ≡」

「はあっ、はあっ、全然重くないよ!」

「ち、ち×ぽ、あっ≡辛い^いの、なんとか、あっ≡なりそう、かい? アタイので、どうにか、なるかい? んっ≡あうっ≡」

「そんなふう^うに言われたらすぐ^すにでも、どうにかなっちゃうって……!」

俺がつい弱音を吐くと、ヴァイオレットは嬉しそうに微笑む。

同時にぎゅうつと膣中が締め、いますぐにでも射精しろといわんばかりだ。でも男としての矜持でそれを押し止め、俺は更にピストンを激しくした。

「あああっ ≡ はあああっ ≡ ふか、いつ ≡ すごいとこまでっ ≡ ち×ぽきてるっ ≡ ありすとおっ
≡」

ヴァイオレットの愛液が更に量を増し、床にいやらしいシミが広がっていく。

凛々しい女性を作るそれは、男としての勲章だ。

勲章が増える度、牡としての誇らしさが大きくなる。

「ふーっ！ ふーっ！」

「ぐっ ≡ おっ ≡ ほおっ ≡」

ただ同時に快感もどんどん増していった。

(突く度^{たび}に、膣奥で亀頭がしゃぶられてる……っ！)

突けば突くほどヴァイオレットの膣中がほぐれ、子宮口による口づけがどんどん激しくなっ
ていつているからだ。

ぞわぞわと足元から昇ってくる射精欲は、もう止められそうにない。

「ヴァイオレット、はあっ、はあっ！ だ、出すよ……っ……っ！」

「ああ、いいよっ≡いっぱい、だしておくれ、あっ≡たっぷりだしてくれたら、んっ≡船に、乗せてやるからね、あっ≡あっ≡」

男に脚を持ち上げられ、思い切り女性器を露出させられる。

そんな羞恥に満ちた体勢になっても、美人船長は本懐を忘れていなかった。もちろん、俺も彼女の期待に応えないわけにはいかない。

俺は自分の内で暴れる牡を加速させる。

「はあっ！ はあっ！！ ヲアイオレットっ！ ヲアイオレット……っ！」

「おっ≡んっ≡いぐっ≡ありすと、アタイもっ、イグっ≡白いお汁で、イギたいっ≡イカせてええええっ≡」

そしてヲアイオレットの素敵な叫び声に合わせて、俺は思い切り肉棒を突き入れた。

ービュルルルッ！！ ビュクッ！！ ビュルッ！！

「あッ≡ぐッ≡いぐっ≡いぐいぐっ≡ま×こ、いぐうっッ≡≡≡」

一番奥で白濁液を放つと、美しい船長の大きな嬌声が港に響く。

同時に彼女が放った愛液はついに甲板へ到達し、女性達の眼の前をはしたなく濡らした。けれど船員の女性達は一切そこを動かない。

皆、俺とヲアイオレットの結合部を凝視しながら衣服に手を突っ込んでいたからだ。

「ッ≡ッ≡」

「は、あ……っ」

「ふっ≡ふっ≡あっ≡はっ≡」

懸命に隠そうとはしているけれど、何をしているかは明らかだ。

その淫靡な様と小刻みにペニスを締め付ける蜜壺に誘われ、俺はもう一度精を放つ。

「ヴァイオレット、俺、また……！」

「まだ、でるんだねっ≡いいよ、アタイの穴にぜんぶ、あっ≡せんぶだしてっ≡」

「くっ、イク……ッ！」

ーードビュルルッ!! ビュルルッ!! ビュクッ!!

「あっ!? あはあっ≡誠意、きてるよっ≡アリストの気持ち、いっぱい……あ、イグッ
≡≡≡」

甲板には再び淫らな雨が降り、ギャラリーの女性達は腰をひくつかせビクビクと震える。

煽られた俺が白濁液を出し、ヴァイオレットも絶頂する。

「おっ≡イグッ≡ま×こいってるッ≡ずっと、イツちゃっ≡≡」

「ヴァイオレット、そんな締めたら、また……っ」

「えんりよ、しないで、あっ≡きて、きてっ≡アタイも、またお汁だからっ≡あ、あああっ
≡≡≡≡≡」

甲板に漂う妖しく淫らな空気は、海風で消え失せることはない。

その空気に酔い痴れながら、俺達は何度目かの絶頂を越えていく。

そしてそれが落ち着いた頃、俺はついにヴァイオレット船長からの信頼を勝ち取った。

「アタイの船は、もう、アリストのものだよ……あつ≡いつでも、どんな命令でも、アタイ達は聞くからね……んっ≡」

目的は達したが、交渉はそれでおしまいというわけにはいかなかった。



観客であった女性達に物欲しげな表情で迫られ。

「アリスト、さんっ≡あっ≡おっぱいっ≡イクウっ≡」

「あ、口づけまでっしてくれるんですか……!? んちゅっ！ んんっ≡」

「ありすとさまっ≡そこほじったら、おしるでちやう……だめっ、でるうっ≡」

「ぢゅぽっ≡ぢゅぞぞっ≡ち×ぽ、おいひいれすっ≡おくちに、しろいのっくだしやい≡ぢゅ

ぽっ≡ぢゅっぽっ≡」

俺は船員の皆さんを相手取り、もうひと踏ん張りすることになったからだ……！

第三章 島の守護者は自動魔法人形!^{オートマタ}

翌日、俺はまだ日が昇る前の船室で思い切り伸びをしていた。

「んーんー！」

船室で寝る、という普段と違う環境だったからだろうか。

いつもより縮こまっていた背骨が、ぱきぱきと音を立てながら伸びていく。

(ヴァイオレットに感謝しないと。二人部屋だし、壁もすごく分厚いし……)

配慮が行き届きすぎていて苦笑したけど、結局それに助けられたことは内緒だ。

「おはようございます、アリスト様。昨日のお疲れは残っていらっしやいませんか？」

未だ寝癖が直しきれしていない俺と比べ、エフィさんの身支度はすでに完璧である。

「あ、エフィさん、おはよう。うん、すっかり眠れたから大丈夫！」

例の交渉の際、彼女は甲板にこそいなかったものの、万が一の護衛としていつでも甲板に飛び出せる場所に控えていてくれた。

そんなエフィさんだが、実は俺が甲板に出る前、一つの予言をしてくれていた。

『交渉というのは、おそらく、その類のお願いをされてしまうのでは、ないかと……』
聞けば、ヴァイオレットは船長室で話している時から『その気』の顔をしていたらしい。
俺にはさっぱり分からなかったから、女性の勘というやつかもしれない。
その上で、エフィさんは両手に拳をつくって俺を送りだしてくれたのだ。

『旦那様のおち×ぽなら、絶対大丈夫です！ どん、どぴゅどぴゅ、頑張ってください！』
転生したからこそ聞いたエールを思い出しつつ、俺はエフィさんと共に船室を出る。
木製の通路を通り甲板への扉を開くと、そこにはずらりと船員の皆さんが整列していた。

「「「おはようございます！ アリスト様！」「」「」
「おわっ!？」

思わず声を出した俺の前に、船首楼せんしゅろうからひらりと降りてきたのはヴァイオレット船長だ。
彼女は爽やかな笑みを浮かべると、一切躊躇うことなく俺の頬ほおへ口づけをする。

「おはよう、アリスト。昨日は良く眠れたかい？ ちゅっ≡」

「わっ！ え、う、うん」

「うん、顔色も良いね。エフィも……おや？ なんか妙につやつやしてるね。ははあ、アタイ達
のを見て我慢できなくなったのかい？」

「ふえっ!？ い、いや、そんなことは……」

「まったく、アリストの逞しさには敵わないね♪甲板でアタイ達をあんなにしたのに、まだ相手をしてやれるなんてさ。こりゃあ仕え甲斐のあるご主人様だ、ふふふっ♪」

「~~~~~」

頬を赤くしたエフィさんを見てヴァイオレットが笑うと、陰かげのある女性の声が響いた。

「なーにが『逞しい』でしてよっ！ あんなにうるさくしてっ！」

言いながら、大きな胸を揺らして船尾楼から下りてきたのはベアトリスである。

彼女はヴァイオレットと俺の間にずっと身体を入れ込むと、ぎろりと俺の顔を睨んだ。

「ちよつと変人！ 隣の部屋に寝ている人間のことを考えられないのでしてっ!? エフィの、あのっ、そのっ……声！ 聞こえていましたわよっ!!」

「えっ!？」

どうやら昨晚の営みは、分厚いという壁を貫通してしまっていたらしい……！

「エフィに大事無さそうだからいいのですけれど！ 時と場所をわきまえるくらいなさいっ！」

「ぶ、ごめん……」

「エフィも少しは遠慮なさい！ メイドなのでしょう!? 主を止めるのも役割でしてよ！」

「申し訳ございません……」

お説教モードのベアトリスに俺とエフィさんは頭を下げる他ない。

(でもベッドに入ったらエフィさんがぐいぐい……っつていやいや、それは言い訳だな！)

俺は改めて病気とは無縁の身体を貰って転生した時、神様にかけてられた言葉を思い出す。

『ちよつと元気すぎるかもしれないませんが……きつと楽しめるかと！』

甲板で船員さん達と、そして寝る前にエフィさんと。

一切衰えずにできてしまうところを思えば、神様は全面的に正しかったといえるだろう。

「わたし達はイルゼ様をお迎えにいくのです。確かに昨晚は時間がありましたけれど、だからといって緩みきつていいということにはなりませんわよ！ それにー」

ベアトリスがしばしお説教を続けるうちに、ふとヴァイオレットが不思議そうに首を傾げた。

「ううん……アタイの部屋も位置的には隣だけど、何も聞こえなかったけどねえ。構造的にちょうど分厚い壁に挟まれた部屋だし、音が漏れるってこともないはずだけど」

「そ、それは貴女の寝付きが良いだけですわっ！ わたしの部屋には聞こえていましたのっ！」

「そんなこと言つて、本当は壁に耳をつけて盛さかつてたんじゃないのかい？」

「さかつ……!? そんな品のないこといたしませんわ！」

ベアトリスが顔を真っ赤にして更に怒りを露あらわにしたが、小言はそこで止まる。

水平線の向こうからうつつすらと陽ひが顔を出し始めたからだ。

「さ、時間だね。アンタ達、準備はいいかい!？」

船長の顔をしたヴァイオレットの一言で、和やかだった甲板の空気がぴりっと引き締まった。赤いターバンを巻いた女性達の雰囲気も変わり、ぴったりと揃った返事をする。

「「「はいつ！ 船長！」「」」

ヴァイオレットがひらりと船首楼に上がった。

「目的地はネビュラ島！ アリスト達の大事なものを取り返しにいくよ！」

パイレーツハットを被り、ばさりとジャケットをはためかせ。

彼女のひとときわ凜々しい声が明るくはじめる空に響く。

「出港!!」

こうして俺達はコスタヴィーノに別れを告げ、謎多き島、そしてイルゼさんとネレイダという女性が消えた島――ネビュラ島へ出発したのだ。

航海は概ね順調に進み、まもなく昼を迎えようかという頃。

女性の大きな声がメインマストの見張り台から響いた。

「船長！ また風向きが変わってきました！」

声の主はこの船の航海士を務めているタリアさんだ。

「まだ少し距離はありますが、早めに接岸に向けて舵を取ったほうが良さそうです！」

「そうみたいだねっ！ まったく、面倒な風だよ！」

船首楼で舵を取る船長が同じく大きな声で返事をしつつ、ぐいと船輪を右側へと回す。

「タリア！ 風もそうだけど、潮の流れも厄介だ！ 正面は難しいね……どこか、船をつけやすそうなところは見えるかい？」

「おもかじがわ面舵側の潮流がかなり落ち着いています！ わずかに浜もありますし、岩もありません！」

「あいよ！ アンタ達、面舵だ！ 急ぎな！」

「「「了解っ!!」「」」」

船長の指示に船員達が一斉に返事をし、甲板の各所のロープを手にとった。

この船はマストや帆から甲板へ張り巡らされた様々なロープを巻き取る、送り出す、引っばるなどのやり方で帆の幅を調整し、舵とあわせて船の進路を操る仕組みだ。

文字通り皆で操舵することになるため、順調な航海といえども決して暇ではない。

そして仲間として乗り込んだ以上、俺達三人も同じだ。

「承知いたしました！ 私は船尾側のマストへ参ります！」

「人使いの荒い船長ですことっ！ ほら変人もエフィを見習ってさっさと動く……って、どこ行っただんですの!？」

「べ、ベアトリス！ こっち、こっち手伝って……お、重……ッ！」

「はあっ!? まだですの!？」

この作業、実は風向きによって各所の縄の重さが変わる。

最も重い縄は一番ロープ、次に重い縄は二番ロープと呼ばれ、航海慣れした船員は引く前に見定めることができるそうだ。

通常はそうした船員さんが指示を出すらしいのだけれど、今日は風向きが特に難しいという。そのため、各々臨機応変に動くことになっているのだけれど……何の因果か、俺が取り付くロープは決まって一番か二番なのだ。

「わあ!? アリスト様すごい、百発百中だよ！　すぐにでも甲板長になれるよっ！」

「細いのに力も強いしっ！　アリスト様、格好いいです！」

「あ、ありがとう……ってというか、重……ッ!!」

俺より早くロープに取り付いていた船員さん達に褒められるけど、呑気に喜んではいられない。

彼女たちの余裕ある表情とは裏腹に、一番や二番に当たるロープはかなり重いのである……!

(女性に負けてられない……ッ!!　リジエさんとのトレーニングを思い出せ、俺っ!!)

男の矜持を振り絞っているうちに、他の縄の処理を終えた船員さん達が加勢してくれる。

「おっばい様！　もっと踏ん張って!!」

「ほら、重たいお胸を活かしてどっしりとー！」

「貴女達いい、陸に戻ったら後悔させてあげますわよっ!!」

「航海だけに？」

「むきいいいいッ!! 絶対に許しませんわっ!!」

ベアトリスはぷりぷりと怒りつつも、その身のこなしは船員さんと比べても見劣りしない。

いつの間にかドレスのスカート丈が短くなっているし、靴も洒落たヒールから動きやすそうな編み上げのブーツになっていた。

(ヴァイオレットが心配してないって言うてたけれど、それはこういうことだったんだな)

エフィさんにもブーツを貸してくれていたようだし、そもそも船旅に慣れているのだろう。流石に港湾都市の領主様を称するだけはある。

「変人の癖に目敏めざとくて腹が立ちますわっ!! なんですぐに一番ロープを見分けられますの!」

「くっ、見分けられたら、もつと身の丈にあつたのを選ぶ……よッ……!」

「それはそれでむかつかますわっ! 毎回一番辛い思いをなさいっ!」

「理不尽っ!」

甲板にしっかりと足をつけ、ぐつと腰を低くして俺と共に縄を引くベアトリス。

堂に入った姿勢でとても格好良い。

ただ一方でそれは魅惑のポーズでもあった。

(大きなおっぱいがめちやくちや当たってる! 下着も見えてる……っ!)

毎回すぐ近くで手助けしてくれるため、むぎゅうと大きな胸、しかも服からはみ出ている横乳部分が押し付けられるし。

スカート丈が短いのに思い切り脚を広げるから、スケスケの赤いショーツが丸見えなのだ！

「変人！ 何をふやけた顔をしてますのツ？ 縄が重すぎて頭がおかしくなったのでして!？」

「わあ!? い、いやいや！ なんでもないっ!？」

「ならもつと腰を落としなさいっ！ 縄に引つ張られて怪我しますわよっ!？」

「わかったっ!？」

俺は邪念を打ち払い、いましばらく綱引きに専念する。

そのうちにロープの重さも軽くなり、作業は次の段階にうつった。

「よし！ そろそろ接岸準備に入るよ!! タリア、甲板で海面を見てくれ!？」

「分かりました!？」

「アンタ達、急いで帆を畳みな！ これ以上風に煽られると面倒になるよっ!？」

「!」「了解っ!」「!」「!」

今まで引いていたロープとは別のロープへ手を移し、一斉に巻き取っていく。

急げ、という指示通りその速度はなかなかのもの。

不慣れな俺はついていくのがやっとで、流石のベアトリスもロープに翻弄されたらしい。

「きゃっ!？」

可愛らしい声をあげ体勢を崩す。

側にいた俺が慌てて抱きかかえると、彼女は大きな瞳を何度か瞬かせた。

「おつと！ 大丈夫？」

「へ、変人も、たまには役に立つのですわね……」

俺が苦笑すると同時に、ふと足元の甲板がカランと音を立てる。

視線を向けると、そこには例の古めかしい鍵が転がっていた。

胸元にしまっていたのだけれど、必死に作業をしているうちに出てきてしまったらしい。

「ちよ!? 気をつけなさい！ 大事なものなんだから——」

姿勢を戻したベアトリスが咄嗟に拾い上げる。

しかし彼女が鍵を手にした時に、それは起きた。

「クルルルル……!」

頭上高くからくるみを転がしたような音と共に、俺とベアトリスの前に一陣の風が吹く。

突如吹きすぎる突風に俺達は二人揃って悲鳴をあげた。

「わっ!」

「きゃんっ!」

その風が吹いたのは一瞬のこと。

だがその一瞬でベアトリスの手からは鍵が消え——

「クルルッ♪」

——船首に留まる、奇妙な鳴き声の鳥の嘴くちばしに移動してしまっていたのだ!

「なっ?! か、返しなさい!! この泥棒鳥イっ!!」

一瞬の後、状況を把握したベアトリスは鳥に向けて、右手の人差し指から小さな魔法弾を撃つ。

しかし真っ白な体躯の鳥はひらりひらりと身をかわし、特徴的な鳴き声を響かせる。

「クーーーー!!」

刹那、その鳥は突如全身から強い光を放った。

(ツ!? くう、まぶしい……ッ!)

太陽が眼の前に現れたかのような光量に怯むうちに、鳥は上空高くへ舞い上がってしまう。

「ま、待ちなさい! 待って!! 返しなさいーいっ!!」

そしてベアトリスの声を背に、遠くへと飛び去っていく。

その姿がネビュラ島へ消えていく様を見て、俺はネレイダという女性の言葉を思い出した。

『ミストコープ上陸、個体イルゼとの面会には必ずお持ちください』

あの言葉どおりなら、イルゼさんと再会するには今奪われた鍵が必要になるということだ。

それに不思議な女性が言った言葉にはまだ続きがある。

『未所持の場合、不法侵入者とみなされる可能性があります』

俺の背筋に冷たいものが走ったのとほぼ同時に、船は大きく左右に揺れ動き始めた。

「うわあっ!?!」

「な、なに？ 次は一体なんなんですか!？」

バランスを崩した俺とベアトリスのもとに、素早くヴァイオレットが飛んでくる。

「アリストっ！ ベアトリスっ！ こっちに掴まれ……ッ！ 何か海の中から出てくるよっ!」
言いながら彼女はぐいと俺達の手を引っ張り、船首楼の手すりへと導いた。

「あ、ありがとうっ!」

「くっ、礼を言いますわ……っ!」

お礼を言いながらそれを掴むと、すぐ隣でエフィさんも同じようにしている。

「エフィさん！ 怪我はしてない!？」

「はい！ 問題ないです！ お二人も、ご無事で……っ!」

「心配されるまでも、ありませんわっ！ 貴女もよく踏ん張りなさい!」

ひととき大きな波が船首側から襲ってきた。

そして持ち上がった海の下に、何か大きな影が見える。

（一体何が出てこようとしてるんだ!？）

船は海面を昇るように傾き、甲板にはそれでも尚受け止めきれなかった海水が流れ込んでくる。

「堪えろっ！ 大丈夫だ、こんな程度じゃ沈みやしないよっ!!」

「沈んでもらっちゃ困りますわっ！ にしても、一体何が出てくるんですか!？」

「海の財宝ってわけじゃあなさそうだね！　ともかく今は船から放り出されないようにしな
っ！」

ヴァイオレットの心強い言葉を信じ、俺達はぐつと腰を落として水流に耐える。

甲板の各所で船員の女性達も同じように水と格闘している様子だった。

「皆、ここで流されたら、もうアリスト様に触ってもらえないよおっ！　踏ん張れえ！」

「海の女の根性を見てもらうんだあっ！」

「もう一度、おっぱい舐めてもらうまで、死ねない……ッ!!」

……忘れたほうがよさそうな声が聞こえる中、やがて甲板を水が行き過ぎる。

幸いなことに船員は誰一人欠けることは無かったようだ。

一方で船首の先にはいよいよ波の発生源が姿を現していた。

「う、海から船が出てきましたわっ！」

「良かった。アタイの目がおかしくなっちまったわけじゃないみたいだね……ッ！」

現れたのは白っぽい木材で作られた、こちらの船より一回り大きな帆船だった。

その船首には一人の女性が立っており、エフィさんが声をあげる。

「アリスト様、あの女性は！」

目元を隠すかのように切り揃えられた蒼い前髪あお。

青と白で構成された軍服を思わせる装束。

船首に立っていたのはあの夜に姿を見せた女性、ネレイダその人であった。



海中から現れたのに、その身体は一切濡れていない。

あの晩と同じ異質さを漂わせる彼女は、どこか機械的に声を出す。

「上陸準備領域にも関わらず、鍵の反応が無いことを確認。不法侵入者の拘束を開始します」
その言葉と同時に、驚くべき現象が始まった。

ぱきぱきと音を立て、俺達が乗る船の周りの海面が氷漬けになり始めたのだ。

蒼く深い色合いだった海が、みるみるうちに白い流水に変わっていく。

それはつまり、船が身動きを取れなくなったことを意味していた。

「アリスト様、魔法です！ こ、この規模は……ペレ様のような大貴族がお使いになる等級です！」

「だよね……!?!」

俺の身体に走るぞくりとした感覚は、父さんとディーブ伯爵の魔法を見た時以来のものだ。

無論、それを放ったネレイダがこちらを敵視しているのは間違いない。

「ヴァイオレット、昨日私が言ったことを信じる気にはなりません!?」

「まったく、こんなふう信じさせられるのはごめんだよ！」

美しい船長は表情を険しくし、すぐに船員達へ声をかける。

「アンタ達、戦闘準備だ！ そこの怪魚より危険だと思ってかかりな！」

ヴァイオレットは自らの魔力を弾に変えて撃ち出すという『魔法銃』を手を取った。

しかし船員の女性達が準備を整える前に、ネレイダが動く。

「抵抗の意思を確認。『センシユアル・イヴ』、実力行使に移行します」

途端に彼女が乗る船から、幾つもの影が飛び出した。

それが次々とこちらの甲板へ降り立ったことで、影の一つ一つがネレイダと揃いの服を身につけた女性達であることが判明する。

揃って目元を前髪で隠した彼女達は、起伏のない声を揃えた。

「」「魔力反応微弱。早急に無力化し本艦へ収容します」「」

その言葉を契機に、船上での攻防が始まる。

「はっ、いい度胸じゃないか！ さあアンタ達、応戦するよっ！」

ヴァイオレットが言うと、甲板の各所から一斉に魔法弾が放たれる。

船員さん達がそれぞれに魔法銃で発砲を始めたのだ。

「このおっ！ 舐めんな！」

「海に落ちちゃえっ！」

対する軍服女性らはいつかのヴァイオレットを思わせる俊敏さで、魔法弾を躲かわしていく。

「気をつけてっ！ 海で襲ってくる動物よりずっと速い！」

「わかってる!!」

一方で軍服女性達は揃って徒手空拳であり、遠距離から攻撃する手段を持っていないらしい。

そのため魔法弾は命中せずとも有効で、彼女らは攻めあぐねているといった様子である。とはいえ、その理屈が通用しない例外というものもあるわけで。

「魔法反応無し。拘束します」

「うわあっ!? ちょ、おわああああっ!!」

……そう、俺は接近されちゃうんだよね!

魔法が使えない俺は、魔法銃も扱えなければ持つてもない。

そのことを見抜いた軍服女性の一人が、俺に集中攻撃をしかけてきたのだ。

良くも悪くも他の女性達は船員さん達に掛かりきりで、俺は彼女と一対一の対峙を余儀なくされていた。

「大人しく投降してください」

息が上がった様子も見せない女性だが、一方で彼女は他の女性達に比べ動きが遅い。

その理由はわからないが、だからこそ俺はなんとか逃げ惑うことができていた。

「そ、そう、言われてもっ!! 困るっ!!」

「不法侵入の事実は曲げられません。拘束します」

加えて、リジエさんから習った護身用の棒術も役立つている。

甲板に転がっていたモップで、彼女が次々と繰り出す手刀や掌底をさばっていく。

「ふっ! くうっ! はあっ!」

しかし俺の実力では逃げ回りつつ、時折彼女の手をいなす程度が関の山。相手に一撃を与えるなどできようもない。

軍服女性は涼しい顔のまま、一方の俺はじりじりと後ろへ下がり続けるだけになってしまう。

「あまり激しい抵抗は罪が重くなります。早めの投降をお勧めします」
しかし、いよいよそれも厳しくなってしまった。

彼女の手から逃げ惑っているうちに、俺の背中は甲板の端に追い詰められてしまっていたのだ。

「もう逃げ場はありません。大人しくー」

万事休す……！

そう思った時、俺と彼女の間でエフィさんが飛び込んできた。

「アリスト様に狼藉は許しませんっ!!」

彼女はそう言うと、軍服女性が伸ばした手を素早く捌いて掴む。

そしてそのまま鮮やかな投げ技を披露し、彼女の背を甲板へと叩きつけた。

「きゅう……」

女性は想像より可愛い声を出し、目を回してしまっただけらしい。

ほとんど動かなくなった彼女の手を持ちつつ、エフィさんはどこからか紐を取り出す。

そして女性の両手を手すりに縛り付けると、俺のほうへと駆け寄ってきてくれた。

「アリスト様、遅れて申し訳ございません！」

「いやいや！ 助けに来てくれてありがとう！」

「メイドとして当然の務めです。ただ他の方に手間取ってしまった……」

そう言う彼女の肩越しに、もう一人女性が柱に縛り付けられているのが見える。

「エフィさん、もしかして別の人も……！」

「ヴァイオレットさん達が素早い女性はひきつけてくれましたし、あの方も他の女性より動きが遅い様子でしたので、何とか」

たとえそうだったとしても、僅わずかな間に二人も無力化してしまうとは驚きだ。

ちなみに彼女が言う通り、船首楼ではヴァイオレットが三人ほどの軍服女性を相手に大立ち回りをしているのが見えた。

「この間相手したでかい魚より遅いねえッ！ 海賊船長を舐めてもらっちゃあ困るよっ！」

そこへベアトリスの鋭い声が響く。

「変人！ エフィ！ 頭を下げなさいっ！」

「「!!」」

急いで指示に従うと、頭の上を赤い弾丸がかすめていく。

その行き先は俺達へ飛びかかろうとしていた軍服女性二人だ。

それぞれに弾が直撃し甲板の端まで吹き飛ばす。

「回避不可……!!」

「魔法弾、回避に失敗……!!」

しかしその影からもう一人の女性が飛び出し、エフィさんへと手を伸ばしてきた。

「エフィさん、あぶないっ!!」

咄嗟に俺はエフィさんの前に出るが、そこに策はない。

「わぷっ!？」

「対象、拘束します」

結果、俺は後頭部に手を回され顔を彼女の胸に押し付けられてしまう。

「アリスト様あつ!!」

「こらあ！ 変人を返しなさいっ!!」

後ろからエフィさんとベアトリスの声、そしていくつかの魔法弾が飛んでくる。

だが女性は俺を胸に押し付けたまま魔法弾を回避し、その背に光る羽を出現させた。

(おっぱい柔らかか……じゃなくてっ！ この女性達もネレイダと一緒に飛べるのか!?)

なんとか逃れられないかと俺はジタバタと暴れるが、女性の力は強く腕を引き剥がせない。

その間に女性は羽を羽ばたかせ、ふわりと宙へ浮かんでしまった。

(くそっ！ どんなやり方でもいいから抵抗しなくちゃ……!!)

このままではイルゼさんに会えないばかりか、エフィさん達とも離ればなれになってしまう。

そんなことは絶対に嫌だ！

俺は必死になつてもがき、その中でふと柔らかいものを掴んだ。

「んっ!?!?!」

刹那、軍服女性は驚いたような声をあげて動きを止める。

今まで俺がいくら暴れてもびくともしなかつた彼女がだ。

(これは効果あつたつてことか!?)

俺はどこを掴んでいるかも分からないまま、その柔らかいものをもみくちやにする。すると今度は女性がびくびくと震え始め、奇妙なことを口走つた。

「性感回路、遮断、不可……っ……」

彼女の腕の力が弱まり、高度も下がっていく。

そしてつま先が再び甲板へ触れる頃、俺は自分が掴んでいたところを理解した。

(これ、この女性のお尻だ……!!)

彼女達が身につけているのは軍服風の衣装だが、あくまで『風』である。

一番の理由はその下衣で、軍服では絶対に有り得ないほどのミニスカートなのだ。

俺はもがく中で、彼女の背中側に回した手でお尻を揉みしだいてしまつていたらしい！

そして信じ難いことだが、どうやら彼女は、

「んっ……あっ……」

お尻を揉まれて気持ち良くなってしまっているみたいである！

(性感とか言った矢先に力も弱まったし、このまま揉んでたら拘束から抜けられるかも！)
なんとも珍妙な考えではあるけれど、今はその良し悪しを考えている場合ではない。

俺は余計な考えを捨て、とにかく彼女のお尻を揉みしだくことに集中する。
はたして、それは絶大な効果をあげた。

女性はびくびくと震え、ついに俺を拘束していた腕をだらんと下げてしまったのだ。

「……っ≡じ、実践フェーズにおける……っ≡学習、不足……っ……≡」
「ぷはっ」

いざ拘束から解放されてみると、今や力の抜けた女性を、俺がお尻を鷲掴みにして支える……
という奇妙な状況となっていた。

疑問のつきない俺のもとへ、エフィさんとベアトリスが大急ぎでやってくる。

「アリスト様っ！ 良かった……!!」

「変人っ！ 無事ですわよねっ!？」

「うん、大丈夫だよ！ ちよっと苦しかったけど」

言いながら俺は周囲に注意を向け、他の軍服女性達の様子を窺う。

すると不可思議な事態が起きていることが分かった。

「皆さん急に動きが変になって、びくびくと震えていらっしやいますね……?」

エフィさんの言うとおり、軍服女性達は各々脚を震わせており、さきほどよりも明らかに動きが悪くなっていたのだ。

ベアトリスが困惑の表情を浮かべる。

「さつきからこうなのでしてよ。動きは緩慢ですけど不規則で読みにくくなりましたわ。変人が拘束を解かれたのと何か関係が……？」

「さ、さあ……」

「つて、変人！ 敵とはいえ、いつまでお尻を触っているのですて！」

「あっ!? ご、ごめん！」

ベアトリスに言われ俺が手を離すと、女性は糸が切れたように崩れ落ちる。

「ちよっ!？」

驚いた俺は思わず彼女を支えようとして、再びお尻を握ってしまった。
するとまた彼女はびくんびくんと身体を震わせる。

「……ツ≡……ツ≡」

それは彼女だけではなかった。

「せ、性感回路、強制、起動……ツ……≡」

「教育、フェーズに、ない……っ……快感を、検出……うツ≡」

「さ、作戦行動、不可……ツ……性感、脅威、極大。あッ……≡」

見れば、甲板にいる全ての軍服女性が時を同じくして脚を震えさせているではないか。その言葉の一部は、俺が拘束されている最中に女性から聞いた言葉と同じ。

(まさか、皆で感覚を共有してるのか……!?)

飛躍した発想だとは思っけれど、この世界に俺の常識が通用しなかった例など、いくらもある。

だとすれば、ここは異世界という不思議に賭けてみよう！

「失礼します！」

俺は無抵抗になった女性の豊かな胸を揉みしだく。

「っ……≡……ッ≡」

激しく跳ね上がる女体を確認した後、俺はスカートをめくり股の間にも指を伸ばした。

しっかりと濡れた割れ目に触れて、不思議な性質を持つ彼女も一人の女性であることを理解する。

堂々痴漢行為を働く俺にエフィさんは驚愕の声を、ベアトリスは非難混じりの声をあげた。

「アリスト様!？」

「へ、変人！ 何を!？」

それでも俺は一心不乱に彼女の胸を揉みしだき、いよいよ割れ目へ指を挿入した。

すると女性はひときわ大きく震えた後、下腹部から愛液を吹き出す。

「くくくくツ≡≡≡ツ≡≡≡ツ……ツ……ツ」

そして俺の目論見は的中した。

甲板にいる他の軍服女性達も一斉に身体を跳ねさせたのだ！

「ツ≡お……ツ≡つ≡」

「けいぞく、ふかの……おツ……≡」

「うツ……≡あつ……≡」

彼女らはそれぞれが艶めかしい姿をさらしながら、続々と動きを停止していく。

「えっ!？」

「ちよ、ちよっ、何!？」

「な、なんか吹いちやってるよっ!？」

戸惑う船員さん達へ、ヴァイオレットが号令をかけた。

「と、とにかく拘束だ！今のうちに踏^ふん縛^{じば}って倉庫に放り込んでしまっよう!」

「「「りよ、了解!」」」

船員さん達はそれぞれにロープをかき集め、動かなくなった軍服女性達を拘束していく。

(やっぱり異世界って不思議だ……)

俺はカルチャーショックの余韻と共にほっと胸をなでおろす。

すると状況を理解したエフィさんが俺に飛びつき、笑顔を見せてくれた。

「アリスト様の手腕は敵の女性にも通用してしまうのですね！ 流石です！」

一方でベアトリスは不満そうな表情である。

「流石と言うべきかは疑問が残りますわね。そもそも、何故通用したのかー！」

しかし俺は彼女の言葉を最後まで聞くことはできなかつた。

正面の船に立っていたはずの軍服女性ーネレイダの声が耳元で聞こえたかと思うと、直後に眼前が真っ暗になったからである！

「重大な危険因子と特定。イヴ達の回収を一時保留、最優先で拘束します」

「わぷっ!？」

今度は彼女の胸に顔を埋められてしまったらしい。

呼吸はできるが、ネレイダの腕が俺の後頭部を抱きしめて離さない。

続いて何か硬質なものが手首に当たる感触がした後、両腕の自由が利かなくなってしまった。

(これって手錠じゃないか……!?! まずい、どうにかして逃げないと!)

しかしネレイダの力は他の女性の比ではなく、俺がもがいたくらいではびくともしない。

「アリスト様!? アリスト様っ!!」

「出ましたわねっ、誘拐女！ いますぐ、変人をつ！ イルゼ様を、返しなさいっ!!」

「変態女達の親玉めっ!! アタイのアリストになんてことをっ！ 許さないよっ!」

エフィさんやベアトリス、ヴァイオレットの声が聞こえる。

それにあわせて魔法銃の発砲音や、甲板を蹴るような音もし、おそらく三人がネレイダへ攻撃をしてきているのだと分かった。

しかしネレイダは俺を抱えたまま、彼女達の攻勢をいなしているらしい。

「戦闘能力、護身相当と認識。イヴ達の自立脱出プログラムに支障をきたさないと判断します」
淡々とした口調も、身体のバランスも崩れず、俺を解放することもない。

「ホロウィング展開、対象の輸送を開始します」

(こ、これ、飛んでる……！)

視界は塞がれていても、その浮遊感は確かなものだ。

ただとても空に浮かぶという体験を楽しんでいる余裕など無かった。

「魔法弾を回避しながらの高速移動が予測されます。安全のため、暴れないように」

言うが早いかな、俺は信じられないような速度で宙を舞うことになったからである……！

(ちよ、はや、うおおおおおッ?!?!?)

その恐怖たるや、ジェットコースターの比ではない。

目が回るといふ表現すら生易しいほど、上下左右に連れ回され、俺の意識は薄れていく。

「アリスト様あああつ!!」

「お待ちなさいッ！ 誘拐女あああつ!!」

「アタイのアリストを返せえええつ!!」

「「「アリスト様——!!」」」」

女性達の声を目元に聞いた後、俺はついに意識を手放してしまうのであった。

「う、ん……?」

目を覚ました俺の視界いつぱいに飛び込んできたのは、ネレイダの顔だった。

「無事そうですね」

「っ!」

唐突な対面に驚き、思わず後ろへ飛び退く。

しかし俺は椅子に座らされた状態であつたらしく、そのために身体は大きくバランスを崩し、椅子とともに後方へ倒れ込んでいってしまう。

「うわわあっ!」

倒れ込む俺を救ってくれたのは、意外にもネレイダであつた。

「落ち着いてください」

彼女は躊躇なく手を伸ばし、俺と椅子を押さえてくれたのだ。

「私に貴方を害するつもりはありません。怪我、及び精神に不調はありませんか？」

「ふ、不調……? いや、えっと……大丈夫、だと思えます。多分」

淡々とした口調の彼女に応じつつ、俺は椅子に座り直して辺りを見回す。

(……そうか、あのまま捕まっちゃったんだな)

おそらく、ここは海から浮上してきたあの船の一室なのだと思う。

白っぽい木材で作られた部屋の隅は海水に濡れていて、ほのかに潮の匂いが漂っている。

丸窓の外にある陽の高さを見るに、さほど時間は経過していないようだ。

「ここはミストコープ所有の船内です。貴方がたは正規の手続きを経ずに島へ接岸しようとしたため、不法侵入容疑で拘束されました」

俺はネレイダの言葉に急速に不安を覚え、ほとんど遮るように言う。

「そ、そうだ！ 皆は!？」

「全員を無力化し拘束しました。現状この船の一室に留まってもらっていますが、捕縛や暴行等の肉体的苦痛を与えるようなことはしていません。船舶も無事ですが、船体とマストに劣化が見られたため、現在修復を進めています」

彼女はそう言うと、複数ある丸窓の一つを指差す。

そこからは軍服女性達が海賊船の修復を進めている様子が見えたりと見えた。

「魔法能力や戦闘能力ともに低く、施設を襲うには明らかに準備不足。なんらかの理由で以前に渡した鍵を紛失したと判明したため、今回の件は軽微なガイドライン違反とし、本土への送還処分が妥当であると判断されました」

今一つ状況を呑み込みきれずにいた俺を見かねたのか、彼女はやや砕けた説明に切り替える。

「鍵もないまま島に近づき、大した戦闘能力もないのに抵抗する。我々はそんな貴方達を、思考能力も危険度も低い方々だと判断し、面倒だから帰ってくださいと言っているのです」
「!？」

確かに分かりやすくはなつたけど、この女性いきなり毒舌すぎない!?

「その証拠に船舶も相当に低品質。船の形をした塵芥ごみです」

「ゴミ!？」

ヴァイオレットが聞いたら卒倒するに違いない。

「周辺海域には攻撃的な巨大魚も生息しています。あの船では対応不可と判断し、現在暫定的な改修をしています。費用は後ほど損害賠償とあわせて請求をしますので、そのつもりで」

「な、なるほど……」

辛辣な説明ではあったが、ひとまず経緯については理解できた。

そしてネレイダの言うことはおおよそ信じられるとも感じる。

その理由は彼女が醸し出す雰囲気だ。

(なんか、泥酔した人を家に帰そうとする警察官にそっくり……)

面倒だから帰ってください、という言葉は本心なのだろう。

この分なら他の皆を痛めつけたり縛り上げたりしていない、というのもきつと本当だと思つ。

(とはいえ、彼女達は一体何者なんだ?)

どの女性も年の頃は女子大生くらいだろうか。

軍服風の服の下は非常に短いスカートで、そこから覗く桃尻と黒のガーターベルト、そして二
ーハイタイツに覆われた美脚がとてもまぶしい。

揃って目元が前髪に隠れているけれど、それでもそれぞれが美形であることは伝わってくる。
中でもこのネレイダという女性は際立って美しく、まるでシヨーケースの中に入れられた宝石
のように、無垢で透明な雰囲気を放っていた。

(でも空を飛んで、粒子になったりもして。そして男性貴族クラスの魔法も使っていた……)
どう考えても普通の女性ではない。

その正体を探ろうと無い頭を絞る俺をよそに、ネレイダは事務的に説明を続けた。
「軽微とはいえ過失は過失です。そのため作業終了までの間、貴方がたは保護観察処分としま
す。外出を制限し、食事は口に二回、健康状態に異常があれば申し出てください。何か質問
は？」

イルゼさんを助けに行くという目的の上では困った話だけれど、俺たちへの処遇は妥当だ。
彼女が纏う異様さからすると、かなり常識的、というか良心的な発言にさえ思える。
ただ……だからこそ、俺は声を大にして質問せざるを得なかった。

「あの、どうして俺は両手を縛られているんでしょうか……!？」
そう、俺は椅子にただ座っているだけではない。

目を覚ました時から、両手を後ろで縛り付けられていたのである！

「今回の措置は、貴方が唐突に私達の尻を揉みしだき、女性器部分を指で擦ったり、膣へ指を挿入したりといった行為に及んだことを鑑みたものです」

「すごく妥当な扱いだった！」

「その節は本当にごめんなさいっ！」

皆の無事を考えた結果とはいえ、自らの痴漢行為を棚に上げて話をするなんて……。

俺はなんと図々しい態度をとっていたのかと恥じ入るばかりである。

しかしそんな俺に対しネレイダが放った言葉は予想外のものであった。

「先の行為の内容を咎めているわけではありません。私達『センシユアル・イヴ』は性行為を楽しむために作られた『魔法人形』なので、むしろ歓迎です」

淡々とした口調で語られる言葉に俺は大混乱に陥らざるを得ない。

（歓迎……？ それに、行為を楽しむために作られた魔法人形だって!?!）

目を白黒させる俺の様子をしばし観察したネレイダは、そこで改めて口をひらいた。

「どうやら前提知識が足りていない様子ですね。相当年数の経過により、文化的常識や認知に破壊的な変化があったという推論の確度が増しました」

一呼吸おき、彼女は自身の発言の補足を始める。

……例によって、かなり砕けた表現で。

「私達はセックスし放題の便利おま×こ、つまりお手軽肉便器として作られた人形ーセンシユアル・イヴです。魔法回路によって動作し『メイカー』によって製作、増産されました」

「に、にくべん……ええっ!? つ、つまり、貴女は人間じゃないってこと……?」

「その通りです。船を修復している者達もイヴであり、この島に存在する性娯楽施設『ミストコープ』の警備や庶務作業も担っています」

「……性娯楽、施設?」

「性行為や痴漢、痴女行為、盗撮など、頭を空っぽにしてスケベ行為を楽しむ施設です。貴方には宣伝行為の一環として、以前に広報紙を渡したと記憶していますが」

(広報紙、宣伝行為……? って、つまりあれはチラシだったのか!)

俺が『熱烈歓迎、淫猥天国・ミストコープ!! まもなく施設稼働!!』という文面を思い起こしていると、彼女は俺に近づく。

「貴方を拘束した理由は、その性衝動の強さが異常値を示していると考えられたからです」
そして、ごく当たり前のように手を伸ばすと。

するりと俺のズボンの中に手を入れて、肉棒を撫で回しはじめたのだ……!

「その証拠に、このような状況にあっても貴方の男性器は即座に反応します」

「わっ!? ちょっと! えっ!? な、何で!」

反射的に後ろへ飛び退こうとする俺を、ネレイダはもう片方の手で押さえる。

そしてさも当然といった様子で、彼女は俺の下衣を取り去ってしまった。

「わわっ……!?!」

「暴れないように。衣服は治療後に返却します」

唐突な痴女行為に慌てる俺をよそに、彼女の手はまったく止まらない。

「痛くするつもりはありません」

言いながらもネレイダの手は竿をねっとり扱き、裏筋を爪で優しく引っ搔いてきた。

言葉どおりそれは決して痛くはない。

というか、すごく気持ちいい……。

「あっ、そ、そこは……くっっ」

「温度の上昇を確認。快感を得ていると認識。続けます」

彼女の手は更に動く。

手のひら全体で竿全体をなで上げ、玉袋をねっとり揉みほぐしたかと思えば、今度はそのま

ま手を奥へ滑らせアナルの入口をさわさわと刺激することさえし始めた。

「痛みがあれば申告してください」

(顔、近いっ！)

ふわりと香る女性特有の香り、絹のような肌触りの手のひら。

どちらもとても人工的に作られたものとは思えない。

一方でその手淫は『性的なことを楽しむために作られた人形』という言葉信じたくなくなるほど凄まじく巧みだ。腰を動かそうが身体を跳ねさせようが、常に的確な愛撫が続くのだ。その精密さからは人間離れたものを感じざるを得ない。

「くっ、はあ、うっ」

「周囲に人はいません。声を堪^{こた}える必要は無いと言っておきます」

彼女の巧みな愛撫に、肉棒はあっという間に天をつくような状態になってしまった。

「私達の尻や胸へ興味を持ち、少し触られただけで勃起する。これは貴方がずいぶんと性欲を溜め込んでしまっていることを示しています。日常生活に支障が出ているのでは？」

ほとんど確信めいた声色で問われたが、俺は首を横に振る。

ただ今までの異世界生活を振り返ると、はつきりと断言ができない部分もあるわけで……。

「支障は、出ていない……と思います」

俺の発言は歯切れが悪く、対するネレイダの切れ味は鋭かった。

「虚偽申告と判断。蓄積した性欲が害を為す可能性があるとし、『治療』へ移行します」

「あっ!! ちょ、わあっ!？」

言うが早いか、彼女は俺に背を向けて中腰になると、今度はその短すぎるスカートを躊躇なくたくし上げた。

（お尻すっご……!）

現れたのは、美尻という表現が生易しく感じてしまうような果実。

瑞々しい柔肉は黒のガーターベルトを押し返そうとするほどの張りがあり、汚れを知らない真っ白な肌は男を誘ってやまない。

更に黒のＴバックは局部に食い込み、左右から秘部の肉がはみ出すおまけ付きだ。

視覚情報だけで先走りを漏らす俺に、ネレイダは淡々と言う。

「私の臀部で更に発情してしまうとは重症です。現在の貴方は、一般女性を目の前にした場合、ほぼ間違いなく場所も弁えず、異常行動に出ると言えるでしょう」

「さ、流石にそんなー」

「膣分泌液の準備完了。セックス経験のデータ検索、該当無し。疑似実践データを参照します」

「ぶ、分泌？ データ？ えっ、何の話を……？」

唐突に始まった機械的なアナウンスの中には、耳馴染みのない言葉がいくつも出てくる。

それを確認する間もなく、ネレイダは局部に食い込んでいたＴバックを横にずらした。

「円滑な治療のため、性感回路を遮断。性器を露出します」

彼女はそのまま脚を開き、椅子に座った俺に美尻を見せながら淫らに跨る。

そして自ら女性器の入口を指で広げながら腰を落とす――

「背面座位姿勢での膣中搾精治療へ移行します」

――俺の肉棒を女性器に挿入してしまったのである！

「んっ、ふう。挿入続行に問題、無し」

「あっ、あっ、ちよ、待って!？」

ぬちゅ、ずぶっ……といやらしい音を立てながら、無毛の割れ目は肉棒を呑み込む。

彼女が口にした通り、そこは溢れるほどの愛液で満たされていた。

「挿入滞りなく進行……男性器の硬度に変化無し、いえ若干硬度上昇。驚きです」

「いや、驚いてるのはこっちっていうか、あっ、くうっ!」

あまりにも事務的な挿入だったけれど、彼女の膣中はちつとも冷淡ではない。

(わ、膣中^{なか}が凄く熱くて、ざわざわしてるっ!)

やがてペニスが行き止まりに突き当たると、他の部分より少し硬い感触が鈴口を刺激する。

その感触は完全に女性の子宮口であり、作り物だとは到底思えない。

「挿入完了。苦痛はありませんか？」

「う、うん、大丈夫……っ。はあ……!」

下半身を襲う快感も本物としか言いようがない。

彼女は自身を道具と言ったが、オナホールなどの性玩具とは比べるべくもない。

俺が感じているのは美しい女性の膣中がもたらす、男を虜にする快感そのものだ。

「く……はあっ、はあっ……」

肩で息をして、膨れ上がった射精欲を抑える。

しかしネレイダはそれを許さないとばかりに美尻を上下に振り始めた。

「んっ！ ふっ！ んっ！ 今、射精を我慢しましたね？」

「えっ!? あ、うっ、そんな、ことは……っ！」

「私は性行為に最適化された魔法人形です。初めての行為とはいえ、誤魔化しは通用しません」
彼女はそう言うとい旦ピストンをやめる。

そしてすらりとした上品な脚を開き、下品極まりないガニ股となった。

俺に向けて結合部がさらけだされるが、それを恥じらうこともない。

「貴方は今、女性に対し極度に興奮しやすい状態にあると言えます。最低でも私達イヴに発情しない程度には、精液を射出し、睾丸を空にするべきです」

ネレイダは自らの両膝に手を置くと、俺のほうをちらりと振り返る。

「イヴの姿勢変更を注視しただけで男性器の硬度上昇。これは重症です」

「いや重症って言われても……」

美しい女性が下品に開脚するのを見て、興奮するなというほうが無理な話だよ！

と思う俺をよそに、彼女は再びピストンを開始した。

「方針を変更。貴方は危険です。よってここで繰り返し射精をし、女性に対し発情することがなくなるようにします。んっ、ふっ、ふっ！」

「そ、そんなっ!? う、うあっ！ ああっ！」

恐ろしいことを言いながら腰を振るネレイダ。

抵抗するべきだと分かっているのに、肉棒を膣壁で激しく扱かれた俺は脚に力が入らない。

(駄目だ、気持ち良すぎて立てないっ!!)

彼女の腰づかいは絶妙で、与えられる大きな快樂で肉棒はどんどんたかぶ昂ってしまふ。
しかも射精を誘うのはピストンによる気持ちよさだけではない。

ネレイダが激しく上下させる美尻が見せる絶景もだ。

(お尻のお肉が波打って、やらしすぎるよ……!)

絶品の光景が視界を支配し、それによつて煽られた興奮が肉棒に伝わっていく。
昂った俺の射精欲をネレイダは見逃さない。

「んっ！ ふっ！ どうぞ。我慢せず、思い切り射精してください。んっ！」

彼女はそう言うのと、今度はピストンをやめて美尻を押しつけてきた。

そしてそのまま円を描くように腰を動かし、子宮口で亀頭をぐりぐりと刺激する。

「くっ、うあああっ!!」

「睾丸の収縮を確認。射精、いつでも構いません」

両手を縛られた俺に抗う術はない……!!

(膣中、なかすぐく締まってきて、ああ、で射精る、イク……っ!)

ービュルルッ!! ビュクッ!! ビュルルッ!!

あえなく俺は白濁液を放つ。

いや、この場合は強引に搾られたというほうが正しいかもしれない。

(でも、又ル又ルの膣中で搾られるの、すごく気持ちいい……っ！)

美しい女性が尻肉を見せつけながらしてくれるというなら、尚更だ。

気づけば俺はその喜びと射精の快楽に浮かされ、自ら腰を突き出していた。

「ああ、気持ちいい……！」

「っ！」

その動きがあまりに欲望任せだったからか、ネレイダの尻が一度跳ねる。

しかし俺の行為を歓迎するように、彼女は美尻を更に擦り付けてきた。

「良い兆候です。私は道具ですから、加減を考える必要はありません」

扇情的な言葉としつこく押し付けられる尻肉。

その両方が俺の射精を延ばし、だらしないものにしていく。

「くっ、ああ……っ……！」

だがネレイダはゆるゆるとした吐精は許してくれなかった。

精の勢いが弱まったと察するや否や、すぐに上下のピストンを再開したのだ。

「男性器の硬度、維持を確認。行為を続行します。ふっ、ふっ、んっ！」

「あっ!? うっ! そ、そんなの、やられたら……またッ……！」

「貴方が続けざまに射精だせるということは聞き込みで判明しています。今日、ここで女性に対する欲望を出しきるべきです」

「うあああっ！ は、速くしないで、くはあっ！」

「睾丸の収縮を確認。射精間近と判断します。んっ！」

俺の顔をちらりと見たネレイダは、ひととき強く俺に尻を打ち付けた。

ぱあんっという大きな音と共に膣中が締まり、彼女の子宮口が鈴口へ吸い付く。

「ああ、また、イク……ッ……！」

亀頭全体を舐めしゃぶられたような感覚と共に、俺は二度目の射精へと至ってしまう。

ーードビュルッ!! ビュルルッ!! ビュクッ!!

「っ!! 射精、確認……。二度目とは思えない勢いです」

ぐりぐりと動くネレイダの腰。

乳房のように歪む尻肉とそれによる快感に煽られ、続けざまに三度目の山がきてしまった。

「それ、やば……ッ……ああっ!!」

ービュルルッ!! ビュクビュクッ!! ビュルルッ!!

前の射精が終わらないうちに、再び射精が始まる。

射精の気持ちよさもペニスの敏感さも、どんどん増すばかりだ。

それでもネレイダの尻肉に浮かぶ妖艶な波が収まることはない。

「ふっ、くっ、ふうっ！ どうぞ。衝動に逆らっては、いけません。これは治療、です」
「……ッ！ うっ……ッ！ ああッ！」

絶頂の気持ちよさが断続的に続く中、俺にもまた波がやってくる。

(このままじゃ本当に枯れちゃう!!)

焦燥感はあるけれど、続けざまの射精で力を抜かれた身体は全く言うことを聞かない。
そして射精を堪えることもできなかった。

「また、出るうっ!!」

ービュクツ!! ビュルツ!! ビュルルツ!!

視界が白く飛びはじめ、いよいよ意識が遠のいていく。

このまま彼女に生命も搾り取られ、俺は死んでしまうのかもしれない。

そんな悲劇的な考えが浮かんだ時、一人の女性の顔が浮かぶ。

優しくて時々いたずらっ子で、品があるのに可愛らしい……そんな女性の顔だ。

(そうだ、俺はイルゼさんを助けに来たんじゃないか……!)

こんな形で命を手放している場合ではない。

俺は遠のいた意識を掴み、無理やりに引き戻す。

「はあっ……! はあっ……!」

霞かすんでいた視界は色を取り戻し、曖昧になった身体の間覚も戻ってきた。

そしてそうなったことで、俺は一つの異変に気がついた。

「あ、あれ？」

ネレイダが俺に魅力的なお尻を擦り付けたまま、完全に動きを停止していたのだ。

「射精、確認……っ……回路、遮断……に、異常……」

いや正確にはびくびくと震え、断片的に言葉を零している。

俺はその様子に強い既視感を覚えた。

それは船の上で、俺が軍服女性のお尻やおっぱいを揉みしだいた時のことである。

(もしかしてネレイダ、感じてる?)

だとすればこれはチャンスかもしれない。

ネレイダは自分達は『センシユアル・イヴ』だと言っていた。

つまり船の上で戦った女性達とネレイダは同じであるということだ。

(ということは、このまま俺が頑張ったら……)

彼女を停止に追い込むことができる可能性がある。

そして希望はもう一つあった。

(縄が緩んでる!)

ネレイダの責めに呻いて激しく身体を動かしたからだろうか。

両手を拘束していた縄が緩み、少し頑張れば自由になれそうな状態になっていたのだ。

元々害をなす気はないと言っていたし、痛くないよう優しめに縛ってくれていたのかもしれない。

「なら……っ！」

その優しさを利用するようで申し訳ないけれど、俺がやることは一つ。男の矜持とイルゼさんへの想いをかけ、思いつき腰を振るだけだ！

「今度はこっちからいくよ、ネレイダ！」

精液塗れまみになったネレイダの膣へ、肉棒を容赦なく叩きつける。すると彼女は美しい尻肉と共に全身を震わせはじめた。

「っ!? 回路、異常、発生中……っ……行為の停止を、要求します……！」
表情は見えないが、彼女の声には焦りが滲む。

さっきまでの様子とのギャップに射精衝動が刺激されるが、それに流されるわけにはいかな

い。
「け、警告、です。今すぐ、行為を、おッ……停止しない、場合、んっ」
もちろん、彼女の警告にも大人しく従ってなどいられない。

俺は奥歯を噛み締め、白濁液と愛液がないまぜになった膣奥へピストンを繰り返す。

「やめないよッ！ ふんっ！ ふんっ！」

「おッ！ 遮断閾値いきち、限界値につ、達し……ッ……」

ネレイダの声色は更に変化し、切羽詰まったものになった。

俺はそれを聞いてこの行為が彼女に対し有効だと確信するとともに、強い快樂に苛まれる。

(わっ!? ネレイダの膣中^{なか}、今度はうねり始めてる!? 気持ち、良すぎ……っ！)

ペニスを追い詰める凹凸が厳しくなるだけでなく、膣道全体が動くのだ。

ヌルヌルの蜜壺でそんなことをされれば射精欲が高まらないわけがない。

「はあっ！ はあっ！ ああっ！」

気づけば格好の悪い声を抑えられなくなる。

ただそれでもピストンはやめない。

この状況を打破するには、彼女をどうやっても気持ち良くさせるしかないのだ。

「警告、します、うっ！ こ、これ以上の横暴は、深刻な、あッ。ガイドライン違反と……おお

ッ

ネレイダのガニ股が細かく震え始め、不規則に膣^{せんどう}が蠕動しはじめた。

俺を責め立てていた時には見られなかった兆候だ。

それに気づき、俺は更にピストンを速める。

「くっ！ ふっ！ はあっ！ はあっ！」

そしてネレイダの声色が、ついにはつきりとした色気を帯びた。

「あ、はあっ、しゃだん、いきち……大幅に、超過……ッ、回路強制、接続……ッ」

「はあっ！ はあっ！ イってっ！ ネレイダ、イッて！」

「い、違反行為を、やめてくだ、さい……ッ、あ、アクメへ到達し、正常動作、不可能に……」
次第に海老反りになっていくネレイダ。

美しい身体の震えもだんだんと大きくなり、腰もうねり始めた。

「耐久、不可能……ッ、あっ、アクメ、キまず、くるッ、アクメく、るッ……！」

切迫した声をあげ、豊かな尻肉を大きく震わせるネレイダ。

イルゼさんを救うため、そして彼女の絶頂を目にするため。

俺は大きく腰を引いた後、その子宮口をペニスで貫いた。

「ネレイダッ！ イけっ!!」

ぱあんつと彼女の尻が音をあげると同時に、ついにネレイダの嬌声があがった。

「んおおおッ ≡ ≡ ≡ イグウウウウウッ ≡ ≡ ≡」

下品で艶かしく、それでいて美しい声をあげるネレイダ。

美術品だった彼女は消え、血の通った、そして欲望に溺れる美女が現れたのだ。

「そ、想定を超え……て、反芻……ウッ ≡ つ、次の、アクメくるッ ≡ イグッ ≡ ≡ ≡」

俺が動いていないのに、彼女は再び身体を激しく海老反りにする。

すると、今まで俺の側からは見えなかった表情が確認できるようになった。

(目が……！)

切りそろえられた前髪の間から、歓喜の涙を流す深い蒼色の瞳。

少し前の様子からは想像もつかないほどの淫らな表情。

あられもなく舌を出して悦楽に浸るその様子は、俺の我慢を吹き飛ばすのに十分すぎた。

「くあ、ネレイダ、俺も……ッ!!」

「ぺ、ペニス、膨張……っ……て、停止を、要求します！ あ、アクメの最中の射精は……ッ」

「出るッ!!」

ーードビュルルッ!! ビュルッ!! ビュルルルッ!!

「あッ≡ほおッ≡≡≡アクメ、イグウウウッ≡≡≡」

ネレイダが絶叫し、無毛の割れ目から愛液が吹き出した。

部屋にあった海の匂いは消え去り、彼女が散らす淫らな潮の香りが充満していく。

「しゃ、せい、アクメ……ッ≡想定、以上……の快感を検知……あっ……はあっ≡」

そして、消え去ったのは海の匂いだけではなかった。

ネレイダの淡白さも、すっかりとどこかへ行ってしまったみたいで……。

「はあっ……≡個体名アリストのペニス、んっ≡まだ、硬さが残っています」

「えっ?」

彼女は自ら上着を脱ぎ去りながら、ねちっこく俺にお尻を擦り付けてくる。

「イヴの利用を推奨、します……んっ≡」



露わになった形の良い乳房が揺れ、結合部からは、にゅちゅ、ずちゅつといやらしい音が響く。

その誘惑に俺はぐくりと生唾を吞んでしまう。

「……っ……」

「ペニスの脈動、硬度上昇を検知。これは治療です、衝動を我慢するべきではありません……
」

口元をわずかに歪め、前髪の間から情欲に濡れた瞳を瞬かせるネレイダ。
そこにいるのは、ただただセックスを求めてくれる美しい女性だ。

我慢なんて到底できるはずもなかった。

「ネレイダっ、ああ、気持ちいいっ！」

「あッ≡おッ≡か、回路がやき、切れ……ッ≡おッ≡ペニス、らめっ≡」
そこからはもう性欲に塗れるだけの時間だった。

腰をぶつけ合い、互いの一番気持ち良いところを擦りあい、粘液を撒き散らす。

「ペ、ペニスっ≡硬度っ≡上昇、していますっ≡しやせい、するの、ですねっ≡あっ≡」

「はあっ、はあっ、出るっ！ ネレイダの膣なか中にまた、出すよッ！」

「し、子宮口、圧迫……ッ≡受け止めますっ≡あ、アクメの、許可を……ッ≡」

「くっ！ いいよっ！ また、ネレイダがイクとこ、見たい……っ！」

ービュルルルツ!! ビュクツ!! ドビュルルルツ!!

「んほおおおおツ≡≡≡」

まともな思考を捨て、快楽を貪りあうセックス。

ネレイダが性行為を目的に作られた人形だというなら、この時の俺は腰を振るために生まれてきたお猿さんだった。

だからこそ、ネレイダが動かなくなり俺の両手が自由になった時。

部屋に駆けつけてくれた女性三人の顔がー

「アリスト様! ご無事ですか?! 魔法人形さん達が皆おかしく……わ、す、すごい……!」

「ちょ!? なんて匂いさせてますの!? 一体、どれだけシたらこんな有り様になるのです! 貴方、本当に……本当に変人ですわねっ!」

「おわあ!? こ、こいつはネレイダかい? なんか痙攣してるけど、生きてる、よな?」

「んツ……≡おツ……≡あツ……≡」

ー揃って引き攣っていたのも仕方がなかったと思う……。

第四章 レースの鍵は領主のおっぱい!?

一夜明け、翌日の早朝。

いよいよネビュラ島に降り立った俺やエフィさん、ベアトリスは、ネレイダの案内で鬱蒼つじそうとした森に足を踏み入れていた。

「マスター、ここからは足元が悪くなります。滑らないようご注意ください」

「あ、えっと、ありがとう」

差し出された手に掴まると、ネレイダは僅わずかに微笑む。

「マスターの安全が最優先事項なのは当然です。しかしそれでも報いをしてくださるとい場合は、右の乳房をぎゅっと握っていただけ、特に乳首を重点的にねぶっていただければー」

「ええっ!? いや、ちよ、ネレイダ、近い……!」

穏やかな表情でとんでもないことを言い出すネレイダに慌てていると、鋭い声が飛ぶ。

「ちよっと!」

声の主は苛立ちを隠さないベアトリスである。

彼女は足元の枝をばきりと踏みつけながらネレイダに抗議した。

「なあにが『マスター』ですよ！ 貴女、昨日までと態度が変わりすぎではなくってっ!?」
ベアトリスほど怒り心頭という様子ではないけれど、ヴァイオレットが同調する。

「アリストに突っ込まれりゃ考えも変わるってのはわかるさ。でもアタイ達を追い返そうとしたかと思えば、今度はイルゼって子のいるところ……ええと『ミストコープ』だかへ案内するってのは流石に変わりすぎじゃないかい？」

エフィさんも、ネレイダに対しやや怪訝けげんそうに視線を向けて言う。

「アリスト様を信奉する方を疑うようなことはいたしません。ですが、イルゼ様の状況はもう少しお聞かせいただきたいです。昨日はその、イヴの皆さんとはあまりお話できなかったので」
彼女が言うのと、ベアトリスの視線が俺に突き刺さる。

「変人、いえ変態のせいで、が抜けていましたよ！」

「アタイ達を監視してた子達が倒れ始めた時は驚いたけど、親玉とあんなに激しく交わってたらさもありなんってやつさ。アリストは本当にアタイ達の予想を超えてくるね。ま、そこにアタイもやられちまったんだけど♪」

「だけど♪じゃありませんわ！ 変態、なにをにへらとしているのです。少しは反省なさい！」
「どっ、ごめんなさい！」

実際、昨日はイヴの皆さんとはほとんどコミュニケーションは取れず、唯一話せたのは絶頂から醒めたネレイダだけ。

そのネレイダも俺達を上等な船室に案内した後、崩れ落ちるように眠ってしまったのだ。

「で、朝になったら急いで出発だなんて。その痴女、ちゃんと説明をしていただけまし？
そもそも空を飛べるならわたし達も運べるでしょうに、どうして徒歩ですか？」

そんな事情であるため、ベアトリスの発言はもっともだ。

「マスターを緊急で運んだ際に魔法回路が損傷し、現在飛行機能、並びに粒子化による転移を利用することはできません。修復方法が無いわけではありませんが、今後の行動を想定すると現状徒歩移動が最適と判断しました」

敵対している相手に対し、ここまで率直に状況を伝えることはないだろう。

空を飛べない理由を淡々と述べる彼女に俺はほっとする。

だからこそ今、俺は彼女に対しずっと聞きたかったことを問いかけることにした。

「ネレイダ。そもそもどうしてイルゼさんはあんなったのか、どうしてミストコープというところにいるのか。そこから教えてもらってもいい？」

「承知しました、マスター。私の記憶領域にある限りでお話します」

ネレイダは頷き、歩を少し緩めて語り始めた。

「個体名イルゼは現在『セラーファ』という立場にあります」

「あの晩もそのようなことを言っていましたわね。その『セラーファ』というのは何でした?」「私達、つまり魔法人形センシユアル・イヴのまとめ役です。同時にミストコープそのものの管理者を代行する権限を持ち、現状のイルゼはそれを運用できる状態にあります」

ベアトリスはその言葉に顔色を変える。

無論、俺やエフィさんもだ。

「イルゼさんが魔法人形のまとめ役……!?!」

「イルゼ様は素晴らしく美しいですけど、ごく一般的な女性ですわよ……!?!」

「ど、どういふことでしょうか? ネレイダ様」

ネレイダは俺達の反応に、なるほど、とつぶやくと説明を再開した。

「ミストコープ、そしてセンシユアル・イヴは『メイカー』と呼ばれる一人の女性が製作しました。彼女は天才でしたが、作ったものの運用や経理は非常に不得手としており、それらを代行できる存在を必要としていました。そのために開発されたのが……」

そう言つて彼女は片方の手のひらを広げる。

するとそこにホログラムのように映像が浮かび上がり、イルゼさんの変化を目の当たりにしていた三人は揃つて目を見開いた。

浮かび上がったのは、あの晩イルゼさんを変身させたと思われるネックレスであつたからだ。

「「「そ、それは……!」「」」」

「これは『ミストレスリング』という魔法道具で、装着者へセラーファの権限、力を付与します」

「アタイには普通のネックレスにしか見えないけどねえ」

ヴァイオレットが言うと、ネレイダが軽く頷く。

「物自体は特殊ではなく、内包された魔法が特殊なのです。実際に装着された場合は仮面のような形態に変化し、装着者の魔法能力を強化、同時に情報処理能力を高めます」

確かにあの晩、ネックレスは変化し半分の仮面になった。

つまりベアトリスが持ち込んだものはまさにその『ミストレスリング』であったのだ。

「情報処理能力を高める……？ ええと、それは計算とかが速くなる、とか？」

「マスター、それも一つの効果です。ただそれよりも重要なのは、いくつかの思考を並列でできるようにするということです。それにより、施設運用に関わる庶務を円滑にこなす人材として活動してもらおうのです」

「いくつかの思考を並列……!? そんな道具が存在するなんて、アタイは聞いたことも……」

肩を竦める美人船長だが、彼女はネレイダをちらりと見て、はあとため息をつく。

「まあアンタみたいなのがいる以上、今更だね。世界は広がったってわけだ」

「私達イヴやミストコープ、そしてミストレスリングも相当な年数休眠状態にあったようです。そのため各所に劣化、それに伴う不具合が出ています。仮面が一部半透明な状態で形成されたの

も、おそらくその影響によるものでしょう」

「劣化ですって……！ それなら、イルゼ様は無事なんですか!?!」

飛びかかるように言うベアトリスに、ネレイダは表情を変えずに頷く。

「無事です。ただし本来リングの支援を受けて処理すべき情報を、その支援無しで受け取ってしまっている状態です。頭が情報でいっぱいになり、ほとんど他のことを考えられない状態と言え
ば伝わるでしょうか」

「ネレイダ様。イルゼ様はとても賢いお方ですが、それでも駄目ということでしょうか？」

「そもそも人間一人の頭ではどうやっても足りないのです。私達イヴはそれなりにいますから」

ネレイダを始めとするイヴ達は、感覚だけでなく思考もある程度共有しているという。

加えて未だに休眠状態にあるイヴを含めると、合計二十人近くが待機中だそうだ。

「彼女の人格や意識が一時的に休眠させられているのはそのためです。本人の思考活動を最低限に制限することで、イルゼの頭を保護しているのです」

「イルゼさんの話し方が変わったのも、その所為ってこと……?」

「流石のご慧眼けいがんです、マスター。セラーフアがイルゼの生命活動を維持しつつ、最低限の応対を代行しているので、皆さんの知るイルゼとは違う振る舞いとなるのです」

並列思考、人格の休眠、そしてそれらを可能にするネックレス……。

いくら魔法がある世界だとはいえ、そう簡単に信じられない話の連続だ。

しかし当然のように話をし、空も飛び、エッチまでできるネレイダという存在がいるわけで。

「マスター、ご理解いただけましたでしょうか？」

俺は美しく圧倒的な説得力を前に、ひとまずは彼女の言うことを信じてみようと思った。

「うん、理屈はわかったよ。ありがとう」

「ではご理解いただくに足る説明ができた私を労う意味を込め、臀部をひとしきり弄もよほっていただ
くことはできますか？」

「えッ!？」

「胸のほうでも構いません」

いや、やっぱり信じちゃ駄目かもしれない！

「今はそういう話をしている場合じゃありませんでしてよっ！ 本当に下品な人形ですわ
ね！」

「イヴとして当然の在り方です。むしろイヴでもないのに品が無いのは貴女です。無駄に大きな
デカ乳をぶるんぶるんと弾ませて、大変目障りです」

「目障りですって!？ あっ!？ ちょ、触らないでくださいましっ!」

「はははは！ アタイ、アンタとは仲良くなれそうだよ」

「恐縮です。ヴァイオレットは胸の形が非常に良いですね。上向きで張りもあり、非常に美しい
と判断します」

「お、そうかい？　綺麗な乳の女に褒められると嬉しいねえ」

何故か距離が近くなるヴァイオレットとネレイダ。

そこへエフィさんも加わった。

「ネレイダ様。私も一つ気になるのですが、よろしいでしょうか？　その『マスター』というのはどういう意味ですか？」

「『我が主』という意味として記憶領域に保存されていた単語です。私達センシユアル・イヴはマスターとマスターのペニスに忠誠を誓ったため、そのように呼びびしています」

「そうなんですね！　魔法人形さんまで虜になさってしまうなんて、アリスト様は流石です！」
エフィさんの純真な瞳が輝いているけれど、俺としては苦笑せざるを得ない。

そんな俺に対し、ネレイダは少し間を置いてから口を開いた。

「……私を含め、船に待機しているイヴ達は不良品と判断された魔法人形です」

彼女は森の隙間から見える浜と、そこへ停泊している二隻の船へ視線を向ける。

そこでは船の整備を進めるため、ネレイダ以外のイヴの皆さんと、ヴァイオレットを除く船員の皆さんが残って作業をしてくれているはずだ。

「その証拠に私達はメイカーによって休眠状態へと移行させられた形跡がありました。そして何らかの理由により施設も停止しており、最低でも千年以上は経過したと推測されます」

「「「せ、千年!」「」」」

驚愕の発言を受け、俺達の声が森に木霊する。こだま

ただネレイダ自身はその事実になんほどの感慨は無いようで、やはり淡々と続けた。

「施設と植生、私達の身体の劣化状態からの概算です」

そう言うのと彼女は視線を森の中へ戻し、少し遅くなった歩みを改めた。

「当然メイカーの存命はありえないでしょう。結果私達は一度の稼働も経験することなく、つい数日前まで休眠を続けていたのです」

心無しか暗い声色に俺達は黙って続きを聞く。

しかし、すぐに吹き出してしまふことになった。

「つまり私達はガチガチち×ぽの味を知らないまま、千年以上放置された残念ま×こだったというわけです」

「「「ぶっ!!」「」」」

彼女が表情も変えずに淫語を話すのだから仕方がない……。

「急に品のない単語を並べないでくださる!? まったく、真面目に聞いて損をしましたわ!!」

「皆様の顔色に陰りが見えたため説明が分かりにくかったと判断し、より直接的な表現に変更しただけです。それでも、遠慮なくデカ乳を揺さぶる女よりは品がある振る舞いだったと考えます」

「……分かりましたわ。これは喧嘩ということですねっ!! そうですねっ!!」

むきーつと飛びかかるベアトリスをひよいと避け、ネレイダは更に続ける。

「メイカーは変人ですが理知的な人物でした。そのため私達は『性的魅力に欠け、十全に役割を全うできない』と彼女に判断されたのだと納得していたのです」

結果、そんなネレイダに興奮した俺を彼女は『性衝動の強さが異常値を示している』と評し、放っておけば性犯罪に走ると判断した。

そしてそれがあの『治療』へと繋がったのだ。

「しかしマスターは治療に際して『気持ちいい』『素敵』『ネレイダ愛してる』『明日もち×ぼしてあげるね』などとおっしゃり、売れ残りま×こをたっぷりと楽しんでくださいました」

「そ、そこまでは言っていないと思うんだけど……？」

ネレイダは首をひねる俺をあっさり無視し、話を進める。

「結果、私達は一つの結論を出しました。世の中にはマスターのような男性がいたにも関わらず、メイカーはその可能性を除外し、私達の価値を不当に低く見積もるといふ過失を犯したと」
彼女の声に熱が籠もっていく。

そしてぐつと握りこぶしをつくり、ネレイダは言った。

「だからこそ、私達はメイカーの思想と決別する道を歩むことにしました。そして以降マスターアリストの指揮下へ入り、その目となり手となり性処理穴となって仕えることを決めたのです」
俺……この女性達に仕えられて大丈夫なのかなあ。

一抹の不安を覚える俺をよそに、エフィさんとヴァイオレットは何故か涙ぐんでいた。

「ぐすっ、アンタ達も苦勞したんだな。よし、アタイ達と一緒にアリストをもり立てていこう！」

「有り難い言葉です。魔法人形に情を持ってくれる女性との出会いは、私達にとって幸福と表現する以外にありません」

「ネレイダ様。アリスト様は素晴らしい御方です。同志として共に歩んでくだされば嬉しいです」

「エフィ、そのような敬称は必要ありません。ところで船の上で披露していた柔術は見事でした。コツを教えていただいても？」

「お力になれるなら喜んでお伝えいたします！ 改めてよろしく申し上げます、ネレイダさん」
急激に距離が縮まっていく三人。

もちろん仲が良いのは良いことだけれど、どこか置いていかれている感が拭えない。ただそう感じたのは俺だけではなかったらしい。

幸いにも、俺の服の裾を引っ張る女性がいたのだ。

「変人。説明のあちこちに品のない単語が入ってくるせいで、わたしはあの子に今ひとつ共感しかねていますが、これって薄情だと罵られたりしませんわよね……？」

「……うん。大丈夫だと思う」

「そ、そうですわよね」

ベアトリスと頷き合う一方、俺の頭の中には大きな疑問が湧いていた。

それはネレイダ達が製造された背景である。

(聞く限り……彼女達は間違いなく男性向けに製造されている。けれど、この世界じゃあ男性は女性に対して性的行為をすることなんて有り得ないはずだ)

そしてそれをしたメイカーという女性は誰なのか。

真つ先に思い浮かぶのは度々語られる賢者という存在だ。

神話の時代にいたとされる人物で、非常に高度な技術を持っていたという話は枚挙にいとまがない。

(ネレイダが千年以上は休眠していたという話が本当なら、賢者が実在していた頃に作られたつてことも考えられなくもない、か?)

本物の女性とほぼ変わらない魔法人形を作るような人だ。

島への上陸を阻む霧を発生させる装置がお手の物だったとしても不思議じゃない。

男性だというのも言い伝えだし、本当は女性だった……という線もありうる。

(だとしても、男性が楽しむための女性型の人形だなんて。この異世界じゃ商売にならないよな)

ネレイダは『主に男性向け』とはつきり言っていた。

男性が女性を毛嫌いする世界で、一体これはどういうことなのか。

ただ、その答えをすぐに知ることは難しそうであった。

「現状、私達の記憶領域は大きく破損しており、製造背景を含めた知識を引き出すことはできません。マスター、申し訳ございません」

「あ、えっ？ いや、そんな謝らなくていいよ！ っていうか、どうして……？」

「マスターは考えていることが非常に顔に出やすいです。大変好ましい性質で、イヴの即時利用を推奨したくなります」

「え、ちよっ!? 見えてる！ 見えてるから!!」

ミニスカートを持ち上げる彼女に顔が熱くなる。

もちろん嬉しい申し出だけど、今はそんな場合ではない。

「ま、まずは！ イルゼさんを取り戻すことを優先してほしいなと！」

「マスターの仰せのままに」

ネレイダは素直に頷き、改めて歩みを進める。

しばしその背についていくと、森の中にこつ然と拓けた場所が現れた。

「到着しました」

そこにあっただのは、大量の蔦で覆われた地上二十メートルほどの円柱。

その円柱は切り立った絶壁と一体化するように建造されていて、絶壁の上には空を覆い隠さんばかりの巨木が枝を茂らせている。

そして巨木の幹からはいくつもの小さな滝が流れ落ち、円柱の周囲に浅い湖を形成していた。

「ここがミストコープ……とかつて呼ばれていた場所です」

周辺の木々から聞こえる鳥の声、巨木に生い茂った葉のざわめき。

巨木を通って落ちる滝が鳴らす水の音。

多様な音が彩っているはずなのに、そこはとても閑しずかで。

「「……」」

時の流れから隔絶された光景を前に、俺達はひととき言葉を失うのだった。

その後もネレイダに案内され、俺達はいよいよミストコープに足を踏み入っていた。

いや、足を踏み入れるという表現は少し語弊があるかもしれない。

「まるで湖の上……ですわね。ネレイダ、この施設はこういうものでして？」

建物内はほとんど水没しており、俺達は小舟に乗って移動していたからである。

「いいえ。経年劣化により、各所から浸水した結果です。この現状を見るに、ここは『ミストコープ遺跡』と呼称するほうが良いでしょう」

聞けばかつてのミストコープ内には遊覧用の水路があつたそうだ。当然そこに行く船も多く用意されていたらしいけれど、ネレイダによるとそのほとんどが使えなくなっているとのこと。

そのため俺達は、ネレイダが探し出した二つの小舟に分かれることになった。

「変態と一緒に小舟で移動することになるとは思いませんでしたわ」

「役立たずでごめん……魔法使えないからさ」

「あつ!? い、いえ、そういう風に謝ってほしいわけではなくってよ! ただ、変態が後ろにいると落ち着かないというだけですわ!」

小舟の一つは俺とベアトリス。

そしてもう一つにはネレイダとエフィさん、そしてヴァイオレットが乗っている。

「申し訳ないね、エフィ。アタイみたいな海賊女と一緒になんてむさくるしいだろう?」

「いいえ。ヴァイオレット様は操船もお上手ですし、十分すぎるほど素敵な容姿をしていらっしやいます。そのように謙遜なさらないでくださいませ」

「ふふふ♪まったく本当に良い子で困っちゃうね。メイドじゃなかったら、今すぐうちの船員にしてたところだよ」

この分かれ方になったのは、この小舟が魔力を注ぐことで動くからというのが理由の一つだ。

ネレイダは一部の故障により上手く魔力を注げないらしく、魔法が操れるベアトリスとヴァイオレットがそれぞれの船に魔力を送って動かしてくれているのだ。

そしてもう一つの理由はネレイダによる俺達の重さの判定であった。

「ベアトリスはデカ乳をぶら下げている分重みがあります。この組分けは妥当かと」

「ふ、ふふ……っ。乳も器も小さく軽いなんて、まったく哀れな女ですこと。おーほっほっほー！」

高笑いするベアトリスだが、その笑顔は引き攣っている。

ネレイダの毒舌はまだまだ有効らしい。

俺は二人のやり取りに笑いを堪えつつ、今一度周囲を見渡してみることにした。

(一階層分、まるまる水没してるって感じ、かな)

褪せた白色の壁や柱で構成された空間は、大型のショッピングモールを思わせるような構造だ。

本来の高さは三階、あるいは四階建てくらいだろうか。

中央は吹き抜けで、左右には各種テナント施設が入るスペースを思わせる場所もある。

左右のエリアを繋ぐ通路もあったようだが、今は水面の下に残骸が沈んでいた。

改めて、これほどの大きな施設が誰も訪れない島にあったことは驚きである。

ただ他にも驚くべきことはあった。

「なあネレイダ。アタイ達は崖に沿って建ってた円柱から入ってきた……とするとここは崖の中だろうか？　なのに、あんなに明るい空が見えてる。これはどういう仕掛けだい？」

ヴァイオレットの質問はもつともであった。

土の中にあるはずの空間なのに、その天井が青空を映しているのだから。

「心配はいりません。あれは空ではなく崖上の巨木の根によるもので、皆青空が見えています」

「巨木の根によるもの、ですか？ わたしには根なんて見えませんけれど……」

困惑するベアトリスに対し、ネレイダが指さした場所は天井の一角。

「それなら、あちらをご覧ください」

そこには空の代わりに大きな穴が見え、水が流れ落ちていた。

よく見ればそこ以外にも天井には穴が点在している。

「劣化で天井が落ち、根が無くなった場所です。よく見ると周囲が盛り上がっているのが確認できるところです」

彼女の言う通りその穴の周囲は盛り上がっており、そこに映る空は歪んでいる。

そしてその盛り上がりこそ、天井に張り巡らされた根の太さということであった。

「あの巨木は葉に映る空模様を根に映す、という性質を持っています。そしてその根がほぼ隙間なく張り巡らされた場合、継ぎ目なく空が映し出され、それが根によるものであることを視認できなくなるのです」

「ははあ……アタイ、いろいろな島に行ったつもりだけど、そんな木は初めて見るよ」

「この巨木は島の固有種です。メイカーがこの地を選んだ理由の一つと言えるでしょう」

感心しきりといった様子のヴァイオレットと俺も同じ気持ちだ。

そうして興味の向くまままきよきよと辺りを見回すと、続いて目に入るのは女性の像。崩れた通路の途中や、浸水した水の中にそれは点在している。

(なんか凄く肉感的っていうか……わ、あの像、おっぱいを自分で揉んでる!?)
女性の像はほとんど全裸で、揃って扇情的なポーズばかりだ。

また男性型の像もあり、そちらも例によって立派な股間を誇示していた。

流石は『淫猥天国』というべきなのかな……。

「どれも素晴らしい造形ではありますが、アリスト様のほうが素敵ですね」

「アタイもそう思うよ。アリストと似た細身だけど、色気が足りない」

「造形物がマスターを超えることは難しいでしょう。ペニスの逞しさを表現しきれません」
女性陣に像は不評らしく、中でもベアトリスは憤慨気味であった。

「ま、まったく品の無い像ですこと！メイカーという方の感性を疑いますわ」
ただその視線はちらちらと忙しく動いているし、耳も少し赤い。

(なんだかんだ言っつて、興味はあるんだね)

そうするうちにも小舟は進み、まもなく水面から突き出した柱が視界に入る。するとネレイダが声を潜めた。

「静かに。巢の主が飛来しました」

彼女が指さしたのは、天井の穴から入ってきた一羽の鳥である。

無論、ただの野鳥ではない。

「クルル、クルル」

聞き覚えのある、いや忘れもしない鳴き声。それを確認し、ベアトリスが静かに沸騰しはじめた。

「可愛らしい声で鳴いても許しませんわよ、泥棒鳥……！」

そう、彼は俺達から例の鍵を奪った鳥なのだ。

ネレイダによれば彼も島固有の希少鳥類でトラディルといい、白い羽を持つのは群れの頂点に立つ証だという。

つまりその特徴だけでほぼ個体を特定できるほどに珍しい鳥だったのだ。

更に幸いなことに、ネレイダは休眠から目覚めた後の巡回で、この鳥の巣が遺跡の中にあることを認識してくれていたのである。

まもなく件の彼は、俺達の待ち伏せに気付くことなく柱の上にある巣へ降り立った。

その様子を目で追って、俺は思わず小さく声を出してしまった。

「……あ、あれ……！」

彼が巣の中から古びた鍵を拾い上げ、戦利品を愛でるように掲げていたからである。

「マスター、流石のご慧眼です。お渡しした鍵に間違いありません」

こくりと頷くネレイダに対し、ひそひそとベアトリスが言う。

「イルゼ様をお救いするにはあれが必要なのですわよね？」

「ええ。彼女が受け持ったセラーファとしての役割を解除する際、あの鍵を使用します」

ネレイダがそこまで言うのと、トラディルは鍵を巢の中へ置き、再び飛び去った。

ヴァイオレットが不思議そうに首を傾げる。

「おや、意外と長居しなかったね。落ち着きのない鳥なのかい？」

「早朝は特に活発で巢に寄り付かない鳥なのです」

事もなげに言ったネレイダにエフィさんがはつと顔を向ける。

「それで朝早くから私達をここへ……？」

「ええ。エフィ達から聞いた状況と、稼働後に行った簡易調査、そして記憶領域に保存されていた近しい生物の情報から類推し、急ぎこちらへ向かうことにしました」

「なるほどね。やるじゃないか、ネレイダ」

「ははあ……意外と考えていましたのね」

ベアトリスも思わず感嘆の声をあげていたが、すぐに彼女は咳払いをして誤魔化していた。

「ごほん！ 変人、今のうちに鍵を」

「わかった。よつと……」

俺は彼女に頷き、小舟の上に立って手を伸ばす。

水面から突き出した柱の上とはいえ、巢はさして高い場所がない。

巢の住民がいなければ、これで十分に鍵は手に入る。

(よし、あと少しで……)

しかし鍵に俺の指が触れた瞬間、予想外の事態が起きた。

唐突に近くの水面が揺れ、勢いよく何か飛びだしてきたのである。

「リリッ！」

そしてその何かは鈴のような音を出して指先をかすめ、再び水面を大きく揺らした。先程よりも近くで波が起き、俺は小舟の上で大きく姿勢を崩してしまう。

「うわあっ!？」

「変人！ 落ちますわよっ！」

ベアトリスが服を引いてくれ、俺はなんとか落水を免れる。

しかし俺がお礼を言うより先に、彼女は水面に向かって大きな声を出した。

「ちよっ、あ、駄目ですよっ！」

何事かとそちらを見ると、ベアトリスの視線の先にはイルカを思わせる生物がいた。

(……って身体が透けてる!?)

水面から顔をひょっこりと覗かせたそれは、形状はイルカそっくりである。

しかしその身体は青い液体で出来ているかのように透けており、身体を動かす度に不思議な波紋が全身に浮かんでいた。

「リリン、リリン♪」

鈴の音のような音は彼の鳴き声だったらしい。

威嚇いかくすることもなく、話しかけるように鳴く半透明なイルカさん。

彼が友好的なのはすぐに分かったが、ベアトリスが『駄目』と言った理由もすぐに分かった。

「アリスト様、その子が鍵を……っ！」

そう、彼は俺達の求める鍵を、その口に咥くわえてしまっていたのだ。

その様を見て、ヴァイオレットが舌打ちをする。

「『マリミスチーフ』じゃないか！　ったく厄介な子が来ちまったね！」

厄介な子というのはどういうことか、俺達は説明を待つ必要がなかった。

「リリンッ♪」

彼はイルカショーのようなジャンプを披露した後、猛烈な勢いで泳ぎだしてしまっただからだ！
それを見て、ネレイダ大きな声を出した。

「追跡を！　彼はああして人の物を盗って、追いかけて楽しむのです！」

「お、追いかけてっこ!？」

目を白黒させる俺に、ベアトリスとヴァイオレットが言う。

「ぺったんこの言う通り、悪戯好きの厄介な生き物でしてよ！」

「あの子が飽きるまでに追いつかないと、鍵は水底の住処にもってかれちまうはずだ！」
二つの小舟が勢いよく飛沫をあげる。

「変人、ちゃんと捕まってなさいっ！」

「わ、わかった！」

「海賊の意地つてもんを見せてやるよっ！」

「加速を検知。エフィ、体勢を低くし、私に掴まることを推奨します！」

「は、はいっ！」

こうして鍵を啜えた半透明なイルカ、マリミスチーフの追跡が始まった。

「全力で行きますわッ！ はああああっ!!」

ベアトリスが小舟の前方で左右に突き出た棒を両手で握り直し、その手を赤く発光させる。

それに伴い小舟の後方に備え付けられた樽が音を立て、そこから伸びる筒から蒸気が放たれた。

すぐに大きな水飛沫が上がり、小舟はぐんと加速する。

激しく蒸気を排出して震える樽はエンジンにも見えるし、そうして生み出される速度も合わせるとまるでモーターボートだ。

「うわッ!？」

慌てて縁ふちを掴んだ俺にベアトリスが前を向いたまま叫ぶ。

「そんなのじゃあ水に落ちますわよっ！ わたしに掴まりなさいっ！」

「っ!？」

意外な言葉に驚いていると、彼女は耳を赤くしながら更に言う。

「ごっ、腰にでも抱きつけと言ってるのでしてよっ！ 女好きならできるのではなくって!？」

「……わかった！」

俺はその言葉に覚悟を感じ、バイクの二人乗りをするように彼女の腰元に両腕を回す。腕の上に凄く柔らかいものが二つ乗るが、今はその感触に呆けている場合ではない。

「リリリッ」

「!!」

鈴のような鳴き声をあげる不思議なイルカは更に速度をあげて進み始めていたからだ。

「魔力に集中しないと速度が落ちる……変人！ ペダル？ とか言うのをお願いできて!？」 方向はわたしが叫びますわ！」

「了解！」

ベアトリスが足を退かしたのを見て、俺は小舟に取り付けられたペダルへ足を乗せる。

右足、左足用に用意されたそれはこの小舟の操舵機関だ。

それぞれの踏み込み加減を調整することで船体後部の舵が動くらしい。

「リリンッ！」

「右へっ、内側を回って距離を詰めますわっ！」

「わかった！」

感触はほとんど車のペダルと同じだ。

幸いその扱いは難しくなく、少しやれば加減を掴むことはできそうだ。

遺跡内を進む前にある程度試していたので、操作そのものに戸惑うことはなかった。

（このまま、右へ!!）

ぐいと左のペダルを踏み、右のペダルから力を抜く。

意図通り小舟は右側へ旋回を始めるが……。

「行き過ぎでしてよっ！ 速度を考えなさいな！」

「ごめんっ！ こ、こう!？」

先程までとは速度が段違いなせいとその調整が簡単ではない。

曲がりすぎたり、曲がらなすぎたりするため、より繊細な踏み加減が求められるのだ。

「今度は曲がらなすぎですわっ！」

「っと、こう、かなっ!？」

「悪くはなくてよ！ って、また向きを変えましたわ！ 左へ！」

「く……ッ！ どじり！」

「及第点ですわね、さあ加速しますわよっ！」

右へ左へと動き、遺跡の中を縦横無尽に泳ぐマリミスチーフ。

引き離されはしないが、その距離はなかなか縮まらない。

一方で、ヴァイオレットが動力を務める小舟は俺達よりも少し先を走る。

「速度を上げるよ！ ネレイダ、瓦礫がれきを迂回してもらえるかいっ！」

「了解。エフィ、右へ体重移動を！」

「は、はいっ！」

ネレイダがペダル操作に慣れていることと、三人であることを活かして重心を移動させることで、上手く小回りを利かせているようである。

即席なはずなのに非常に良いチームワークだ。

しかしそれでもマリミスチーフとの差を詰めるには至っていなかった。

「あつちへこつちへと……！ 随分とやんちゃな子だねっ！」

「やんちゃじゃなくて、ただの盗人ですわッ!! 変人、左へ！」

小舟同士の接触を避けつつの会話に、ネレイダが大きな声で介入した。

「彼は遊びたいだけですから、追いつきさえすれば鍵は返してくれます！」

追いつけば良いのだとすれば、話はかなりシンプルだといえる。

事実、俺達を翻弄はするものの、不思議と水の底に潜って姿を消そうとはしない。それに背びれをしっかりと海面からのぞかせたまま泳いでいた。

(知性が高くて遊び好き……ってますますイルカっぽい！)

とはいえ、彼がいつこの遊びに飽きるかはわからない。

つまり、これは時間制限つきのレースだ。

しかも相手はかなりの強敵らしい。

ネレイダ達が更に情報を付け加えてくれる。

「まだ泳ぎに余裕が見られます。おそらく群れの長でしょう！」

「群れの長……きゃっ!？」

「エフィ、しっかりネレイダに捕まってな！ 長ってことは、群れの中で一番速いってことなのだ。こつちも全開でいかないとマズイからね……!」

ヴァイオレットは言いながら更に魔力を込め、ベアトリスもそれに続く。

「速度をあげますわ！ 振り落とされないようにしなさい！」

「わわっ……っつとー！ 了解！」

更に小舟は加速し、時折水面を跳ねるほどの速度に到達する。

するとマリミスチーフの身体に異変が起きた。

蒼色あおいろの半透明だった身体がみるみるうちに黄色に変色していく。

すると、今までの泳ぎが小手調べだったかのように彼はぐんぐんと速度を上げる。

「ちっ、流石の速さだね……っ！」

そのせいで俺達と彼の距離はじわじわと引き離され始めてしまう。

しかし小舟をこれ以上加速させるのが難しいのは明らかであった。

「くっ、ネレイダ！ もっと速度を出す方法はありませんの!？」

「アタイ達の魔力にも限りつてもんがある！ このままじゃあギリ貧だよっ！」

ベアトリスとヴァイオレットは既に額に汗を流しており、表情も苦しそうだった。

俺も精一杯ペダルを操って小さく旋回するよう努めはするが、根本的な解決には繋がらない。

(このままの速度を出し続けられたとしても追い越すのは……!)

焦燥感に苛まれる中、果たしてその打開方法はネレイダの口から放たれた。

「マスター、ベアトリスのデカ乳を揉みしだいてください！」

「「「ええっ!？」」」

彼女以外の四人の声が揃う。

それでもネレイダは一切動じずに続ける。

速度があがるほどに大きくなる飛沫の音に負けないよう、それはほとんど叫び声に近い。

「ここは淫らな行為を楽しむ施設、ミストコープです！ 備品であるこの小舟も、例外ではありません！」

「はあ!? 貴女、何を言っているか分かっていませんか!」

ベアトリスが叫ぶように言うが、ネレイダは続けた。

「棒を握る人物が強い快楽を感じれば、魔力の代わりに速度を上げることができます! そもそも、この舟はそういう娯楽を楽しむためにメイカーが作ったものなのです!」

(なにその娯楽!? 発想が変態すぎない!?)

俺は思わずペダルから足を滑らせかける。

が、ネレイダの表情は真剣そのものだ。

「この中で最も女性を気持ち良くできるとすれば、それはマスター以外いません! マスターの愛撫はそれほどに経験がにじみ出ていたと主張します!」

美女に大声でとんでもないことを言われて面食らう。

が、意外にも彼女の同乗者達は納得の表情であった。

「ええ、アリスト様の御業みわざに翻弄ひんろうされない女性はいません!」

「アタイもエフィと同意見だよ!」

その言葉は嬉しいけれど、今言われても反応に困るといっか……。

俺が微妙な気持ちになる一方で、ベアトリスは黙ったままであった。

「……」

だが彼女の耳は赤くなっていて、話はすっかり聞こえている様子。

どうしたものと俺が躊躇しているうちに、エフィさんが顔色を変えて叫ぶ。

「マリミスチーフ、更に速くなりました……ッ！」

「っ!!」

「まったく、まだ速くなりやがるってのかい！ 生意気だね……っ！」
けれどやはり舟の加速は追いつかない。

マリミスチーフが黄色に変化させた半透明の背びれがどんどん遠ざかっていく。

(このままじゃまずい！)

俺は意を決して、今までより少し強くベアトリスを抱きしめる。

「んっ！」

彼女は少し声をあげるものの、それ以上何かを言うことはない。

いや、正確には俺にだけ聞こえるような凄く小さな声を出していた。

「……いい、イルゼ様とお会いするためなら、変態にお乳を触られるくらい、安いものですわ……」

彼女と俺は目的が同じだから一緒に行動しているに過ぎない。

ベアトリスからすれば俺は今も、イルゼさんを騙している詐欺師だ。

にも関わらず、安いもの、と表現したのは覚悟の表れに他ならない。

(今、俺の持ちうるものを全部出そう！)

だから彼女の覚悟に全力で応じると決めた……と言えは聞こえは良いだろう。

しかしながら、どうあっても俺の格好がつくことはない。

だって実際にやったことと言えは……。

「さ、触るね……！」

ベアトリスの大きなおっぱいを左右からわしっと掴むという痴漢行為なんだからね！

「あう……へ、変態……！」

舟を進ませる彼女の抗議は至極真つ当である……！

無論、俺だって申し訳ない気持ちを持つてはいる。

けれど一方で、手の平からは素晴らしい感触が伝わってきているわけで。

（おつきい！ やわらかつ！ すごい！）

そんな風になど鼻の下が伸びてしまっているのだから、変態の誹りそしは免れないだろう。

ただし、ただの変態になつてはいけない。

これは半透明イルカに追いつくため、イルゼさんを救うための行動なのだ。

ベアトリスには可能な限り早く、できるだけ深く気持ち良くなつてもらわなくてはならない。

（こんな状態で女性を気持ち良くさせるなんて、本当にできるのか……？ いや、やるんだ。ベ

アトリスの覚悟を無駄にしちゃ駄目だ！）

難しい状況に弱気になる自分を叱咤し、改めて彼女の乳房を服の上から揉み始める。

「ベアトリス、痛かったらー」

「す、すぐ言うに決まっていますわ！ ほら、み、右ですわよっ！」

「つと！ 了解！」

ペダル操作をしつつ、俺は手を動かす。

敏感な突起には触らないように、なるべく優しく、柔らかく。

(やっぱりノーブラか……！ それならとにかく穏やかに、驚かせないように……)

水面の波を越え、ガクンと舟が振動する時は要注意だ。

思わず彼女の胸を握ってしまえば、きつと痛がらせてしまう。

(右に行った！ 身体を倒して……っ！)

ペダルを操作と体重移動で可能な限り小回りを狙いつつ、一方では慎重に慎重を期してベアトリスの胸を愛撫する。

世にも珍しいマルチタスクを求められたことで、俺の思考に邪心や余計な遠慮も入る隙間がなくなり、舟が立てる轟音さえも遠くなった。

処理能力の限界を迎えつつある脳が、本当に必要な情報以外を遮断し始めたのだ。

「ふう、はあ、つ、次は左ですわ！」

聞こえるのはベアトリスの指示と吐息、感じられるのは彼女の体温と微妙な身体の動き。

絞られきった情報に集中したことが良かったのか、何度目かの旋回を終えた時、ベアトリスはくぐもった声をあげた。

「ん、んんっ！」

同時にぐんつと舟が前に進み、ふわりとした浮遊感が足元に来る。

俺は実際の両手の力は緩めつつ、心の中の拳はぎゅつと握っていた。

(感じてくれてる！)

その事実は、他では手に入れがたい種類の喜びで胸をいっぱいしてくれる。

しかし調子に乗っている場合でないのは変わらない。

俺は細心の注意を払いつつも、彼女の乳房をより大胆に揉みしだく。

「ふうっ……はあっ……あっ」

するとベアトリスの吐息に色がつき、ますます舟が加速し始めた。

驚くべきことにその速度は先程までの比ではない。

「マスター、流石です！ ヴァイオレット、私達は支援に回りましょう」

その加速を見たネレイダの声が桃色を帯び、別の進路を取り始める。

「わかった！ あの子を適度に追いたてて、なるべく進みやすそうな進路に誘導してみせるよ！

エフィも周りを見て、指示をしてくれ！」

「はい！ あの大きな瓦礫をまずは避けられるように……あ、奥のほうが広いようです！ このまま私達だけ横へずれば……」

「良さそうだね！ よし、しっかり捕まってるな！」

「ヴァイオレット、私が乳を揉みますか？ それなりに気持ち良くてできるかと」

「アタイにそういう趣味はないよ！ ペダルに集中しておくれ！」

「承知しました」

彼女達の小舟は段々と離れていき、ところどころに浮かぶ流木や木箱を退かしたり、少しコーズをずれて誘うように動いたりすることで、上手く経路を開いてくれる。

「リリリン……リリリン……」

マリミスチーフ側もそれを妨害とは捉えていないようだ。

速度が違う二つの舟と遊んでいるつもりらしく、誘いにのるように動いてみたり、あるいは真似して流木を鼻先で遠くへ飛ばしたりしはじめた。

一方で、俺達の舟はベアトリスが吐息を漏らすたびに速度をあげていった。

「ふう、はあっ……く、悔しいですけど、このやり方のほうが、速度が出ます、のね……はあ、少し左ですわ、瓦礫の間を抜けて……っ」

気持ち良くなっている、と受け取れるベアトリスの発言に嬉しくなる。

その上で俺は彼女の顔色が悪くないことを確認し、いよいよ双丘の先端に指をかけた。

「あ、ん……っ！」

ベアトリスが更に甘い吐息を漏らす。

服の上からでも分かるほどに、彼女の乳首は勃たつていた。

もちろん次なる標的はそこだ。

「はあっ、はあっ、へ、変態……そこ、ばっかり……いっ……！」

大きく息をしながら、ベアトリスがいじらしく身を振る。

ベアトリスも一人の無垢な女の子なのだ、と感じられる仕草に思わず胸が高鳴った。

堪たまらなくなった俺は次の段階へと移る。

彼女が着る服の胸元、その左右に開いた横乳を見せつけるような開口部へ、いよいよ手を突っ

込んだのだ。

（おわあっ!? す、すごいおっぱい!!）

途端に絹のようなきめ細かい肌の感触が手のひらを支配し、同時に凄まじいボリュームの乳肉が手全体を押し返そうとしてくる。

（まさに爆乳……イルゼさんの胸とはまた別方向にすごい!）

胸を揉んでいるというより、胸に手が呑み込まれているという表現が正しいかもしれない。

「あっ、ああ……っ……」

大きいと感度が悪い、なんて話をする人がいるがそれは嘘だと思う。

優しめに触っていてもベアトリスは身体全体をくねらせ、甘くかすれた声をあげてくれる。

俺はそんな彼女に魅了され、気づけば本音を漏らしてしまっていた。

「ベアトリスのおっぱい、凄い。ずっと触ってたくなる……！」

「は、はあっ!? 今はそういう話を、している場合では、ああっ≡」

もう遠慮は必要ない、と手つきを激しくすると、ベアトリスはついに可愛らしい声を聞かせてくれる。こうなると舟も俺の欲望も止まらなくなった。

「はあ、はあ、ベアトリス、凄い」

「あっ≡す、凄いつて、なん、ですの……っ≡」

「おつきくて、すべすべで……触ってるだけで、気持ちいいよ」

「あっ！ 胸の先を、そのように捏ねたら、あっ≡あっ≡み、右っ≡右へ、早く……うっ≡」

健気に指示をしてくれるベアトリス。

俺はそれに応じつつ、彼女の固くなった乳首を指でつまむ。

「な、なんで、こんな時ばかり、旋回、上手……なんですのっ≡んっ≡あっ≡さきっぱ、引っ張らないでっ≡」

ベアトリスは抗議の声をあげるけれど、甘い声色で言われても説得力がない。

むしろ俺の興奮はますます高まって、もっと彼女をよがらせたくなってしまう。

「ちゅっ」

「あっ!? 首に、吸い付いていいなんてっ ≡ 言ってませんでして、よ……おっ ≡
「ふーっ、ふーっ」

「ま、また乳首っ ≡ ちくび、ばっかり ≡ へんたいっ ≡ へんた、いいっ ≡
汗ばんだ彼女の首筋にキスをしながら、しっとりとした爆乳を揉みしだき。

「はあっ ≡ はあっ ≡ す、少しは遠慮というものを……おっ ≡ あんっ ≡
固くなった乳首をコリコリとすりつぶし、人差し指で甘くひつかいた。

「やっ ≡ やっ ≡ やあああ……っ ≡ もっと優しく、するべき、でしてよ……っ ≡
口ではそう言うベアトリスだけれど、舟はどんどん速くなる。

そしてその加速は非常に快適なものだった。
どうも舟が特殊な動きをしているらしく、ほとんど揺れを感じないのだ。

(ペダルも軽いし、動きも明らかに機敏になってる。魔法を注ぐやり方は補助的なもので、こっ
ちのやり方が正規の乗り方なのかも……)

どんな仕組みかはわからない。

けれどそれは『もっと同乗者を気持ち良くさせることに夢中になりなさい』という舟の作り手
からのメッセージのように思えた。

もちろん俺はそのメッセージをありがたく受け取る。

「やっ ≡ あっ ≡ ほ、ほらっ ≡ つ、次は……あっ ≡」

「左、だね」

「え、ええ、そう……っつっ≡あっ≡そ、そっちまで、合わせなくっていいから、あああっ≡」
彼女がひととき大きく嬌声をあげる。

舟が加速し、目標との距離が一気に詰まる。

「リリリン……！」

気づけばマリミスチーフの背びれと舟の先端がほぼ同位置にあった。
まさに鼻の差、という状態だ。

ただ、レース相手はまだ奥の手を残していたらしい。

「リリ、リリ、リリ」

規則的な鳴き声をあげると、身体を虹色に変化させる。

そしてもう一段階速度が上がった。

「まだ速度が上がるのかい……っ!?」

「アリスト様、ベアトリス様！ お気をつけて、水面の揺れも激しくなります！」
ヴァイオレットとエフィさんが声を上げる。

じわりと距離が再び開く中、ネレイダが言う。

「マスター！ それで最後の加速です、追い抜いてください！」

俺は彼女の言葉を受け、お姫様の首筋にあらためてキスをする。

するとベアトリスは諦めたような表情で、俺に頭を擦り寄せる。

「あんっ≡はあっ≡ま、まだ、変態に、弄られないといけない、の、ですわね……あんっ≡
「そうみたい。もう少し、強くしていい？」

彼女はこくりと頷き、舟に乗ってから初めて俺と視線をあわせる。

「イルゼ様のためですわ。もっと良く、なさい……あっ≡あああっ≡
欲望も舟もすぐに加速を始めた。

そして奇妙なほど揺れない舟の上で、ベアトリスはどんどん高い嬌声を上げていく。

「あっ≡はあんっ≡ああっ≡へ、へんたい、も、もみすぎ、ですわ……っ≡

「気持ちいい？ 嫌じゃない？」

「ふ、舟の速度を見たら、あっ≡わかりますでしょう……っ≡性格が悪い、ですわ、あっ≡
頬ほおを赤くし視線を外すお姫様。

マリミスチーフとの距離は再び詰まり始め、先ほどよりも更にきんさ僅差になった。

「リリン、リリン」

虹色のイルカは鳴き声をあげる。

奇妙なやり方で舟を操る俺達を見て呆れているのか、それとも楽しんでいるのか。
それは分からないけれど、彼の速度は変わらない。

そして左右にそれることもなく、まっすぐに進むようになった。

(最後は直線勝負、ってことか……！)

不思議な確信を得て、俺はベアトリスの首筋に吸い付く。

彼女はもう抗議の声はあげなかった。

「あっ≡はあっ≡はあっ≡も、もう少し、でして、よ……っ≡」

そればかりか俺に身体を寄せるようにし、切なそうに瞳を細めて言う。

「もう少し、ですよ……ッ≡」

わかるでしょう、といわんばかりの声。

ああ、なんて可愛い女性なんだろう。

俺は胸を撃ち抜かれながら、激しく彼女の乳首をいじめる。

「んっ≡あっ≡はあっ≡はあっ≡あ、ああっ≡」

切迫していくベアトリスの声。

その腰がびくびくと浮つき始め、彼女の顎が少しずつ上がっていく。

「あっ≡んっ≡そ、そっっ≡……おっ≡」

舟はほとんどマリミスチーフと並ぶ。

やるべきことは一つだ。

俺は身体を反り返らせるベアトリスの首筋に今一度吸い付き。

「あっ≡へん、たいっ≡し、してっ≡」

瞳を濡らすベアトリスの両乳首を思い切りつねり上げた。

「んはああああッ≡≡≡」

彼女の甘い声が遺跡内に響き、その大きな乳房が震える。



同時にひとときわ大きな水しぶきがあがり、舟が浮いたかと勘違いするほどに加速した。
(うわあっ!?)

思った以上の加速に驚き、俺は荒い息をついたままのベアトリスを抱きしめる。

(飛沫でマリミスチーフが見えない!)

勝負はどうなったのか、と思った時。

鈴のような鳴き声が一

「リリリ……♪」

——俺達のわずかに後ろで響く。

(追いついた……いや、追い越したってことか!?)

その実感が湧いてくるのと同時に、エフィさん達の舟がゆっくりと近づいてきた。

「流石です！ アリスト様！」

「マスター、大変素晴らしい操舵でした」

「ベアトリスは無事、ってわけじゃなさそうだねえ。ふふっ♪」

「う、うるさいですよ……っ≡はあっ……≡」

そして近づいてきたのは彼女達の舟だけではない。

身体を青の半透明に戻したマリミスチーフもだ。

「リリ、リリ♪」

その鳴き声は楽しげで、つん、つんと時折優しく舟をつついてきていた。

親愛を一切隠さない可愛らしい振る舞いに、さきほどまでの悪戯を許してしまいそうになる。ベアトリスも同じ気持ちだったらしく、絶頂の余韻に身体を震わせながら言った。

「ちよ、調子の良い、子、ですこと……はあっ」

彼女と一緒に苦笑していると、マリミスチーフは小舟の上に顔を出してくる。

そして俺の手元へ器用に口を持ってくると、古びた鍵を差し出してくれた。

「リリン♪」

どこか満足げに鳴く彼から俺は鍵を受け取る。

「ありがとう……って言うのも変かな？」

後はイルゼさんがいるという遺跡の奥へ行くだけ——そう思った時。

唐突に天井から大きな音がした。

瞬発的にそちらを見て、俺は背筋に冷たいものが走る。

「ちよ、ちよちよちよっ!？」

天井の一部から巨木の根が剥がれ落ち、こちらへ落ちてきていたのだ！

崩落してきた巨木の根は下敷きになってしまえば間違いない命はない、と分かる大きさ。

俺は突然のことに思考が停止してしまう。

「マスター!! 崩落です!!」

「アリスト様、ベアトリス様！ 避けてください!!」

「待ってる！ 今、そっちに行くからねっ!!」

が、耳に入ってきた女性達の声が停止した思考を取り戻してくれた。

俺は青い顔をしているベアトリスを片腕で抱き寄せ、近くにあった瓦礫を蹴り小舟を動かす。

「へ、変態!？」

「ベアトリス、魔法を！」

「!!」

驚きながらも彼女はすぐに姿勢を直し、棒に魔力を注ぐ。

途端に舟は速度をあげて進み始めるが、巨大な根はどんどん近づいてきてしまう。

「急いで、急いで、急いでくださいましっ!!」

涙声で叫ぶベアトリス。

俺も必死でペダルを操作し、根と一緒に落ちてきている細かい瓦礫を避け続ける。

しかしそれでも、瓦礫が落ちたことで生じる水面の揺れが、舟を思うように進ませない。

ヴァイオレット達の舟も同じ状況らしく、気づけば互いに距離が離れ分断されてしまっていた。

そればかりか動力を生み出しているであろう樽から煙が上がり始め、完全に停止してしまう。

「動いてっ！ 動いてえっ！ イルゼ様に謝ることもできていないのに……っ！」

懸命に魔力を注ぐベアトリス。

しかし舟は動き出さない。

(ここまでか……！)

頭上に迫る影はどんどん大きくなり、もはや一刻の猶予もない。

そう思った時、俺の身体は咄嗟に動いていた。

ベアトリスを抱き寄せ、水面へ飛び降りる。

「きゃっ!? あ、貴方っ、何をっ!？」

「息を吸ってっ!! 早く!!」

「!!」

切迫感が伝わったのか、彼女は思い切り空気を吸った。

俺も同じく目一杯息を吸った後、彼女を連れて舟の下へと潜りこむ。

そしてベアトリスを抱き寄せ、舟と彼女の間に身体を入れ込んだ。

「……っ!!」

その意味を理解したベアトリスが瞳を大きく開き、慌てて身体の位置を入れ替えようとする。けれど、それを許すわけにはいかない。

「~~~~~ッ!!」

俺はもがく彼女を押さえ、船底に背をつけた。

刹那、水面の強い揺れと共に、小舟の船底が俺の背を突き飛ばした。

「ぐっ、ごほっ!!」

その衝撃で溜め込んでいた空気を吐き出してしまふ。

水中を昇っていく気泡の分だけ、俺の意識は薄れていく。

一方のお姫様はするりと俺の腕の中から脱出し、見事な泳ぎを披露していた。

(良かった、大きな怪我は無さそうだ)

ただ、俺の身体にはうまく力が入らない。

そして空気を吐き出しきってしまったせいか、俺の身体は水底へと沈んでいく。

遠ざかる水面には粉々になった小舟の残骸と、水に浮かぶ巨大な根が見えた。

水面が覆われきってしまったわけではなく、十分顔を出せる余地があることが分かる。

(あれなら息継ぎできるし、なんとか、なる、はず……! 早く、泳い、で……あ、あれ……?)

ベアトリスが俺に手を伸ばしてくれている。

けれどそれを掴もうとしても、俺の身体は全くと言っていいほど動かない。

「~~~~~っ!!」

悲壮な表情を見せるお姫様。

しかしそんな彼女の手を取ることができないまま。

(これ、まずい、かも……)

俺の意識は暗闇へと落ちていった……。

——リ——リ——リ——。

(なん、だ……?)

暗闇の中、鈴のような音が聞こえる。

とても遠いところから響いていたそれは、次第に近く、はっきりとしたものになってきた。

「リリン……リリン……！」

すると別の音、いや声も耳に入る。

切迫した女性の声だ。

「アリスト、アリストっ！」

同時に胸の辺りに強烈な圧迫感が加わり、俺は思わず咳き込んだ。

「げほっ!? ごほっ! ごほごほっ！」

胸の奥に溜まっていた水が口から吐き出され、暗闇だった世界に光が差し込む。

(い、生きてる? 良かったあ……!)

空気が全身を巡る感覚に心底ほつとしながら、俺は上半身を起こす。

次第に咳が収まってくると、目に入るのは見覚えのある色褪せた白い壁だ。

ただ天井に青空は無いし、根っこも見えない。

(小部屋って感じの狭さだし、小舟を走らせた場所とは別の場所?)

と、思った矢先、俺の胸に質量のある柔らかい塊がぶつかってきた。

「どわあっ!？」

「アリストっ!! 良かった……っ!」

衝撃の後に聞こえた声で、俺はベアトリスに抱きつかれたのだと分かった。

柔らかい塊は彼女の大きなおっぱいで、圧迫感と幸福感が一度に襲ってくる。

(す、すごい威力!!)

二つの意味で威力抜群な包容を受けとめると、彼女は瞳を潤ませながら俺を睨んだ。

「無事ですわね!? ね、無事ですわよね!? 無事って言わないと首を絞めますわよ!!」

「いやそれ無事じゃなくなっちゃうけど!？」

それじゃあ安否確認じゃなくて脅迫じゃないか!

思わずツッコミをいれた俺に対し、ベアトリスは噛みつくように言う。

「お黙りなさい!! 水の中であんな無礼をしたのですから、これくらい言われて当然! いえ、

首の一つや二つ絞め落とされても文句を言う権利は無くってよ!」

「首は一つしかないよ! 沢山あったら化け物だよ!」

「変態は化け物の一種、わたしの中ではとても有名なお話ですわっ!!」

「理不尽っ!？」

とんでも理論を言いながら、ベアトリスはぐいぐいと俺の襟元を締め上げる。

ぐぐつと息が苦しくなったと思うと、彼女はぱつとその手を緩めた。

「すぐく心配、しましたわ。いつまで経っても目を覚まさないんですもの」

俯き加減うつむで言うベアトリス。

嘘偽りない声に俺は素直に謝罪する。

「……うめん」

「まったく……いいですわ、もう過ぎたことですし。ただ彼にはちゃんと感謝なさい」

「彼？」

首を傾げる俺に軽く笑みを浮かべるベアトリス。

そうして彼女が俺から身体を離すと、聞き覚えのある音がした。

「リリン……」

それはマリミスチーフの鳴き声であった。

彼は部屋に備えられた低い仕切りの上から顔と手ビレを出し、左右に身体を揺らしてみせる。

見ればその仕切りの向こうは、たつぷりと水が溜まっているようだ。

お風呂に浸かったような状態で鳴く彼は、そこから身体を乗り出し、俺の足をつんつんとしてきた。

「リリン、リリン……」

「リリ、リリン……」

可愛いな……って、二匹いる!?

「大きな根が落ちてきた後、この子達がここまで運んでくれましたの。命の恩人ですよ」

「そうだったんだ……! ありがとう!」

聞けば水たまりの奥に水路があり、それがあの大空間と繋がっていたらしい。

沈んだ俺と慌てるベアトリスを乗せ、凄まじい速度でここへ連れてきてくれたのだという。

「それに何か特別な道具を使ってくれましたわ。多分ですけど、貴方の身体を癒やしてくれたのではなくって?」

そう言っただけで彼女は懐からペンダントのようなものを取り出す。

小さく揺れるそれをマリミスチーフが俺に鼻先で触れさせた途端、俺の身体は光に包まれ顔色も良くなったそうだ。

「うん……確かに身体は全然痛くないよ。背中に舟もぶつかったはずなのに」

「やっぱりそうでしたのね。見たところ宝石のようなものがついていますし、この遺跡周辺にあったのだとすればきつと貴重な遺物なのでしょう。本当に優しい子達ですわ」

彼女が言う通り、それには緑色で半透明の石がついている。

俺は軽さすら感じる身体を起こして、彼らのほうへと向かう。

俺は愛らしく鼻先を出す二匹にペンダントを返しながら、お礼を伝える。

「助けてくれて、本当にありがとう」

すると彼らは嬉しそうに身体を揺らしてくれる。

半透明の身体はひんやりと気持ち良く、とても優しい触り心地だった。

「さっきの追いかけてこでわたし達を気に入ってくれたのか、ずっと様子を見ていてくれましたの。服も乾かしてくれました」

「えっ、あっ、そう言えば全然濡れてないね」

「凄い勢いでヒレを動かして風を起こしますのよ。あれは中々見応えがありましたわ」
それがどんなものだったのか見られなかったのが残念だ。

とはいえ彼らには感謝してもしたりない。

せめてもの印として、俺は気持ちを込めて彼らを撫でる。

「リリン、リリン♪」

「リリ、リリ♪」

半透明の身体に美しい波紋を浮かべる二匹のマリミスチーフ。

彼らに俺の感謝の気持ち伝わったのか、それとも撫でられることで満足してくれたのか。

二匹は互いに顔を見合わせ、その後ぷるぷると身体を震わせると水へ潜った。

そして尾びれを水面からのぞかせると。

「「リリ♪リリ♪」」

愛らしくそれを振り、水たまりの奥にある水路を伝って去っていく。

本当に賢くて、優しい子達だ。

（芸を教えられたらイルカショーとかできそうだなあ）

などと呑気なことを考えつつ、彼らが消えた水たまりをなんとなく見守る俺。

ベアトリスも特に何かを口にしなかつたため、小部屋は静かになる。

しばし穏やかな沈黙が流れたが、やがてベアトリスが陰のある声を出した。

「……男に貰った、いえ押し付けられたのですわ」

「え？」

話が見えず首を傾げる俺のほうを見ないままー彼女は告白を始めた。

「イルゼ様を変身させてしまった、あのネックレス。首都からわたしが持ち出したもの、というのは真っ赤な嘘ですよ」

アルコル伯爵が、非公式都市という微妙な立場である「スタヴィーノ」を脅し、利用しようとしているということ。

手先としてグリムウエフトという執事がやってきて、ネックレスを渡してきたこと。

その際伝えられたネックレスの効果は、どんな秘密でも自白させられる、というものだったということ。

ベアトリスはこれまでであったこと一つ一つを説明していく。

「そして、グリムウエフトの狙いは貴方。だからわたしはあの夜、あのネックレスを……」
「!!」

ベアトリスはそこで俺の顔を見る。

その瞳は昏い悲しみを宿していた。

「わたしは貴方を、我が身可愛さに贅にしようとしたのですわ……！　そして、イルゼ様までもあのような目に……っ！」

美しい双眸から涙が溢れる。

「貴方がネレイダに捕まっている間、エフィに言われましたの！　イルゼ様は男性を拒絶なんて決してなさらないと……っ！」

俺は黙ってその続きを待った。

彼女の悲壮な声を俺は止められない、いや止めるべきではない。

上手く説明できないけれど、今はただそれに耳を傾けることが必要だと。
そんな風に思ったのだ。

「わたしは食って掛かりましたわ。だって、だってイルゼ様はかつて仰っていたのですもの！
『女性が豊かな人生という絵を描くために、外遊訪問という絵の具は必ずしも必要ではない』って。だからわたしはイルゼ様に見た、男に頼らない強い女性の姿を……！」
ベアトリスは叫ぶように言う。

けれどそれは俺に向けられたものではない。

彼女が彼女自身に向けた悲痛の声だった。

「でも……イルゼ様が仰りたかったことは違った」

エフィに教えられましたわ、とベアトリスは唇を震わせてうつむく。

「外遊訪問を待つて不満を言つて過ぎすより、遠くの人領民を思つて過ぎすことを大切にしたいと……イ

ルゼ様は昔も今も、そういう在り方をなさつているお人だつて……！」

彼女はそこまで言つて、ぎゅつと悔しそうに両手を握つた。

「言い返せなかつた！ だつてわたしは……男に脅された不安から逃れるために、自らの無力から目を背けるために！ イルゼ様に対して身勝手に『強い女』を押し付けていただけだつたつて分かつたんですもの！」

聞いているほうが胸を締め付けられる、そんな声だ。

でもきつと……それを言葉にする必要がある、と彼女が強く感じているというのは分かる。

そんなことないよ、なんて薄っぺらい言葉を求めているわけじゃない。

ベアトリスは今自分自身と、深く激しく、痛みを伴う会話をしているのだ。

「結局、わたしは自分しか見えていなくて、イルゼ様のことなんて、何も……っ！」

彼女は頬を伝う涙を拭うこともせず、再び顔をあげた。

「……貴方のことも同じですわ」

そして今までで一番まつすぐな目で俺の瞳を捉える。

「嫌な人、悪い人、そう思えば贄ためらにすることを躊躇ためらわなくて済む。自分の心ばかりで目が曇って、貴方のこと、何にも分かかっていなかったのです！ 命を賭として、わたしを守ってくれるような男性だったのに！」

本当にごめんなさいーと彼女は大粒の涙を流す。

俺はその様を見て腑に落ちた、というより改めて納得した。

コスタヴィーノに彼女を野次る女性達はいても、彼女を拒絶する女性は一人もいなかったということを。

(皆、ベアトリスのことが好きなんだ)

自分が間違っていた、自分の中に弱い心があった。

それを言葉にして謝ることができる。

(……うわべだけじゃなく自分の心をちゃんと晒して、明け渡せるんだ。ベアトリスは)そして多分、それは今だけじゃなかったんだと思う。

彼女がこういう人だから、コスタヴィーノという都市ができたのだ。

「凄いね、ベアトリスって」

「……え？」

口を突いて出てしまった言葉にベアトリスはぽかんとする。

それが今までの悲壮な感じとは対照的で、俺はつい笑ってしまった。

「な、なんで笑いますの？ わたし、今、真剣に謝っているつもり、なんですから……っ!？」
徐々にいつもの調子に戻りはじめるベアトリス。

それを嬉しく感じながら、俺は彼女を見習って自分の気持ちも話すことにした。

イルゼさんが変身してしまった時、自分は驚きと、たぶん恐れを抱いてしまったこと。

結果ろくに動けずに、ただただ見届けるだけになってしまったこと。

そのことをとても後悔しているということ。

「だからもう……絶対後悔したくないんだ。それでちゃんとイルゼさんに謝りたい」

魔法が使えない自分で生きるということに、全然覚悟が足りてなかったって。

そうじゃないと、俺はちゃんと前に進めないのだ。

それにイルゼさんをちゃんと救った後ならば、父さんとアルコル伯爵関連のこともじっくり相談できる。

「ある意味不可侵となっている地域にこっそり手を出しているということが明らかになれば、追い詰められるのはあちら側だし、色々やりようもあるはず。父さん、つまりペレ伯爵は公会議の一員だから、この件を相談するとしたら一番良い相手だと思っしね」

俺が言うと、ベアトリスは瞳を丸くする。

「お父上とは壊滅的に仲が悪い、と聞いていましたけれど……」

「あはは、首都の男性の大半は嘘つきみたい」

事実、俺もペレ伯爵と会うまでは親子関係は最悪だと聞かされてたしね。ともあれ。

「そもそもは都市に手を出してきた伯爵が原因だし、ベアトリスばかりが気に病まないでほしいな。それに、怖気づいた俺にもちゃんと責任があるって忘れたくないんだ」

ベアトリスはまだ少し潤んでいる瞳を数度瞬かせる。

そしてしばし視線を彷徨わせ、ううんと考え込む様子を見せた後に少し不器用に微笑んだ。

「なら、一緒にイルゼ様に頭を下げるということでも良くなって？」

「もちろん、床に頭を擦り付ける勢いで頑張るよ！」

「あら、わたしの土下座は見事なものだと各所で評判ですわ。並大抵の謝罪では勝ち目はありませんことよ」

やっぱりこうやって素直に謝ることは初めてじゃないんだ、と俺は嬉しくなる。

まあ、各所で土下座が有名っていう事実を誇らしげに言うのはどうかと思うけど！

「ふふ、なんだかスッキリしましたわ。さ、ヴァイオレット達を探しませんと！」

そう言つて、ベアトリスは晴れやかな顔で立ち上がった。

「さっきの子達によると、あっちは崩落には巻き込まれなかったようです。まあ、ヒレを動かして頷いていただけなんですけれど」

彼らの知能の高さを考えるに、会話はしっかり成立していると考えていいんじゃないだろうか。

希望の持てる話にほっとしつつ、俺達は早速部屋の出入り口らしき場所へ足を踏み出す。

しかしその矢先、ベアトリスの足元でカチツという硬質な音がした。

「あら？ 何か踏んだような……」

小首を傾げるベアトリス。

が、そんな振る舞いができたのも一瞬のこと。

次の瞬間、俺と彼女は揃って大声を出していた。

「「あああああっ!？」」

俺達が向かっていた出入り口らしき場所に石の板が現れ、完全にそこを塞いでしまったのだ!

「ちよ!? これどうなっていますの!? くっ!!」

「お、重いつー!」

石の板を必死でどかさそうとするが、びくともしない。

その上そこには隙間一つなく、寸分違わずぴったりと入口が塞がれている。

さきほど床でした音といい、まず間違いなく人為的なものだ。

「はあ、はあ、他に出口があったりはしないのかな?」

「ぜえ、ぜえ、さ、探しますわ! ほら、貴方も一緒に!」

ひとまずその石との格闘をやめ、俺達は小部屋に他の出口がないか探す。

しかしそれは『出口がないこと』を確認する作業となってしまうた。

「完全に閉じ込められましたわね……！」

他に出られそうな場所といえば、マリミスチーフの二匹が通っていった水路だけど。

「流石に生身で泳ぎきれる距離じゃあ、ないよね？」

「あの子達の速さをお忘れになつて？」

「だよね……」

どうしたものか、と頭を抱える俺達。

が、救いの手は差し伸べられた。

聞き覚えのある声が、塞がれた入口のほうから聞こえてきたのである。

「マスター、デカ乳、そちらにいるのですね？」

「エフィです！ お返事いただけますか!？」

「アタイもいるよ！ こっちは全員無事だ！」

ベアトリスと顔を見合わせ、俺達は頬を緩める。

そしてできるだけ大きな声で返事をした。

「怪我もないし大丈夫！」

「こっちも無事ですわ！ って、デカ乳でなくてベアトリスですわよ、ぺったんこ！」

安堵の声をあげる三人に簡単に経緯を説明した後、俺達は本題に入る。

「で、急に閉じ込められちゃったんだ。そつちからここを開くようなことはできないかな？」俺が聞くと、その答えは非常に非情であった。

「この石は扉の役割をするものであり、通常ならば強制的に開ける方法が用意されています」「……嫌な予感がする言い方ですわね」

「なかなか鋭い考察だと評価します、デカ乳。残念ながらその方法は現在利用できません。浸水と崩落の影響で魔法回路が完全に破壊されてしまっているからです」

ネレイダが淡々と事実を並べ、俺達はがっくりと肩を落とす。

それは扉の向こうも同じであった。

「そりゃ困っちゃうよ！ 鍵を持つてるのは中の二人だろう？ せつかくイルゼって子のところへ行く通路が見つかったのに……」

「ネレイダさん、なんとかありませんか!？」

ヴァイオレットとエフィさんがネレイダに聞く。

俺とベアトリスも彼女の言葉を待つほかない。

「方法があります。しかも今、それを実行するには非常に都合が良い」

「」「都合が良い?」「」

果たして、ネレイダは回答を持っていた。

確かに持っていたんだけど。

「中の二人がセックスすれば開きます」

「」「」「げっ!?!」「」

「ここは『悦技の間』^{えつき}。性技を向上させたいと願う者が、指導役のイヴと共に入室して修練をする部屋なのです。そしてそれを成すための回路は壊れていないようですので」

やはり淫猥天国の名は伊達ではなかった……!

驚きの声をあげる俺達だが、ネレイダはごくごく当然のように話を続けた。

「都合良く、こちらから室内設備の一部を作動させられるようです。少しでも落ち着いたセックスのために寝具をご用意します」

そう言ってネレイダは室外にある何かのボタンを押したらしい。

カチツという音が聞こえると、室内の壁の一部、特にその下部がせり出し始めたのだ。

「わっ!!」

「な、なんですの……!?!」

やがてその動きが止まると、そこには直方体の物体が現れる。

かと思うと、その天面が忍者屋敷の扉のようになりと表裏に回転した。

すると現れたのは白くてふかふかの天面と、そこに不思議な力でくっついてきた枕のようなクッション。

(これ、完全にベッドだ……！)

先ほどまで壁から引き出された石材だったその変身に、俺もベアトリスも呆気に取られる。ネレイダの奇天烈な解説は更に続く。

「マスター、デカ乳。その寝具は男性の射精と女性の絶頂を感知します」

「どんな仕掛けは知りませんが、メイカーなる女性の頭がどうかしていることだけはハッキリしていますわね……」

ベアトリスが深い溜め息をついて言うが、俺も心の底から賛同せざるを得ない。

一方で疑問も強まる部分ではある。

(意思を持つ魔法人形、気持ちよくなると速くなる舟、そして近代的に感じるこの部屋の仕掛け……メイカーって一体、何者なんだ?)

ただ、今はそれを深く聞く状況ではない。

俺は軽く首を振って、ネレイダの説明の続きに耳を傾けることにした。

「この部屋は性技の修練と娯楽性を両立させるため、入室した者の性的快感を『快樂値』として測定し、その蓄積が一定の閾値いみちに達すると扉が開く仕掛けです。一方でマスターの腰使いは大変お見事でしたし、膣中射精の精液量が最も大量でした。このことからマスターもセックスが大好きであると分析します」

完全なる断定形で話すネレイダ。

「……やはり貴方、変人ですわね」

ベアトリスはやや厳しい視線を俺に向けてくるけれど、俺に反論の言葉はない。

射精量はともかくとして、ネレイダの俺に対する分析は間違っていないんだもの！

「性的利用を目的にしたイヴであっても、マスターの射精によって引き起こされる快楽は正常動作を阻害されるほどのものでした。となれば、ベアトリスのようなデカ乳は必ずイキます。従って、二人がセックスすることが最も効率的に快楽値を貯める方法だといえるでしょう」

ハキハキと、それでいてすぐくすくすけべな提案をする魔法人形さん。

そんな彼女に抗議したのはベアトリスだ。

「快楽値を貯めるだけなら、その、べ、別にセックスじゃなくても良いのではなくって!?!」
確かにその通り。

気乗りしない女性と無理やりするより、俺が部屋の隅で頑張るほうが良いんじゃないだろうか。

「そもそもわたしは男性を好いておりません！ 目に入るのはイルゼ様だけ。それにだって性的な気持ちはありませんわ！」

それもその通りだと思う。

俺に対して認識を少し改めてくれたとはいえ、彼女が執事に脅されているのは変わらない。男性に対して良い印象がないのも当然だろう。

(おっぱいは触らせてくれたけど、あれだって他に方法が無かったからだし……) セックスは更に一步踏み込んだ行為だ。

彼女が気乗りしなければ、互いに気持ち良くなるのは難しいに違いない。

しかし、次にネレイダの口から語られた論理は予想だにしないものであった。

「イルゼについて発情していないということには嘘はないでしょう」

「当然ですわ！ あの御方は目指すべき場所……いいえ、これから改めてお会いする御方であつて、劣情を向ける対象ではありませんもの！」

「ですが、マスターについては嘘をついています」

「な、何を根拠に言うのでして？」

「皆さんが乗ってきた船の調査、そして乗組員からの聞き込みにより、一昨晚に貴女がエフィとマスターのセックスを覗き見た可能性が非常に高い、むしろ間違いないとの結論が出ています」

「「えっ!？」」

驚いたのは俺とエフィさんである。

ちなみに扉の向こうからはヴァイオレットの笑い声が聞こえてきた。

「ふふっ、やっぱり！ だってアリスト達が泊まったあの部屋は本当に音が聞こえないんだよ。

扉に耳でも貼り付けてなきゃ、寝不足になんてなるわけないからね。ふふふふっ！」

一方でベアトリスはすぐに抗議の声をあげた……のだけれど。

「そ、そそつ、そ、そんなわけありませんわ！ や、やっぱり、人をデカ乳呼ばわりするぺったんこの話なんて、ちつとも参考になりませんわね。お、おーほっほっ！ おーほっほっほっ!!」
(覗いてたんだね……)

ここまで打てば響き、可愛らしく慌てる女性も珍しい。

なるほど使用人の皆さんや、領民の皆さんが彼女をいじりたくもなるわけだと納得した。

「マスターは貴女が嫌う男性という枠組みを逸脱しており、加えて貴女も性的欲求を有している。だからこそ貴女は自然とマスターとエフィとのセックスに興味を持ったのです。そして自ら体験してみたいという欲求もあるように推察されます」

「だ、黙らっしやい！ そのような俗っぽい考えは、わたしには一切ありませんでしてよ！」

「マスターにデカ乳を触られ、気持ちよさそうに喘いでいたと記憶していますが」

「あれは舟を動かすために仕方がなく、でしてよ！ 舟に魔力を注がなくてよいのなら、わたしが、そのつ、自分でやっていたって良かったのですもの！」

ベアトリスはだんつと床を踏みつけ、胸の下で腕を組む。

ネレイダに何を言われようが動じない、という宣言をしているかのようだ。

「貴女の主張はわかりました。しかし貴女がセックス未経験であることには違いありません。となれば、自分でやるということとの効率の比較すらできません。違いますか？」

「……それはそう、かも、しれませんがね」

「ここでセックスを拒否することは、イルゼのもとへたどり着く手段の一つを、検討もせずに放棄することと同義です。なるべく早くイルゼのもとへ行く、という目標に反する行動です」

「う……」

「マスターを心の底から嫌悪しているのでなければ、試みることもせずに拒否するのは効率的とは言えない。違いますか？」

「ぐぎぎ……」

ベアトリスに歯ぎしりをさせたネレイダの声は、今度は俺のほうへとやってきた。

「マスター。ベアトリスはお嫌いですか？ デカ乳に魅力を感じませんか？」

なんて直球で、逃げ場のない質問か……！

俺はベアトリスとは別の意味で声に詰まるが、しかししっかり言葉にしようと覚悟を決める。

ここは男としてちゃんと本音を晒さないといけないと思ったからだ。

まあ、俺の本音はいつも欲望丸出しの発言になっちゃっただけだ！

「べ、ベアトリスは凄く可愛いし、優しいし、一生懸命だし、魅力しか感じてないよ！ デカ……えっと、大きなおっぱいも、すごく良いと思うしー！」

「……っ……」

ベアトリスは顔を背けるけれど、特に抗議の声はあげなかった。

罵倒の嵐も覚悟していたので少し意外だ。

「ベアトリス、マスターはこう仰っています。イルゼを早く助けたいというなら、一度試してみるべきでは？」

「うう……うううう……っ！」

仁王立ちの領主様は猫のようにしばし唸った後、ぎゅっと両目をつぶって大きな声を出した。

「やればいいんですよ！ やれば！」

「い、いいの……？」

「変人は黙ってなさい！ そ、そのっ！ この見苦しい胸が本当に良いと思うのでしたら、好きにして結構ですよ！」

俺のほうは向かないまま、彼女は自らの胸を持ち上げて揺さぶる。

雑なアピールではあるものの、耳まで赤くなった美女にそうされると喉を鳴らしてしまうのが俺というもの。

「……えと、ありがと……」

「ど、どういたしましてっ！」

彼女は両手に握りこぶしをつくると、勢いよくベッドに飛び込む。

「そ、粗末な棒を挿入されるくらいなんてことありませんわ！ さあ、さっさと突っ込んで、部屋から出ますわよっ！」

そして頬を真っ赤にしながら、ムードのかけらもない宣言をしてみせたのであった。

——ベアトリスが放った宣言の後。

俺は軽い放心状態に陥っていた。

(……なんだ、これ)

でもそれも仕方がない。

だって、さっきまで普通に話していた美女が。

「さ、さあ、ひと思いにやりなさい……っ！」

自ら両脚を大きく開き、その局部を俺に晒しているのだから……。

あまつさえ秘裂に指を這わせ、くぱっくぱっとな女性器の入口を開いてみせているとなれば尚更なまむらひである！

「じゅ、準備はっ、できておりましてよー！」

(な、なんだこれ!?)

とはいえ、状況に余裕があるわけではない。

イルゼさんを助けるために、部屋を出る必要があるのはもちろんのこと。

「……ッ……っ！」

羞恥に耐えて気丈に振る舞う女性を、これ以上辱めるわけにはいかないからだ。

俺は意を決して、ベッドに上がる。

「わ、わかった！」

何が分かったかは自分でも良く分からない……が！
ただひとまず彼女の気持ちはいっつかり受け取ったよ、と伝えたかったのだ。
続いて、俺は身につけた衣類の全てを脱ぎ捨てる。

服は着たままとはいえパンティを左脚の膝辺りまで下ろし、大股を広げているベアトリス。
そんな彼女を前に、俺だけいつも通りの格好なんてあまりに不誠実。

せめて全裸にくらいならないと釣り合いが取れない、と思ったからだ。

「べ、ベアトリスにばっかり、恥ずかしい思いはさせないよ！」

「ひゃ!? な、なるほど、なかなか、良い、お身体、んっ！ お覚悟、ですわねっ！」
セックスをしようとする男女とは思えないやり取りである……。

だからだろうか、扉の外からヴァイオレットの押し殺した笑い声が聞こえてきた。

「ぶぶっ……ぶっ……！」

ベアトリスは開かない扉に鋭い目を向けるが、やがて俺のほうへと視線を戻す。

「「……」」

ほんの少しの間、互に見つめ合った後。

俺は大股を開いたままのベアトリスへと覆いかぶさった。

「……嫌だったら言っつてね」

そして少しの勇気を出して、その口を塞ぐ。

「んっ!？」

びくりと震えるベアトリスの唇は少し冷たい。

ただそこに抵抗はなく、おっかなびつくりのキスが始まった。

「ちゅっ、ちゅっ……んっ」

彼女の大きな胸は仰向けでも形が崩れることはなく、キスの最中も俺の胸板に当たってくる。そのふわふわとした感触と、彼女の濡れた唇の感触。

触れ合うだけのようなキスでも興奮はどんどんと高まり、肉棒にしつかりと火が入る。

それがベアトリスのお腹をはつきりと押すようになると、彼女は抗議の声をあげた。

「んむっ、ちゅっ、ず、随分、乱暴な棒、ですわね、ちゅっ」

やや不服そうな声色だけれど、彼女はキスをやめない。

そればかりか、そつとその手を肉棒に添えてくれた。

予想していなかった行動と、彼女のひんやりとした手の感触を受けて身体が震える。

「くっ……」

俺が声を出すとベアトリスは手を止め、またゆったりと手の動きを再開した。

「それは『気持ち良い時の顔』ではなくって？」

「っー!」

「それは凶星の顔、すべてお見通しですわ」

柔らかい微笑みに薄っすらといつももの勝ち気さを滲ませると、彼女は指で輪っかをつくり、ゆるゆると俺の亀頭を擦り上げ始めた。

「あうっ、うう……っ」

「今、情けない顔をしているのがお分かりですか？ 本当に仕方がない人ですこと」

「そ、そんなこと言われたって……あっ、うう……」

「ごこ、なぞられると良いのでしょうか？ 顔で全部わかりますわ、ふふ」

少しだけ爪を立て、カリの周囲をなぞったり、親指の腹で裏筋を強めに擦ったり。

彼女の責めに俺のペニスは悦び、先走りをもろもろ漏らしてしまう。

「あっ、ちよ、ちよっと！ ぴくぴく動かすのはおやめなさい、びっくりしますぞ……」

「くっ、ご、ごめん。気持ち良いと、つい動いちゃうというか、あっ」

俺が大きめに反応すると、彼女は一瞬真剣な表情に変わる。

そして少しの間を置いてから、丁寧に愛撫を再開してくれるのだ。

(なんか大切にされてる感じがして……すごく嬉しいな)

部屋から出るという目的でのセックス。

男性に良い感情を持たないベアトリスからすれば、あまり良い気分ではないと思う。

なのに、彼女の手つきや行動には常に深い思いやりが溢れている。

その様に俺は熱いものがこみ上げ、気づけば彼女の胸を揉み始めてしまっていた。

「んう、ちよっと……お、お乳、そんなに揉んでいいなんて、あ、こら、服をそんなにしては、脱げてしまいますわ……」

頬を染めるベアトリスに胸を高鳴らせつつ、俺は彼女の胸元に手をかける。

そして横乳を大胆に露出する形状の服を真ん中へ寄せると、大きな乳房がついに露わになった。

(生で見ると、ますます凄い……！)

仰向けなのに立体感を失わない乳肉。

桜のように上品な桃色の乳輪に、ぷっくりと少し大きめの乳首。

出会った時から気になっていた果実は想像以上で、俺はしばし見とれてしまう。

「で、デカ乳と罵りたいなら、好きになさい。でも、セックスをやめるのは無しですわよ……！」

……こんな至宝を見せつけた女性が口にする台詞ではない。

俺は困惑や呆れを通りこし、軽い怒りを覚えた。

なんとも理不尽だとは思っけれど、でもどうしたって言わずにはいられない。

「こっちの台詞だよ……っ！ もう絶対、色々しちゃうからね！」

「え？ あっ!? そ、そんな余計なことをしている場合じゃ……！」

抗議するベアトリスをpushさえつけ、俺は彼女の乳首に吸い付いた。

頂点に触れないようにしつつ乳輪をじつとりと舐め、ベアトリスが背を浮かせたところで、思い切り乳首を舐めしゃぶる。

すると、ベアトリスは予想外の行動に出た。

ベッドの上にあった枕を引き寄せ、自分の顔の上に乗せてしまったのだ。

「ベアトリス……？」

「もごもご、もごもご……」

白い枕に遮られるせいで良く聞き取れないが、どうやらヴァイオレットやネレイダ、エフィさんに声を聞かれるのが嫌ということらしい。

なんとも強引な対策に可笑しくなるけれど、その反応に手応えも感じた。

見れば乾ききっていた彼女の局部が、触らなくてもわかるくらいに濡れている。

俺は彼女が快感を覚えてくれることに嬉しくなりつつ、再び果実にしゃぶりついた。

「ちゅっっっー！」

「っ、むぐ……んっ！　ふう……っー！」

しつとりと、手のひらに吸い付くような肌。

相手を受け止め、呑み込んでいくような柔らかかな乳肉。

ぶつくりと膨らみ、^{けが}汚れの無い桃色の乳輪。

舌で少しつつくだけベアトリスが身体を跳ね上げて反応してくれる、敏感な乳首。
(ベアトリスのおっぱい、すごく美味しい！ ずっと吸い付いていたい！)
我ながら完全に変態の思考だけれど、そうなってしまふほどに彼女の至宝は素晴らしい。

「ふう、ふっ！ う……ふうっ≡」

枕で顔を隠し、嬌声を抑えるベアトリス。

たっぷりと彼女の至宝を堪能した俺は、そのままベアトリスの下腹部へと移動する。
そして細身だけれど女性らしいラインを保った脚、その内腿に舌を這わせた。

「はうっ!? んうう！」

くぐもった声が枕の向こうから上がり、彼女は脚をばたつかせる。
けれどそれは抵抗というよりも、驚いて身体が反応したといった感じ。

その証拠に軽く押さえるだけで動きは止まり、再び舌を這わせても抵抗はない。
代わりにベアトリスの口からは甘い吐息が漏れ出した。

「……っ！ ふっ≡ふう……っ≡」

その反応に安堵しつつ、内腿から鼠径部へゆっくりと舌を移していく。
そしてついに、彼女の秘裂に舌を差し込んだ。

「うううッ≡」

途端にベアトリスの身体が跳ね、奥のほうからじゅわりと愛液が溢れ出す。

はつきりと甘くなった吐息がもつと聞きたくて、俺は大胆に舌を動かした。

(ちゃんと感じてくれてる！)

ぢゅっ、ぢゅぞぞっ！　ぴちゃ、ぴちゃぴちゃっ！

淫らな音が鳴ってしまうのもお構いなしで、彼女の大切な場所を舐め回す。

「っ≡くふっ≡う……ふうッ……≡」

声を我慢しているせいだろうか。

彼女の下半身は上下左右にひっきりなしに動く。

それでも俺はベアトリスの小ぶりのお尻を驚掴みにし、舌を離さない。

「うううッ≡」

すると彼女は唸り声とも嬌声とも付かぬ声を出しつつ、俺の首を両脚で締めてきた。

(んぐううっ!?　く、苦しいっ！)

意図せず寝技をかけられる側になってしまったが、しかし悪いことばかりではない。

柔らかい太腿に頬を挟まれ、蜜が溢れてやまない局部に顔面が押し付けられるのだ。

(苦しいけど、天国！)

俺は嬉しさと共に彼女の秘所を舐め回し、ついに彼女のクリトリスへと吸い付く。

瞬間、ベアトリスの声なき声が部屋へ響いた。

「~~~~~ッ≡≡≡」

彼女の両脚がぎゅっと締まり、勢いよく吹き出した愛液が顔にかかる。

そのままベアトリスは幾度か身体を跳ねさせ、やがて俺の顔は解放された。

「ふうっ………はあっ………あ………ッ………はあ………っ………」

乳房を上下させ、息も絶え絶えといった様子のベアトリス。

よほど苦しかったのか、顔を隠していた枕から口だけ露出させている。

(ま、まずい！ やりすぎた!!)

気持ちよくなって欲しかったけれど、これでは追い詰めてしまったただけだ。

俺は慌てて身体を上へ移動させ、ベアトリスの様子を確認する。

「ごめん！ ベアトリス、大丈夫!？」

「は、はやく、して………」

「早く、あ、飲み物!？」

ここは密室ではあるが、それでも不思議な施設の一室だ。

ネレイダに聞けば飲み水くらい手に入れる仕掛けがあるかもしれない。

急いでベッドから離れようとして、それはできなかった。

「も、もう………逃がしませんわ………!」

掠れた声を出したベアトリスが俺の手を掴んでいたからだ。

彼女はそのままぐいと俺を引き寄せると、潤んだ唇を動かす。

「……お、おち×ちん、はやく……」

「えっ!？」

俺は驚嘆する。

確かに部屋から脱出するのは早い方が良い。

けれど今の状態では、と思った俺は大きな勘違いをしていたらしい。

彼女の可愛らしい唇はむっと尖った後、少しの間を置いて密やかな声を出した。

「も、もう、我慢、できないって言っておりますの……!」

「!!」

「……そ、それとも、わたしのみっともない姿に、呆れてしまったのでして……んむっ!？」

その言葉を聞き終わるやいなや、俺はすぐにその唇にしゃぶりついた。

なんて罪深くて、柔らかくて、素敵な唇か。

そんなものを放りだしていたら、悪い牡に食べてくれと言っているようなものじゃないか!

「むっ! んちゅっ≡むうっ≡んっ!？」 んむうっ≡」

彼女の口の中を舌で思い切り犯す。

上唇も下唇も、肉厚の舌も……どれもが甘くていじらしくてたまらない味だ。

「ぷはっ、許さないからね、そんな可愛いことばっかり言っ!」

「な、何を言っ……あっ!」

戸惑いの声をあげる彼女の局部に、俺は肉棒のさきを何度も何度も擦り付ける。

先走りか愛液が分からないような淫らな汁を塗りたくった後、俺は彼女を一気に貫いた。

「いくよ、ベアトリス……!」

「は、はいつて、あゝあ、あうツ!」

肉棒が大切な膜を越えて行き止まりに達すると、ベアトリスは魅惑の山脈を震わせた。

それに伴って下腹部がびくびくと波打ち、彼女は腰を浮かせたり沈めたりしている。

ただ痛みはあまり無かったらしく、俺が腰を動かすと彼女はすぐに甘い吐息を漏らし始めた。

「あうツゝん、ふっゝむうっゝうう……っ!!」

嬌声が漏れたことを自覚したのか、彼女は再び枕で顔全部を隠してしまう。

そんなふうになればそれなりに苦しいだろうし、不慣れな相手には穏やかに始めなきゃ駄目だ。

それは分かっている、分かっているんだけど……!

「はあっ! はあっ! はあっ!」

「んっ!? んツゝふうツゝううツゝ」

俺のピストンはすぐに動物的なものに変わっていつてしまう。

(おっぱいもおま×こも丸出しで顔だけ隠すなんて……ベアトリス、すけべすぎるよ!)
ぱんっぱんっという音と共に、極上の獲物を味わう牡。

牡の横暴を必死に耐え凌ぐベアトリス。

側はたから見ればそう見えるだろう。

「グツ≡ふーっ≡ふーっ≡ふーっ≡」

けれど内情はさほど時を経ないうちに逆転していた。

気付けば、俺が歯を噛み締めて耐える状況に追い込まれていたのだ。

(おっぱい、揺れすぎ！ 見てるだけで、やばい、かもっ！)

まず耐えなければいけないのは視覚を襲う魅惑、主に彼女が弾ませる乳房だ。

極上の至宝が上下に跳ね、その威力はより凶悪なものになった。

暴れる爆乳を長く目で追ってしまえば、その視覚情報だけで射精してしまってもおかしくな
い。

無論、ペニスを受け入れる蜜壺も容赦がない。

(腔なか中の、順応が早すぎる……！ こんなので、どんどん気持ちよくなっちゃうって！)

挿入したばかりの時は締め上げられるというより、包まれるという感触が近かった。

きつとたつぷりと濡れた腔壁が肉厚だったから、そう感じたんだと思う。

しかし今は肉厚な腔壁の気持ち良さはそのままに、強烈な圧がペニスを追い詰めてくる。

(ふわふわな壁が寄ってくるから、逃げ場がない！)

もはや包まれるなんて生易しいものではない。

そこにあるのは、肉棒を窒息させようとする悪魔の壺だ。

「はあっ、はあっ、ああっ、すごい、気持ちいいっ！」

「敢えて言葉にすることで、少しでも快樂を逃がそうとする。

互いの快樂が増すほどに部屋の脱出が近づくのだから、すぐに果てるわけにはいかないのだ。今は持ち出すべきじゃないとも思うけど、男としての矜持だつてある。

しかし、だとしても俺は劣勢であつた。

「ふーっ≡ううっ≡んっ≡んっ≡うッ≡」

漏れ聞こえるベアトリスの艶めいた声と、揺さぶられる乳房。

そして、蜜壺によつて甘美に窒息させられるペニス。

どちらも俺の射精欲を強烈に煽るばかりである。

(もつとベアトリスにも気持ちよくなつてもらいたい……っ！)

劣勢を覆すべく、俺は視線を奪つてやまないベアトリスの乳房を掴んだ。

「ッ!？」

同時に、ベアトリスの身体がびくつと震える。

俺はその反応に確信を得て、やや乱暴に彼女の乳首をつねつた。

「んっ~~~~んっ~~~~ッ≡≡≡」

びちゃっ！ びちゃびちゃっ!!

枕を顔に押し当てたままのベアトリスが、海老反りになって潮を吹く。

するとベッドの下がぼんやりと緑色に発光を始めた。

(これが……絶頂を検知してるってことか……?)

腰を止めて石の扉のほうを確認すると、それもうっすらと発光していることがわかった。しかしその光は弱く、本当にぼんやりといったものだ。

俺は直感的にもっと光が必要なだろうと感じた。

今まで間近で見た遺物は、その効果を発揮する際は強烈な光を放っていたからだ。

ならば俺もベアトリスも、もっと共に気持ちよくなる必要があるということだろう。

しかし理性的に部屋を分析している余裕はすぐに無くなった。

「ふーっ ≡ ふーっ ≡ ふーっ ≡」

枕の下から吐息を漏らすベアトリスが自ら腰を持ち上げ、ピストンの再開をねだるように下半身を動かしていたからだ……!

「このっ！ そんなことしたら、もっとしちゃうからね！」

「んぐッ ≡ んッ ≡ んぐうッ ≡」

堪らなくなつた俺は激しいピストンを再開し、改めて彼女の乳首へ指をかける。

そして乳房が尖って見えるほどに持ち上げると、ベアトリスは再び潮を吹いた。

「んふうッ ≡ おッ ≡ んぐぐぐぐぐッ ≡ ≡ ≡」

顔だけ隠した彼女は絶頂に狂い、極上の身体を暴れさせる。

同時にペニスを窒息させている蜜壺も暴れ、俺の牡も暴走状態へと突入してしまった。

「ああ、ベアトリス……ッ！」

「おッ≡ぐッ≡んッ≡ふっ≡んっ≡」

ごりごりとベアトリスの蜜壺を削り取るようにペニスを突き入れる。

けれど彼女の膣壁はそのすべてを受け入れ、たっぷりと仕返しをしてくる。

動けば動いた分だけ撫で上げられる裏筋。

離れようとしても離してくれず、鈴口を強烈に吸い上げる子宮口。

蠕動する膣壁によって責め続けられるカリ首。

(射精したい……っ！ でも、もっと、少しでも長くこの快感に浸りたい……！)

相反する、自分勝手な欲望。

しかしその間に、もう一度唇を見せたベアトリスの声が割り込んできた。

「あっ≡はあっ≡おち×ちんっ≡がまんしてっ≡だめっ≡あっ≡でしてよ……あッ≡」

ピストンに身体を揺らしつつも彼女は続ける。

「ご、ごっちは、もう、イきまくってますのよっ≡ほ、ほら、またっ≡あッ≡≡≡」

びちゃびちゃっと再び潮が俺の下腹部へとかかる。

がくがくと彼女の下半身が派手に震え、俺は思わずピストンを止めてしまった。

しかし、それを咎めるようにベアトリスの両脚が俺の腰へと巻きつく。

「はあっ≡はあっ≡な、生意気言ったから、ぴゅっぴゅ、してくれないなんてっ≡そんなの、嫌ですわ……はあっ≡あっ≡」

そう言っつて彼女は腰を円状に動かして、子宮口で鈴口を刺激してくる。けれどそれが射精の直接的な原因ではない。

俺にトドメをさしたのは、結局ベアトリスの唇から出た言葉だった。

「わ、わたしのことも、すきに……ッ、なっつてえ≡」

かあつと全身が熱くなり、俺は彼女がくねらせる腰を両腕で掴む。

そして亀頭が抜けてしまうギリギリまでそれを遠ざけ。

「ベアトリス……ッ!!」

彼女を道具のように引き寄せて、子宮口へ煮えたぎる牡を放った。

ーードビュルルッ!! ビュルッ!! ドビュルッ!! ビュクッ!!



「おツ≡おおツ≡≡≡つれしつ……いッ≡ツぐつ≡いぐいぐ、イグウつつつツ≡≡≡」
ベアトリスの身体が跳ね上がる。

それはもはやブリッジといってもいい状態で、俺の胸のほうにまで吹き出した愛液が飛び散る。

「おツ≡あうつ≡ま、まだ射精^でてます、のお……っ≡」

枕の下から覗く唇からははつきりといやらしい声がでている。

それもだらしく開いており、可愛らしい舌まではみ出していた。

当然、そんな淫らかな様子に俺が耐えられるはずもない。

「まだ、射精^だすよツ！」

「え、あつ≡ま、まら……だしゅ？」

うわ言のように言うベアトリスの乳首を思い切り引っ張り、俺は改めて腰を突き入れる。

目的は彼女がしつこく俺に擦り付けてきた子宮口だ。

「あああツ≡お、おちちつ≡≡ひっぱらないでえっ≡≡≡」

「嫌だっ！ もっと引っ張るし……もつとっ、ああっ、射精^でるツ!!」

ービュルルツ!! ビユクツ!! ドビュルルルツ!!

「はあんっ!? おツ≡しゃせい、またきてる……ッ≡くるっ≡おま×こも、くるうツ≡≡≡」
再びの射精はもはや義務のようなものだ。

いやらしい声をあげ爆乳を揺さぶり、ペニスを窒息させようとしてくる女体に敵うはずがない。

一度射精の味を知ったら、蛇口が壊れてしまうのが我が息子なのだ。

「う、うそっ……おち×ちん、びくびく……っ……だ、だめ、もうだめっ……これ以上は、入らな
ー」

「ベアトリスが好きだから、まだ、ああっ、射精^でちやう……っ！」

ービュクツ!! ドビュルルツ!! ビュルルルルツ!!

「あッ≡やあッ≡そんなこと、いわれたら、またすぐイクウツ≡≡≡
そこからはもう互いの境界線が無くなった。

枕を放りだしたベアトリスと抱き合い、深く口付けを交わす。

部屋を出るという目的を忘れたわけじゃないけれど、この瞬間は間違いなく互いを愛するためのセックスだった。

「好きっ≡好きいつ≡んむっ≡ちゅっ≡」

「ふーっ! ふーっ! 俺、また……ッ!」

「んちゅっ≡ちくびっ≡ひっぱって≡おねがい、でしてよっ≡」

「うん……ッ! ああ、ベアトリスッ、好きだよ……っ!」

「あ、うれしッ≡あっ≡おちち、イクっ≡おま×こ、イグッ≡すきいいッ≡≡≡
」

ービュルツ!! ドプドプツ!! ビュルルルツ!!

ドロドロに溶け合い、唾液と先走りと愛液、そして射精と絶頂を交換する。外でこの声が聞かれているなんて、もうちつとも関係が無かった。

一緒に心も身体も隠さず、抱き合って、どんどんと光を増す部屋の中で俺達は交わる。そして幾度目かの射精を終え。

「んっ……あッ……うっ……≡」

ベアトリスの反応が薄くなり、俺の白濁液の濃度も薄くなりきつた頃。

淡々とした、けれどどこか楽しげに聞こえる声が背中からかけられた。

「マスター、お疲れ様です。無事扉は開きましたので、少々休憩をなさるべきかと」

「わあっ!? ね、ネレイダ!？」

ぱつと振り返ると、そこにいたのはネレイダだ。

彼女の視線の先にいるのは、局部から時折白濁液を吹き、ほとんど意識がないベアトリス。

それはつまり、俺が本能のままに貪り尽くしてしまった女性の姿であった……。

「確かにベアトリスは最後まで嬉しそうに求めていましたが……何事にも限度はあると進言しておきます」

「……はっ」

返す言葉もないです……。

主に言うべきことを言ってくれたネレイダの隣に、少し遅れてヴァイオレットがやってきた。その顔はどこか楽しげ、というか嬉しそうな様子である。

「まあ、ベアトリスもアリストの良さが身に染みただろうし、良かったんじゃないかい？ おーい、生きてるかあ？」

「ふへへえ……しゅきい……≡づつ≡≡≡」

「あ、だめだこりゃ。生きてないね、余韻イキはしてるけど」

「マスターの射精は凶悪な余韻を残します。あそこまで射精を繰り返されれば、やむを得ないでしょう。とはいえ部屋の機能劣化により、これくらい絶頂してもらわなければ厳しかったのも事実。マスター、流石です」

皮肉まで上手とは恐れ入ります……。

「それじゃ、少し綺麗にしてやるとするかい。ネレイダ、手伝ってくれ。ほらベアトリス、こっちへごろーんつてしろ〜」

「はえ……？ づあいおれつと……？」

「呆けていても構いませんが、大人しくしててください。股間部に触れますよ」

「あつ≡ね、ネレイダあ？ な、なにして、ます、のお？」

二人がそれぞれが手に持ったタオルで、ベアトリスの身体を綺麗にしていく。されるがままのベアトリスはなんだか猫のようだ。

その様子に少し和んでいると、そばへやってきてくれたのは頬を染めたエフィさんであった。

「アリスト様、素晴らしい御業みわざでございました」

彼女もタオルを持っており、それをベッドの上に座ったままの俺に渡してくれる。

聞けば、これも部屋の一角がせり出して現れた物入れから出てきたのだという。

「ありがとう」

「そんな、勿体ないお言葉です」

俺がいうと柔らかく微笑んでくれるエフィさん。

彼女はもう一つタオルを取り出すと、俺の上半身をそれで拭き始めてくれる。

ごく当然のようにそうしてくれるのが嬉しくて、俺はつい頬がほころんでしまいそうになるが、すんでのところでそれを耐えた。

(い、いや、いかんいかん。部屋の扉を開くためのセックスだったんだし、まだ目的は達していない。ここでニヤニヤしているわけには……)

だが、そうできたのも束の間のこと。

「で？ アリスト、アタイのことは好きじゃないのかい？」

「マスター。魔法人形に対しても時には行動だけでなく、労いと愛の言葉が必要です」

「あ、あのっ、私はその、構いませんので……」

三人の可愛いおねだりに、結局俺の頬は決壊してしまうのであった。

第五章 遺跡の奥の邪悪なオーダー!?

しばらくの後。

淫猥施設たる所以ゆえんを知らしめた不思議な部屋を抜けた俺達は、いよいよ施設最奥部へと足を踏み入れた。

「わあ、凄く綺麗です……!」

「ここ、本当に室内かい？」

「森の中だと言われても、信じてしまいますわね……」

そこは床面の大半が浸水し、壁のほとんどが青々とした蔦つたに覆われた空間だった。

水面には崩れ落ちた天井から覗く夜空が映り、木々の閑しずかなざわめきが聞こえる。

(水の中で何か蒼あおいものが光ってる……光石、とは少し違うような気がするけれど)

発光しているそれをどこかで見たような気がするが、上手く思い出せない。

ともあれ沈んだ瓦礫のところどころで瞬くそれによって、相当に水が深いことが察せられた。歩ける場所は部屋の中央に走る白い通路と、その先にある円形の舞台のような場所だけ。

ただ、今の俺達にとってはそれで十分だ。

「皆さん、あちらを」

ネレイダが指さした円形の舞台上で、その女性は緑色の腰掛けに座っていたからである。

「イルゼさんっ!!」

「「イルゼ様!」」

「お、おい! あんまり焦ると危ないよ!」

俺達は彼女の名を呼び、ヴァイオレットの制止も聞かずに走りだす。

到着してみれば、その腰掛けは古い玉座のようなものが蔓によって覆われたものらしく、近くには何やら杖のようなものが転がっている。

しかしそれらが認識できるほどに近づいても、そこに腰掛けたイルゼさんは俺達に対し一切反応を見せなかった。

「イルゼ様! お迎えに参りました、エフィです!」

「ベアトリスです! イルゼ様、お声をお聞かせください!」

「イルゼさん……っ!! 俺の声、聞こえる!?!」

勢い込んでその身体に触れても無反応のまま。

いつも親しみのある光を灯ともしている大きな瞳も、今は仮面の下で瞼まぶたを閉じたまま、開かれる気配もない。

彼女の身体に何かあったのかもしれないと不安になった俺達に、すぐ後ろからネレイダの声がかけられた。

「セラーフアは休眠中、分かりやすく言えば深い眠りについていて健康状態に問題は
ありません」

彼女はそう言うと、イルゼさんの胸を指差す。

そこは規則正しく上下しており、彼女の顔付近に耳を近づけると穏やかな息遣いも確認できた。

落ち着いてみれば、顔色もいつも通りといった様子であることが分かる。

「ああ、良かった！ イルゼ様はご無事なのですね」

「ぺったんこ、そういうことは先に言っておくべきですよ！」

「私は当初から同じことを言っています。デカ乳の理解力に問題があるのでは？」

「ちよつと！ 失礼ですよ！」

二人の小競り合いをよそに、ヴァイオレットは感嘆の息を漏らしている。

「ごりやまた凄い別嬪べっぴんさんだね……！ 胸は大きいけど上品な感じだし、どっかの自称領主様とは大違いだよ」

俺とエフィさんは顔を見合わせて苦笑しあう。

そうですね、とは言い難い感想だからだ。

それに俺としてはベアトリスも格式を感じる上品さを持っていると思う。

「ははあん、わかりましたわ。貴女はわたしのお乳に嫉妬しているのですわね！」

「嫉妬？ そのような感覚は私にありませんが」

「いいえ！ あります！ 貴女のぺったんこな胸よりはあるに決まっていますよ！」

……黙っていれば、という条件つきだけど。

ともあれ、ネレイダが当初から言ってくれていたようにイルゼさんは無事だった。

後はこの眠りから醒めてもらう、つまりセラーファという役割を終えてもらうだけだ。

（ええと、さっきベアトリスから預かったはず）

俺は懐をさぐり、例の鍵を取り出す。

そうするとイルゼさんの正面宙空に変化が起きた。

いつか見た白い粒子が集まり、掌くらいの大きさの魔法陣が現れたのだ。

「わっ!？」

「これ、アリストの鍵に反応してんのかい……?」

「ええ。マスター、まもなく鍵穴が出現します」

ネレイダの言葉どおり、魔法陣の中央に鍵がちょうど入る穴が出現する。

不思議な現象の連続に驚きつつも、俺はゆっくりとそこへ鍵を差し込もうとした——その瞬

間。

「ぐうああッ!!」

突然両腕に激痛が走り、俺は声をあげながら鍵を手離してしまった。

「どうしたんだい!？」

「マスター!？」

「アリスト様っ!？」

「変人! どうしまして!？」

女性達が声をあげる中、鍵は床に落下して跳ね返り、水面のほうへ落ちそうになる。

(ま、まずい……!ー!)

ここまで来て、鍵を失うわけにはいかない!

俺はまだ全身を支配する痛みには耐えながら、腕を伸ばそうとして、それが出来なかった。

両腕がまるで何かに縛られたかのように動かないのである。

「ぐッ……え……っ!？」

いや、まるで……ではなかった。

俺の腕は今、本当に縛られていたのだ。

(い、糸が巻き付いて……!?! 一体こんなもの、どこから!?)

身体を自由を奪っていた原因が細くひんやりとした無数の糸であると気付いた時。

室内に聞き慣れない声が響いた。

「素晴らしい！ いやはや素晴らしいねエ!! フヒヒヒッ!!」

声のほうを向くと、その主は俺達が入ってきた通路を歩いてきていることが分かる。それと同時に直ぐ側で悲鳴があがった。

「きゃああっ!？」

「な、なんだいこれっ!!」

「エフィさん!? ヴアイオレット!？」

急いでそちらへ目をやる。

そこには同じように糸で縛られ、立ったまま身動きが取れなくなっている二人の姿があった。更にその隣ではネレイダとベアトリスも同じ状況になってしまっている。

「マスター……ただの糸ではありません……!」

「こ、この糸は……っ」

珍しく焦りを感じさせるネレイダと、忌々しく糸を見るベアトリス。

何かを察した様子の一二人に事情を聞く間もなく、男はさきほど俺達が駆けつけた通路に立っていた。

「奇つ怪な仕掛けだらけの遺跡！　そして魔法人形！　どれもこれも賢者が残した記録にも無いものばかりだよオ！　フヒヒッ！！　フヒヒヒヒッ！！」

芝居がかった台詞と気味の悪い笑い声をあげるのは、白髪を後ろでまとめた男であった。執事姿の彼の指先からは無数の白い糸が伸びており、それが俺達に繋がっている。

「グリムウエフト……っ！　どうしてこんなところっ！！」

ベアトリスの言葉で、すぐに俺はすべてを理解した。

彼女に例のネックレスを渡し、非人道的なことを強要したのがこの男なのだ。

そんな彼は大きいため息をつき、ぞっとするほど冷たい瞳を見せた。

「下等生物が許可なく口を開かないでもらえるかいイ？」

言いながら彼は後ろ手にしていた左腕を前に出す。

それはなんてことのないゆったりとした動き。

しかし俺の脳内にはけたたましい警鐘が鳴り響いた。

「ベアトリスッ！！　危ないっ！」

腕の痛みを振り切ってベアトリスの前へ飛び出すと、無数の糸が俺の身体へと絡みつく。途端に先ほどよりも強い痛みが全身を駆け巡った。

「ぐああああッ！！」

「アリストっ!？」

ベアトリスが初めて俺の名を呼ぶが、その感慨に浸っている暇はない。

「おヤア、下等生物を守るかいイ。これは面白いことをするねエ！」

にやりと笑うグリムウエフトが腕を振り、更に糸がこちらへ向かってきている。

ただ、それが俺の身体に到達することは無かった。

「させません」

拘束から抜け出したネレイダが、瞬時にそれらを手刀で叩き落としてくれたのだ。

「フヒヒ!! ワタシの糸を振りほどくとは、なかなかアに面白いねエ!!」

しかし彼の操る糸は力を失うことはなかった。

「だけど、それならこれはどうだいイ？」

グリムウエフトがニヤリと笑い、叩き落されたはずの糸が唐突に幅を広げる。

そして帯状に変化した糸の集まりが、ネレイダをあっという間に拘束してしまったのだ。

「ネレイダっ！」

「マスター……くっ……」

胴体のほとんどを帯でぐるぐる巻きにされ、悔しげな声をあげるネレイダ。

グリムウエフトはそんな彼女に顔をしかめた。

「魔法人形ねエ。確かに興味深い代物だけどオ、なんだいこの形状はア。下等生物の身体を模すなんて、悪趣味にもほどがあるよオ」

彼が虫を払うように手を動かすと、ネレイダは帯状の糸でぐるぐる巻きにされたまま、グリムウエフトから離れた水面の上へ逆さに吊り下げられてしまった。

しかしその表情を見る限り、彼女を激しい痛みが襲っている様子はない。

他に拘束されている女性達も同じ様子で、今はただグリムウエフトへ鋭い視線を向けている。とはいえ、糸を操る男がいつどんなことをしてもおかしくない状況には違いがない。

(ど、どうすればいい……！)

焦燥感に駆られる俺とは対照的に、グリムウエフトはのんびりとした足取りで近づいてきた。そして俺を頭から爪先まで舐めずるように観察し始める。

「見たところはア、男だねエ。拍子抜けするくらい普通だア……フヒッ!!」
彼が放つ笑い声と邪悪な視線。

それは皮膚の内側に虫が入り込んでしまったような、耐え難い悪寒を覚えさせる。

「にイも関わらずウ!! 魔法の素養は一切感じられない、あまつさえ下等生物の盾になろうとしたねエ! どうだい? ワタシの糸はなかなか痛かったはずだろオ? まずは痛みにどう反応するか見てみたかったんだよオ」

グリムウエフトはそう言つて、吐息がかかるほどの距離にそのおぞましい顔を寄せてきた。

「興味深い! 興味深いねエ……アリストオ。この島と同じくらい、君は興味深いよオ!!」
ぞつと背筋に冷たいものが走った時、ベアトリスの声が辺りに響いた。

「や、やめなさいっ!! 彼は首都の命を受けた者でしてよっ!!」
邪悪な執事は途端に一切の感情を失ったような表情になった。

「首都の命? それは都市調査のことを言っているのかア?」

「それ以外に何があるというのでして! 彼への手出しは、貴方の立場を危うくしますわよ!」
「ははあ……困ったなア」

彼はそこで大げさにため息をつく、不意に無数の糸と一緒に右手の拳を握りこむ。

「立場を弁えずに口を開く、下等生物の生態にはまったく困るよオ」

同時に俺の身体に激痛が走り、女性達の悲鳴が上がった。

「うあああッ!!」

「アリストっ!」

「アリスト様アッ!!」

「や、やめなさい!! やめてえ!!」

白髪の執事はニヤリと笑い、腕を振る。

すると、俺の身体に走る痛みは収まった。

「フヒヒヒ……こりゃあ面白いねエ。痛みも与えていないのに下等生物が喚わめくとはア、アリストくんは随分と大事にされているよオだねエ!」

言いながら彼は口元に手をやって笑いを堪えてみせた後、芝居がかった様子で俺に言う。

「さて、ワタシはそんなアリストくんに話したいことがあってねエ」

「はあっ……はあっ……話……？」

「聞いてくれるかアい？ なアに、悪いようにはしないよオ」

その言葉が何一つ信用できないのは、ここまでの彼の行動を見れば明らかだ。しかし俺の身体は動かさず、女性達の自由も奪われている。

(今は言う通りにして、機会を窺うしかない……)

俺が唇を噛むと、グリムウエフトはニタリと笑みを浮かべる。

そして彼は上機嫌に話を続けた。

「ワタシはグリムウエフト。無能な貴族の執事をしているんだけどオ、たまたまアリストくんと同じ日にコスタヴィーノへ来ていてねエ？」

彼はそこで、フヒヒ、といやらしく笑い、指から出した糸を室内の水面へ垂らす。

「なんでも海にあった霧が晴れたらしいじゃないかア。だからワタシも興味湧いてさア」

水面に落ちた糸の周囲が細く凍りつき、人ひとりが歩ける程度の氷の道となった。

彼はそうして道をつくり、海を渡ってきたということなのだろう。

「一足先に遺跡を調べていたら、あら大変。後続に君達が来ちゃったってわけだよオ」

つまり彼は事前にコスタヴィーノに潜伏し、俺達の動向を探っていたのだ。

そして糸の魔法を利用して俺達とは別のルートを進み、ここへ辿り着いたところだろう。

「さて、そこでアリストくんに相談んだけどオ」

邪悪な執事はニタリと笑い、座ったままのイルゼさんを指差す。

「ワタシはねエ、その検体が欲しいんだア」

わざとらしく糸をちらつかせながら、彼は続ける。

「下等生物に魔法的能力を付与する遺物、そしてその影響下にある生身の検体……研究者として非常に興味深いし、話の分からない貴族を蹴散らすのにも都合が良さそうだろオ？」

彼が指差すイルゼさんの胸元に出現していた魔法陣はとうに消えていた。

そして例の鍵は床でも水の底でもなく、グリムウエフトの手元にあった。

おそらく得意の糸で手繰り寄せたのだろう。

「だからね、アレと魔法人形達を置いて黙って出て行ってほしいんだア」

グリムウエフトは口角を上げるが、その瞳は笑っていない。

「そうすれば命は取らないし、下等生物を何匹連れ帰ってもいい。イイ話だろオ？」

強烈な拒否感が胸にこみ上げるが、それを言葉にするより先にグリムウエフトが口を開く。

「もし、ワタシに従わないと言うのならア」

そして床から拾い上げた掌大の石を宙に投げ、指先から放った糸で真つ二つにしてみせた。

「君の首をこうしてもいいんだよオ？　まア、貴族との面倒が増えるのは本意じゃないけどね
エ」

半分になった石の片方が床へ落ち、もう片方は水面を揺らして水の底へと沈んでいく。その断面は寒気がするほど鮮やかで、俺は首の周りに冷ややかなものを感じる。

俺はその感覚に言葉も、寄る辺も失う。

(……俺に魔法が、力があれば。こんな状況でも何かできたはずなのに)

もっと早く棒術を習っていたら。

もっと早く魔法への知識を深めていたら。

(もっと早く、自分の未熟さに気づいていたら……！)

悔しさばかりがこみ上げるが、それはもう何の意味も成さない。

視界の端に入る、縛られたまま唇を噛むベアトリス。

逆さに吊るされたままのネレイダ。

腰元の魔法銃へ手を伸ばした状態のまま、身体を奪われたヴァイオレット。

蒼い瞳から大粒の涙を零し身体を震わせながらも、グリムウエフトを睨むエフィさん。

彼女達の表情からはその深い怒りと、強い悔しさが伝わってくる。

(俺のせいだ……俺が、俺が……っ！)

自らの情けなさに俯き涙が溢れそうになった時、ふと視線を感じて俺は顔を上げる。

すると目があつたのは鬼気迫る形相を収めたエフィさんだった。

「……」

彼女は何も言わない。

けれど、こんな状況でも必死に、そしてぎこちなく微笑もうとしているのが分かる。

(……何をやってるんだ、俺は!!)

俺は頬の内側を血が出るほどに噛み締め、自らを叱咤した。

不安定だった視界と気持ちが一ツキリしていく。

「そんなに長考することかいィ？ 答えは決まってると思うけどねエ、アリストくん。フヒヒ！」

ああ、その通り。

今俺がやるべきは出来なかつたことを悔やむことじゃない。

「とはいえワタシも考えることは好きだよオ？ だから少し時間をあげようねエ。その間、ワタシはこの興味深い部屋の観察でもするとしようかア」

この男をぶっ飛ばす方法だつてあるかもしれない。

(なんでもいい、この状況を打開する糸口を探すんだ……!)

俺は必死に視線を動かし、この状況を打ち破れそうなものを探す。

「!」

と、まず目についたのは真っ二つに割れた石。

グリムウエフトが足元から拾い上げ、糸を操って得意げに切断した片割れだ。一見なんの変哲もない石で、表面はくすんだ色をしている。

が、俺はその断面に視線が吸い込まれた。

糸の切れ味に慄おのいて、気づかなかった事実がそこにあつたからだ。

(あれ、半透明の橙色じゃないか!? それならもしかして……っ！)

俺は急いで水面へ視線を映す。

目的はここへ来た時から気になっていた、水中で瞬く蒼い光だ。

果たしてその正体は予想通りであった。

(光石なんかじゃない、あれは……花だ！)

壁を覆っていたのは蔦ではなく、とある植物が伸ばした蔓つるであったと理解する。

更に、俺は水面に別の光が映り込んでいることにも気がついた。

(あれは他の花か……いや、あれは!?)

それはネレイダの瞳に浮かび上がった、小さな魔法陣が放つ光だった。

逆さに吊るされたことで彼女の瞳が露出していたことが幸いしたのだ。

そして彼女のほうも俺が見ていることに気がついたらしい。

しっかりと視線が合った後、ネレイダは声を出さないままその唇を動かし始める。

あ、と、ご、ふん——

(あと五分……！)

そこで彼女は何らかの魔法を発動させる気なのだ。

となれば俺もそれに合わせよう……と決めた時、室内を興味深げに観察していたグリムウエフトが改めてネレイダに興味を示してしまった。

「ふうむ。なかなか結論が出ないようだねエ。なら魔法人形の解体でも始めるとするかア」
彼が腕を動かし、逆さ吊りになっている彼女を自分のそばへ引き寄せ始めてしまう。

(今はまずい！)

瞳がうつすらと発光していることに気づかれれば、ネレイダの魔法は阻止されてしまうだろう。

グリムウエフトには意気揚々としたままでいてもらわなければ、隙を突く機会もなくなる。

(……俺が、時間を稼がなくちゃ……！)

俺はすぐに声を出そうとしたが。

「あっ……は……っ……」

喉がまったく震えず、パクパクと情けなく口が開閉するだけだった。

俺の身体は未知なるもの、常識を超えたものを前に十全に働かなくなっていたのである。

「かつ……くっ……うっ……！」

必死に口を開けしめすることしかできない俺。

脳裏に流れるのは石をあつさり切断し、自在に形を変え、人間離れた速さで動くネレイダすらもあつかりと捉えたグリムウエフトの糸だ。

視界と痛みによつて身体に刻まれた恐れ記憶が、正常な喉の働きを邪魔する。

(くそツ!! 身体の真ん中が縮こまつてる……っ!)

俺は自分を奮い立たせるため、もう一度頬の内側を噛んだ。

(イルゼさんを失うことに比べたら、こんなただの糸だ……っ!!)

冷え切っていた身体に、喉に、もう一度熱が入る。

そしてようやく、俺の意思は音になった。

「グリムウエフト」

「あらア？」

こちらに身体を向けた執事。

「ようやく返事をする気になったみたいだねエ、出来損ないくん。フヒヒ！」

俺は一呼吸して、その言葉をぶつける。

「いやいや、今更自己紹介はもういいよ。気持ち悪い笑い声も聞き飽きたし」

「……ほウ？」

「おや、違ったかい？ 出来損ないという言葉ほど、君にぴったりなものもないと思ったからね」

すっと細められたグリムウエフトの瞳。

そこには自身が絶対的に上であるという傲慢さと、それを侵された怒りがありありと浮かぶ。それを見て、俺は彼の本質に気付いた。

(……そうか。そういうことなんだな)

魔法という先天的な力を偶々持っていただけなのに、偉くなったと錯覚し喚き散らす。その振る舞いに、俺は心当たりしかなかった。

転生前にコンビニでバイトしていた時、こういう人間はいくらも見てきたからだ。

(この男は、バイトに当たり散らすクレーマーそのものだ)

あの時は先輩に対応してもらったり、あるいは警察へ通報したりすればよかった。けれど転生したこの世界にそうした助けはない。

そしてこの邪悪な男は、俺の大切な女性達に危害を加えようとしているのだ。

ならば今こそ――

「首都で重用もされず、貴族になるほど規模の大きな魔法も使えない。女の尻を追い掛けて成果を出した気になれるなんて、番犬の仕事がよっぽど天職なんだね」

――俺が腹を括る時だ！

「……なるほど、なるほどオ」

落ち着いたフリをしながら顔を赤くしていくグリムウエフト。

怒りのあまり、その目に俺しか入ってないのは火を見るより明らかだった。

(狙い通り……！)

となれば、後は耐えるだけ。

なあに、たった五分だ。

「君が今、どこにいるのかア……ワタシの糸で教えてあげないといけないようだねエツ!!」
それで大好きな皆とコスタヴィーノに帰れるというのなら。

「ぐああああッ……!!」

こんな程度の痛み、往復の交通費にもならないね!

糸で縛りあげられた人間を、糸を束ねて作られた鞭むちが襲う。

「うあああああッ!!」

「フヒヒヒッ!! 良い鳴き声だねエ!!」

グリムネフェトによる打ち擲りはすでに三桁を数え、アリストの絶叫が幾度も響く。

大樹が生い茂らせた木々のざわめきすら遠くなり、その他に聞こえるのは女性達の悲鳴だけだ。

「アリストおおツ!!」

「アリスト様あああつ!!」

「おやめなさいツ!! おねがいつ! やめてえええつ!!」

グリムネフェトが操る糸は、彼が持つ水の温度を変化させる魔法を応用し、空気中の水分を凝固させることで作られたものだ。

更に魔法による温度操作は自然法則を凌駕し、凝固や融解という事象すら自在に操ることを可能とする。

だからこそ彼は氷を糸状にして刃物にするのも、鞭にするのも、あるいは縛った対象に鋭い冷気を放ち凍傷を与えることも可能なのだ。

「あああツ!!」

「フヒツ! フヒヒヒツ!!」

今、邪悪な執事はその全てを行っていた。

ある糸は鞭として打擲に使われ、別の糸は鈍い刃としてアリストの身体にうつすらと食い込み、またある糸は彼を拘束しながらその肌を凍らせる冷気を纏う。

しかしそのどれもが彼を死にいたらしめるほどのものではなく、絶妙な加減がなされていた。

「フヒツ! ヒヒヒツ! もっと、ももっと、ワタシの魔法を味わってくれよオ!!」

グリムウェフトの目的は、その命を奪うことではなく、自らの正当性を証明し、ひれ伏させることだからだ。

だから彼は女性達に目もくれず、ただただアリストを打擲することに執着する。

それが自らの劣等感からくる行動であること、痛めつけた男のものとは思えないアリストの眼差しに恐怖を覚えたためだということに気づきもしない。

「がはっ!! あっ!! うあっ!!」

「どうだいイ……ッ！ ただただデカい魔法を放てばいいと思っっている貴族達とはまったく違うだろオ！ ヒヒヒヒヒッ！」

夜空に木霊する残虐な宴。

執事は他者をいたぶる刹那的な興奮に陶醉し、冷静さを失っていった。

「ヒヒッ!! アヒヤヒヤッ!! わかったかなア、出来損ないくん!? 魔法も頭脳も、こうやって使っただよオ！」

だから彼は多くのことを見落とした。

一つ、彼は残忍な打擲をするよう仕向けられた側であること。

一つ、その打擲が始まってから五分が経過したこと。

最後に、魔法人形が『下等生物』型であるからと、愚かな先入観でその能力を侮ったことを。

「解析完了。水分子制御に関わる魔法波を逆位相で展開します」

ネレイダの声が始まりの合図。

それとともに室内には白く光る粒子が撒き散らされ、その変化が起きた。

グリムウエフトが操っていた全ての糸が、無害な水蒸気となって宙空へ消え去ったのだ。

「ヒビ、ヒ……ヒャ……ッ!？」

あまりに突然のことに執事は反応できず、硬直する。

それは唐突に糸から解放されたベアトリス、ヴァイオレット、エフィも同じであった。

「「……ッ!？」」

邪悪な宴の閉幕後、ごく僅わずかな間を静寂が支配する。

だがすぐにアリストの声が響いた。

「ベアトリス、ヴァイオレット、魔法を撃って!! アイツを動かさないで!!」

「「!!」」

珍しく鋭いアリストの声を聞いた二人は、彼の身体の心配を一旦忘れるという判断を下す。

「命令なんて、ぐすっ……生意気ですよッ!!」

「アタイに任せなッ!!」

ベアトリスは両手から、ヴァイオレットは魔法銃から。

それぞれが魔法弾を丸腰となった執事へと打ち込む。

「ぐウ!? こ、小癩なアツ!!」

彼は糸を広げ弾丸を受け止めようとするが、それはかなわず直撃を受ける。指の先からは力無く数本の細い糸が出現するのみだ。

「な、なぜだアツ!? うぐウツ!? がはッ!!」

その間にアリストは足元に転がった石を踏みつけ、ぐりぐりと床に押し当てて擦っていた。

「はあっ、はあっ、こ、これで……くっ……!」

しかし激しい打擲により負ったダメージは大きく、まともに立ってられない。

ぐらりとバランスを崩した彼を支えたのは、目元を腫らしたメイドだった。

「アリスト様っ!!」

「エフィさん! お願い……この、石をアイツにッ!」

エフィはアリストの言葉にはっとし、全てを理解する。

そして彼を支えたまま、軽やかな身のこなしでその石を蹴り飛ばした。

行く先は打ち込まれる魔法弾で身動きが取れなくなっているグリムウエフトの顔面だ。

「下等生物ごときが調子に乗るなアツ!!」

魔法弾を弱々しい糸で受けつつも、彼は別に生成した糸で石を粉々にしようとする。しかし彼の行動は実を結ばなかった。

壁を覆っていた無数の緑が蠢き、氷の糸よりも遥かに多い蔓が執事をしばりあげたのだ。

「な、うわああああッ!?!?!?」

声をあげるグリムウエフト。

そこへ様々な太さの蔓が殺到し、やがてその顔すらも覆っていく。

「むぐッ!! ぐぐぐぐ……ッ!」

幾重にも伸びる緑に吞まれていく執事。

アリストはそれを見て、幸運の女神が存在することを確信する。

(やった……ッ!)

特殊な石。パルフライト。

それを好物とする食石植物ロックアイビー。

その二つの要素がここに揃っていたのは奇跡という他なかったからだ。

しかしグリムウエフトを押さえつけるにはその奇跡だけでは不足だった。

彼には糸を使って蔓を引き裂き、緑の拘束を抜け出そうともがくだけの力は残っていたのだ。

「はアッ……はアッ……やって、くれたなア……っ!」

けれど、その不足した奇跡は――

「イヴシステム、機能制限を解除。戦闘状態へ移行します」

——緑の玉座に座っていた美しき天使によって補われる。

「イルゼさん!？」

「イルゼ様ツ!？」

始めに声をあげたのはアリストとエフィだった。

閉じられていた瞼を開き、宝石のように輝く瞳を明らかにした主が纏う神々しいオーラを目の当たりにし、驚きと畏敬、そして希望が緋^ない交^まぜになった感情がつい口について出たものである。

続いたのはグリムウエフトの醜悪な声だ。

「わ、ワタシの魔法がア!?　なんだというのだ、お前はア!!」

怨嗟^{えんさ}に塗れた声色は、その指先から全ての糸が消失したことに對するものだ。

彼はなおも魔力を指先に集めるが、天使の瞳から発せられる光によりそれは霧散させられる。

「敵対的対象を認識。来訪者の安全のため、術式の構築を阻害、緊急排除行動を開始します」
セラーフアのリングが強く発光した。

同時に彼女の背には左右六枚の金色の翼がはためき、宙空へ輝く粒子で構成された羽が舞う。
神話のような光景はほとんどの生命にとって祝福に映り、畏敬の念を抱くだろう。

そんな中、グリムウエフトは恐怖した。

セラーファの仮面へ収束していく光の粒子が、自身を貫こうとしていることに気づいたのだ。「ヒイツ!? ヒイイイイツ!! やめ、やめろおお!! いやだいやだいやだアあッ!!」
緑の拘束の中でグリムウエフトは必死にもがき、悲痛な声をあげる。
しかし透き通った、それでいて感情の無い声が彼へ最期を告げた。

「対象確認、照射」

セラーファから輝く二本の細い光が放たれる。

それは緑の拘束ごとグリムウエフトを貫き、彼の全身を呑み込んだ。

「あ、あああ、ああアアアああああ……ッ!?!?!」

光の中から執事の絶叫が響くが、それはある時ぶつくりと途切れる。

それは光線が消えるとともに、彼の身体もまたこの世から消えてしまったからであった。

暗く閉ざされた視界にうつすらと光が差し込む。

俺はその穏やかな明かりに誘われるまま、ゆっくりと瞼を明けた。

目に入った薄暗い天井は、ベアトリスの屋敷の寝室のものだ。

(あれ、俺……寝てた、のか?)

ああそうか。

俺はコスタヴィーノに到着して、寝る前にエフィさんとイルゼさんに気持ち良いことをシてもらった。

それで明日からの調査に向けてゆっくり眠ることに……。

「……!?!」

って違う!

ついさつき俺が目にしていた光景は、水面に浮かぶ執事服だったはずだ。

(こんなところで寝ているはずはない! だとしたらまた何か起きた!?! 皆は!?!)

急激に胸のうちで膨らむ悪い予感に慌てて身体を起こし、周囲を確認しようとする。

しかし周囲の確認は不可能だったし、悪い予感はずっとの杞憂きゆうだった。

身体を起こした俺に涙ぐんだ女性達が飛びついてきて。

「「アリスト様っ!!」」

「「アリストっ!」」

「マスター!!」

「みんなっ! って、わあっ!?!」

再びベッドに倒れ込むことになるという幸せな結末が待っていただけだったのだから。

——女性達の温もりをしっかりと感じさせてもらった後。

俺は改めて彼女達とベッドに座り、まずはネレイダからここまでの顛末てんまつを説明してもらったことになった。

ミストコープ遺跡は突如として崩壊をはじめ、遺跡もろとも島全体が海に沈んでしまったこと。

セラーファの力で全員揃って船の上へ転移し、そのままコスタヴィーノへ戻ったこと。その間、俺はずっと意識を失い眠り続けていたということ。

「ー状況としてはそのような形となりました」

「そっか。そんなことがあったんだ……」

信じがたい話ではあるけれど、窓から見える海にネビュラ島の姿はもう無かった。

「アリスト様は二日、ぐすっ、お眠りになっていらっしやいました……もう目を覚ましてくださらないかと、ぐすっ……」

一度は収まった涙を溢れさせるエフィさん。

その顔を雲間から漏れる穏やかな月明かりが照らす。

「心配かけちゃってごめんね、エフィさん」

「いいえ、いいえ……ッ！ っこうしてまたお話しできているだけで十分ですー！」

一方で、特大の嬉しいニュースもあった。

それは今この場に、すっかり元の性格を取り戻したイルゼさんがいることだ！

「無事で本当に良かったですわ、アリスト様……っ！」

「イルゼさんこそ、無事で良かった！」

「きゃっ！ ふふっ、もつとくっついてくださいませ♪」

穏やかな笑顔と甘い香り、そしてぎゅっと当てられる大きなおっぱいの感触。間違いない、イルゼさん本人だ。

ただ、彼女は完全にいつものイルゼさんというわけでは無かった。

「あれ？ イルゼさん、その服……」

というのも、彼女の衣装はセラーファであった時のままなのだ。

「仮面は無くなったのですけれど、服は元に戻らなくて……」
困っていますの、と彼女は自分の服を触ってみせる。

着崩す程度はできるものの、完全に脱ぎ去ることはできないのだという。

「時折湯浴みに入ったような感覚がして、身体は綺麗になっているのです。ですけど、着替えが一切できないのは困りものですわ」

この奇妙な状況について、ネレイダが続けた。

「羽や仮面の消失、そしてイルゼの人格が元に戻っていることから、ミストレスリングはその機能のほとんどを失ったと判断できます。しかしまだ動力はある程度残っているようですね」

ただ幸いなことに、イルゼさんの健康状態に悪影響を及ぼす心配はないという。

「つまりマスター、イルゼ共に健康な状態で再会できた、ということですよ」

「本当に、ぐすつ、良かったです、イルゼ様もアリスト様もご無事で……！」

「変人とイルゼ殿が抱きあっているけど、抗議しなくていいのかい？ ベアトリス」

「……わたしは貴女のそういうところが嫌いですよ」

女性達の姿を見ながら、俺は目的を達したことを噛みしめる。

一方で、改めて例の島が保持していた技術の高さも実感させられていた。

俺は肌触りの良い寝間着をめくり、自分の身体を触ってみる。

「色々されたはずだったんだけどなあ……」

そこにはグリムウェフトにやられた打擲や凍傷の跡はもちろん、痛みすら残っていなかった。

ネレイダ達が魔法によって治癒してくれたらしい。

「ぺったんこの癖に生意気ですわ。まあ、とても助かりましたけれど」

「しっかしねえ、傷の治癒を促進する魔法なんて聞いたこともないよ。ネレイダ、アンタは何回常識を覆したら気が済むんだい？」

「二度は出来ません。イヴ達の持つ動力すべてを使い切りましたので」

感謝してもしきれないが、同時に寂しい話を聞くことにもなった。

他にいたイヴの皆さんは俺を治療するべくネレイダにその力の全てを渡したそうで、彼女以外は皆遺跡とともに海底深くへ沈んでしまったそうなのだ。

「本当にありがとう。それと……ごめん。皆せつかく目覚めたっていつのにも、俺のせいだ」
ネレイダを見るかぎり、彼女達の感情が豊かだったことは想像に難くない。

千年以上ぶりに目覚め、やりたいこと、見たいもの、色々あつたんじゃないかと思う。
その機会を永遠に奪ってしまったのだと思うと、非常に辛くやりきれない気持ちになる。

「マスター。勘違いなさっているようですが、彼女達は消滅したわけではありません」
「え……？」

うつむく俺に、ネレイダはさも当然といった様子で再び常識を覆してみせた。

「確かに今度は施設同様深海へ潜つての休眠ですので、活動の再開が難しいのは事実です」
ネレイダは頷き、そして自身の胸元に手を当てた。

「とはいえ彼女達の身体は保存されていますし、感覚や思考の共有は継続しています。私を介してこの会話も聞いていますし、景色も見えています」

「そ、そうなんだ！」

「ええ。もちろんセックスの感覚も共有されますので、また体験させてほしい、という申し出が
今も大量に出されています」

「そ、そうなんだ!？」

素直に喜んで……いいのかな？

ともあれネレイダを通して今の世界を感じてもらえるなら、それは良い話だと思う。

「イヴの代表として今後も私はマスターにお供いたします。イルゼとエフィにも許可は得てありますので、末永くよろしくお願いいたします」

「ネレイダ殿を寂しがらせたら、沢山のイヴさん達に叱られてしまうそうすわ。ふふっ♪」

「メイドさんとしても働いてくださるそうです。ネレイダさん、今後も一緒にアリスト様をお支えしましょう！」

「もちろんです」

既に根回しまで済んでいるとは流石である。

イルゼさんはセラーフアであった時の記憶があると言うから、色々とスムーズだったのだろう。

俺としても彼女と一緒にいてくれるのは心強いし、嬉しいし、断る理由なんてない。

(俺の意思確認はまったくなかったけど、まあ……いつか！)

既に仲睦まじい様子の三人を見ながら頬を緩める。

と、そんな俺の前にベアトリスがやってきた。

「……皆様には既にお伝えしたことの繰り返しとはなりますけれど」

そこまで言うと、彼女はベッドから降りて床へ正座し、深々と頭を下げる。

「この度は大変、大変……」ご迷惑をおかけいたしました」

ベアトリスは床にしっかりと頭をつけ、続ける。

「此度の件、わたしの不徳が原因であったことは疑いようもありません。にも関わらず、皆様は最後までわたしを助け、守ってくださいましたわ。このベアトリス、これまでの不敬を謝罪すると共に、その御恩を一生かけてでもお返しすると誓わせてください」

真剣な声色にしんと部屋は静まり返った。

窓の向こうから幾度か波が打ち寄せる音が聞こえた後、彼女は同じ姿勢のままと言う。

「その証明としては不躋ぶしつけですけど、皆様から一つずつ申し付けをいただいております。ですからどうぞご所望を。どのような難題であれ、この心が真まことであることをご覧に入れましてよ」

言い終わると彼女は顔を上げ、まっすぐな瞳で俺を見る。

潤みの残るその双眸そうぼうには、夜空に浮かぶ月が曇りなく映っていた。

(ここで何も無い、って言うほうが失礼だな)

ただ、これといって頼みたい内容が思いつかない。

俺は助けを求め、まずはヴァイオレットへと視線を投げた。

「アタイは船員全員分の酒を頼んだよ。ベアトリスの懐から、普段は絶対に飲めない高いやつを買ってもらおうってね♪」

「おお……！」

なるほど、彼女らしい素敵なお願いごとだ。

続いて、俺の視線は彼女の隣に座るネレイダへ移る。

「この都市で最も高級な食材を使った食事を。動力にもなりますし、千年以上ぶりの食事はとびきり良いものを皆で共有したいのです」

「あ、そっか、そうだね……!」

これもネレイダだから思いついたお願いごとだと思う。

「ちなみに動力を回収する効率は、マスターとのセックスのほうが数段良いです」
「なるほ、どえッ!」

ネレイダの動力ってセックスで回収できるの!?

凄く気になるけど……今の本題はそれじゃない。

「エフィさんは何を?」

「武術書の揃えをお願いいたしました。もっとアリスト様をお守りできるようにと!」
静かに闘気をみなぎらせるエフィさん。

気持ちは嬉しいけれど、あまり俺を置いていかないでほしい気もする……。

俺が一瞬微妙な表情をしてしまったのを見逃さなかったのか、くすくすとイルゼさんが笑う。

「わたくしは植生の凶鑑をたっぷりと。アリスト様、またぜひ色々教えてくださいませ♪」

「っ! も、もちろん!」

危なかった、イルゼさんのいじらしさと可愛らしさで心臓が止まりそうだった。

また一緒に凶鑑を見たら、素敵ないたずらをしてもらえたりして……って、そうじゃなくて!

(どんなお願いがいいかな……あ！)

そしてようやく、俺は自分のお願いしたいことに思い当たった。

「落ち着いたら、皆でウイメに遊びに来てほしいな。これでお別れなんて寂しいから」

ウイメとコスタヴィーノは遠く旅の労力も大きいし、ベアトリスは今後忙しいだろう。

だとしても彼女はもちろんのこと、ヴァイオレット達にも絶対にまた会いたい！

(それにベアトリスには今回の件でのお願いだと言えば、バンドンで混浴してもらったり、ブラジャーを着けてもらったりできるかも……！)

考えただけでも胸が高鳴っちゃうね！

一方で、ベアトリスは俺が下心に塗れていることには気づかなかったみたい。

彼女はきよとんとした後、口を尖らせている。

「……そんなことでよろしいの？」

そこで楽しげな声をあげたのはヴァイオレットとネレイダであった。

「言われなくても会いに行くのに、ってことかい？ ふふっ♪」

「なっ!? そ、そういうことでは——」

「会うだけでなく、マスターにセックスを要求すると考えられます。デカ乳ははしたないですね」

「は、はあっ!? ペったんことわたしは違いますの！ 同じにしてもらっては困りましたよー！」

やいのやいの、と言ひ合いが始まる三人。

その賑やかさにイルゼさんとエフィさんがくすくすと笑う。

(うん。俺はもう充分、素敵なものを貰ってるよね)

異世界で手に入れた宝物を取り戻せたのだと噛み締めつつ、俺はベアトリスに手を伸ばした。彼女は不服そうな様子は残しつつも、そこに手を重ねてくれる。

そして少しだけ頬に朱を浮かべた。

「必ず参りますから、やっぱり来るなは無しでしてよ？」

俺はできるだけ大きく頷いて手を引くと、彼女は控えめにベッドの上へと戻る。

ただ、これで話はまとまった……とはならない。

「それでネレイダ、改めてイルゼさんの服についてだけど」

イルゼさんの身体が健康とはいえ、服が脱ぎ着できないという状態を放置はできないからだ。

「問題解決にはミストレスリングが持つ残存動力の枯渇、あるいは機能解除の必要があります」
ネレイダの後に口を開いたのはヴァイオレットだ。

「アタイ、例の鍵は転移の前になんとか拾ったんだけどさ」

困り顔のまま、彼女は手を広げる。

するとそこには、辛うじてかつて古びた鍵だったとわかる程度の残骸があった。

当然ながら、バラバラに砕けたそれが機能を果たせるはずもなく。

更にミストコープ遺跡が沈んだため代わりの鍵を用意する手立てもないらしい。

ではリングの動力枯渇を待てばと思ったが、ネレイダによれば最長で半年前後かかるという。「大半の機能が停止したことで、却って動力消費が抑えられてしまうのです」

何か糸口がないかと俺は、半年の辛抱ですわ、と苦笑するイルゼさんの服を改めて観察する。(こうして近くで見ると凄い格好だな……！)

胸は首から下がった帯が乳首を隠すだけで、その左右からは生の乳肉が溢れているし。ハイレグ過ぎる構造のため、局部は最小限の布でしか覆われていない。

(つて、布が密着しすぎて割れ目が薄っすら浮かんでない!?)

これ以上直視するのは危険だ……！

そう判断した俺はネレイダに声をかける。

「他に何か手はー」

しかし俺が言い終わる前に、イルゼさんの悲鳴があがった。

「きゃっ!? ま、また!？」

咄嗟にそちらに目をやると、そこでは驚くべきことが起きていた。

イルゼさんの顔にどこからともなく白い粒子が集まり、再び仮面が現れたのだ!

同時に、天使を思わせるリングや六枚の羽もじわじわと復元を始める。

俺は咄嗟に彼女の手を握るが、幸いなことにイルゼさんの人格はそのままであった。

「イルゼさん、大丈夫!？」

「え、ええ。少し、不思議な感覚はありますけれど……」

しかしほっとしたのも束の間、今度は別の異変が起きた。

突如、ベッドの上に金色の魔法陣が広がったのである。

「わっ、なんだいこれ!？」

「きゃあっ!？」

見れば俺とイルゼさん以外の女性達が、揃ってベッドの外で尻もちをついている。

「ネレイダ、どうなっています!？」

「これは……短距離転移によって、寝具の外へ追い出されてしまったようです!」

ネレイダが焦った声をあげている間に、更に事態は進行する。

俺とイルゼさんの足元からシャボン玉のような透明な膜が広がりはじめ、あっという間にベッドを包みこんでしまった。

「あっ、なんでしよう、これ、すごい弾力で……!」

「どんなに力を入れても……くッ、破れませんわ! もうっ! 人の屋敷に妙なものを出さないでくださいませ!」

「魔弾が吸収されちまうよ! これもなにか特殊な魔法なのかい?」

なにやら特殊な膜のようで、俺達以外の皆は内側には入れないらしい。

「アリスト様、イルゼ様！ お怪我はありませんか!？」
不思議な膜と格闘しながらもこちらを心配してくれるエフィさんに、俺達は揃って声をかける。

「うん、こっちはひとまず平気だよ！」

「ええ、怪我ありませんわ！」

一方で、しばし考え込んでいた様子のネレイダがはっと顔をあげた。

「軟性の魔法障壁……つまり、攻撃する意図はない。だとすれば、これは——」

だが彼女の言葉を聞き終わる前に、俺の身体は何か柔らかいものに押される。

それはイルゼさんの大きなおっぱいだった。

彼女は何故かそれを俺に押し付け、勢いよくベッドへ押し倒してきていたのだ。

「わぷ……！ ちょ、イルゼさん!？」

「もっ、申し訳ございませんっ！ ですが身体が勝手に、動いてしまっ……あっ！」

戸惑うイルゼさんの天使のリングが光る。

すると俺の両手首と足首に魔法陣が現れ、まるでベッドに貼り付けられてしまったかのように動かなくなってしまった。

「何だこれ……ってイルゼさん!? どうして俺の服を脱がすんですか……わあっ!？」

「ああ、ごめんなさいアリスト様！ わたくしの手が勝手にいー！」

いやいやと首を振りながらも、イルゼさんの手は手際よく俺から全ての服を奪い去っていく。それでも彼女の腕の動きは収まらず、今度は彼女自身の胸元に手をかけた。

(ま、まさか！)

イルゼさんも俺と同じことを考えたのだと思う。

彼女は顔を赤くしながら声をあげ、ぶんぶんと首を横に振る。

「きゃっ！　そ、それは、やめてくださいましっ！」

しかしその声を無視するかのようにイルゼさんの腕は動き、ぶるんつと果実が露わになった。

(やっぱりイルゼさんのおっぱい、すごい……！)

瑞々しく張りのある果実が月明かりに照らされ、俺はごくりと喉を鳴らしてしまう。

「……ってイルゼさん!？」

しかしそうこうしているうちにイルゼさんは更に驚くべき行動に出ていた。

するすると俺の下腹部へ下がり、今度は肉棒に頬ずりしはじめたのである……！

「ああ、申し訳ありませんっ！　でも、身体がどうしても言うことを聞かないのですっ……！」

イルゼさんは羞恥に顔を赤らめているけれど、その表情に反して頬ずりは止まらない。

もちろん大好きな彼女にそんなことをされたら、行き着く先は火を見るより明らかだ。

「ああ、アリスト様のが、大きく……」

「うう、ご、ごめんなさい！」

俺が謝る側になったところで、ネレイダの声が透明の壁越しに響いた。

「マスター！ それはミストレスリングの自己修復機能によるものと思われませう！」

「じ、自己修復機能……!？」

俺はネレイダに続きを聞こうとするが、その間にも状況はまた進展した。

「だ、駄目ですわ！ 身体が、勝手に動いてしまいますわ……っ！」

悶えるようにそう言ったイルゼさんが、硬くなった俺の肉棒を胸の谷間に挟み。

更に谷間から顔を出した亀頭にしゃぶりつき、激しいフェラチオを始めてしまったのだ！

「ありすとひやま、しゅみましえんっ、ぢゆるる≡でもっ≡からだがっ≡ぢゅぽっ≡」

「くあっ！ ちょ、ああっ、イルゼさん、それ……くう！」

張りのある乳肉で扱かれつつ、激しく吸引される俺のペニス。

頬ずりとは比べ物にならない快感を受け、すぐに下半身が甘いしびれに支配されていく。

脳内が桃色に染まり始める中、ネレイダの声が聞こえた。

「ミストレスリングが強引にイルゼの身体を使い、性行為で機能回復しようとしているのです！」

「せ、性行為で、機能を回復!？」

「リングは潤沢な動力があれば自己を修復できます！ 動力の確保手段はイヴと同じくセック
ス。だからイルゼが愛する存在が近くに来るまで、機能を停止させて動力を温存していたので

す！」

つまり俺は、ミストレスリングの非常食と見なされたってこと……!?

「この事態を予見できず、大変申し訳ございません。しかしイヴと動力確保の手段が同じだからこそ、イヴと同じ脆弱性を持ちます！」

「ぜいじゃく……つまり、弱点ってこと……くっ、ああー！」

「えろえろっ≡ちゅぱっ≡ちゅぞぞっ≡」

「ううっ、イルゼさん、それ、気持ちよすぎ……っ！」

現在進行系で脆弱な部分を責められて、つつい正直な感想が出てしまう。

そんな俺にネレイダは説明を続けた。

「セックスです！ マスターの射精をイルゼが膣中で受け止めて、思い切り絶頂してくださいー！」

「「「ええっ!?!」」」

奉仕中のイルゼさん以外の反応が一致するが、ネレイダはそれに構わず言う。

「私にそうしたように、マスターのおち×ぼで特大の快樂を与え、イルゼを通じてミストレスリングの機能を停止させてしまえば良いのです！」

耳を疑うような内容だけれど、ここは彼女の言葉を実行するべきだと俺は感じる。

(ミストコープ絡みでネレイダが間違ったことを言ったことはない。それにイルゼさんとのセックスを嫌がる理由もない！)

むしろ正直嬉しいと思ったけれど、どうやら甘かったらしい。

奉仕をやめ、俺の上に跨ったイルゼさんの表情を見て、俺の背筋を冷たいものが走る。

「ふーっ ≡ ふーっ ≡ ふーっ ≡」

「い、イルゼさん？」

白地のレオタードに六枚の羽を背に生やし、頭の上には金色のリング。

半分の仮面こそ異質だけれど、その出で立ちには誰が見ても天使だと思うだろう。

しかし自ら女性器にペニスを擦り付ける様は、むしろ淫欲に塗れた墮天使である……！

「アリストさま……もう我慢なりません……ッ……ふーっ ≡ ふーっ ≡」

——ずぶんっ！

言うが早いか、墮天使は勢いよく腰を落とし俺のペニスを熱く潤った膣中へとしまい込む。

「あはあんっ ≡」

「くう……ッー！」

普段のイルゼさんとの騎乗位なら、ここで一旦落ち着いて抱きしめあったり、互いの身体の感触にしばし浸るのが普通だ。

けれど、ミストレスリングの影響を受けた彼女に『普通』など無かった。

「はあっ ≡ ああっ ≡ ああっ ≡ ありすとさま、ありすとさまっ ≡」
始まったのは容赦のないグラインド。

ペニスをぴったりと膣奥で捉えたまま、淫乱墮天使はいやらしく腰で円を描きはじめた。

「久しぶりのおち×ぽっ ≡ もっ、逃がしませんわあっ ≡」

肉棒がスクリュー状に絞り上げられ、肉ヒダが亀頭をいやらしく舐め回す。

パイズリとフェラチオで昂ったペニスに、その快感はあまりに強烈だ。

(これ、吸い上げられる……ッ！)

竿の付け根辺りに抑えていた射精衝動が、暴力的な快感に引き上げられていく。

懸命に堪^{こた}えているつもりだが、それでもぐんぐんと昇^{のぼ}っていつてしまうのだ。

一方のイルゼさんは、余裕たっぷりの様子でグラインドを続ける。

「アリスト様、我慢はいけませんわっ ≡ どうぞ、おま×こに ≡ 思いつきり ≡ んっ ≡ んっ ≡」

「あっ、くっ、ああ！」

淫らな踊りで肉棒を虐められた俺の耳に、ネレイダの声が入ってきた。

「マスター！ 今のイルゼの思う通りにさせては動力を献上するだけになってしまいます！ ど

うか積極的に、雄々しくなさってください！」

それはおそらく真実だ、と俺は直感する。

「ふふっ ≡ わたくしの、おま×こ ≡ 楽しんで、ただけていますか ≡ あっ ≡」

イルゼさんは甘い声を出すものの、その表情から絶頂は程遠いことは明らかだ。

この状況で射精してしまえば、彼女がセラーフアになるのを手助けしてしまうだけになる。

(俺のほうからもっと責めないと……っ！)

そう思つて俺が腰に力を入れたその瞬間。

硬度を増した肉棒を、淫猥な墮天使は見逃さなかった。

「あつ ≡ 悪戯はいけませんわ、アリスト様 ≡」

彼女は甘つたるい声で言うと、今度はグラインドを前後に切り替える。

途端にコリコリとした子宮口で鈴口がほじられ、俺はあつという間に限界を迎えてしまった。

「あつ！ あああつ!!」

ービュルルルッ!! ドビュルルルッ!!

「はあんっ ≡ ああつ ≡ あついのきていますわっ ≡ おしゃせい、すっぐく、イイツ ≡」
精液の感触にうつとりとした表情を浮かべるイルゼさん。

しかし彼女の責めは終わらない。

射精中を好機と見たのか、精液の勢いが衰ひたえないうちに今度はピストンを始めてしまった。

杭を打つように腰を上下させ、同時に俺の乳首を舐めしやぶる。

「ちゅっ ≡ ちゅっ ≡ えろえろっ ≡」

「あ、ああっ!! イルゼさん、それ、駄目……っ!」

ただでさえ気持ちいいのに、乳首まで責められてしまえば逃げ場はない。それはイルゼさんによる快樂の包囲網であった。

「ぴちゃぴちゃっ≡ちゅぱっ≡どうぞ≡ちゅっ≡おち×ぽ、ぴゅっぴゅ！　ぴゅーっ≡」
「あああっ、出るう……ッ！」

射精が完全に止まっていないのに、再び大きな波が来る。強烈な快樂を前に、蛇口の緩んだペニスは無力であった。

ービュルルッ!!　ビュクッ!!　ドビュルルルッ!!

「ああんっ≡すてきですわ≡もっつと、たっぷりくださいましっ≡」
精が膣奥へ当たった時にだけ、びくんつと身体を震わせるイルゼさん。

彼女にはまだまだ余裕が見られるし、その証拠にピストンの速度はちっとも落ちない。

(気持ち良すぎるよッ。で、でも、このまま絞られ続けたら先は無い……！)
しかし怪我の功名、というか射精の巧妙というか。

立て続けに精を放ったことは無駄ではなかったみたいだ。

昂ぶりを発散したおかげで、快樂一色で染まっていた頭の端っこに思考の余白が出来た。

(手も脚も動かないまま……。騎乗位から逃れるのは難しい、よな……)

自分の好きに責められる体位にはいけないだろう。

つまりイルゼさんのペースでセックスせざるを得ない。

(ん、イルゼさんのペース……?)

とそこまで考えたところで、イルゼさんの杭打ちピストンのギアが一段階あがった。

「ああ、アリストさま。いけませんわ、おち×ぽとおま×このことだけを考えてくださいまし」

「あっ！ ううっ！ はあっ！」

彼女は乳首を責めるのをやめ、今度は俺の胸板に両手を置いて容赦なく腰を上下に振りだす。きゅんきゅんと締まる膣圧で一気に精を搾り取るうという意図がありありと伝わってきた。

「ただただ、気持ちの赴くままにお射精なさって！ さあ、ほらっ ≡ほらっ ≡ほらあっ ≡」
「腰づかいは相変わらず絶妙で、再び快樂の波が俺を追い詰めようとする。」

けれど俺の脳に残った思考の余地が、一つのことには気づかせてくれた。

(さっきから、ずっと身体を押さえられている気がする……！)

まずは今の体位。

上下のピストンをしながら、俺の胸に両手を置き、ぐいぐいとベッドへ押し付けてきている。上下運動が激しいこともあり、ほとんど身体の自由は利かない状態だ。

(一つ前の時も、のしかかられるような感じだった)

俺の乳首を責めながらの騎乗位。

単純にすごく気持ち良いプレイだったし、事実簡単に搾り取られてしまった。

ただここで重要なのは、彼女がその体位に移ったタイミングだ。

（ネレイダが『どうか積極的に、雄々しくなさってください！』と言った後、体位を変えたんだ）

寝かせた対象から搾り取るにはどちらも有効な体勢だと言えば、その通り。けれど、不自然だと思える点もあった。

（俺は既に両手両足の自由を奪われていて動けない。なら別に押さえつけなくても、グラインドするだけでも良かったはず）

そこまで考えて、俺は一つの可能性に行き着く。

『イヴと同じ脆弱性を持ちます』

ネレイダは確かにそう言っていた。

だとすれば、試してみる価値はある……！

「考えごとはいけません≡おま×こ穴で、ちゃんと感じてくださいますし≡ちゅっ≡ちゅぱっ

≡

「んんっ！」

イルゼさんは俺に全体重を預けるようにのしかかり、今度は情熱的なキスで俺の口を塞ぐ。

そうして俺の舌をたっぷりと追いつき回す間も、彼女の腰は止まることがない。

「うっ、ふっ、くっ！」

「いいれしゅよ≡このまま、らしてくらひやいませ≡んむっ≡ちゅっ≡」
上も下もヌルヌルにされ、胸板にはたっぷりとしたおっぱいを押し当てられ。
このまま射精してしまいたいという誘惑に俺は負けそうになる。

(ああ、気持ちいい！ イルゼさんの身体、どこもかしかも気持ち良すぎるよ！)
ただ、今回はその誘惑に負けるつもりはない。

「ぢゅっうっうっうっうっ！」

俺は咄嗟の隙をつき、イルゼさんの舌に音が出るほど思い切り吸いつく。

それは互いを愛し合うためのものではなく、彼女を驚かせるための仕掛けだ。

「んあっ!? はふっ!?」

目論見通り、墮天使イルゼさんは目を見開いて動きを止める。

(今だ！)

俺はお腹を限界まで引っ込ませるようにして身体をくの字にし、ベッドの軋みを最大限に利用して、身体を跳ね上げた。

「ふんっ!!」

部屋に響いたのは、ばちんと肉がぶつかる大きな音。

そして、戸惑いの混じったイルゼさんの嬌声だ。

「あっ!? やあああんっ≡」

同時にじわりと俺の下腹部が温かくなり、墮天使の身体が震える。

「あ……っ≡ありすとさまったら……っ≡い、いたずらがお上手ですわ……あ≡」
ふるふると大きなおっぱいを震わせつつ言うイルゼさん。

しかし彼女は身体を起こさないし、その声色からは余裕が消えていた。

俺はそこで、自分の仮説が正しかったことを確信する。

(やっぱり！ ネレイダと一緒に、責められるのに弱いんだ！)

ネレイダは俺が積極的に動き出した後は、されるがままに絶頂して機能を停止した。

そして結果として他のイヴの皆さんも巻き込んで、機能を停止することになった。

ならば墮天使にやるべきことも一緒だ！

「ふんっ！ ふんっ！ ふんっ！」

「あうっ!? ああんっ≡そ、そんなに暴れては≡いけません……わっ≡あうッ≡」
腹筋の力で身体を動かし、俺はイルゼさんをたっぷりと突き上げた。

しかし墮天使のグラインドで十分に昂った肉棒にとつて、それは簡単なことではない。

(ぐうっ！ き、きつい！ またすぐ、射精そう……！)

けれど性感の蓄積があったのは俺だけじゃない。

イルゼさんだってそうなのだ。

「んあっ≡はあっ≡い、いたずらは駄目ですわっ≡わ、わたくしがっ≡みちびいて、さしあげます、からあっ≡」

彼女の声は明らかに悦楽に染まっているし、腰もキスも止まったまま。今のイルゼさんは俺にしがみつき、嬌声をあげているだけだ。

「いいや、俺がするよ……っ！」

俺は鈴口を子宮口へ押し付けながら腰で円を描く。

コリコリとした感触を執拗に追いかけて、壮絶な快楽に構わずペニスでそこをすりつぶす。

「あっ!? あああっ≡だ、だめっ≡そこ、そんなにしては、いけません……あっ≡はあっ≡」

びくびくと震えながら、イルゼさんがいやいやと首を横に振った。

けれど可愛らしく駄目と言われたら、やめてはいけないのがセックスである。

今度は俺のほうから、強く、深く、彼女の最奥へ杭を打つ。

「あッ≡おッ≡ほおんっ≡ら、らめっ≡いたずら、やめてえっ≡ありすとさまっ≡やあっ≡」

「やめない……! 今度は、イルゼさんが、思いっきり気持ちよくなる番だからッ!」

「あッ≡おま×こ、の奥、をおっ≡そんなにしてはあっ≡いけませ……ッ≡」

イルゼさんの膣中が不規則に締まり、俺の肉棒もそれに誘われるまま精を昇らせる。

でも今度は一方的なものじゃない。

「あ、いけま、イクツ≡それイクツ≡やらあつ≡おま×こ、イツちやいますのおつ≡
「くっ！ 俺も射精^でる……射精^でるよッ！」

互いに切羽詰まっていく中、不意にパラパラと何かの粉が落ちてきた。それはイルゼさんのつけている仮面から落ちるものだった。

(仮面にヒビが入ってる……！)

そのヒビは彼女の奥を一突きするごとに広がっていく。

見れば金色のリングも明滅を始めた。

「ああっ≡ありすとさまあつ≡気持ちいいっ≡おま×この奥うっ≡ぐりぐりってえっ≡
ヒビが広がるほどに、墮天使の声色や表情は段々と俺の知るイルゼさんへ変わっていく。
どこか見下すような色合いがあった瞳も、今やすっかり元の美しさを取り戻していた。

「ああ、もうイク≡ありすとさまのおち×ぽで、いっぱいイっちゃいますのおっ≡
「うんっ、一緒に……ッ！」

俺はペニスで彼女を持ち上げるつもりで、思い切り身体を跳ね上げる。

ベッドが大きく軋み、イルゼさんは身体を大きく反り返らせて天を仰いだ。^{おお}

「おま×こ、イぐうううううッ≡≡≡」

ーードビュルルッ!! ビュルルッ!! ビュクッ!!

絶頂する腔中で絞られ、俺の欲望も彼女の最奥で爆発する。

するとその衝撃で、今度はイルゼさんが二度目の絶頂へと昇った。

「あぐツ≡おほおっ≡おしゃせい、あたってっ≡またおま×こ、イグのおツ≡≡≡」

月明かりに照らされた、金髪美女の嬌声が響く。

同時に仮面も弾け飛んで消え去り、金色のリングと六枚の羽は白い粒子となって室内に散る。

それはまるで天使の羽が部屋の中で舞うような、とても神々しい光景だった。

「んツ≡あ……はあツ≡ありすと、さま……あっ≡」

「イルゼさん……!」



天使の呪縛から逃れ、ゆつくりと俺に倒れ込んでくる彼女を俺は受け止める。そして魔法陣が消え、自由になった両腕で抱きしめた。

「はあっ、はあっ≡ありすとさまあ……んっ≡」

絶頂の余韻に浸りながらのキス。

深く、穏やかに互いの舌を追いかけ回し、今度こそ終わったのだと確かめ合う。

「ぷはっ≡はあっ≡……また、アリスト様にたっぷり狂わされてしまいましたわ≡」

「俺も、イルゼさんにいっぱい搾り取られちゃいました」

「わたくしだったら、はしたなく求めてしまって……うう、お忘れになってくださいまし」
頬を赤らめるイルゼさんに、今度は俺のほうが堪らなくなる。

「イルゼさん……」

「アリスト様……」

どちらともなくもう一度口づけを——することは無かった。

室内で抗議の声が上がったからである……！

「マスター！何かお忘れでは？」

「「あっ……！」」

声の主はネレイダだ。

髪の毛で目元は見えないけれど、心無しか睨まれているような気がしてならない。

「失礼します」

そんな彼女があつさりとおベッドに乗ってきたことで、例の膜が消えたということがわかった。しかし更に抗議は続く。

今度はベアトリスとヴァイオレットだ。

「わたし達もいますのよ！ さつさとお二人の世界に入らないでいただいてもよろしくって!？」

「まったく、見せつけてくれちゃってさ！ アタイ達はすっかり蚊帳かやの外かい？」
言いながら、二人もベッドへと上って来る。

そして最後はエフィさんだ。

「アリスト様、イルゼ様。ご無事のように何よりです」

彼女は心底ほっとした様子の表情を見せつつ、ベッドの上をすすると移動し。

「失礼いたします……三」

……すすると服を脱ぎ始めた。

「えっ!？」

見ればヴァイオレットとネレイダも既に半裸の状態である。

「あんなセックスを見せておいて、アタイ達だけお預けなんて言わないよな？」

「マスター。私の貢献に報いていただく必要があります」

彼女達は衣服が消えて全裸になったイルゼさんを優しく持ち上げて退かせてしまう。

「ふふ、選手交代のお時間ですわね」

イルゼさんはお茶目に笑うと、ベッドの端でもじもじとしていたベアトリスに近づいていく。裸のまま近づいてくるイルゼさんにぎよっとするベアトリス。

イルゼさんはその様にも微笑みつつ、そのまま彼女に何やら耳打ちをした。

「……っ！」

途端にぼんつと音がしそうな勢いで、ベアトリスの顔が真っ赤になる。

更にもう一言二言耳打ちをされた後、彼女はゆっくりと俺のそばへとやってきた。

そして可愛らしく唸った後、大きな乳房を自ら服から取り出して言う。

「わたしも、その、挟ませていただいても宜しくって……?」

彼女のいじらしさに俺の肉棒がびくんつと反応する。

「……ふふ、変人は本当に素直ですわね」

そんなベアトリスの言葉が長い夜の始まりとなり――

「だんなさまっ ≡そこ、ずんずん、されてしまおうっ ≡また、おしるが……でちゃうッ ≡あ、
でるっ ≡ああでるでるっ ≡おしるいっばいでちゃうっ ≡ッ ≡ ≡」

「アリスト、アタイのおま×こ、そんなにしゃぶってくれて、うれし……あ、イグッ ≡ ≡」

「かけてっ ≡デカ乳に、アリストのお情けかけてっ ≡ああんっ ≡」

「ぢゅぽっ ≡ぢゅぞぞぞぞっ ≡ますたあのおせいし ≡おいひいです ≡ぢゅぞぞぞっ ≡ ≡

「アリスト様あゝお乳、たくさん吸ってくださいましあつゝんはあつゝん空が白むまで、俺達は互いの無事をたつぷりと感じあつたのだった。」

首都メنز、セレタ島は貴族達が集う権力の中心地だ。

その地の頂きに君臨する者の名は、イコモチ公爵。

神話級と呼ばれる魔法を扱える世界で唯一の存在であり、その権力の絶大さは言うまでもない。

星の见えない夜、そんな彼の屋敷で若年の男が掠れた声を出していた。

「イコモチ、さま……どうか……！」

彼の名はアルコル、国の政を牛耳る公会議に名を連ねる大貴族の一人だ。

今、その首は魔法陣から出現した巨大な龍の手で掴まれ、半ば宙吊り状態となっている。

悲壮な瞳を見せる彼を、対面の椅子に座つた老貴族はつまらなそうに眺めた。

「勝手に始めた遺物の調査に失敗し、使いでのあつたグリムウエフトを失つた。そして貴殿の過失によつて、公会議はよりにもよつてあの出来損ないの顔を立てる羽目になつたわけじゃ」

「い、遺物の件については、今後も調査を――」

アルコルが言いかけると、イコモチ公爵は右手を軽くあげる。

それに従うかのように龍の手が動き、更にその力を強くした。

「うぐ……っ!？」

「今後とな？ なかなか面白いことを言いおる」

再び龍の手が動き、いよいよアルコル伯爵のつま先は床から離れる。

公爵はその様を冷たい目で見つめながら言った。

「無能貴族に明日は訪れぬ」

アルコルが恐怖に顔を引きつらせ、イコモチが更に魔力を込めようとした時。

部屋には突如魔法陣が現れ、女性とも男性ともつかぬ、中性的な声が響いた。

「不良個体が出力されるのも計画の内です」

声が終わると、宙空に出現した魔法陣は複雑な動きで折りたたまれ、やがて人の形を取る。

光り輝く七色の粒子で構成された人型の『何か』を目にして、素早く反応を示したのはイコモチであった。

彼は転がり落ちるように椅子を離れ、躊躇なく床にひれ伏したのだ。

「た、大変失礼をいたしましたっ！ 老いたこの身とはいえ、主様あつじを疑うなど……!」

普段の尊大な様子とはまったく違う態度に、アルコルは激しく驚愕し、もがくことも忘れる。

一方で平伏された側はごく当然のように、あるいはほとんど無関心なように声を出した。

「問題はありません」

「なんとご寛大なお言葉!! して、この度はどのようなご用件でしょうか……!？」

「不良個体の回収です。その個体は思考能力が一般的なそれを下回り、これ以上の活動は無駄と判断しました」

光る何かはそう言うと、アルコルのほうへ顔を向ける。

そこには瞳も口も存在せず、ただ七色の輝きで塗りつぶされているだけだ。

それでもアルコルは射抜かれるような視線を感じ、同時に激しい恐怖に苛まれる。

「ひーっ!! ひいー!!」

だが、彼の恐怖はすぐに終わる。

「貴方に、救いを」

七色の輝きの塊が放った光によって、彼はこの世から完全に消滅したからだ。

「リカルネシア様のご厚意に感謝せよ。一足早く大義の糧となるのだからな」

来客が還り静かになった部屋に、イコモチの声だけが響いた。

第六章 強欲転生者のあぶない散歩!?

ミストコープに関わる一件が終わり、アルコール伯爵が失脚したと知らせを受けてから一ヶ月。俺は満月が浮かぶ深夜に、ベアトリスと共にコスタヴィーノを歩いてた。

いかにもデートっぽい状況だったけれど、俺の心は喜び一色とはいかなかった。なぜなら……。

「ほ、本当に、行くの?」

隣を歩くベアトリスが、ほとんど全裸だからである!

「……い、いつでもよろしくってよ……っ!」

いやいや、靴だけしか身につけてない全裸の女性と散歩だなんて、こっちがよろしくないよ! 毅然きぜんとした表情を見せるベアトリスに、俺は頭を抱えそうになる。

「あの、俺はもう充分かなって思うんだけど。それでも……行くの?」

「ま、まだ屋敷の裏口を出たばかりでしょ。これでは、難題の『な』の字にも未達ですわ!」俺にしがみつきつつ、勢いよく首を横に振るベアトリス。

それと一緒に彼女の胸の果実も左右に揺れ、柔らかい感触が俺の二の腕に当たった。

「ウイメへ訪問するだけで良いなんて……それじゃあわたしの気が済まなくてよ！」

そう言っているとベアトリスは再び首を振り、月明かりに照らされた魅惑の果実を揺さぶる。

そして彼女が身につけた首輪から伸びるリードを俺のほうへと差し出した。

「さあ、こちらをお持ちになって？　そして手懐けた動物のように連れ歩いてくださいまし

「っ……！」

「これは償いでもあるのです。ですから、その、た、たくさん辱めてくれないと嫌でしてよ
胸を押し付けながら上目遣いに言われ、俺はもう降参するしかなかった。

「あの、嫌になったらすぐ言っただけ？」

「弱音を吐くつもりはありませんけれど……ええ、ご厚意に感謝しますわ」

「あとさつき言っただけ四つん這いは絶対無し。ベアトリスが痛がるのは見たくない……」

「仕方ありませんわね。譲歩して差し上げてよ」

（どうしても俺が譲歩される側なんだらう……）

償いでもあるという発言はなんだったのかと思わされつつ、深夜の変態散歩は始まった。

深夜のコスタヴィーノは、街中であつてもとても静かだ。

路地裏を歩く必要がなかったかな、と思うくらいひとけの人も感じられない。

いや、それでも表通りなんて絶対歩かないけどね！

「流石にこんな時間ですし、誰もいませんわね。これではお仕置き具合が足りない気が……」

ベアトリスは頬を赤くしつつも、『お仕置き具合』とかいう良く分からない尺度を口にする。どうか早く正気に戻ってほしい。

(とはいえ、人がいないのは幸いだ)

当然だけど俺は彼女の裸を見世物にしたいわけではない、というかむしろ独り占めしたい。にも関わらず、何故この難題が採用されてしまったのか。

そこにはイルゼさんとネレイダの暗躍があった。

『アリスト様は女性を恥ずかしがらせるのがとてもお好きなの。ベアトリス殿が恥ずかしがる姿をたっぷり見せれば、きつとご満足なさいますわ♪』

『であれば露出散歩という遊びはいかがでしょう。私の記憶領域に残った知識に――』

その場に立ち会ったエフィさんによれば、イルゼさんは大変良い笑顔であり、ネレイダも僅かに声が弾んでいたらしい。

イルゼさんの悪戯心と、ミストコープ由来のアイディアが悪い相乗効果をもたらしたといったところだろう。

そしてその結果、俺にも若干の被害が起きていた。

「えっと……じゃあ、最後にこっちを通って屋敷に帰ろう」

「ええ。貴方が満足なさったのなら、それで良いですわ」

あの二人の変なアシストのせいで、露出趣味があると思われてしまったのだ。

(見つかりたくないし、大きな声で否定できない状況なのがあまりに辛いよ……!)

何故か俺のほうがお仕置きされているような気分になりつつ、道を折れる。

するとついに住民女性の声が聞こえてきてしまった。

「お疲れさま」

「お疲れ、いやあ今日も大繁盛だったねえ」

一気に緊張感が高まるが、ベアトリスは引き返そうとはしない。

覚悟を決めた様子で、ここで道を変えようなんて言いだせる雰囲気ではなかった。

(ええい、ままよ……!)

俺はベアトリスより半歩前に出て、足音を立てないように彼女と進む。

しばし行くと、その声は閉店作業中の飲食店から聞こえているということが分かった。

俺達が歩く道は店の裏にあたるので、姿を見られることはない。

「そつえばさ、明日アリスト様が街を回るって本当に本当？」

「ええ。ベアトリスと一緒に街中を歩いてくださるって。夢みたいな話よね」

「「っ……!!」」

突然名前が出たことで、俺達は揃って身体が反応し足が止まる。

彼女達の話は続く。

「うちの領主もやるねえ。結局コスタヴィーノを正式に女性都市にしてくれたし」

「ペレ伯爵のお膝元ってというのは意外だったわ。納付金もあんまり高くないみたいだし、どういうことなのかしら」

「あたしら庶民には理解できない理由なんだよきつと。だってあの人、公会議貴族なのに首都でも浮いてる変わり者でしょ。代わりに海で泳がせろって言うてきても不思議じゃないよ」

「流石にそれは……いや、ありえるのかしら。漁に影響のない範囲にしてもらえると助かるわ」
会話の内容に俺とベアトリスは顔を見合わせ、こっそりと破顔する。

互いにペレ伯爵を知っているからこそ、この言われようは可笑しく感じられるからだ。
そのまま俺達は足音を殺しながらそっと通り抜けようとして――事件が起きた。

唐突に女性が裏路地へ出てきたのである。

「えっと、在庫はまだあったかしら？」

「「!?」」

どうやら俺達から見えない場所に勝手口があったらしい……!!

ただ、幸いなことに彼女の視線はまだ俺達を捉えていない。

「ベアトリス、こっち……!!」

「ええ……!!」

俺達は最大限声を抑えつつ、店とその隣の建物の間へ入り込み、積まれた木箱の奥へ身を隠す。

女性店員さん達からは完全に死角となったその場所で、二人揃って息を潜めた。

「どう？ お酒まだあるー？」

「多分、大丈夫よ。でもいくつかは売り切れるでしょうから、うまくやらないといけなそうね」

「アリスト様効果でお客さんも増えるだろうしね。そこは明日の仕入れに期待しようか」
よく見るとこちらの木箱は随分放置された様子で、彼女達が来ることはないだろう。

高まった緊張が緩むと、俺は今の体勢の危険さに気付かされた。

(これは、マズイかも……！)

咄嗟に建物の間に入り込む際、まず考えたのはベアトリスの裸体を隠そうということだ。

だから俺は彼女の背を壁につけ、自分の身体でそれを隠すような体勢を選んだ。

しかしその結果、俺達は互いに真正面から密着することになってしまっている。

(あんまり意識しないようにしてたのに、やっぱりベアトリスの身体すごすぎるって！)

ベアトリスは普通に服を着て歩くだけで絵になる美女だ。

そんな彼女が全裸にヒール、そして首輪にリードをつけた状態で目の前にいる。

そして俺の胸板には彼女の生の爆乳が押し付けられているわけで……。

「……硬いのが、当たってしまってますよ……？」

上目遣いに言われ、俺はいたたまれなさで羞恥で頬が熱くなった。

ベアトリスの顔を直視できず、俺は顔を逸らすしかない。

「……ふふ♪」

すると彼女はひそやかな笑い声をあげ、素早い身のこなしで俺と身体を入れ替えた。壁を背にした俺が驚いているうちに、彼女は大胆に股を広げしゃがみ込む。

そして俺のズボンを下げ、勃ちあがり始めたペニスを取り出してしまった……！

「っ!？」

「わたしは今、貴方の下僕ですわ。下僕は主の気持ちを察して動く、それが当然でしてよ？」
頬を染めた彼女は微笑み、自らの言葉を証明するかのようペニスを頬張る。

「はむ……≡」

「あっ！」

間もなく、ベアトリスの情熱的な奉仕が始まった。

彼女の熱い口内で、ペニスがじっくりと料理されていく。

「んちゅ……っ≡えろっ……≡んん……っ≡」

音は抑えられているけれど、彼女の奉仕は穏やかではなかった。

唇の先から喉奥までたっぷりと使ったストロークの快感が、ぞわぞわと身体を侵食し始める。

「うっ、くっ、ふうっ……」

「ちゅっば………≡んむ………≡ぢゅ………っば………ちゅっ≡」

舌を裏筋に当てながら、ゆっくりとペニスを受け入れていくベアトリス。

そして竿の付け根に唇がつくほどに肉棒を呑み込むと、彼女はそのまま舌を左右に動かして玉袋を舐め回す。

「えろっ ≡ちゅっ ≡えろっ ≡」

(喉奥も一緒に動いてっ、ああ、さきっぱが絞られる！)

喉で亀頭を締められ、同時に玉を熱い舌で弄ばれる。

同時に襲い来る快感は凄まじく、声を抑えるだけで一苦労だ。

腰は勝手に浮つき、ふるふる情けなく脚が震えてしまう。

「ぢゅっ………≡ぢゅっ………≡ぢゅぞ………っ ≡」

今度はベアトリスの口が遠ざかっていくが、快樂はやまない。

頬を引っ込ませながらの強い吸引が始まるからだ。

更に彼女の柔らかい唇がカリへと到達すると、また責め方が変わった。

「えれえろえろっ ≡ちゅっ ≡ぢゅっ ≡ちゅぱっちゅぱっ ≡」

リズムカルな吸引と執拗な舌遣いで亀頭をいじめ、今度は竿部分への手コキが加わる。

放りだした乳房に涎よだれを落としながらの奉仕は、とてつもなく気持ちいい………！

「くっ、ふうっ、はあっ！」

ベアトリスは声を抑えきれない俺に微笑みつつ、再び喉奥までペニスを呑み込み始める。その表情から、彼女が俺の弱点をすっかり認識してしまったことは明らかだ。

(またあれが来る……！)

快感への期待を抱いた矢先、再び近くで店員さん達の声が聞こえだした。一度店内に戻っていたようだったが、また外に出てきてしまったらしい。

「……っ！」

びくりと俺が肩を揺らし、ベアトリスのフェラが停止する。

一方で、聞こえてくる会話の内容は非常にまずいものだった。

「あのさ、そっちから何か聞こえない？」

「貴女も？ 私もさつきから、なんかうめき声みたいなのが聞こえてて……」

「でもこの隣の貸し倉庫、今誰も使ってないよね？」

「……ええ、そのはずよ」

二人の足音が近づいてくる。

彼女達に箱をいくつか退かされてしまえば、淫行にふける俺達の姿は丸見えだ。

しかし今動けば、それこそ見つかってしまう……！

「泥棒が盗るようなものもないはずだし……お、おばけ……とか？」

「や、やめなさいよ……っ！」

「だって満月の日には、海から悪いお化けがでてきて空き家に入り込むって話、あるよ……？」
「知ってるからやめなさいって言うてるの！ とりあえず、様子だけ見てみましょう。子供の丸
うさぎが迷いこんじゃったのかもしれないわ」

「う、うん……」

もはやこれまでか、と思った時。

唐突に強い快感が俺の下半身を襲った。

「じゅぽっ ≡ じゅぽっ ≡ じゅぞっ ≡ じゅぞぞっ ≡」

ベアトリスがフェラチオを再開したのだ。

しかもそれはさきほどとは打って変わって激しいもの。

肉棒の鈴口を突然舌で強くほじくられ、俺は声を堪えることなんてできなかった。

「ふっ!? くっ、おっ！ うう……ッ！」

「「ひゃっ!？」」

積み上げられた箱の向こうで、女性達の驚いた声が上がる。

けれど、それを聞いてもベアトリスのフェラチオは止まらない。

彼女自ら亀頭を喉奥に叩きつけるようにペニスを呑み込み、熱い舌で玉袋を激しく転がす。

「んむっ ≡ えろえろえろっ ≡ ちゅぱちゅぱっ ≡」

既に音を遠慮していない分、その快感は暴力的だ。

脳天までつらぬくような激しい悦楽は、俺に射精を耐える暇すら許さなかった。

「ぐッ……はあッー！」

ービュルルッ!! ドビュルルッ! ビュクッ!!

人らしい言葉も発せられないまま、俺は欲望をベアトリスの喉奥へぶつけてしまう。

ほとんど暴発と言って差し支えない唐突な射精に、ベアトリスはくぐもった声を出した。

「んんっ、んぐうっ!？」

しかしそれはただの一度だけ。

彼女はすぐに喉を鳴らし、精を飲み下し始めた。

「んくっ……んくっ……んんっ≡」

そればかりか玉袋を舐め回す舌の動きも復活する。

爆乳美女に自分の精を飲まれながら、もっと射精せと舌で促される。

その幸福感に俺の脳は支配され、ただただ情けない声と白濁液を漏らす動物になってしまう。

「じゅぞっ≡じゅぞぞぞっ≡ぴちゃぴちゃっ≡」

「あ、ああ、はあああ……っ」

情けない自分を人に見られたくはないけれど、精を絞られる快感には勝てない。

しかし今日に限っては、その理性の弱さが良い方……多分、良い方に働いた。

俺の気持ち悪い声のおかげで、女性二人は箱を一つも退かさないうまま逃げ出してくれたのだ。

「ひいええええ!! おばけええええっ!!」
遠ざかっていく声にほっと胸をなでおろすのと、ベアトリスが精を飲み干すのは同時であった。

「ぷはっ ≡ ……確かに、お化けみたいな声が出ていましたわね ≡」

「だって、ベアトリスの口が気持ち良すぎて……」

肩で息をつきながら抗議すると、彼女はくすくすともう一度笑う。

「あら、わたしのせいですか?」

お嬢様が友人の冗談に笑う、そんな雰囲気だ。

けれどその口の端からは飲みきれなかった白濁液が滴り、大きな乳房にそれが落ちていく。上品なのに下品、清楚でありながら淫乱。

相反する魅力を備えた彼女は、こちらに背を向けて、今度は倉庫の壁へと手をついた。

「であれば……出過ぎた下僕には躰しっけが必要ですよ」

そして妖艶に光る瞳で俺を見ながら、自らの秘裂を広げてみせる。

牡を誘う穴からはねっとりとした愛液が滴りおち、地面に次々と染みができていく。

「その大きくて逞しいもので、乱暴に躰しっけしてくださいまし。今、すぐに…… ≡」

「……っ!!」

その瞬間、俺の身体全体はかあっと熱くなり、ここが外であることなど忘れてしまった。

「ベアトリスっ!!」

「あっ!? はああああんっ ≡ ≡ ≡」

ペニスが挿入されると同時に海老反りになり、ぶるんつと豊満な果実を揺さぶるベアトリス。痙攣する膣壁は彼女がたった一突きで絶頂に達したことを示していた。

その淫猥な様に浮かされた俺は、彼女の首元から伸びるリードを掴み、更に激しく腰を動かす。

「ふーっ! ふーっ! ふーっ!」

「ああっ ≡ 今、イッて……あっ ≡ ます、からっ ≡ アリストっ ≡ だめだめっ ≡ また……イっ ≡ 震える脚を動かし、ベアトリスはペニスから逃れようとする。

しかしその度に俺は彼女をリードで引き寄せ、乱暴に何度も剛直を叩き込む。

そして空いた片方の手で大きな爆乳を揉みしだき、乳首を強くつまむ。

「あああああッ ≡ ≡ ≡」

途端に甘い絶叫があがり、倉庫の壁にはおびただしい量の愛液がぶちまけられた。

「外なのに、こんなにいやらしい汁を出してっ! 恥ずかしくないのっ!」

「あっ ≡ いやっ ≡ ち、ちがうのおっ ≡ んっ ≡ はあっ ≡」

「何が違うのっ!!」

「あ、おやめに……っ!? んはあああッ ≡ ≡ ≡ あッ ≡ ≡ ≡」

ただ声量を気にしている余裕はもうなく、俺達は互いの想いを包み隠さず声に出す。

「はあっ！ イクよ……ッ！ いっぱい射精すよ……っ！」

「だしてっ≡げぼくのっ≡おま×こにつ≡わたしのあなにつ……しっけっ≡してえっ≡」
そして俺はもう一度リードを引き、煮え立った精を放った。

「んあッ≡≡≡」

「射精る……！」

ービュルルルッ!! ビュルッ!! ドビュルルルッ!!

「い……グウっっっっッ≡≡≡」

天を仰いだベアトリスが絶叫する。

と同時に、愛液が作った水たまりに蜜壺から溢れた白濁液が次々と落ちていく。

「あ、ああ……ッ≡せいえき、あつい……っ≡んッ……≡」

膣奥へ放出され続ける精液を受けていたベアトリスが、ついに崩れた。

俺はリードから手を離し、彼女の大きな乳房を掴んで支える。

しかしそれすらも、敏感になったベアトリスには致命傷だった。

「ひゃあっ!? あッ≡おちち、いまだめえっ≡≡≡」

無論、俺にとつても彼女の爆乳の柔らかかさと、絶頂にうねる膣壁は愛すべき天敵だ。

肉棒が再び噴火を始めるのも無理はなかった。

「ううっ!!」

「ービュクッ!! ビュルルッ!! ドビュッ!!」

「んおほおっ≡んおおッ≡≡≡」

そこからはセックスというより動物の交尾に近かったと思う。

「はあっ≡ああっ≡も、もっとおっ≡」

「ベアトリスっ! すきだっ!」

「わ、わたしもおっ≡すきいッ≡」

互いに場所も考えずに愛を叫び、射精と絶頂を何度も繰り返したのだから。

「あっ≡イクッ≡すきっ≡またイクっ≡イグウッ≡≡≡」

「俺も、また射精^でる……ッ!」

ーーただし、コスタヴィーノは都市であり、人間が生活する場所である。

だから深夜の奇妙な鳴き声は当然通報されてしまっていたし。

「異音がすると通報があったかと思えば……ベア、それからアリスト様。場所を弁えるという言葉はご存知ですか?」

駆けつけたメイドさんークラネさんに叱られ、俺達は半裸の状態で揃って頭を下げることになったし。

「「すみません……」」

満月のコスタヴェーノには化け物が出る……という怪談はよりまことしやかに語り継がれることになったりした。



恥ずかしい異音騒ぎから一夜明け、朝。

コスタヴィーノの澄み切った青空の下、俺とベアトリスは屋敷を出発した馬車に揺られていた。

コバルトブルーの海はいつかと同じように蒼く輝き、穏やかに波打つ。

「……貴方達が初めてここに来た日を思い出しますわね」

「そうだね。あの時はもうちょっと賑やかだった気もするけど」

この都市へ初めて訪れた時は、四人乗りのこの馬車は満員だった。

しかし今日は隣に座ったベアトリスとの二人きりだ。

「それは皮肉でして？」

「あ、いや！　そういう意味じゃなくて！」

慌てる俺に対し彼女は、冗談でしてよ、と可笑しそうに笑う。

「イルゼ様とエフィは場所取りだそうですわ。一番良い位置で貴方をご覧になりたいって」
今日はコスタヴィーノが正式に女性都市として認められたことを祝う式典がある。

馬車の目的地は式典が行われる街中央の広場だ。

そして俺は貴族の代理として式典へ参加し、形ばかりのご挨拶をすることになっている。

「使いつ走りが書面を読み上げるだけなのに、そこまで期待されると恥ずかしいな……」

「見知った顔がいれば緊張もほぐれますわよ。とはいえ、ぺったんこまで一緒に連れて来るとは
思いませんでしたけれど」

相変わらずの言いように俺が苦笑すると、彼女は少し口を尖らせた。

「あの品の無さで、貴方や周囲を困らせているのではなくって？」

「あはは、まああれも個性みたいなものというか。困ってはいないよ」

「本当ですか？ ざっくりと言えばここ出身の女ですし、コスタヴィーノの評判を落とすような
振る舞いをしていないか心配ですわ」

なんだかんだと言いながらネレイダの身を案じるベアトリスに胸が温かくなる。

そして同時に、俺はネレイダとウィメで交わした会話を思い返していた。

「マスターは私の知識を使って、この世界にあるという遺物や、他の魔法人形を探したいと」

「積極的に男性と衝突したいわけじゃない。でもグリムウエフトみたいな男が現れた時、次も今
回のようになんとかなるとは限らないと思うんだ」

「だから何らかの対抗手段が欲しい、ということですね」

コスタヴィーノへ出発する前夜に寢室へやってきたネレイダ。

彼女は俺の話に頷くと、端的な返事をした。

「マスターは強欲にすぎる、と忠告します」

「……！」

鋭い言葉を受け言葉に詰まる俺に対し、彼女は静かに淡々と言う。

「この世界で男性と女性が同じ立場で共存する。そのことが軋轢あつれきを生む可能性が高い、私はそう推測しています。マスター、この推測は間違っていると考えますか？」

「それは……間違っていない、と思う」

その証拠にこの世界で困っている女性の力になろうとする度に、大抵俺は男性の権力とぶつかってきた。

女性が男性より必ず下になるよう、社会的な仕組みが整えられてしまっているからだ。

「もし衝突を避けたいのなら、女性一団体への執着をやめることが最善です。例えば今回も、マスターがイルゼを追わなければ、グリムウエフトとの対峙はなかったでしょう」

「そんなことは——」

「——できない。つまりマスターは自ら衝突を引き起こす行動を選択しながら、一方で衝突を避けたいと主張しています。相反する二つの欲望を一度に叶えようとしている状態です」

返す言葉が見つからずに沈黙する俺へ、ネレイダは更に続けた。

「大きな欲望の前には、それに比例した壁が立ちはだかるのが自然の摂理です。だからこそ一般的な生物は欲を制御し、壁の大きさを調整します」

「……それなら、俺は壁に押しつぶされるのかな……？」

「可能性は高いと思われます」

寝室はしんと静まりかえり、宮殿の庭に植えられた木々がのざわめきだけが聞こえる。しばしそんな静寂が流れた後、ネレイダは唐突に口を開いた。

「マスター。質問をしてもよろしいですか？」

突然の申し出に驚くが、ひとまず頷く。

すると彼女は少し何かを考えるようにし、やがて話を始めた。

「私の記憶領域に残る知識には、沢山食することを指して『健啖』けんたん、食べすぎ、飲み過ぎという状態を『暴飲暴食』と表現するとあります。これは今も使われている言葉ですか？」

思ってもみなかった話の内容に少し驚く。

それでも俺が首を縦に振ると、ネレイダは次の質問へと移った。

「この二つの言葉を抽象化した場合、どちらも『飲食量が多い状態』を指していると言えます。であるなら、わざわざ表現を分ける意味はあるのでしょうか？」

「ううん……。でも何の意味も無かったら、わざわざ二つの言葉にしないんじゃないかなあ」

「なるほど。ではどのように意味が違うのでしょうか？ どちらも食べ過ぎであると判断されているのでは？」

「確かに、普通の量を食べている人には使わない言葉かも……」

じゃあ何が違うんだろう、と考えてみるもの。

俺の頭で絞り出せたのは辞書に書いてあるような理路整然とした答えでは無く、結局は印象論となつてしまった。

「なんかこう、嬉しそうにいっぱい食べるのが『健啖』で、哀しそうにいっぱい食べるのが『暴飲暴食』って感じかなあ」

「……なるほど」

俺の回答に頷くネレイダの顔を見て少し驚く。

彼女は普段あまり見せない笑みを浮かべていたからだ。

「だとすれば大きな欲望にも『健啖』と『暴飲暴食』が存在する、と私は考えます。少なくとも今回の件を通し、マスターは強欲だからこそ勇敢でした。そして『暴欲』で無かったからこそ、周囲からも慕われている」

そこまで言つて、彼女は窓際に寄つて僅かに窓を開く。

庭の木々のざわめきとともに、そこから心地よい風が入ってきた。

「……そして、慕っているのは人だけではありません」

「！」

ネレイダは窓際に立つたまま振り返る。

「マスター。私は今、いくつかのことに興味があります」

夜風が彼女の前髪を揺らし、美しい双眸そつほうが部屋の明かりに照らされた。

「一つは、この世界が私の記憶領域にあるそれとあまりに違うこと理由です」

「ネレイダが作られた千年以上前と今で、随分常識が違っているって話のこと……？」

「ええ。この変容がどのように起き、何が原因だったのか。私達イヴが休眠させられた理由もそこに繋がるのではないか。そう考えずにいられないのです」

そしてもう一つ、とネレイダは続けた。

「マスター、貴方の未来です。私は、いえ私達はそれが見たい。不思議ですね、出会ったばかりなのに、もうそう思うのです」

彼女が想像を絶するほど高度な技術で製造された魔法人形であることは明らかだ。

けれど月を背にネレイダが浮かべた笑みには、誰もが持つ自然な魔法が宿っていたと思う。

「『健啖』なマスター。未永く、宜しくお願いします」

ただし、その素敵な笑顔に見とれる時間はあまり無かった。

「では早速マスターのお役に立つため、記憶領域の修復作業に移行します」

さつさと『健啖』モードに入ったネレイダが、素早くベッドの上へ移動してきたからだ。

「えっ!? ちよ、い、いきなりっ!？」

「ええ。修復のための動力の回収効率、マスターの中出しが最も良いのです。そもそも夜更けに女が部屋に来ているのに、それを放置するのは許されません」

「それは、そうかもしれないけど……余韻というかさ、そういうのあるよね!？」

「そうですね。おち×ぽの余韻が今とても必要です。はむっ≡」
「あう！」

いや、あの晩のネレイダは『暴飲暴食』モードだったかも……。

(あの日は凄かったな……)

などと記憶に浸る俺を、ベアトリスの厳しい声が現実に引き戻してくれた。

「ちよ、ちよっと！ なにをにやにやしているのでして!?!」

「わっ!? ご、ごめん、ちよっと考え事してて……」

「別にいいですけど、ひとまず後になさい。そろそろ着きますわよ」

彼女の言う通り、馬車は式典会場である都市の広場へ差し掛かっていた。

窓から外を見ると、非常に沢山の女性達が集っているのが見える。

(あの大勢の前でこれから挨拶か……うう、緊張するなあ)

と、街の人々の様子を眺めていたベアトリスがぼつりと零こぼした。

「……世界はとても多彩だった。最近、ようやく感じるようになりましたの」

広場のざわめきはまだ少し遠く、彼女の言葉ははっきりと聞こえる。

「それくらい自分しか見えていなかった。自称領主、そう呼ばれるのも無理ありませんわ」
ベアトリスは軽いため息をつく、今度は俺のほうへ顔を向けた。

「アリスト殿。貴方の目から見て、今のわたしはどのような色をしていまして？ 少しはまともな色合いになっていきますかしら？」

困ったように笑うベアトリス。

けれどその瞳は真剣で、少しだけ揺れている。

「まともな色っていうのは分からないけれど……」

俺は彼女の瞳をもう一度見た。

そして確信を持って言う。

「最初から綺麗だし、今も素敵だと思うな」

「……今、おべっかはいりませんわ」

彼女は口を尖らせるが、俺は意見を変えるつもりはない。

「おべっかなら、コスタヴィーノっていう都市が出来上がることなんて無かった」

「え……？」

「ベアトリスの色が好きな人が沢山いた。君に力を貸したいと思う人が沢山いた。だからここは女性が集う場所になった。俺はそう思う」

馬車が止まる。

広場には女性達の笑顔がいくつも並んでいる。

集った飲食の屋台から漂う美味しそうな香りは馬車の中にも流れ込んできた。

「そうですね。ええ、そうに決まっていますわ」

ベアトリスの瞳がまた鮮やかになった。

色が変わったというなら今じゃないかと俺が思った時、馬車の扉が開く。顔を見せたのはクラネさんだ。

「ベア、随分とご機嫌ですね？」

開口一番、いつもの調子のメイドさん。

そんな彼女とベアトリスの賑やかなやり取りが始まる。

「は、はあっ!? そ、そそ、そんなことありませんわ!」

「アリスト様にお情けでもいただきましたか？」

「屋敷の仕事中におねだりする貴女とは違いますの!」

「出発前に迫るベアに言われたくはありません。ちゃんとお口と谷間は綺麗にしましたか？」

「ひゃえっ!? い、言いがかりでしゅわよ!」

……「じめんなさい!」

俺がいたたまれない気持ちになっていると、ヴァイオレットとネレイダも顔をのぞかせた。

「アリスト、今日はアタイ達が守ってやるから心配いらぬよ。可愛がってもらった分、全員やる気がみなぎってるからね!」

「マスターの魅力に卒倒する女性に関して、こちらで対応できます。どうぞお任せください」

「あはは……ありがとう」

そんな彼女達越しにエフィさんとイルゼさんの姿も見えた。

広場の観覧席の中ほどに座った二人は、屋台で買ったらしき食べ物に分け合って楽しげだ。思わず俺も笑顔になりながら、馬車を降りる。

そしてベアトリスに手を差し出した。

「ベアトリス。行こう？」

彼女は一瞬驚いたような顔をした後、そっとその手を俺に預けてくれた。

ドレスの裾を持ちながら馬車から優雅に降りる様子は、どこに出しても恥ずかしくない淑女だ。

しかし、その淑女へは身近な者達の容赦ない野次が飛ぶ。

「ベア。良い画家を紹介しましょうか？」

「べ、べべ、別にいいませんわ！」

「ふふ。隣ばかり見て躓くようなら、また自称領主に逆戻りだよ」

「はあっ!? 最初かられっきとした領主ですよ！」

「デカ乳は歩行の邪魔でしょうが、途中でマスターに支えてもらおうなどと思わないように」「そんなこと思うわけがないでしょう！」

はあ、と大きいため息をつくベアトリス。

彼女は呆れと疑いの混じった眼差しを俺のほうへと向けて言う。

「さきほどの発言、撤回したくなっただけではなくって？」

「むしろベアトリスの人気を今、再確認したかな」

ベアトリスは肩を竦めた後、広場に降り立つ。

途端に大きな拍手が会場を包む。

「……やっぱり貴方は信用なりませんわ」

美しい領主様はそう言って、花のように微笑んだ。



番外編

Extra edition

二人の従者の
シャッフルご奉仕!?



コスタヴィーノでの式典が終わり、ウィメでの日常に戻ってきた。

春の穏やかな陽光が差し込む自室にて、俺は溜まった書類と格闘していた。

もちろん楽とは言えないが、コンビニと家を往復するだけだった前世の暮らしよりも、今の忙しくも充実した毎日のほうが俺は好きだ。

「ええと次はレテアの決済と、バンドンの経理確認か。うわあ……」

とはいえ、数字関連が苦手なのは相変わらず。

思わず声をあげた時、扉の向こうからエフィさんの声がした。

「アリスト様。ご休憩はいかがでしょうか」

まさに一息入れたくなった瞬間に来てくれるなんて、流石の気遣いだ。

お言葉に甘えることにして、俺は扉のほうへ声をかける。

「ありがとうございます。どうぞ、入ってー」

そして姿を現したエフィさんを見て、絶句した。

「失礼します……」

彼女がいつものメイド服ではなく、非常に見覚えのある軍服風の装いをしていたからだ！

呆気にとられる俺に対し、エフィさんは頬ほおを染める。

「い、いかが、でしょうか……？」

短すぎるスカートからのぞく瑞々しい太腿と、黒のガーターベルト。

フリルの多いメイド服から一転、セクシーさと格好良さがあいまった姿になったエフィさん。そんな彼女を見れば、いかかも何も答えなんて決まっていた。

「いい！ すごくいい!! 格好良いし、可愛い!」

俺は勢いよく椅子から立ち上がり、猛烈な勢いで首を何度も縦に振る。

すると少し不安げな様子だったエフィさんが、みるみるうちに顔色を明るくする。

「そう仰おほっていただけで嬉しいです……♪」

今日も俺の専属メイドさんは最高に可愛い。

魅力爆発中のエフィさんに鼻の下を伸ばしていると、突然彼女の後ろから起伏の無い声が出た。

「予想通り、効果は抜群のようですね」

「えっ、ネレイダ!？」

彼女が姿を見せたことにも驚いたが、更に驚かされたのはその服装だ。

ネレイダはいつもの軍服姿ではなく宮殿メイドさんに変身していたのだ……!

「こちらも十分な衝撃を与えられているようですね」

ニヤリと口元を歪めると、彼女は自身の姿を見せつけるようにその場で回転してみせる。

するとマイクロミニのスカートが浮きあがり、魅惑のお尻と白のTバックがはっきりと俺の視界に入ってきた。

勿論上半身にはスケスケのブラウスを着用済み。

ネレイダが持つ形の良いノーブラおっぱいがしっかりと揺れている。

「マスター、私にも感想を求めます」

「良い……ネレイダ、凄く良い……！」

「語彙力の消失を確認。マスターの言葉に嘘はないと判断します」

少し馬鹿にされたような気もするけれど、そんなことはどうでも良い話だ。

二人の素晴らしさに比べれば些細なことさ！

「では、お茶をご用意しますね♪」

明らかに上機嫌になったエフィさんが紅茶の用意を始めてくれた。

俺はその完成を待とうと休憩用のソファへと移動したのだが、そこには既に先客がいた。

「マスター！ お先に失礼しています」

当然のような顔で座面の中央に陣取るネレイダである。

彼女は座ったままぐいと両脚を開き、ぽんぽんと太腿の間の座面を叩いてみせた。

「さ、こちらに。どうぞご遠慮なく」

すぐにその意味が呑み込めず、俺は頭に疑問符を浮かべる。

「……？」

だがそれが気に食わなかったらしい。

魔法人形メイドさんは、すぐに実力行使に移った。

俺の腕をぐいと引き、太腿の間に俺を座らせてしまったのだ。

「マスター、鈍感は良くありません」

「うわっ！」

「意図が伝わらないと激昂した女性に、このように拘束されかねませんよ」

「されかねないっていうか、今まさに拘束されてる気が……！」

抗議の声を上げてみるものの、美しい魔法人形さんの耳には入らなかったらしい……。

ネレイダはぐつと俺を後ろから抱きしめると、耳元に息を吹きかけながら言う。

「マスター、まだ気を抜いてはいけません」

「むしろ今、休憩だから気を抜きたいんだけど……？」

「そのような心の隙を敵は狙ってくるのです」

休憩に隙も何もないと思う。

ただ敵を自称するネレイダの動きには確かに隙は無かった。

話し終わったと同時に、俺の耳をねっとり舐めあげてきたのだ！

「ちゅぱっ≡えろっ≡」

「わわっ!? きゅうに……あっ！」

「唐突にこのような攻撃が始まってしまっても、ちゅっぱっ≡ひれまへん、ぢゅっ≡」

「も、もう始まつてるけど……っ!? くっ、はあっ、ちよつと、あうー!」
見事に心の隙とやらに入りこまれた俺は、ネレイダに好き勝手耳をしゃぶられてしまう。
唐突な展開に困惑と驚きが入り混じる中、彼女は更に言う。

「ちゅっぱっ ≡ 情欲を暴走させる女性が身近にいたら、どれくらい困るか。れるれろっ ≡ その危険性を知って頂く必要があると判断しましたので、ぢゅっぱっ ≡」

諫めるような言い方をするネレイダ。

しかしその態度とは裏腹に、彼女の舌遣いはとても丁寧で優しい。

背中に感じる二つの柔らかい感触と相まって、俺の身体力は抜けていく。

(吐息がかかるのも堪えないし、後ろから抱きしめられるのも嬉しい……)

じわじわと性感が高まり、つい^{まぶた}瞼を閉じて身を任せてしまう。

が、すぐにネレイダが俺に対し警告を放った。

「これはいけません。情欲を暴走させたイヴもやってきました。海から這い出てきたようです」

彼女の言葉に瞼を開くと、そこにいたのは軍服風の姿のエフィさん。

普段は一番の味方の彼女だけれど、今日に限ってはネレイダの指揮下に入ってしまったようだ。

「さ、エフィ。例の攻撃を」

その証拠にエフィさんはネレイダの言葉に黙ったまま頷き、そのまま俺にキスをしてきた。

俺としてはもちろん大歓迎だけれど、今日のそれは一味違った。

「ん……≡」

唇をあわせたまま、エフィさんがそつと口を開く。

すると上品な香りとともに、温かい液体が流れこんできたのだ。

(く、口移し……!?)

素敵な贈り物を飲み下しつつ、俺はエフィさんとはばし舌を絡ませる。

紅茶がしつかり適温だったのは流石のメイドさんぶりと言うべきかもしれない。

「ぷはっ。旦那さま、申し訳ありません。専属メイ……あつ、イヴとして、危機意識を持ってい

ただくお手伝いをしないといけないのです≡」

もつともらしいことを言うエフィさん。

けれど口角はしつかり上がっているし、声もほんのり弾んでいる。

「旦那様、重かったら仰ってくださいね……」

そんな彼女は敵とは思えない気配りを見せつつ、そつとソファに座る俺に正面から跨る。

すると下腹部に張ったテントが、エフィさんの下着の股間部に当たってしまった。

「あ、旦那様≡もう、こんなになさって……≡」

言いながら彼女は俺のズボンに手をかけ、あっさり肉棒を取り出す。

そして黒のパンティをずらすと、硬くなったペニスに女性器の入口を擦り付け始めた。

「んっ ≡ ふっ ≡ だんなさまの、硬いです…… ≡ あっ ≡」

「うっ、くう……！」

エフィさんが腰を前後させると、無毛の割れ目の柔らかい部分が反り返った肉棒に当たる。裏筋を女性の大切な唇でねっとり愛され、ペニスはますます硬さを増していく。

更にネレイダの熱い口撃も再開してしまった。

「ちゅぱっ ≡ れろろっ ≡ んちゅっ ≡」

ここへきて俺は完全に二人に身体を預けてしまう。

前後から与えられる快感が気持ち良すぎて、まともに座っていられなくなったのだ。

「は……あっ！ はあっ……」

そんな俺に、エフィさんとネレイダは素股と耳舐めをやめないまま、交互に語りかけてきた。

「マスター、れろっ ≡ 溜まった仕事を言い訳に、休暇を取られていないそうですね、ちゅぱっ

≡」

「んっ ≡ ふう……っ ≡ 夜遅くまで、最近執務をなさっていらっしやいます……あっ ≡ きちんと、お休みできていらっしやらないのではありませんか……んっ ≡」

「!!」

諫めるように言うネレイダと、心底心配そうな表情を見せるエフィさん。

俺はそんな二人に申し訳なくなった。

「心配、うっ、してくれてたんだね……っ……」

「マスターの身体を案じない、ぢゅっ≡イヴなどいません。れろっ≡ちゅぱっ≡」

「メイドも同じです……あっ≡はあっ≡んっ≡」

彼女達の言葉がとても嬉しく、胸がぽかぽかと暖くなる。

一方で、二人の声色は艶かしさを増し、その動きも大胆になりはじめた。

「夜遅くまで仕事をしていることにより、セックスの頻度が著しく減っていると報告を受けています。んちゅっ≡れろおおっ≡」

「誰に……!?! あうー!」

「独自調査の結果です。れろれろっ≡ちゅっ≡」

出どころが不明の報告をしながら、ネレイダは愛撫の範囲を広げていく。

鎖骨近くから首筋まで彼女の舌が這い回り、腰が跳ね出してしまった。

一方のエフィさんは自身の背中側に手を回し、お尻の下から俺の玉袋を触り始める。

「それに、んっ≡メイドを使ってくださらないと、皆さん、寂しがっています……こんなに、溜め込んでいらっしやるのに、あっ≡」

言いながらも腰の動きは止まらず、彼女の割れ目は俺の肉棒を責めるままだ。

時折クリトリスがカリをかすめる刺激によって、じわじわと射精感が高められていく。

「以上の理由から、本日一つの決定が下りました。今日の午後からしばしの間、マスターの執務行為は禁止され、業務は一時的に代行されます。ちゅっ≡れろおっ≡ちゅぱっ≡」

目を見開く俺に対し、エフィさんが更に腰を激しくしながら続けた。

「旦那様が、して良いことはっ≡こっやあって、気持ちよく、なっていたかくこと……おっ≡」
そしてネレイダが素早く俺の乳首をつまんで囁く。

「おま×こへの腔中射精のみが許可されます」
ずぶんっ！

間髪入れず、俺のペニスは勢いよくエフィさんの腔中へ招かれた。

「くあっ!？」

「くださいっ≡一番、奥につっ≡」

「マスター。腔中射精は義務です。れろれろっ≡れろっ≡」

不意打ちの挿入と執拗な耳舐めに悶えた俺に、更に追撃が行われる。

エフィさんがトップスピードで腰を上下に動かし始めたのだ。

「あっ≡んっ≡旦那さまっ≡どっぞっ≡おしゃせい、どっぞっ≡あっ≡はあんっ≡」
ぱんっぱんっ彼女の美尻が音を立て、熱い腔中がペニスを絞り上げる。

同時に、ネレイダによる耳と乳首への責めも早くなった。

「ちゅぱっ ≡ さあ、マスター ≡ 義務を ≡ ちゅっ ≡ おちんぽの義務を果たしましょう ≡ えろっ
≡」

激しい行為とは裏腹に二人の声は、俺を慈しむように暖かく、優しい。

前後から責められ、甘やかされる快感に、俺の肉棒が我慢をする余裕など全く無かった。

「射精^で……ッ!!」

ー ドビュルルッ!! ビュルルルッ! ビュクッ!!

「はあんっ ≡」

きゅんっ と締まるエフィさんの膣中。

コリコリとした子宮口に到達した肉棒が締め上げられる。

敏感なペニス舐めしゃぶられるような感触に、俺はあえぐ。

「うはあっ……!」

しかし二人の敵の淫らな攻撃はやまない。

エフィさんのグラインドは止まらず、ネレイダは乳首と首筋を更にとりと責め立ててくる。

ただ何よりも俺を追い詰めたのは彼女達の言葉だった。

「だんなさま ≡ まだ、たまたま、ぱんぱんです……っ ≡ もっと、おしゃせい、くだせい ≡」

「ぴゅっぴゅ ≡ マスター、ぴゅっぴゅ ≡ 我慢した分、いっぱいぴゅっぴゅしなさい ≡」

耳にも肉棒にも効く極上のサンドイッチ。

その美味しさに誘われ、俺の腰はほとんど本能的にピストンを始めていた。

「はあっ、はあっ、はあっ！」

「あっ≡はっ≡ああっ≡だんなさまあっ≡」

「その調子ですよ。エフィの穴で気持ちよくなって、沢山びゅっぴゅするのです≡
言いながら、ネレイダはエフィさんの胸元をはだける。

すると軍服を押し上げていた彼女のおっぱいがふるんつと嬉しそうに飛び出した。
と同時に俺の身体はネレイダに後ろから押される。

そうして前傾姿勢になった俺の顔は、エフィさんの深い谷間へと押し付けられた。

「んむっ!？」

「マスターの好きなお乳です≡さあ、たっぷり味わって、ペニスを硬くしてください≡
顔全体がエフィさんの甘い香りと柔らかい乳肉に包まれ、理性が蒸発していく。

もう肉棒を気持ちの良い穴で擦って、射精することしか考えられない……！

「ああっ≡硬いです≡だんなさまっ≡このまま、おなさをくださいっ≡」

「んぐっ!？」

そして、メイドさんに玉袋をぎゅっつと掴まれ。

「さあマスター、びゅるびゅるしなさいっ≡んぢゅっつっつっつっつっつっつ≡」

「ああああ……っ！」

ネレイダに首筋を吸われながら。

(昇って、きた……っ！)

俺はエフィさんの胸に顔を埋めて、爆発するような射精に到達した。

ービュルルルッ！ ドプドプッ!! ビュルッ!! ビュルッ!!

勢いよく飛びした白濁液が、エフィさんの膣中で跳ね回る。

それと同時に彼女は、乳房を前に突き出して絶頂に達した。

「んああああッ ≡ ≡ ≡」

びくんっびくんっ と互いが震える度に、結合部からは淫らな汁が散る。

女体に挟まれ全身を愛されながらの射精は、その快樂以上の幸福感に浸らせてくれる。

(はあ、幸せ……！)

その感覚に浮かされ、気づけば俺はエフィさんの腰を引き寄せ、ネレイダにわざと体重を預け、肉欲のサンドイッチを満喫していた。

「はあっ、はあっ、だんなさまあ ≡」

「んちゅっ ≡ れるおっ ≡ マスター、素敵な射精でしたよ ≡ ちゅっ ≡」

「あ、ネレイダっ、それやられると、また……ッ！」

「はあんっ ≡ あああっ ≡ また、きてます ≡ うれしい……っ ≡」

女性達も、そんな俺のわがママを全部受け入れてくれる。



異世界で俺だけが味わえる、贅ぜいの限りを尽くした休憩だ。

……しかし、綺麗な花には棘とげがあるように。

甘美なサンドイッチにも、恐ろしい別の側面があったのだ。

「ではエフィ、交代してください」

「はあ、はあ……≡はい≡」

「えっ」

「さあ、旦那様。次はネレイダさんの腔中なかにたっぷりお射精なさってくださいね≡」

「少しペニスの硬度が落ちていますが、私の腔中なかで大きくするのも気持ちが良いはず
す」

「えっ、えっ、えっ!？」

有無を言わず肉棒を挿入しはじめるネレイダを見て、俺はそれを理解した。

「んっ≡ふう……っ≡ではマスター、私にもしっかり愛を表現してください。仕事にかまけて、イヴを放置するなど言語道断です」

「メイドの放置もいけません、旦那様≡」

この休憩は俺が『贅ぜい』の限りを尽くすための時間じゃなく、俺が『贅にえ』になる時間だったんだ
つて。

「さすがです、マスター……っ≡性感、回路がつ≡すぐに限界へ到達しそう、ですッ≡」

「らんなさま、んちゅっ≡もっろ、舌をらしててくらはい≡えろっ≡ちゅぱっ≡」

二人から心のごもったご奉仕をされながら、俺は贅としての役割に蕩けていった……。

あとがき

『左遷先は女性都市！ MI』をお手にとつていただき、誠にありがとうございました。誠にありがとうございます！
海と冒険をテーマに執筆をした本作はいかがでしたでしょうか？

今作は王道アクション映画のようなテイストをイメージしつつ、コメディ有り、シリアス有り、そしてエッチ有りの全部盛りのお話を目指しました。

バトルシーンを取り入れ、新鮮な読み心地を提供できないかと試行錯誤した物語でもありますが、女性都市版の冒険譚ともいえる本作をお楽しみいただければ嬉しいです。

今作も魅力的なイラストの数々を描いてくださったアジシオ先生、自分の我儘にも耳を傾け、力強いサポートをしてくださる編集者様をはじめとした出版に関わってくださいくださった皆様、並びにWEB版の拙作を応援していただいている皆様に、この場をお借りして深く御礼を申し上げます。

また、改めて本作をお手に取ってくださいましたあなたに心より感謝致します。

異世界での冒険と甘いひとときが、皆様の心に楽しみと安らぎをお届けできていれば幸いです。

二〇二四年十二月 一夜澄

●本作は小説投稿サイト「ノクターンノベルズ」 (<https://noc.syosetu.com>)
にて連載中の『左遷先は女性都市！ ～美女達と送るいちゃラブハーレム都
市生活～』を修正・改稿し、改題したものです。

著作

一夜澄

いちや すみ

未熟な自分が文章を書くうえで『予測変換』機能には頭が上がりません。

加えて『ドビュ』という効果音を書く時は、変換候補に偉大な作曲家『ドビュッシー』が現れるので、更に頭を上げられない状態になっています。

イラスト

アジシオ

ボーイロ好きイラストレーター。サークル「烏賊輪」で成人向け同人誌なんかも描いています。

左遷先は女性都市！MI〜不思議の島でいちやラブハーレム〜「電子書籍版」

発行日 2024年12月1日 発行

著者 一夜澄

イラスト アジシオ

装丁 5gas Design Studio

発行所 株式会社竹書房

〒102-0075

東京都千代田区三番町8-1

三番町東急ビル6F

e-mail info@takeshobo.co.jp

URL <http://www.takeshobo.co.jp>

データ加工 合同会社アドバンスド・メディア・ジャパン

©Ichiya sumi 2025

本書の一部あるいは全部を著作権者および株式会社竹書房に無断で複写・複製すること、および放送・上演・公衆送信（ホームページ上への掲載を含む）などは、法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

